

高校生の鎮守府生活

龍龍龍×

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日突然提督になるように言われた青年、櫻川（さくらがわ）秋人（あきと）は嫌々ながらも引き受ける事に。

秋人が待っていた鎮守府とは一体――

そしてその鎮守府には、以前秋人が助けた艦娘の姿が――

※この物語は艦これ知識があまりない作者が書いた2次創作ストーリーです。そして小説経験が0です。プラス、艦これではあり得ない設定になっておりますので、過度な期待はしないことをオススメします。お気に召さなかった場合は即座にブラウザ

バックへお戻り下さい。

目次

番外編

番外編 救済 | 1

番外編 動き出す歯車 | 12

番外編 体育祭 上 | 29

番外編 体育祭 中 | 45

番外編 体育祭 下 | 62

設定

オリキャラ設定＋所属艦娘（22話）

時点） | 87

コラボ

コラボ 演習① | 99

コラボ 演習② 上 | 111

プロローグ

1話 始まりからの出会い ※一部修

正 | 136

2話 彼女の正体 | 143

3話 みんなとの約束 | 156

4話 それぞれの思い | 165

5話 雨はいつか止む | 175

6話 特別 | 184

第1章 鎮守府生活編

1話 始まりからの再会 | 192

2話 違い | 204

3話 寝所探索 | 216

4話 秋人の人間性はいかにッ……!!

13話	朝	339	...	474	
12話	秋人争奪戦?	326	22話	やっぱり俺の朝は騒がしい	
11話	建造、仲間	312	いつき	457	
石達の不安	—	300	21話	提督の仕事とちよつとした思	
10話	秋人の過去カツコカリと明	288	20話	決着	
9話	秋人の「お・も・〇・な・し」!	276	423	19話	絶対的絶望を覆す希望
8話	出撃	264	18話	最悪な形	
7話	主人公ならお約束ごとです!	252	17話	日課体験	
6話	救出	241	16話	夜	
5話	涙の再開といない存在	228	第2章	復讐編	
4話	—	212	15話	影響	
3話	—	200	14話	4人の駆逐艦	

4 2 話 人違いから始まる物語

757

4 3 話 勘違いによる時音のピンチ!!

800 777

4 4 話 何かが始まる予感 | 800

4 5 話 侵入者の搜索と絆の証明

816

4 6 話 BOND OF PIECE

E
く絆のカケラ | 838

4 7 話 夏之夜のお風呂 With

時音 | 858

4 8 話 いつもの騒がしい朝 | 879

4 9 話 別れに伝える気持ち | 893

5 0 話 戻った日常(ほのぼの)

904

5 1 話 前日 | 917

5 2 話 当日 | 929

番外編

番外編 救済

これは櫻川 秋人が着任する前に時雨が艦娘達を地獄から解放するお話
side 夕立

時雨ちゃんがいなくなつて1週間ちよつとが経つた。提督は時雨ちゃんがいなくなつてから提督の暴力やセクハラがエスカレートしていった……もう嫌だ……どうして私達がこんな目に合うの……。

提督「おはよう、兵器ども！今日の私は気分がいい、休暇にしてやるから私に呼ばれたやつは直ぐに執務室に来い!!」

艦娘「……分かりました提督様!!」

提督「まずは、そうだな。赤城!!お前だ、執務室へ来い!!」

赤城さんが最初に呼ばれたっぽい……

赤城「!?……はい。提督様の命令ならば!!」

夕立「赤城……さん……」

赤城「私なら大丈夫です夕立さん……」

そう言つて赤城さんは微笑んだけど手が震えていた……そして赤城さんは提督と一緒に食堂から出て行つた。赤城さん……無事でいてほしいっばい……

—————

食堂から出たあと私は自分の部屋に向かつた。その時執務室の前を通ると赤城さんの悲鳴が聞こえたっばい……。赤城さん! 一体何をされて……私は執務室のドアを少し開け見てみると。

赤城「いやっ!!……それだけはいやああああ!!」

提督「いいじゃないか! 貴様は私の為ならなんでもすると言つたのだろう?」

赤城さんは提督に服を脱がされていた。酷い……早く助けなきゃ！でも私には出来ない、する勇気がない……。時雨ちゃんならどうしていたのかな……。絶対に助けに行つてたつばい、けど私は……

提督「ガタガタ喚くなあああ!!」

赤城「うぐツ……」

提督「これだから兵器は嫌いなんだよ！ほら、脱ぎ終わったぞ赤城！」

赤城「……助けて……ください……！」

赤城さん……！

夕立「もう止めるつばい!!」

提督「ほう、どうした夕立？」

赤城「夕立……さん」

気づいたら私は赤城さんを助けに行っていた。そして提督に艦装を向けていた。多分時雨ちゃんなら絶対している筈だ。

夕立「赤城さんから離れろっばい!!」

提督「まさかお前に脅されるとはな、分かった言うことを聞いてやろう……」

提督が赤城さんから離れた瞬間に私はすぐに赤城さんの元へと走った。が、私は失敗してしまった、艀装を下ろしたことに。私はその場で倒れてしまった。理由は簡単だ提督に小刀でお腹を刺されたからだ。

夕立「……うぐっ……しまっ……た……」

赤城「夕立さん!!」

提督「馬鹿が!安心したのがアタとなったな!!赤城はあとでいい。まずはお前からバラしてやる!提督に艀装を向けた罪だ。しっかり受けるがいい!!」

お腹が痛い……。気がつけば提督は私の前に来て小刀を私に向けていた。私はこれで終わるの……?嫌だ……こんなところで……

提督「終わりだ!夕立!!」

赤城「やめてええええええええ
!!!!!!」

……ごめん赤城さん……私はここまでつばい……。私は目をつぶって全てを諦めたその時……

??「終わりなのは君のほうだよ……。」

提督「!?!」

一つの光が照らした。そしてその光の正体が……

提督「貴様……生きていたのか時雨
!!!!!!」

……時雨ちゃんだった。私はその瞬間涙が溢れて出てきた。もう会えないと思った時雨ちゃんが目の前にいるからだ。

赤城「時雨さん……」

時雨「赤城さん夕立、助けに来たよ！それと死んだと思ったのかい？残念だったね提

督」

提督「ふん！だがお前だけで私を——」

時雨「悪いけど、来たのは僕だけじゃないよ。ちゃんと頼れる人たちと一緒に来たから——」

時雨ちゃんがそう言った瞬間に後ろから憲兵さん達が提督を囲んだ

憲兵「そこまでだ!!お前を、艦娘に過度な出撃、パワハラ、セクハラ行為の罪により拘束する!!」

提督「な!?!時雨、貴様ああああ!!!」

時雨「僕を含め、ここみんなを散々酷いことをしたんだ。十分に牢屋で償ってもらうよ!!」

憲兵「さあ来い!!詳しいことは大本営で聞く!!」

提督「覚えておけ時雨!!絶対に抜け出してお前を復讐してやる!!」

時雨「その時は楽しみにしておくよ……」

提督は憲兵に連れていかれたっばい——それよりも時雨ちゃんが目の前

にーにー。

夕立「時雨……ちゃん……」

時雨「夕立！その傷!？」

夕立「……えへへ……赤城さんを助けるために……ちよつとドジつちやつたつ……」

時雨「早く手当てしないと！」

夕立「……大丈夫……これくらいの傷……出撃……よりはマシっぽいから……早くみんなを解放させないと！」

赤城「夕立さん、みんなの事は私に任せてください！大丈夫です、あなたの頑張りは一航戦の誇りにかけて無駄にはさせません！」

夕立「赤城さん……うん後は、お願いするっぽい……」

私がそう言った後、赤城さんは直ぐに、人質にされていたみんなの元へと向かった。私は、傷が深かったせいなのか、安心したせいなのかは分からないけど、力が抜けてしまった。

時雨「夕立!!」

時雨ちゃんが私の体を受けて止めくれた。

夕立「ありがとう時雨ちゃん……」

時雨「全く夕立は、無茶しすぎたよ……」

夕立「それ、時雨ちゃんが言うの……!?」

時雨「うっ……確かに人のことは言えないね……」

夕立「……だから今回はお互い様っほい……!!」

時雨「そうだね。あ、夕立ほら!」

時雨ちゃんはそう言って背負う姿勢をとった。

夕立「時雨ちゃん?」

時雨「そんな傷じゃ歩けないでしょ?だから僕が夕立を背負って入渠ドックへと一緒に向かうんだよ。だからほら!」

夕立「うん、ありがとう時雨ちゃん。……それじゃあお言葉に甘えるっほい!」

そうして私と時雨ちゃんは一緒に入渠ドックへと向かった。そして時雨ちゃんと一緒に入渠ドックに入った。入った後、時雨ちゃんがここまでのことを話してくれた。

時雨「—————ということがあって僕は生きていられたんだよ」

夕立「そうなんだ。けどその人はすごいね、迷いなく時雨ちゃんを助けたんだから！ほんと軌跡っぽい！」

時雨「そうだね、本当に巡り会えてよかったと思うよ。そのおかげでこうして夕立と笑って話ができているんだから」

夕立「時雨ちゃん……」

私は時雨ちゃんの言葉に胸が熱くなったように感じた。そうだ……！私も時雨ちゃんに伝えなきゃ……！そう思って私は、時雨ちゃんの手を包んだ。

時雨「夕立？」

夕立「わ、私も時雨ちゃんに伝えたいことがあるっぽい！私も時雨ちゃんが生きてくれただけで、その……幸せっぽい／／！！」

時雨「夕立……うん、ありがと!!」

こうして私と夕立は手を繋いだまま食堂へと向かった。この後赤城さんがみんなを解放したおかげで、全員が集まっていた。それから時雨ちゃんはみんなにもう一度今までの事を説明して「これからは僕がみんなを守る」って宣言したっぽい。なんかヒーローみたいでかつこよかった。みんなは時雨ちゃんが生きていたことにびつくりする子がいれば、安心して泣いている子がいた。これで私達は自由なのだ。ただ、ご飯が今までと変わらないのが難点な部分はあるっぽい……………。

side out 夕立

side ??

提督「なんの罰を受けるんですかあ？どうぞ処刑するならさっさとー」

尾形「処刑はせん。お前は、永遠に牢屋で過ごしている！その方がお前のためになるからな」

提督「な!?!……………殺さなかった事を後悔させてやるから覚悟している……………（小声）」

|||||

秋人「そういや、尾形さんは？」

大和「提督の判決を下しに行っていますよ」

秋人「まじ!?!場所を教えてください大和!あいつ殴りに行くから☆」

大和「やめて下さい秋人!秋人も罪に問われますよ? (冗談)」

秋人「OK止めるわ」

大和「素直でよろしいです! (すみません秋人嘘なんです……本当は別に罪にはならないんです……)」

番外編 動き出す歯車

春休み。それは終わりの休みでもあり、始まりの休みでもある。そして今日は、1学年の修了式で、まさに明日からその春休みが始まるうとしていた。しかし、俺はサッカー部に所属している、無論休みなどあまりない。でも俺はサッカーが好きなのでこれといって嫌なわけではないのだ。

?? 「おーい秋人ー」

廊下の向こうから俺の名前を呼ぶ声が聞こえた。振り返ると、クラスメイトだった、部活仲間の1人 島崎しまざき 拓海たくみ が走ってきていた。ここだけの話、拓海は結構女子に人気だ。

秋人「どうしたよ拓海」

拓海「今日の部活offだつてよ！だから秋人どっか行かね？」

秋人「はあー!？」

いきなり拓海の口から驚きの言葉が発せられた。何、offだって!? そんなバカな

.....

秋人「私ノ辞書二、offトイウ文字ガアリマセン」

拓海「そんなバカな!! 聞いたことねーよ!? いいだろ、リフレッシュ程度に、な?」

秋人「まあいいけど、どこ行くんだ?」

拓海「そんなの風ぞー」

秋人「俺帰るわ」

何言ってるんだこいつ……。とりあえず今日の拓海は絡まない方がいいな。俺が背を向けて帰ろうとした時拓海に腕を掴まれた。

拓海「ちよつ…ごめん!! 冗談だつて it American joke ! ショツ

ピングモールに行こうかなってさー」

秋人「そんなジョーク、アメリカでも通用しねーよ。えつと、ショツピングモールだっけ? ちよつどいいや、俺も買いたいもんあつたし」

拓海 「何買うんだよ？」

秋人 「スパイクと練習着」

拓海 「あ、そういや秋人のスパイク、ポイント無いもんなー」

秋人 「土だから削れるのが早いんだよ……」

そう、スパイクというのはそういうもの。人工芝だとポイントは削れるのは少ないが、使っていくうちに滑りやすくなる。土だったらさつきも言った通り削れるのが早い。だからといってやりにくくなるということはない。じゃあなぜ買いに行くのかって？ 試合に出れないからだ。サッカーの試合はスパイクのポイントが無ければ出場出来なくなるので、俺はそうならないためにスパイクを買うのだ。

拓海 「そのまま行くか？」

秋人 「いや、着替えていこうぜ。制服姿だと何かとメンドくさくなる気がするわ……」

拓海 「お前のその予感、結構な確率で当たるからな」

ほんとに怖いぐらいによく当たる。もうこれ一種の能力といっても過言ではないだろうか。まあちゃんとした能力を隠しているんだけどね……拓海達には内緒に。

拓海「じゃあ俺こっちだから」

秋人「り、じゃあ一時にこのマ〇クに集合な」

そう言つて俺と拓海は別れた。

俺は家の門についた。傍から見たら戦国時代じゃん！というような家だ。俺たち櫻川家は一体何の一族だったんだよ……そんな武将教科書に載つてねーぞおい。まあこれ引越しの時に作ったんだよね注文で……。玄関に入った瞬間に相変わらず親父は「櫻川家流出迎え」繰り出してきた。ほんと止めてほしい……俺はそれを、余裕でかわし自分の部屋へと向かつて私服に着替えた。—————全部の支度が終わつて時計を見ると12:45になっていた。やば！そろそろ出よう。俺は家を出た。

—————

拓海「人に言つといてギリギリだな秋人」

秋人「悪かつたつて……」

俺が集合場所として決めていたマ〇クに、集合時間の五分前に来たので、拓海に怒られた。

拓海「じゃあー……ん……？」

急に拓海がまじまじと俺を見てきた。気持ち悪い……。

秋人「何？」

拓海「今日は前髪下ろしてんだなーって」

秋人「あー、めんどくさくなる気がしたからな」

拓海「おまえ前髪セツトしなかったら、マジで別人だからな」

秋人「そんなにか!？」

拓海「おう」

そう、何故か俺は前髪を横に流さずそのままストレートの状態だったら、ほんとに誰？ っていう扱いをされる。あとクラスの女子からは好意を向けられ、男子からは敵意を向けられるという結構複雑な状態になるのだ。しかし、部活メンバーは、このことを

知っているのです、誰？扱いはされない。しかし敵意を向けられるのは変わりない。拓海を除いて。

秋人「んじやあ、ちやつちやと行きますか」

拓海「そうだな」

俺と拓海はショッピングモールに向かった。俺はスポーツ店で練習着やスパイクを買って、拓海は練習着と私服を少々買った。あ、俺も私服買っとけばよかったな。現在俺たちは時間潰しにショッピングモールのまわっていた。そして俺達が歩いていると女性達がこつちをチラチラと見てくる。何でだ？

拓海「なあ秋人、お腹減ったからフードショップに行かね？」

秋人「そうだな、俺もお腹減ってたところだし」

俺達がフードショップに向かおうとした瞬間、拓海の足が止まった。

秋人「？ーどうした拓海」

拓海「秋人あれー」

拓海が俺に不思議そうに指をさして聞いてきた。俺も拓海が指をさした方を見ると、何やら少女達が男達に囲まれていた。

拓海「なあ秋人、あれどうする？結構やばくね？」

秋人「俺助けてくるわ」

拓海「え、ちよっー秋人!？」

side out 秋人

side 鈴谷

男1「ねえ〜いいじゃん〜俺らと一緒にご飯食べようぜ〜！」

私と電は提督を待っている最中にいきなり知らない男達にご飯を誘われた。いわゆるナンパという奴だ。はつきり言っつてキモい……。

電「駄目なのです！ 私たちは人を待っているのです！」

男1「そんなのほつといて、な？」

電「え!?!ちよつと離すのです！」

電がなんとかして断つてゐるみたいだけど、男達はそれを無視して1人の男が電の腕を掴んだ。駄目だ私が止めないと！

鈴谷「ちよつと！ 私たちは人を待ってるって言ったよねー！ だから手を離してよ！」

男1「へえ、随分と気が強い女の子じゃねーか！ 余計に連れて行きたくなるな」

男2「ん？ おい、よく見たらこいつら艦娘だぜ！」

男達に私達が艦娘であることがばれた。別に隠しているつもりは無かったんだけど……。けどそうなった場合結構めんどくさくなるんだよね、これ……。

男1「へえ、お前らも随分とお気楽になったもんだな、兵器なのによくギヤハハハハハハ!!」

何なのこいつら……

男2 「まあいいじゃねーか。この兵器達は俺たちが遊んでやるんだからな笑」

鈴谷 「ちよつと、待っ!!」

私は何も言い返せずに男に引つ張られた。あー多分誰も助けしてくれない。男達が大
声で艦娘だの兵器だの言っていたから。

電 「いい加減にツーーー」

秋人 「あのくすいません。彼女たち嫌がってるみたいなんで、その手離して貰っても
いいですか?」

突然、高校生ぐらいの男の子が助けに来てくれた。

男1 「ああ? 何だよ糞ガキ!!」

秋人 「いや、だから彼女たち嫌がってるから、手を離して下さい」

男2 「随分とヒーロー気取りしているみたいだが、お前こいつらの事を知っているだろうか?笑」

「そうだ、ほとんどの人なら私たちの存在を知っているはず、なのに何でこの人は――」

秋人 「?。何言ってるんですか、普通の女の子ですよ?…」

まさかの私達の存在を知らない人だった!?

男1 「ギャハハハハハ!!お前それ本気で言ってるのか!笑」

秋人 「そうだけど、何か?」

男2 「だったら教えてやろーか?こいつらの存在 笑」

ほんとにこいつらは……余計なことをするじゃん!!

秋人 「そんなことより結構うるさくて人様に迷惑なんでどっか行って貰ってもいいで

すか？」

男1・2 「ああ……？」ピキツ

秋人「聞き取れませんでしたか？迷惑なんでどつか行け！って言っているんです。聞かない場合は警察に通報しますよ？ほら、証拠もバッチリ」

助けに来た人は男達に端末を見せて証拠を確認させた。

男1 「テメエ……!!」ピキツピキツ…

秋人「自分は大ごとにはしたくありません。ですのでここはどうかー」

男2 「ふ……引けてなあ……やる訳ねーだろ!!」

男は男の子に拳を振り落として来た。しかし男の子はそれをいとも容易く男の拳を掴んだ。凄い……まるで私達の提督見たい……。

秋人「はあ……これだからチンピラ気取りは嫌いなんだよ……」

男2 「な!？」

秋人「おい、これが最後だ。今すぐここから消えろ……」

その瞬間男の子から得体の知れない威圧を感じた。何この人は一体――。

男1・2 「ひっ……！チツ覚えていやがれ!!」逃

秋人 「もう二度と会えませんがね……笑。あ、大丈夫でしたか？」

男の子は私達に気づいて声を掛けてくれた。

鈴谷 「うん。私は大丈夫だよ！」

電 「私も大丈夫なのです」

鈴谷 「あ、えつとありがとね助けてくれて。お陰で助かったよ（男達が死ななかつた事）」

電が完全に殺るスイッチ入っちゃったからなく。

秋人 「いえいえ、自分は当たり前のことをしたただけですのぞ」

電 「それよりも本当に私達のことを知らないのですか？」

秋人「どういう意味ですか？」

この人は本当に何も知らないんだね。逆に珍しく感じる。

鈴谷「知らなかったら大丈夫だよ。別にこれと言って気にすることもないしね」

秋人「は、はあー。じゃあ自分はこれでーなーなー!?」

鈴谷&電「!?」

提督が男の子に向かって殴りに行った。そして私と電はびっくりした、提督が殴りに行った事ではなく、またもや男の子は容易く片手で受け止めたから。

提督「ほう……随分と喧嘩慣れしているみてえじゃねーか……」ピキツ!

秋人「どういふつもりかは知りませんが、恐らく貴方は誤解していますよ……!?」

ちよっ!?やばい、これは本気で男の子が死んじやいそう!!

提督「いい度胸じゃねーか。この期に及んでまだ誤魔化すつもりとはな……」ゴゴゴ

ゴ…

鈴谷「ちよつとストオオオオオオプ!!!」

提督「どうした？今からこいつを」

電「この人は私達を助けてくれた人なのです！悪い人ではないのです!!」

提督「そうなのか？」

秋人「だから言ってるじゃ無いですか！」

拓海「秋人!!お前は何やらかしてんだよ！」

今度は男の子の友達が来たみたい。なんかカオスな展開になって来た、ちよつと面白いかも。それに助けてくれた男の子の名前が秋人というらしい。

秋人「助けたら逆に絡まれた…拓海まじ無理、助けて笑」

拓海「あの！秋人がなんかやらかした見たいですみませんでした!!ほらお前も謝れ！」

秋人「はあ!?!…すいませんでした」

提督「こつちも悪かったな、誤解しちまった」

拓海「お気に召さなくても大丈夫です!!ほら秋人さつさと行くぞ!!!」

秋人「待てや拓海!!!」

秋人という男の子は拓海という男の子と一緒に駆け足で何処かへ行った。何故か提督は2人をじっと見ていた、理由はわかるけどね…。

提督「……………」

鈴谷「どうしたの提督あの2人を見て、まさか提督のパンチが止められるとはね〜」
提督「結構本気で殴りに行ったんだけどな……………あいつは何者だ、秋人っつー奴は……………」
電「提督があんな顔をするなんて、よっぽど凄かったのですね、きつと」

鈴谷「そうだね、あの人の言葉を借りるなら もう二度と会えない笑。だけど……………」
けど本当に何者だったんだろ。またいつか会ってみたいなくなんて思ったりする。

side out 鈴谷

side 秋人

拓海「お前本当に変装しててよかったな？制服だったらワンチャン探されていたぞ……」

秋人「それな……」

現在俺は拓海と一緒にまたショッピングモールをフラついていた。それにしても俺の嫌な予感には本当によく当たる、最悪な形として……。

秋人「多分もう二度と会えないけど笑」

拓海「それフラグな」

秋人「思っても言うなし……はあく本当に俺はこの世界が嫌い……」

そう言いかけた瞬間、俺の耳にはつきりとショッピングモールで流されていた音楽が聞こえて来た。

くでも不安なんて唱えてないさ♪

秋人「は!?!この曲はまさか!?!」

拓海「はあ……聞こえちやったか……」

く 僕らは今夜も叫んでいたい♪く

秋人「 I LOVE THE WORLD

I LOVE THE WORLD

I LOVE THE WORLD……♪
「!!!!

拓海「始まった……」

俺はやっぱりこの世界が好きだ。

番外編 体育祭 上

体育祭。全校生徒が（休まない限り）唯一、強制的に参加させられると言う、運動音痴な人にとつて、なんともまあ傍迷惑な行事だ。この行事は大体秋にやることが多い。そんな前置きはさておき、俺の通っている私立高校も体育祭が始まろうとしていた。先輩から聞いた話だが、この学校の体育祭は、毎年白熱しすぎて、荒れて、怪我人が続出してしまっているらしい。簡単に言うとかち勢が多いのだ（ちなみに俺もガチ勢の1人になる予定）。何故、みんながみんなガチ勢になるかと言うと、優勝したクラスには、何故かバイキング無料券と言う豪華な商品が貰えるからである！ ” この学校ってそんなにお金持ちなの!?” と思っている奴がいるから説明するけど、結局は俺達が払っている学費からとつているだけであつて決して金持ちではない、まあ校舎は綺麗だけど……。だからみんなはその学費を取り返すべく、ガチ勢になるのだ。まあ俺の場合は運動が出来ればそれで良いけど。

拓海「秋人オツハ〜！」

一人でそんなことを考えていると、クラスメイトで部活仲間の1番の親友、拓海が声を掛けて来た。

秋人「おう、拓海オツハ〜！」

拓海「ところで秋人、とうとう始まったな…俺たちの学費を取り返す為の戦争が……」

秋人「そうだな…」

現在俺たちは、まだ教室中にいる。理由は開会式が始まるまで待機しているからだ。

拓海「お、今日は前髪おろしてんだ〜」

秋人「当たり前だろ、勝つ気で行くんだから！」

？「出た出た〜本気モードの秋人〜」

秋人「うるせー、夕立」

立夷「夕立じゃねー！立夷だ！」

こいつはクラスメイトの夕陽ゆうひ。立夷たつひ。陸上部に所属していて、性格は誰でもいるような感じ、いわゆる the 普通。何故夕立と呼んでいるのかは察しの通り名前に

笑

この時、クラスの全員は一斉に——

全員（メタいな……）

——と思っていただろう。もちろん俺も思っていた（、・ω・）

担任「——まあそんな事は置いて、全員出席——と。優秀だなお前ら。その調子で優勝も挽ぎ取るぞツツ!!」

全員「イエツサ——ツツツ!!」

俺達の掛け声とともに朝礼は終わった。そのあとグラウンドへ行き開会式が始まった。そして、例の校長先生の長あああ話が始まる。ほとんどの生徒は、校長先生の話なんざ右から左へ受け流す。勿論俺も 笑。開会式が終われば、第1種目定番の全体体操、それが終われば第2種目出場する生徒以外は、クラスのテントに行つて待機。ちなみにこの学校の体育祭の種目はと言うと——

準備体操、パン食い競争、50mハードル、タグ取りサバイバル、二人三脚、10

0 m走、騎馬戦、男女混合600 mリレー、クラス対抗リレー、綱引き、部活対抗リレー、ハンドボール、フットサル、保護者参加競技、20 mシャトルラン、応援合戦。

というものだ。その中で俺はハンドボール、タグ取りサバイバル、フットサル、部活対抗リレーに出る。だって俺の身体能力が発揮されるのそれしかないし、あとフットサルと部活対抗リレーは強制的に指名されました！ちなみに拓海もフットサルと部活対抗リレーに参加するみたいだ。

ーとりあえず午前部の部のある程度の種目が終わっていいよ俺が出場するタグ取りサバイバルだ。ルールは普通のタグの取り合いだ。タグは二つ付けて全て取られると脱落、5分以内に何人生き残れるかの勝負だ。ちなみに1クラスの参加人数は8人。ちなみに俺たち1年のクラス数は4クラスだ。高校のわりには少ない方だな。

秋人「つしやああああ！気合い入れて頑張るぜッツ！！」

立夷「秋人、目標何人墮とす？」

秋人「10人だな…」

立夷「流石」

「……そしてタグ取りが始まった。……結果は圧勝、だって身体能力が高いやつらを固めたんだから当然だ。ちなみに女子も運動部の子を入れた。やつてる間滅茶苦茶楽しかった。俺は宣言した数よりも5人多く脱落させることができた。そんな俺を見て周りの奴らは「勝てる気がしねえ……」って思ったらしい。」

他クラス「秋人お前どうなつたらあんなアクロバティックに動けるんだよ!？」

秋人「g g r k s 笑」

「……………」

この後も、調子良く上位で終わらすことができたが、こつちにも欠点があった。それはガタイがでかい奴が誰一人もないのだ、全員が一般体型。すなわち、綱引きや騎馬戦が限りなく弱い。得点が結構高い競技が弱いので、なんともまあ危うい立場にいる……まあみんなはめげずに頑張るけど！

……結果は案の定最下位、他クラスにグツと得点をもぎ取られた。気づけば全クラスがいい感じの点数になっていた。

拓海 「ここからが勝負だな…」

秋人 「まあ頑張るしかねーんじゃね？それより、次の競技なんだっけ？」

拓海 「確か保護者参加競技だったはず、競技内容は毎年変わるらしいな。今回は————居合斬りだな」

あ、終わった——

拓海 「どうした秋——」

観客1 「うおおおおお———すげええええ!!!」

観客2 「なんなんだあの人はツツ!？」

観客3 「カツコイイイイ!!!」

拓海が俺に何かを聞こうとした瞬間、グラウンドが歓声の嵐になった。俺たちは中で何が起きているのか、観に行つた。まあ大体はわかる、なぜなら——

頼長 「ふんッ！」

ズバツ---

親父が刀で5く6本ぐらい並べた竹を綺麗に切っていたのだから。つーか体育祭で居合斬りつて大丈夫なのか!?俺はそこが心配だ。

観客「おおおお〜」 8888

頼長「こんなもんか……まだまだ甘いな」

秋人「おい親父!!さすがにちよつとやり過ぎだろツ!」

頼長「ん、バカ息子か。居合斬りと聞いから参加したただけだ」

秋人「あんたは格が違うから参加すんな!!親父がやると競技じゃなくて演武になる
!」

頼長「別にいいだろう演武になつても、人を喜ばせているなら」

秋人「まあそうだけどー」

なんだかなあ、ふに落ちないっていうか。なんか複雑な気分になる……まあいいや。

秋人「とりあえず終わったから、早く保護者の席に戻れ親父……」

頼長「仕方ない…」

親父は素直に退場した。残りの保護者かというと、親父の存在のせいで少々気合が感じられなくなっていたようだ。

拓海「頼長さんマジイケメンだな…!!」

秋人「俺からしたら鬼のような親父だけだな…」

親父の変な登場によりグラウンドが騒ついたがここで一旦昼休憩になる。昼は校舎内や、この日だけ特別に外食可能。しかし遅れた場合は即失格で最下位が確定になる。

時音「秋人、今からみんなでファミレスにでも行かない?」

クラスは違うが部活仲間の男の娘の時音が声をかけてきた。そして時音を見て俺はすぐに思った。本当に男なのか? つと。顔はもちろん、体操服だけど、ズボンがフツートの半ズボンではなく、なぜかショートパンツをはいているからだ。ちなみになぜショートパンツがあるかというと、この学校が女の子の可愛さ重視やら、女の子達がショート

パンツも作って欲しいと要望があったかららしい。しかしショートパンツは別に女の子用ではない、男もはけるのだ。まあ誰もはくとは思わないだろうな、目の前の時音を除いて。

秋人「おお、いゝね！それよりもなんでショートパンツをはいてんだ？男なのに恥ずかしく無いのか…？」

時音「動きやすかったから、はいてみたんだ！ー変？」

秋人「いや、変じゃない。むしろ似合ってます!!」

時音「そう言ってくれると嬉しいよ…!!／／ーあ、それよりも拓海達が待ってるから早く行こ！」

秋人「OK」

そうして俺と時音は拓海と良と合流した。いつメンの完成だ！

良「おつせーよお前ら！時間が無くなるだろ!!」

秋人「わり〜！」

拓海「何してたん…だ…あああああああ!？」

時音「どうしたの拓海？僕を見て叫んで」首傾げ

拓海「時音が体操服のシヨ…シヨ…シヨートパンツをはいてる…だとツ!?」

良「あー俺も1回目の反応はそんな感じだった」(・ω・)

時音「やっぱり変なんだね…」

時音が涙目になった。その瞬間俺の何かが切れたようだ

秋人「お前ら表へ出ろ」笑顔

拓海「めっちゃ似合ってます!」

良「抱きしめていいでしょうか!!」いや、足を舐めさせてくださいツ!!」

秋人「この変態がああツツ!!」

良「あべしっ!」

—————

※ほぼ会話にします

変な茶番があつたが、なんとかファミレスでご飯を食べ終わって現在学校に戻っている最中。

拓海「そういえばさー、部活対抗リレー何故か俺等1年が走る事になったよなー」

時音「サッカー部は毎年1年生が走る事になってるんだって、噂では度胸試しらしいけど」

秋人「なんだよ度胸試しって…なんの試しにもなってるねーよ…むしろ楽しみだわ!」

良「で、第1走者が俺だろ?嫌だなあ…」

拓海「男が嫌とか言うなよ、恥ずかしいだろ」

秋人「俺がアンカーとかマジ燃えるわ〜!拓海第3走者頼んだぞ?」

拓海「任せろって!」

時音「僕遅いからみんなの足引っ張っちゃうよ…」

秋人「心配すんな時音ー」

3人「俺たちが付いてる!!」

時音「みんな…ありがとう!」笑顔

3人(可愛い…ー絶対負けらんねー!!)

色々と話しながら俺たちは学校に着いた。

良「あ、言うの忘れてたけど、フットサル当たったらよろしくな」

時音「楽しみにしてるから！」

秋人「あ、そうかお前ら同じクラスだったな。OK、その時は敵同士だから本気で行くからな！」

拓海「会うのは絶対決勝戦で」

先に時音と良が学校へに入った。早くフットサルになんねーかなあ。その前にハンドボールだったわ…

拓海「秋人、俺たちも行こーぜ」

秋人「了解」

そう言つて学校に入ろうとした時。

ドンツ---

? 「きやあ！」

誰かにぶつかった。そして下を見ると女の子が転んでいた。

秋人「大丈夫ですか？」

女の子「すみません…大丈夫です！」

俺は手を出して女の子を立たせてあげた。長い黒髪で頭のとっぺんには一本？髪の毛が飛び出している、世間でいうアホ毛で、青のセーラー服を着た女の子だった。今時、いるんだなセーラー服着てる子。

秋人「随分と焦っていましたが大丈夫ですか？」

女の子「ツ!?そ、そうでしたツ！先度はすみませんでしたツ！ではツ！……」

セーラー服の女の子は急いで走っていった。……あれ？思ったけど今日平日で学校だよな？なんで学生が普通に……まあいいや。

拓海「大丈夫か、あの子。なんかやばそうな気がしてならないんだけど……」

秋人「確かに…………ん、何だこれ？」

俺は、地面に落ちてるサラリーマンが持っているような黒い鞆を見つけた。恐らくさっきの女の子の物だろう。体育祭が終わったら警察に届けるか。

拓海「さっきの女の子が忘れたんだと思う、一応中を確かめようぜ」

秋人「そうだな〜ローラーえ〜となにこの箱…中は指輪!? ローそんで何〜なんかフィルムがあるな。あと、何この写真ツ!？」

拓海「うわあ…なんかやばいなこれ」

俺たちが見た写真は、色んな女の子が性行為している写真や全裸の写真などがあつた。今すぐに破りたい。

? 「おい、お前らツ!!」

鞆の中身を見ていると白のジャケットを着た男が俺たちを呼んだ。こんなクソ暑い日なのによく長袖のジャケットを着てんなこのオッサンは……逆に尊敬する。

秋人「何ですか？」

男「セーラー服を着た女の子を見なかったかッ！」

2人「……」

拓海「あつちの方向に行きましたよ？」

男「何ッ、逆の方向だとッ!? チッ……逃すかッ!!」

そういつて男は女の子が走っていった逆の方向へと走っていった。そう、俺たちは嘘をついたのだ、色々と嫌な予感がしたから。……けど、大の大人が……教えてあげたのに礼ぐらいは言えよ……礼儀がなくなってませんねえ。

拓海「秋人……」

秋人「分かってる……けど動くのは体育祭が終わってからな……」

拓海「当たり前だろ……」

番外編 体育祭 後半へ続く……

番外編 体育祭 中

担任「……で、結局お前らは、今までどこで何をしていたんだ？」

女の子とオッサンの件があつて俺たちは午後の部が始まる5分前にクラステントについた。そして現在俺たちはみんなの前で正座をして担任から説教を受けている。リアルに公開処刑だろこれ……………。

秋人「すいませんくちよつといざこざがあつてえ〜」

拓海「こいつが変な所でつまずいて転んで遅れました」(´・`・´)

秋人「なツ!!? ……てめえ拓海ツ! 何勝手に罪なすりつけてんだよツ!!」Σ(。Д。1
11)

担任「分かったから落ち着け…。 ……つたく…とりあえずお前ら、フットサル1位じゃなかったら、クラスが優勝してもお前らだけバイキング無料券無しなく…」

2人「ガツデムツ!!」

担任からのえげつない試練を出されて、時間も経たないうちに午後の部が始まった。そして午後の部の1発目の競技がハンドボールだ。ルールは公式のものと一緒だが、1人のボール所持時間は無制限だ。1試合の時間は5分、しかし前半、後半というのが無い。そのため失点するとかなりキツイ。なのでまずはシュートを打たせないことが大事だ。メンバーは男子3人と女子2人の5人混合チームじゃないといけない。

秋人「こつちにハンドボール部が1人もいないのはちよつと痛いな…」

女子「大丈夫だよ秋人君！私達もそれなりに出来るメンバーを集めたんだし！」

秋人「そうだな！っしやああ!!行くぞッ！」

—————結果は惜しくも2位で終わった。1回戦は4―2で勝ったが決勝では2―2の同点でPK負けだった。

秋人「はあ…同点になったのにPK負けかよ…。クッソ悔しいッ!!」

男子「けど凄かったな秋人！決勝の後半ほとんどお前無双してたぞ？ドリブルが青○

みたいだったしジャンプシュートもめっちゃ速かったじゃん！」

秋人「けど負けたのは変わりねーよ…次のフットサルで挽回してやる……！」

そうは言っても次のフットサルまで結構時間が空くので、俺は時間を潰すために自販機に向かった。

尾形「おお、秋人！ いたいた〜！」

後ろから俺を呼ぶ声だったので振り返った、するとそこには――

秋人「あれ？ 尾形さん!? どうしてここに、仕事は？」

いつも親しくしてもらってる親父の友人の尾形 正義さんがいた。いつもこの日は秘密の仕事とやらに行ってるはずなのに、なんでだろ？

尾形「頼長に来るように言われてな、仕事も抜けてきた☆」

秋人「大丈夫なんですかそれ…？」

尾形 「大丈夫だよ！……多分な（小声）」

あれ…今多分って聞こえたような…まあいいや。

秋人 「そうですか、大丈夫ならー」

？ 「正義さんツ!!」

奥の方からまたもや声がした。見ると眼鏡を掛けたロングヘアでカチューシャをしており、またもやセーラー服を着た女性が走ってきた。ーとりあえずツツコませてくんない？肩に小さな人形が乗ってるし…

女性 「仕事をさぼって外出するなんて何を考えているんですかツ!!」

尾形 「いやゝすまん！秋人の体育祭が見たくてのゝ」

女性 「秋人？」

尾形 「目の前にいる人じゃ！私の孫みたいな存在だよ！」

秋人 「どうも、櫻川秋人です」 頭を下げる

大淀 「はじめまして、私は大淀と言います！よろしくお願いしますね！」

秋人「こちらこそよろしくお願いします、大淀さん」

大淀「……なんか江戸時代の人みたいな名前だな……あ、それよりも……」

秋人「あの、つかぬ事をお聞きしますが大淀さん……あなた学校はどうしたんですか？
それに仕事って……」

大淀「学校……？……ハッ！いやッ、き、今日は……」（@ ?? @ ;）

尾形「ちよつとなあ……！」

2人揃って怪しい反応だな……

尾形「そ、そう！あれだよ臨時休校だよ！なっ大淀？」

大淀「そ、そうです！休校なんです！なので私は正義さんの仕事を手伝っているんです!!」

臨時休校ねえ……まあいいやとりあえず信じとくか……逆に疑ったらめんどくさくなりそうだし。

始まるギリギリで拓海達と合流できた。やっとフットサルまで来たな、すげー楽しみ〜！ちなみにフットサルのルールはと言うと基本公式ルールと同じだ。しかし時間はハンドボール同様前後半が無く、チームも男子3人、女子2人の混合だ。はあー、早くモチベーションを上げとかないとな〜。

時音「あ、秋人！良かったよ、運良く決勝戦で僕達が当たるよ！」

良「絶対に負けんなよ？」

秋人「そりやお互い様だろ？」

拓海「確かに」

俺たちは運良く時音のクラスと当たらなかった。いよいよだなー！第1試合は俺達からで、時音達は俺たちの試合を見てからだ。

女子1「秋人君、相手男も女の子も経験者で固めて来てるよ…」

秋人「大丈夫だ、俺と拓海がついてる！自信持ってプレイしたらいいぜ！」

女子2「さすがアッキー！」

立夷「期待してるぜ、サッカー部！」

拓海「おい秋人！無駄にプレッシャーかけんじゃねーよ！」

秋人「良いじゃん、事実なんだし」

審判「それでは、第1試合を始めます！」

2チーム「よろしくお願いします」

そして——

ピイイイイイイイイイイ——!!!

——と開始の笛が鳴って第1試合が始まった。

——

ピイイイイイイイイイイ——!!!

と再び笛が鳴って試合が終了した。結果は3—2で俺たちが勝った——正直危なかつたな……。

そして第2試合は、言うまでもなく時音と良がいるクラスが勝った。そして決勝戦……。

秋人「本気で行くから覚悟しろよ時音！」

拓海「勝たなきゃバイキング券が没収されるからな」

時音「じゃあ、だったら尚更負けるわけにはいかないかなあ〜」

良「俺たちを舐めんよお前らあ〜」

審判の笛とともに試合が始まった。まず俺は、お手並み拝見としてダイレクトプレーをした。良と時音は俺のやり方を知っているせいかプレッシャーを掛けてこない。それ以外の奴らは無駄にプレッシャーをかけてくるのでパスコースが空いてパスを出しやすい。しかし、時音達の攻めになると良が爆速スピードのドリブルで前線のデイフェンスを蹴散らせ、時音がパスを受けるともうほとんどボールが奪えなくなる。ボールを隠すのが上手いし、シュミレーションが半端ない、すぐに体を当てると倒れて逆にこっちがファールになる。だからこそ、デイフェンスに拓海がいる。拓海は良や時音の特徴を完全に熟知しているため、ある程度抑えることができた。

時音「流石拓海だね、シュミレーションができないじゃないか…」

拓海「けど、時音も以前より上手くなつると思うけど…」

立夷「つーか秋人そろそろだろ？本気出せよ！」

秋人「もう半分か：そうだな、じゃあ全力で行くぞッ!!」

良「やべ、全員ディフェンス集中しとけ！」

俺はお手並みをやめて本気で行った。時音と良で俺のマークに着くが、俺はマークを外してボールをもらう。そしてドリブル開始、俺は相手を余裕に抜いていきゴール前にいく、そこで拓海達にパスを出してシュートを打たせる、その繰り返し。周りで見る奴全員が、俺が1人抜くたびに歓声上がる。そして、良と時音以外の3人がかりでディフェンスに来て俺は足技で余裕にかわした。しかし、良と時音は俺のスタイルを知っているため、中々抜くことが出来ない。やっぱ流石だわ………

時音「絶対に抜かせないよ！」

良「勝ちたいからな……！」

秋人「やっぱり流石だわお前ら、けど今回だけは勝たせてもらう!!」

良・時音「ッ!？」

俺は2人を抜いて、シュートを決めた、その瞬間試合が終わった。結果1―0で俺たちのクラスが勝った。いや、まじで危なかった……。

時音「やつぱり秋人は強いね……」

良「いつかりベンジしてやるからな」

秋人「おう、そんな時は最初から全力で行くから！」

拓海「最初からそれでやれよ……」

—————

担任「とういわけで1位おめでとさん〜！約束通り、バイキング券有りになったから」
拓海・秋人「っしやあああああ!!!」

—————俺たちが喜んでる間すぐに部活対抗リレーが始まった

良「俺たちに勝った奴らと一緒に走って……」

時音「ちよつと気まづいよね〜」あはは……

秋人「仕方ねーだろ…俺だつて気まずいんだから…」

拓海「とりあえずさっきのことは忘れて、味方としてこうーな？」

良「そうだな、つしやあああ〜！行くぜツ！」

時音「流石良…切りかえが早い…」

他クラブ生「おいおい、今回もサッカー部は1年が出てんのか〜」

いきなり他クラブの先輩、多分3年生が声をかけて来た。——なんだよこいつ…

秋人「伝統なんで仕方ないですよ。それより先輩は僕たちに何か用ですか？」

他クラブ生「用？そうだな、とりあえずお前らは1位無理だから諦めろ、去年も俺ら陸上部がダントツで優勝したから」

時音「無理かどうかはやってみないと分からないよ！」

陸上部「ん？お前も出んのか？——ブツ、ハハハハッ！めちやくちや笑わせてくれんじゃん。女が走るとか何考えてんだよ！」

時音「ツ！僕は男だツ!!」

陸上部「それでもだろ！女見たいな奴が走るとかヘッドが出る、現実を見ろ！」

先輩がそう言った瞬間、時音の目からは涙溜まっていまにも流れ落ちそうになっていた。その瞬間俺の中にある何かキレたような気がした。そして先輩は陸上部が集まってる所に戻って言った。

秋人「時音、大丈夫だ俺たちが付いてる…」時音の頭を撫でる

時音「秋……人……？」

拓海「そうそう、それに周りに何言われようが関係ないし、知ったこつちやねー」

良「まあとにかく……」

※時音はサッカー部にとって天使的存在です。それを侮辱したのですから……

3人「陸部上等ツ……全面戦争だツ!!時音を侮辱したこと後悔させてやるツツ!!」ゴゴゴ……

「……こうなる。とりあえず良が本気になったから、もうリレーはこつちのモンだ。パンツ!!」

というピストルの音ともに対抗リレーが始まった。走ってる部活は、陸上部、サッカー部、バスケット部、野球部、バレー部だ。第1走者は良だ。

実況「さあ始まりました、部活対抗リレー……おおうといきなりサッカー部が前

に出て1位だあああ!!速い速い、陸上部も追いつけません!

良「時音ッ!」

時音「任せてッ!」

実況「さあ早くもサッカー部は第2走者へとバトンが繋がったああ!———
おおおおとサッカー部が3位に転落、大丈夫か!?そして陸上部が1位だああ!!」

時音「拓海ッ!」

拓海「おう、んじや俺も本気を出すかなッ!」

実況「さあはやくも第3走者へとバトンが繋がった———なんとここへ来てサッカー部の追い上げ一気に3位を抜き1位の陸上部との距離を縮めて来たああ!!!」

陸上部「———へえ、やるな。だが勝負は俺の勝ちだ!!」

拓海「秋人ッ!」

秋人「分かっているって!あいつを全力で潰す…」

実況「リレーはアンカーに渡ってなんとサッカー部と陸上部が一進一退の激戦だあああ!」

陸上部「(こいつッほんとに1年かッ!?早すぎる!このままだと———)———へッ!
ニヤッ

陸部の先輩は肘で俺の顔面を狙って事故と思わせるせこい事をしようとして来た

陸上部「終わりだッ！」

秋人「考え方が甘いんだよ雑魚先輩さん…」

陸上部「なっ!?!」

陸上部3年のお前に告ぐー

秋人「男なら正々堂々と勝負しろ、じゃあノー」

俺たちサッカー部が // NO. 1 // だ

そして追いつかれない場所で お前を誘いざなうー

実況「ゴオオオール!!今年の部活対抗リレーの優勝は何とサッカー部だああ。さらに第1からアンカーまで全て1年生というこれまでにない革命が起きたああ!今年のサッカー部は何かが違うぞ!!」

拓海「さすが秋人、あそこでよく先輩の肘かわせたな！」

秋人「あのタイプ人は絶対にあーいう事するって相場は決まってるんだよ」

良「読みがすごいなあ……」

時音「みんな……ありがとう。けどまた僕のせいで迷惑……うわあ!？」

俺は時音が最後までい終わる前にまた頭を今度は激しく撫でた。

秋人「何言ってるんだよ、時音も頑張ったじゃん！時音の走者はほとんど俊足の奴が揃ってたんぜ？途中で野球部と陸上部しか抜かれてないんだから、逆にスゲーよ！」

良「時音が3位で踏ん張ってくれたおかげで、優勝できたと言っても過言ではない！」

拓海「だから全部時音のおかげだな！」

時音「みんな………………はうッ……！」

時音がまた泣きそうになったので俺は時音に向かって軽くデコピンをした。

秋人「時音、泣くんじゃなくて笑顔だよ、優勝したんだから！」

良「そうそう、笑った方が可愛ー」「良くうんく？」「ーすいません…」

拓海「笑顔が大事！」

時音「うん…：…ありがとうみんな!!」最高の笑顔

良「やつぱは時音、男とかどうでもいい！俺と付き合ッ（ry）」

秋人「変態は黙ってろッ!!」

良「へぶらッ!!」

拓海「まーたやった…」呆れ

時音「ははは…」(?▽?；)

番外編 体育祭 下

担任「とりあえずお前ら、1位おめでとうさん。お前らが頑張ったから優勝できた。だから今回は何を隠そうお前ら全員がMVPだ、というわけで今からバイキング無料券をお前らに贈る、プラス俺からの差し入れだ。」

閉会式が終わり、俺たちのクラスが1位になった事で俺たちの教室はお祭り騒ぎになっていた、踊る奴もいれば、歌う奴もいた。担任がいるにも関わらず。担任は俺たちを静かにさせた後、そう言っただけで俺たちにバイキング無料券と差し入れを渡した。その差し入れがなんなのかというところ、5000分のギフトカードだった。

クラス全員「すげえええええええ!!」

秋人「先生、あんたそんなに金持ちだったのッ!?」

担任「あれ言っただけでなかつた?俺、結構金持ちよ」

秋人「自分で言うんかい……」

見た目20代後半なのに、何して稼いでんだろ……私気になります。

担任「とりあえず今日はもう終礼しないから各自で適当に帰ってくれ、それじゃあまた明日な〜」

そう言って担任は出て行った。時計を見るとまだ2時半……んじゃ俺も帰りますかね。

秋人「拓海、帰ろうぜ〜」

俺はクラスの男子と楽しく会話してる拓海に声を掛けた

拓海「OK秋人、じゃあまた明日な!」

男子「イケメン2人でどこ行くんだよww」

男子2「風俗かww?」

秋人「何言ってるんだよお前ら……。普通に帰るだけだよ、じゃあまた明日な〜」呆れ
男子「おう、また明日〜!!」

クラスの奴とそう交わした後、俺達は教室を出たそしてタイミングよく時音と良も教室から出てきた。

時音「あ、秋人と拓海だ！」

良「一緒に帰ろーぜ〜！イケメンおふたりさん！」

秋人「悪い、俺たちこれから用事があるから一緒に帰れないわ」

時音「用事って何の？」

秋人「用事は用事だよ」

時音「だから何の用事なの？」

ちよつ……時音結構グイグイ来るなあ…。

秋人「何のつて、そりゃ〜…」

拓海「…うん」

良「なんか怪しいなあ…」

やはり感ずかれてしまった。そして時音はいきなり歩き出し、俺たちの通路の前に立ち、両手を広げて一言――

時音「秋人、拓海、本当の事言うまでボクはここから動かないよ」

――と言つて頬を膨らませた。うん、可愛い…。

良「秋人、拓海、こうなつた時音は言うまで通らしてくんねーぞ」

拓海「…秋人」

秋人「はあー…仕方ねーな……とりあえず下まで降りるぞ」

――

俺たちは一階にあるロッカーに行った。そして俺のロッカーに隠していた黒い鞆を2人に見せた、もちろん中も。

良「何このサラリーマンが持つてるような鞆、しかもその写真……うわっ……やばッ」

時音「うう……気持ち悪いよ……」

そして俺は、2人にこの鞆の事の経緯を全部話した。そして現在正門まで歩いてる。

良「なるほどな〜つまり白いスーツを着ていた男が女の子を追いかけてたと」

秋人「見た感じそうなるな」

拓海「まあ、あくまで仮説だからそれが本当かどうかは分からないし、仮に追いかけていたとしても、その女の子が悪いことをしたから追いかけてるって可能性もあるし。例えばひったくりとか〜」

時音「何か当てはあるの、秋人？」

秋人「無いな」(?+!?)

良「無いんかい!?!」

秋人「まあテキトーにそこから辺歩いてたらみつけれらるだろ、かなり大事そうに抱えて持ってたし、落としたことぐらい〜」

俺は正門を見た瞬間、言葉が途切れた。理由は簡単だ、そこにぶつかつた女の子がいたから。多分鞆を探してるんだろう。

良「どうした、秋人？」

秋人「いた。あの子だ、俺とぶつかった女の子」

拓海「ーほんとは。て事は鞆を探しに来たって感じかな？」

良「アレエ。あの子、俺超タイプだわー!!」

時音「変態は黙ってて…」

秋人「ちよつと行ってくるわー」

拓海「おい、秋人!？」

side out 秋人

side 潮

私の配属している鎮守府の提督さんは、いつも気に入らなかつたら、みんなに罵声や暴力を浴びせる人です。なのに夜になると夜伽の相手をさせられる挙句、写真や映像を撮って楽しんでます…それに憲兵さんまでもが一緒に夜伽をしています。だから私は、こんな地獄からみんなを助ける為に今日、隙を見て提督さんの鞆を奪って、大本営に持っていくことを決めました。

潮「…うう…どうしよう…」

ですが現在、私は提督さんの鞆を探しています。大本営に持っていく途中で、鞆を落としてしまったからです。

潮「早く鞆を見つけないと…提督さんに…」

———それに知らない学校の前で一人で鞆を探しているんだ…周りに不審者だと、いつ思われてもおかしくない…。私が不安になりながらも提督の証拠鞆を探している
と———

秋人「あのー？」

潮「ひゃ、ひゃいッ！」

突然、後ろから男の人が声をかけてきたので、私はびつくりして声を上げてしまった。その声に周りにいた人達は更に私の方を見てきた。———うう…恥ずかしいです…で

も声を掛けられたんだし後ろを向かないとダメですよ…。私は恐る恐る後ろを振り返った、声の正体はあの時ぶつかってしまった男の人だった。

潮「あ、あなたはー！ー!!」

秋人「こんにちは、さつきぶりですね。ところで貴方はここで何をしていたんですか？」

やっぱり不審に思っ、私に声をかけてきたんだ…！うう……どうしよう…！ー！でも、ここはちゃんと正直に言った方がいいですよ…

潮「す、少し探し物をしていまして…」

秋人「もしかしてこの鞆ですか？」

そう言っ、男の人は私に鞆を見せてきた。ー！ー！それを見て私はびっくりした、なぜならその鞆はまぎれもない提督さんの物だったからー！ー！

潮「ー！ー！?はい、それです…！でもどうして…」

秋人「自分とぶつかった時、貴方は落とした鞆を拾わずそのまま走って行ったので自分が代わりに預かっていました。ほんと良かったですよ、貴方を探す手間が省けたので！」

「……思い出した……それで鞆が……じゃなく！早く鞆を貰って大本営に届けに行かないと!!」

潮「あ、あの！預かって頂きありがとうございます！……ですが鞆を早く、返して頂けませんか！それを持って早く行かないといけない所があるので！お願いします!!」

私は鞆を預かってくれた男の人に、早く返してもらえるようにお願いをしました。ですが……

秋人「分かりました！……と言いたい所ですが、鞆の中を見てしまったので、事情を聴くために一度署までご同行を願います……」

潮「……ひっ……」

「男の人は、お願いを聞いてくれるどころか、逆に事情を聞かれる羽目になってしまいました…。それに急に男の人の目が鋭くなって私は怖さのあまりまた小さく声を上げてしまった。…うう…。…どうしよう…。時間が無いのに。そんな時――」

拓海「おい、秋人！今の言い方は誤解を招くことになるからやめろ…」

時音「年下の女の子に対して、酷いよ秋人！」

良「とりあえず謝れ秋人！」

潮「――へ？…」

「――男の人の友達でしょうか、3人の男の人がきました。――あれ、1人の人は男なのかな…。女の子のように…。」

秋人「分かったから…。――悪い、脅すような言い方をして。あ、あと普通の口調に戻すから。――この写真がどうしても気になって…。…ここじゃマズイと思うから向こうにあるス〇バでこの写真の事とか、なんで急いで走っていたとか俺たちに教えてくれないか？頼む！」

男の人は頭を下げて言ってきました。それを見て私は、心の何処かで “この人達なら……” と僅かな希望を持ったのだと思います、だから——

潮「……分かりました説明するので、ま、まずは頭を上げてください！」

——私はこの人達を受け入れたのかもしれませんが。私はこの人達と近くの喫茶店？みたいな所で、今までの事を全て話しました。提督さんの事や、みんなの事を全て——

side out 潮

side 秋人（多分ほぼ会話）

俺は事情を聞くために、女の子と拓海達とス〇バに行った。そして女の子は洗いざらい全て話してくれた。

秋人「要するに君の上司？は君や君の同僚達に性的暴力や罵声を浴びせていたと——そしてそれが証拠の写真ってな感じか？」

潮「はい…そうです…」

良「ひでえ話だな、こんな可愛い子に暴力とか…マジぶん殴ってやりたいぐらいわ！」
時音「それだったら早く警察に提出した方がー」

潮「それじゃダメなんです！」

秋人「どういう事だ？」

潮「それはー」

潮説明中」

潮「ーとう事なんです…」

時音「そんな…」

拓海「…警察さえも味方にしてる奴なんて…どんだけすごい上司だよそれ…」呆れ
良「詰みだな☆」(・ω・)

潮「だから私は、大本営という場所へ行くんです！」

時音「そこだと君や君の仲間も助けてくれるの？」

潮「はい！」

時音「そうなんだ、それだったらー」

秋人「いや、それじゃダメだ…」

潮「え…？…？…どうして…ですか…？」

秋人「よし、これで準備完了だな！」

俺達は学校の体操服だった為、近くのシヨツピングセンターに行つて服を買つた、俺と拓海は担任から貰つたギフト券で、時音は自分のお金で、良は時音に奢つてもらつた形となつた。

拓海「俺の5000円ギフト券がああ……ちくしょう」

時音「あとで絶対に返してもらうからね、良」

良「はい……ありがとうございます時音さーいえ、時音様！」

潮「あの、皆さん。どうして服を？」

秋人「あのままでと学校の生徒だとバレるからなーあ、そう言えば潮さんも制服だけど、潮さんが行つてるところって学校か何かか？」

潮「そうですね、学校ーと少し似ているところがあるかもしれません……」

秋人「なるほどな……（正直分かつてない）ーとりあえず早く行くぞ、もう4時半過ぎてる！」

—————

俺達は潮さんや潮さんの同僚？とその上司？が居る場所についた。そこは海の近くにあり、確かに雰囲気は学校に少し似ている。だけど、一般の学校よりは少し小さい建物だ。

秋人「ここか……ーけど潮さん、その上司？は今、居るのか？ーまだ潮さんのことを探してるんじゃない？」

潮「大丈夫です、必ず居ます……！ですが……早く助けに行かないと……みんなが……！」

良「おい秋人！早く入るぞ!!」

時音「早く潮さんの仲間を助けないといけないしね」

秋人「そうだな、んじゃない行くぞッ！潮さんの上司？と全面戦争じゃあああああ!!!」

拓海「大丈夫か……これ……」

俺達は素早くその建物に乗り込んだ。

side out 秋人

side 曙

提督「おい、曙ッ!! 今日はお前が秘書艦だろッ! 早く来いッ!」

私は今のクソ提督が嫌いだ。毎日パワハラやセクハラをされるからだ。けど誰も逆らえない、もちろん私も…。そして今日クソ提督は潮を連れて大本営へ行つていたはずなのに、なぜか1人で鎮守府に機嫌を悪くして戻って来た。いつもウザいが、機嫌が悪いつのクソ提督は一層にウザい……。それよりも何で潮が居ないのだろう…。私はそこが気になった。

曙「はい…提督」

提督「全く、この潮はどうなっているんだッ!! 俺の鞆を奪って逃げるとはッッ!! 全てお前の責任だ曙ッ!!」

曙「…:…:…:すみません…:提督」

クソ提督は怒鳴りながら、私に平手打ちをして来た。いつものことだから…:私は慣れた、だけど痛い…。…:それよりも、潮がクソ提督の鞆を奪った?…:何でそんなこと

を——

提督「もういい、潮は後でしつけだ！それよりもまずは曙からだ」

クソ提督は私の服を掴んで脱がそうとして来た。——また地獄が、始まった…。

曙「ツ！——…いや…」

提督「しつこい、奴だなツ！早く脱げ!!!」

クソ提督は、今度は私のお腹を殴った。…痛いけど、私は泣かない。こんな奴の前で弱い自分を見せたくないから——

曙「…やめろツ…!!」

提督「うるさいツ！俺に逆らうなツツ!!」

曙「…ツ…!!」

さらにクソ提督に数回蹴られる…もうダメだ…誰か——

曙「誰か…助けてツ!!」

提督「ふっ…。誰も来るわけ無いのに、無駄なことを!」

そんなのは分かってる、だってみんなコイツを怖がってる、私も…だけど、ほんの少しの光があるなら、ほんの少しの希望があるなら、私は……

提督「さあ、少し早いが夜伽を始めよう」

秋人「ハイ! 証拠をガッツリ撮らせて頂きました! ご提供ありがとうございます!」

提督「………は?」

私が全てを諦めた瞬間、突然知らない男3人と多分女の子1人と潮が入って来た。………って潮!?

提督「誰だ………! お前はあの時のツ!? それにどういう事だ潮ツ!!」

秋人「どうもさつきぶりっすねー白服のお・じ・さん! 潮さんからあなたの事を全て

聞いたので証拠を撮るために来ました☆」

良「それよりもあんたか、女の子を散々傷つけたのは！」

提督「だったらどうする？警察に届けるのか？言っておくがー」

拓海「誰も警察に届けるなんて言ってますよ」

2人の男の人がクソ提督に反発している：ダメだ、早く止めないとクソ提督にツ！

曙「あんた達、もし私達を助けに来たのなら、今すぐやめて!!」

時音「嫌だ。君はこの男に殴られたり、服を脱がされたりしていたんだよ、助けない方がおかしいよ！」

拓海「そういう事だ！悪いな、お嬢さん」

曙「でもー」

潮「曙ちゃん、大丈夫!？」

私が2人に言おうとした瞬間、気がつけば潮がこっちに来ていて、私のからだを支えてくれた。

曙「う、うん。何とか大丈夫…けど、あの人達を早く——」

潮「大丈夫だよ曙ちゃん…秋人さん達ならきつと提督を止めてくれるから…!! だからここで見守つていよ」

秋人「——多分一番最初に入って来た人が秋人と言うんだろう。私は潮のその言葉に、ふと力が抜けた感じがした。——多分、安心したんだと思う。」

曙「そうね…私は信じるわ、潮の言葉を——」

side out 曙

side 秋人

秋人「とりあえず、この決定的証拠は大本営という場所に提出しますから」

俺は男をとりあえず脅した。これで終わればいいが、やはり——

提督「ふッ。やれるものならやってみろ!!」

「——そう上手くないかないらしく、男が叫んだ瞬間、なんか兵士みたいな服を着た男が5・6人入ってきて、俺たちに銃口を向けて着た。」

提督「この俺に逆らったんだ、お前らは国家反逆罪として牢屋にぶち込んでやる!!」

秋人「女の子脱がそうとして奴がよく言うな、それに反逆罪って戦争時代かよ…。今はゆとり世代だろゆとり世代!」(?!+!?)

拓海「それな」(、、、)

提督「黙れ!!!——分かっていないようだなお前らは、牢屋に入れてから嫌でも教え付けてやる!!捕らえろッ!」

秋人「はッ!もちろん俺等は抵抗するけどな——」

4人「——拳で!!」

俺達は拳で兵士達を一瞬でダウンさせた。拳銃?俺が1人の拳銃を奪って時音に渡したら、時音が正確に兵士の拳銃を撃ち落としたな…。ちよ…時音君じゃないです、はい。——のちに聞いた話だが、時音は時音父の関係で射撃を経験した事があるらしい、まあそれでもだろ…。

曙「凄い…圧倒してる…」

潮「かっこいい……」

秋人「最後はあんただな」

提督「馬鹿なツ!?!何者だお前らは!!」

拓海「何者ってそうだなー」

良「俺達はただの一般人ー」

時音「ーって言った方がいいかな」

秋人「んじゃ、さっさと終わりにしようぜクソ上司…」

俺は一步ずつゆっくりと男に近づくー

提督「ま、待て!俺を殴るとお前は後悔するぞツ!」

秋人「こんなことしてる時点で、即ち後悔もクソもねーよ…」

ーーそして加速して一気に男に詰め寄る。

秋人「あの人の言葉を借りるなら——あんたのそのクソくだらねー幻想は、この右手で——ブチ○す!!!」

俺は男の頬をフルスイングで殴った。その衝撃で男は1〜2mほど飛んでいった。男を見ると白目むいて、泡吹いて気絶していた。——気持ち悪…。

秋人「あー、スッキリした——よし、逃げるぞ!!」

良「ここ一階だから、窓から抜けるぞ!」窓から逃走

時音「ちよつと待ってよ、ボク足そんなに早くないよ!」窓から逃走

拓海「俺達らしいな…このやり方…」窓から逃走

秋人「よしじゃ——「ちよつとツ!」——ん?」

窓から逃げようとした時、サイドテールの女の子が声を掛けてきた。

曙「あ、ありがとう…助けてくれて…/」

秋人「良いって!それよりも、この事は絶対に内緒な、いいな?——あ、そうだこれ

!」

俺は潮さんに携帯を投げた。

秋人「それそいつの証拠が録画されてるやつだから、それ持って大本営つてところに提出しに行つてこい！」

潮「はい、ありがとうございます秋人さん!!」

秋人「じゃな！」

そう言つて俺は窓から逃走した。

曙「――行つたわね…とりあえずどうする、クソ提督達は？」

潮「早く、元帥に報告した方が良いよ！」

――

殴り込みをした後日、俺達全員は、帰りが遅かったという事で、学校から厳重注意を受けた。しかし1回目だった為、停学処分にはならなかった。そしてさらに1週間ほど

経ってから俺は例の建物を見に行つたが取り壊し工事が行われていた。そりやそうだ、上司？があんな事するんだから。ーよくよく考えると潮さん達は制服姿のまま仕事をしていたんだよな…もしかして…いやもしかしなくても、あの建物は絶対風俗店だろ!! だって事は俺が殴つた男はオーナーか何かか…じゃあオーナーが雇つてる女の子を脱がそうとしたって事だよな…とんだ変態野郎だツ!! そりや潰れて当然だわ
笑ーまあの事はもう忘れよう…2度と会えないんだし!! (・ω・)

設定

オリキャラ設定＋所属艦娘（22話時点）

櫻川 秋人（さくらがわ あきと）

17歳 誕生日 4月30日

身長 176cm 隠れ筋肉質

趣味 運動全般、料理、サツカー

特技 アクロバティックな動き

主人公で元高校生。軍事学校に通わずに唯一、一般人から提督になった者。提督の服を着ずに学校の制服で提督活動をしている。艦娘と人間のハーフで、内なる能力を秘めている。言えば人間をやめてる人間。前髪を横に流すヘアスタイル。前髪を下すと別人になり、イケメンと化す。あるバンドグループのファン。高校に在学中はサツカー部に所属していた。噂で密かに実況動画を上げているとか。秋人の父、頼長の影響で剣術がとて優れている。

最近起きた悲劇

ながら携帯をして廊下を歩いていたら、壁に激突した

島崎 拓海（しまぎき たくみ）

16歳 誕生日 7月18日

身長 175cm 細マツチヨ

趣味 バスケ、サッカー、勉強

特技 ペン回し、ボイパ&mp;ビートボックス

秋人の1番の親友で部活メンバーだった。基本、なんでもこなす高スペック。サッカーで秋人とのタッグは最強と言われている。女の子にモテモテで月に1〜2回は必ず告白されるらしい、そのため男子の敵になっていた。女の子にモテモテで月に1〜2回はいていない。しかし秋人のモテ事情は気づいている。秋人ほどではないが秋人と一緒に、あるバンドグループのファン。噂で好きな人に告白をして振られたとかー。

最近の悩み

出来心でファンであるバンドグループの、ボーカルのヘアスタイルの真似をしたが、中々上手く仕上がらない

伊口 良（いぐち りょう）

16歳 誕生日 9月16日

身長 181cm 細身

趣味 人のランキング作成(主に女子の)、サッカー

特技 絵画

秋人の親友で部活メンバーだった。バカで、お調子者。秋人たちによくちよつかいを出すや否、すぐに返り討ちに合う。しかし、やる時はやる男で、その瞬間だけはまるで人が変わったかのように別人と化す。走るスピードがよても早く陸上短距離走の全国レベルだという噂も。絵を描くことに優れていて、その実力は美術家やイラストレーター並みだそう。表面上は変態キャラだが女の子に対しては紳士的に接してらしい。最近のマイブーム

歯磨き

雨見 時音(あまみ ときね)

17歳 誕生日 5月18日

身長 150cm 小柄

趣味 散歩、サッカー

特技 嘘泣き、愛想笑い

秋人の一推しで部活メンバーだった。学校中の男女問わず人気。その理由が、見た目が完全に短髪の女の子だからで、よく学校中の男子から告白される。男子も彼が男だと知った上で告白しているらしい。その影響でBL好きの女子もテンションが上がりっぱなし。また、子動物みたいで可愛いと、女子にも人気があり、彼自身は大分と困っているらしい。部活になると別人になったかのように変わる。学校中で女の子である噂が広がっているが、当の本人は全く知らない。

最近になって気づいたこと

高校に入ってから全く身長が伸びていない

櫻川 頼長（さくらがわ よりなが）

47歳 誕生日 12月7日

身長 179cm 筋肉質

趣味 修行、木刀の素振り

特技 刀でなんでも切ることが出来る

秋人の父。自分を追い込む修行が好きで、その結果スポーツ選手でも驚くような筋肉

質の身体が仕上がった。顔が『ワン○ンマン』の『アト○ツク侍』に似ている、本人もその事については自覚しているらしい。修行の一環として、いつも秋人に『櫻川家流出迎え』をしていた。彼が刀を持ってばどんな物でも切れる妖刀と化す。表には出さないが、実は極度の妻コンで、自室には妻（赤城）1人で写っている大きな写真を隠しているとか。秋人もその事については気づいている。

最近嬉しかったこと

妻（赤城）が見つかった

尾形 正義（おがた まさよし）

64歳 誕生日 10月30日

身長 165cm 超筋肉質

趣味 釣り、将棋& amp ;囲碁、運動

特技 ツボ押し、りんご握り潰し

元帥。秋人と頼長の親しい人。見た目は優しいおじさんだが、そのうらはらに鍛え上げられた筋肉を持つ男。あるアスレチック番組に出たことがあり、最終ステージにまで進んだらしい。整復師の免許を持っているため、よく憲兵に足ツボを押し遊んでい。艦娘にも足ツボを試したが効かず、むしろ気持ちよがられてしまった。握力も

強いたため彼を知っている人は、秋人と頼長以外、握手を拒んでいる。
最近の楽しみ

仕事終わりのビールとお風呂

矢倉 元提督（やぐら）

34歳 誕生日 知らん（作者の気持ち）

身長 知るか！（作者の気持ち）

趣味 艦娘のしつけ

特技 考えるのも面倒い（作者の気持ち）

秋人が配属される前に着任していた提督。悪提督。艦娘たちを兵器として見、非人道的なことをしていた。時雨の活躍で憲兵に拘束され、牢屋行きとなった。しかし、深海棲艦と手を組んでいたようで、牢屋から脱獄し、秋人や時雨達がいる鎮守府を復讐のため、おとそうとしている。いろんな計画を立てては、秋人に次々と防がれてしまつて、なんていうかカッコ悪く、残念な人である。

最近起きた出来事

提督の処分計画を企てたが、またもや失敗してしまつた

秋人が配属している鎮守府の所属艦娘

長門、陸奥、金剛、比叡、榛名、霧島

北上、大井、天龍、龍田

明石 間宮 大淀

赤城、加賀、翔鶴、瑞鶴

暁、響、雷、電、吹雪、夕立、時雨、睦月、如月

短編茶番劇 ほぼ会話だけ

帰り道

良「ときに拓海よ」

拓海「ん？何、良？」

良「秋人が提督になったのは知っているよな？」

拓海「知ってるけど、前にも聞いたし。それが？」

良「羨まし過ぎないかッ!? 艦娘という美少女と一緒に暮らすとか、まじ天国だろおい

!!

拓海「いや、それ前にも同じこと言ってたぞ良……」

良「いいや、俺は秋人が戻って来るまでずっと言い続けるぞコノヤロオオオ!!」

拓海「はあー……あ、そんな事より良、焼肉の無料券あるんだけど時音誘って行かない?」

良「うん。行く」

拓海「こいつ単純でよかったわマジで……」

(――;)

良「早く行こうぜー!今日はやけ食いだあああ!!!」ヒヤッハー!!!

モノマネ

吹雪「お手!」

夕立「ぼい!」(・ω・)

吹雪「お手!」

夕立「ぼい!!」(?????)

時雨「2人とも何をしているんだい?」

夕立「あ、時雨ちゃん!犬の真似をしていたっぼい!」

時雨「なんで犬の真似を?」

吹雪「夕立ちゃんがモノマネ合戦しようって」アハハ:

夕立「時雨ちゃんもするっぼい!」

時雨「え、僕も!？」

吹雪「じゃあ時雨ちゃん猫の真似をしてほしいかな」

時雨「吹雪まで!?!はあ…分かつよーに、にや／／。これでいいかい？

／／

夕立「時雨ちゃん語尾に “にやん” をつけて欲しいっぽい」

時雨「分かつたよ…し、時雨だにやん／／にやん／／。恥ずかしいよ!!!／／

吹雪「じゃあ次はー」

時雨「もうやめてええええ!!／／」

斬る…

頼長「……ふんツ！」

竹、真二つ

頼長「……ふんツ！」

丸太、真二つ

頼長「……ふんツ！」

コンクリートブロック、真二つ

頼長「……ふんツ！」

壊れた車、真二つ

頼長「…………ふんツ！」

大きい岩、真二つ

頼長「また、つまらぬ物を斬——」

秋人「やめろツ!!」(。D。——)

頼長「は…………？」

秋人「つかどうなってるんだよその刀ツ!？」

頼長「知るか」

ヘアスタイル

拓海「うーん……」

時音「どうしたの拓海？」

拓海「いや、髪型を真似したんだけど、また失敗しちゃってなく」

時音「また挑戦したんだ…………けどその髪型って結構昔の頃だよ？」

拓海「知ってる。俺は昔の頃の髪型の方が好きだったからさ。まあ今もかっこいいけど」

時音「そうなんだ。——あ、うまくいかない理由が分かったよ！」

響が暁を壁ドン

響「……こう言うことかい？」

暁「……／＼／＼／＼／」カアアアアアア……

していると、俺の携帯から通話通知が来た。——通話相手は尾形さんからだった。

秋人「はい、秋人です。どうしたんですか尾形さん、こんな時間に？」

時計を見ると0時を過ぎている。——ちなみに補足になるけど、今日の秘書艦と補佐の大淀は、22時の時点で部屋に戻らせた。理由は明日の出撃に支障が出ないように。だから俺はそれ以降一人で仕事をこなしていた、クツソしんどいぜ……。——まあそんな話は置いて、明らかに電話をする時間ではない。だから俺は尾形さんに疑問を投げかけた。

尾形『いや、すまんなく秋人。急遽明後日、いやもう明日か、明日に秋人の鎮守府が演習する事になったから、その報告で電話をしたんだ』

秋人「はあ……ちよつ……えええええ!!いきなりすぎますよツ!!」

ホントにで何でいきなり俺の鎮守府に……俺演習とか初めてなのに……。

尾形『いや〜すまんなく(2回目)。そこの鎮守府の提督が「どうしても演習がやりた

い」と、聞かんくてなく。そこで一番信頼できる秋人、お前に頼んだんだよ!」

この人、ホントに俺の事知ってて言ってるのかな?初めてで、一般人で、元高校生な俺が指揮とかとれるわけじゃないじゃん!!——戦ったことはあるけど:

秋人「それでもですよ!大体一般人の自分が時雨達の指揮なんてとれる訳無いじゃないですか!!」

尾形『大丈夫じゃよ!お前の演習相手の鎮守府は最近建設されたばかりでね、そして配属されている提督も軍事学校を卒業したての新人提督だから多分、知識はあっても経験が無いから秋人と変わらんよ。あと歳も秋人と近かったような気がするなく』

秋人「ですが…」

それでも俺が、受けるか受けないかで悩んでいると尾形さんから一言——

尾形『受けてくれたのなら、お前が好きなバンドグループのライブチケットをお礼として送るよ』

「……と言われたので俺は、」

秋人「喜んで引き受けさせていただきます」

(?+?)

「……即答する。」

「……………」

「……ってな感じで引き受けたんだっただけ……俺も俺でなんとも甘い人間だ……好きなバンドグループのライブチケットが貰えるが為に引き受けるなんて……。そういや次の日起きて、みんなに今日の事を話したら結構テンションが上がっていたな。ちなみに今日の演習で連れてきた艦娘はというと、時雨改二、夕立改二、暁、響、雷、電、だ。まあ、相手の鎮守府は最近建設されたばかりで、艦娘もほとんど駆逐艦しかいない、だから俺はそれに合わせたのだ……合わせるのって大事だろ？それよりも……」

秋人「……あ」つ　　い　　……とりあえず門の前で待つてるけど反応が無いな

………

時雨 「そうだね、もう少し待ってみようか」

秋人 「てか時雨、普通な顔してるけど暑くないの!？」

時雨 「？僕は平気だよ？」首傾げ

秋人 「流石だな…元部活生な俺でも結構キツイのに…」

響 「いつそのこと暑さで倒れればいいのに」

秋人 「上等だ響、まずお前から（物理的に）倒してやるから、ちよつと来い…」

響 「冗談だよ…」

やっぱり響はぶれねーな…こういう時だけからかいやがって…でも俺と2人だけになつたら馬鹿正直になる。マジで俺の事好きなのか嫌いなのか分からない…まあ信頼はされてるみたいだけど。

雷 「今のは響が悪いわ（呆れ）」

電 「なのです！」

暁 「秋兄も普通に元気じゃない！」

秋人 「元気じゃねーよ…まったく…どうしようかなく？」

夕立「このまま待っても来なさそうっばいし、中に入って着いたことを報告しにいった方がいいっばい」

秋人「そうするか」

そうして俺達は鎮守府の中に入ろうとしたその時――

男「いや、その必要はない」

――突然横から声をかけられた。見ると提督の服を着た見た目20代の男と響が立っていた。

男「すまない、わざわざ来てもらった側なのに待たせる事になってしまつて……」

秋人「あ、いえ、大丈夫です！それよりも貴方がこの提督さんですか？」

達也「ああ、そうだ。私がこの鎮守府の提督の浅間達也だ、よろしく頼む。そ

して私の横にいる響は私の秘書艦だ」

響2「響だよ、よろしくね」お辞儀

響2はそう言ってお辞儀をして来た、滅茶苦茶良い子やん！（関西弁）こっちの響とは大違いだなーあ、やべ…響のやつすげー俺の方見てる……怖いんだけど！まあいいや。

秋人「自分は、櫻川 秋人 と言います！こちこそ今回の演習ー」よろしくね、提督「ーちよつ、響！」

達也「!!ーそうか、君の鎮守府にも響がいるのか…」

秋人「いや、まあ訳ありで提督が嫌いな響ですけどね…今はましになりましたが…」苦笑い

響「何故かな…君を見ているとどこか懐かしい感覚になる」

達也・響2「ツ!」

なんか響が超意味深な事を言ったせいで、達也さんと響2が驚いた顔をして固まってしまった。本当にコイツは…

時雨「響、浅間提督を知っているのかい？」

響「まさか、ただの思い込みだよ」

響2 「はあ……（安堵する）」

秋人 「なんかすいません！ウチの響が変な事を……」

達也 「いや、構わない：それよりも、疲れていると思うから、まず鎮守府の中に入って休憩してくれ」

秋人 「ありがとうございます達也さん！」

そうして俺達は鎮守府に入った。

—————

く鎮守府内く

秋人 「そういえば、思ったんですけど、達也さんはどうしてあの時外に出ていたんですか？」

達也 「あの時？—————ああ、私が声をかけた時か。それはだな……」

何故か達也さんは言葉を詰まらせる。—————なんか怪しいな…。

響2 「達也は、絶対君達はバスで来ると思い込んでしまっただけ、それで鎮守府の近く

にあるバス停に到着予定時間の30分ぐらい前から待つてしまっていたんだよ、そしてふと鎮守府を見たら歩いて来ていた君達が見えてね、急いで戻ったってわけだよ。達也も可愛いところもあるんだね！」

達也「言わないでくれ……」

秋人「そうだったんですね。……ってそれよりもバスあったんですかッ!?」

達也「ああ、確か櫻川君はこの鎮守府の最寄の駅に降りたはずだ、そこからでもバスは通っているはずだよ。知らなかったのか?」

ちよつ：知らなかったっていうか、Googleマップ大先生の検索ルートだとバスとか出てこなかったんだけどツ!?

時雨「秋人……」ジト目

夕立「もしかしてわざと歩かせたっばい……?」ジト目

暁「レディーになんて事させるのよ!」

電「お兄さん酷いのです……」涙目

雷「お兄ちゃん、そういうところが甘いんだから!ちゃんと調べてよね!!」

響「一度……(自主規制)……した方が良いかな?」

秋人「ちよつ、待てお前ら!?俺はしつかりと偉大なるG o o O i eマップ大先生で調べたぞ!?そこにはバスに乗るルートなんて無かったんだ!2 km歩くルートしか出てこなかったんだ、ほらこれ!!」

俺は時雨達にスクリーンショットで保存していた画像を見せた。

時雨「ホントだ：でも何で出てこないんだろうね」

秋人「分かんねーよ：これからはY a O o o!マップ先輩の力も借りるか!」

達也「櫻川君、私からの質問も良いか?」

検索ルートについてガヤガヤしていると、達也さんが疑問を投げかけて来ようとしていた。まあある程度の疑問は察しがつくー。――。

秋人「質問ってこの服の事ですか?あと秋人で良いです、達也さんの方が歳上なので!」

達也「わかった。――それで秋人、何故君は提督の服ではなく普通の学校の制服なんだ?それに歳下って：だいたい提督になるのは早くても19歳からの筈だが……」

秋人「あー、それはですねえ……」

歳も突かれるかどう説明しようかな……結構悩みどころだな……。

時雨「秋人はつい3ヶ月前まではただの一般高校生でね、提督が不足していたら、元帥の命で提督になったんだよ。その時ちょうどブラック鎮守府にした提督も捕まってる。だから秋人は、「そんな提督と一緒にこの服を着たくない！」って言って学校の制服で提督をすることを元帥は許可してくれたんだよ！」

秋人「ちよつ、時雨……全部言うなよ！恥ずかしいだろ！」

時雨「いいじゃないか、事実なんだし」

達也「成る程、つまり秋人は一般人からなった提督でとても艦娘思いなんだな」

時雨「そうだよ！」

そう言われると恥ずかしくなってくる……。……そのあと昼前だったので、食堂へ行って昼食をとった。まさか用意してくれるなんて思ってもいなかったけど……メニューは定番のカレーだった。うん、めっちゃ美味しい！うちの鎮守府の間宮さんが作るご飯と同じぐらいに！そしてご飯を食べてる際に、ここの鎮守府の艦娘達からすげー

ぐらゐに質問責めされたけど全て答えた……めっちゃしょんどい……中には「好きな人いる？」だの「今までに誰と付き合つた事があるのか？」だのいわゆる恋バナ質問があつたけど、俺は勿論「彼女いない歴〃年齢。あと彼女は現在募集中（ゝ・ω・ゝ）」と答え、それを聞いていた時雨達は急に「ガタツ！」と立ち上がった。そして周りにいた艦娘達も目を輝かせていた……何で……？

コラボ 演習② 上

昼食を終えて、俺たちは第三鎮守府の近くにある海岸に向かった。一応行く前にもしものことを考えて例のウエットスーツを中に着ておいた。そして日本刀も――

秋人「ではよろしくお願いします、達也さん」

達也「ああ、こちらこそよろしく頼む」

海岸に着いてから、俺と達也さんは作戦を考えるため、それぞれ場所を離れた。

――

秋人「とりあえず、前にも言ったように俺あんま指揮とか取れないから、戦い方は時雨と響に任せるわ。絶対に独断行動はするなよ、夕立？」

夕立「っほい!?なんで私だけ!?それに秋人、それは振りっほい?」

秋人「いや振りじゃない、断じて振りじゃないからねー夕立(棒読み)」

5人（振り「なのです…」だ…）

秋人「まあ、俺から言えることは2つだけ。1つ、この演習をめいっばい楽しむこと。2つ、手を抜かずに全力で戦うこと。OK?」

夕立「OKっばい!」

時雨「もちろん僕はそのつもりだよ秋人!」

響「血祭りにしてあげよう」目を輝かせる

おい、響!?なんか今、物騒な単語が聞こえたぞ!!

暁「誰に言ってるのよ、秋兄!全力で戦うに決まってるじゃない!」

雷「そうだよ、お兄ちゃん!」

電「なのです!」

みんな、気合い満タンだな……あんなこと言った俺が馬鹿だったわ。

秋人「そうだな!しゃあああ勝つぞお前らああッ!第三鎮守府と全面戦争
じゃあああ!!!」

時雨「それはちよつと違うと思うよ秋人……」

side out 秋人

side 達也

達也「さて、こちらはどうか……」

秋人の艦隊は私の艦隊のメンバーに合わせて駆逐艦だけで組んでくれたが、あまりにもレベルの差がある。秋人は素人だ、しかし侮つてはならない。どんな戦い方で来るのかが分からないからだ。素人相手が逆に怖い、どうやって戦おう……

達也「正直難しいな……」

響2「らしくないよ達也！達也は達也がしたい戦いをすれば良い。もつと自信を持つて達也！」

達也「響……」

雷「そうそう、もつと私を頼ったっていいのよ？」

木曾「そうだと提督！俺がお前に、最高の勝利を与えてやる！」

球磨「提督は安心していいクマよ〜！」

電「私も頑張るのです！」

気がつけば響たちが私を励ましてくれていた。らしくない事をしていたな私は…。

達也「そうだったな…：すまないみんな。らしくない事をしてしまった。この演習、絶対に勝とう！」

6人「はいッ！」

side out 達也

side ?

秋人「そつちの作戦会議は終わりましたか？達也さん」

達也「ああ、では始めようか秋人」

秋人「了解です！」

大淀「準備は良いですね？ーでは、演習を開始します！」

大淀の声と共に秋人の鎮守府VS達也の第三鎮守府の演習が始まった。

夕立「じゃあ早速行くつばい!!」

で、
早速夕立は秋人の指示を無視して第三鎮守府の艦隊へと突っ込んでいった。1人

暁「あ、こら夕立!」

響「やっぱり夕立に協力戦は無理なようだね…」

時雨「まあ僕達が夕立に合わせて連携をとれば良いだけだよ…」苦笑い

響「そうだね」

雷「なんか夕立、改二になってから、さらにテンションが高くなってない…?」

電「多分気のせい?なのですか…」

—————

球磨「じゃあ皆んな行くクマー!!—————って、なんか来たクマーツ!!?」(;)

口。))

夕立(改二)が猛スピードで第三…めんどくさいから達也の艦隊でいいや。――
達也の艦隊へと近づいて来た。

雷2「夕立1人だけで来てるわよ！――って言うか近距離戦!？」

木曾「やはり、素人のやる事は違うな！」感心

雷2「なに感心してるのよー!!」

夕立「覚悟ツつぽい!!」

夕立は砲撃しながら距離を詰めて来た。――改二になって、さらにはしゃぐ
キャラになってしまった。性格は大人っぽくなったらしいが……

響2「なんて威力なんだ…被弾したらひとたまりもないね…」回避

電2「これが改二の力なのです…？」回避

暁2「そう見たいね」回避

――

暁 …… 撃沈判定 …… 一暁2：撃沈判定

響 …… 大破 …… 一響2：大破

雷 …… 撃沈判定 …… 一雷2：撃沈判定

電 …… 大破 …… 一電2：撃沈判定

—————になっている。

時雨「そろそろ終わりにしよう」

夕立「最高に素敵なパーティーしましょう」

響「さあ…（自主規制）…の始まりだよ」

電「覚悟するのです！」

そうやって4人は砲撃を始めた。響に関しては、明らかに殺人鬼のような雰囲気を感じさせていた。一般の人が見ると、逃げるレベルで。

木曾「な、なんだ!?!むこうの響のあの目は…!!」

球磨「い、命の危険を感じるクマ…!!」

2人が少々怖がっている中、響2は—————

響 「面白くなって来たじゃないか！」目を輝かす

——むしろ楽しみがっていた。まるで響の心がとりついたかのように。

木曾 「響2ツ!!お前大丈夫か!?向こうの響みたいになっているぞ!」

響2 「私は正常だから、大丈夫だよ。流石にあんなか感じにはなりたくないよ……。——あと、苦しい時こそ楽しまないと、乗り越えられなくなるよ!」

球磨 「……うん!そうクマね!みんな、決着をつけるクマ!」

—————

秋人 「だんだんと面白くなって来ましたね、ですが勝たせていただきます、達也さん!」

達也 「いいや、勝つのは私達だ」

side out?
side 響2

私は必至に相手の砲撃を避けていた。今、私たちが残っている艦隊は、全員が大破、だけど相手の残っている艦隊は未だに中破が2人いる。正直勝てるかどうか分からない。だけど、私は諦めない！達也に勝利を見せてあげたいから——

時雨「終わりだよ！」砲撃

球磨「——ツツ！なめるなクマツ!!」回避して砲撃

時雨「甘いよ！」回避

まずい……球磨が……私が行くしかない！

球磨「ツ!？」

時雨「これで本当に——」

響2「はあああ!!」

私は球磨を助けるために時雨に向かって砲撃をした。

時雨「ぐツ……痛いじゃないか……」大破

そしていつの間にか木曾が電を、撃沈判定にさせ夕立を大破判定にさせていた。——やっぱりすごいな木曾は……！

電「みなさん……ごめんなさい……撃沈判定になっちゃったのです……」撃沈判定
リ
タイア

夕立「……まだまだこれからっほい！」大破

木曾「——俺たちはまだ終わらないぞ！」砲撃

時雨「いや、終わりだよ。最大の凶器がまだ死んでいないからね——」

木曾「何を————……ツぐ……！」撃沈判定 リタイア

時雨がそう言った瞬間に、木曾の背後が爆発し、木曾が撃沈判定となった。私は一瞬だけ何が起きたのかがわからなかった。しかし私の中の一瞬がとて長く感じた。

響 「凶器は酷いよ時雨」

時雨 「事実じゃないか」

響 「まあ否定はしないけど……」

夕立 「どうするの、まだ続けるっぽい？」

時雨 「正直、今の僕たちが確実に有利だけどね」

そんな事は分かってる……この状況は確実に絶望的だつて……だけど……

響2 「それでも私は、降参なんてしない!!」

球磨 「響2と一緒だクマ！」

響 「そう、なら終わりにしよう」

3人は一気に私たちを囲み、一斉に砲撃をして来た。……ダメだ避けきれないツ……!

球磨 「響2ツ!!」

球磨が私を庇い、球磨は撃沈判定になってしまった。どうして私をツ……!

響2 「球磨ッ！どうしてッ……」

球磨 「響なら勝ってくれるって思ったからクマ……あとは頼んだクマ……」 撃沈判定
リ
タイア

球磨……球磨の思いは絶対に無駄にはしないッ!!

時雨 「君だけになってしまったね……響2。決着をつけようか」

夕立 「これで終わりっぽい!!」

響 「すぐに楽にしてあげるよー」

3人は私の方へ一斉に向かって来た。……ダメだ……囲まれた状態じゃ……そんな
時……

達也 「頑張れッ！響2いッッ!!」

響2 「ッ!?!」

「……………達也の声援が聞こえた。

響2 「トーツ!!」

3人 「ツ!?!」 撃沈判定 リタイア

その瞬間、私は無意識に3人の攻撃をかわし、3人を撃沈判定にしていた。多分、達也のあの一言のお陰で、私の中にある最大の力を出すことができたのかもしれない。いえば火事場の馬鹿力みたいなものだ。私が3人を撃沈判定にしたことによつて演習が終わった。

大淀 「終了!! 結果は、第三鎮守府の艦隊の勝利です!!!」

達也の艦隊 「やったあぁー!!!」

私たちは凄く喜んだ。だって、勝てるか分からなかった相手に勝つ事が出来たのだから。

時雨 「響2、僕たちの負けだよ…おめでとう!」

夕立「悔しいけど、楽しかったっぼい！ありがとう！」
響2「こちらこそありがとう、凄く楽しかったよ！」

そう言つて私は時雨と握手をしようとした瞬間—————
ドオオオオオン

—————いきなり何かがかつちに飛んできて私たちの横に落ちて爆発した。

響2「ツ!?……………一体何が——」

球磨「みんな、あそこを見るクマツ!!」

球磨の声とともに私たちが球磨が指を指した方向を見ると、深海棲艦が数隻いた。

side out 響2

side 秋人

秋人「まじかよ……………」

現在俺は遠征に負けたことよつて、少々混乱していた……。いやだって、正直俺もちよつとは心のどつかで勝てるつて思つちやつたし……。つーか最後の達也さんの応援によつて覚醒した響2の攻撃はやばくね!?あれ絶対、愛の力だな……。(俗に言うケツコンカツコカリの様なもの)けど、指輪ははめてなかつたな……

達也「ありがとう秋人、とても面白い演習ができた!」

秋人「こちらこそ、ありがとうございました!ーしかし、最後のアレは流石にずるくないですか?」

達也「どうした、ここに来て負け惜しみか?」

秋人「ぐツ……。確かに、負けてから言うのはみつともないですね……。すみません、少し負けず嫌いがありますので……」

達也「そうか……。秋人は負けず嫌いか……。ならまたリベンジしに来てもいいぞ」

秋人「まじすか!?!」

達也「ああ、けど次はー(サイレンの音)……。この音はツ!?!」

達也が喋っている途中にサイレンがが鳴った。嫌な予感がする……

大淀 「大変です、提督ツ!!」

達也 「どうした…大淀」

大淀 「先ほど演習をしていた艦隊が深海棲艦からの襲撃に遭っていますツ!!」

達也 「なんだとツ!？」

やっぱり俺の嫌な予感が当たった。おそらく時雨達も深海棲艦の襲撃に遭っている。そして砲弾も演習用だから、太刀打ち出来ないだろう。あの時と一緒だな——

大淀 「おそらく今の艦隊は、演習でのダメージを負っているので、沈没する可能性がかなり高いですツ!!」

達也 「なツ!?!——今直ぐ帰投させるんだツ!」

確かにその指示が一番いい選択だ。しかし、現実はその通りかかない——

大淀 「ダメです……深海棲艦に囲まれていて帰投できません……!!」

達也 「そんな……私はまた、響を……みんなを……」

達也さんは絶望したみたいに、その場で崩れ落ちた。——はあ……軍事学校を卒業した男がそんな簡単に諦めるなんて……だらしがない!

秋人「しつかりして下さい、達也さん……まだ終わったわけありませんよ……!」

達也「秋人……。……しかし、私にはどうすることも——」

秋人「——ッ!?……何言ってるんだよ!なんで、提督のアンタがなに諦めようとしてんだよ……!もう何も失いたく無いんじゃないのか?——だったら、自分が今何ができるか少しでも考えようぜ……!何も考えてもないのに簡単に「できない」って言うなよ、達也さん……!」

俺は絶望している達也さんの両肩を持ち、目線を合わせ必至に訴えた。正直これでもだ絶望していたら殴る。いや別にシリアス雰囲気をぶち壊したいとかそう言うわけじゃないからね?ギャグに乗り換えようとか思っていないからね?本当だよ?

達也「秋人……ありがとう……おかげで目が覚めた」

秋人「それは良かったです……」

良かった……ただ殴れなかったのがあれだけど…………！……！……！そんなことはとりあえず置いておこう。

達也「しかし、私たちが出来ることは水上バイクに乗って深海棲艦を誘導することしか……」

秋人「充分。なので達也さんは、水上バイクで深海棲艦の誘導をお願いします。その際に攻撃をするので！」

達也「秋人、一体誰が攻撃をするんだ？」

秋人「そんなの……俺に決まってるじゃないすか！」

俺がそう言った瞬間達也さんはスゲく驚いた顔をした。まあ当然だよな、だって提督が、いや、普通の人間が攻撃するって言うてんだから。

秋人「俺は先に行くんで、達也さんは水上バイクに乗って来てください！」

俺は海へ飛び降りた。そして俺が海に立った時点で達也さんはさらに状況の処理が追いつかず、頭がパンクしそうになっていた。しかし俺は気にしない、っーか気にした

ら負けだ。じゃ、久し振りにいっちょやりますかッ!!俺は時雨達の元へ全力ダッシュで向かった。

達也「秋人、お前は一体……」私も早く行かなければッ!!」

side out 秋人

side 時雨

今、僕たちは、深海棲艦に囲まれている。敵は軽巡ホ級、駆逐ハ級、駆逐ロ級2隻の計4隻。編成自体は初期の海域だけど、今の僕たちはそれすらも倒せない状況だ。理由は砲弾が演習用だからだ。演習用の砲弾は攻撃性がないため、ダメージは受けても沈没はしないのだ。それに僕たちはさっきまで演習をしていた、そのせいで装甲が薄くなっている。明らかに戦える状況ではない。それでも、皆んなを守らないと……

時雨「……みんな僕たちの後ろに隠れていて!みんな、少し僕に協力してくれないか?」

夕立「時雨ちゃん?……そう言うことね!分かった、協力するっばい!」

響「仕方ないね…」

電「了解なのです！」

暁「分かったわ時雨！」

雷「やるしかないわね！」

僕たちは敵艦隊に近づいた。

木曾「何をするつもりだ、時雨!？」

球磨「そんなに近づいたら危ないクマ!!」

時雨「大丈夫だよ!ここみんなはまだ敵艦隊との経験が浅い、だから僕たちが注意を引きつけておくから、そのうちにみんなは早く逃げて!みんな早くよ!」

響2「待つて時雨ツ…!!」

僕の合図でみんなは一斉に移動した。4隻の敵艦隊も移動した僕たちを追ってきた。とりあえず第1作戦は成功かな。

夕立「時雨ちゃん、これからどうするっぼい?」

時雨「最悪、近距離戦で倒すしかないね…みんな小刀とか持つてるかい？」

響「もちのろんだよ！ やつとこれの出番が来たんだね」目を輝かせる

電「何でそんなに楽しそうなのですか!？」

雷「響らしくて良いんじゃない？」

暁「良くないわよ！ レディーがすることじゃないわ！」

時雨「そうかもね…でも、やるしか無いんだ！ 行くよみんな！」

僕たちは、敵艦隊を念のため持つていた小刀を使って倒していった。どうして近距離戦ができるかって？ 秋人に教えてもらったからだよ！

暁「思ったより弱かったわね…」

響「……」

時雨「どうしたんだい響？」

響「いや、確かに倒したんだけど…あまりにも手応えがなさすぎると思ってたね」

時雨「言われてみれば…」

確かに、この編成でもそれなりに来るはず…なのに、こんなにも簡単に

……ー……ッ!?もしかして、僕たちは大きな誤算をしたのかもしれない……僕がそう思った、その時……

電「時雨ちゃん大変なのです!」

電がいきなり声を荒げながら僕に言った。僕が電が指を指した方を見ると、第三鎮守府の響2たちが駆逐艦口級たちに追い込まれていた。僕の嫌な予感が的中してしまった。……ダメだ早く助けに行かないとッ!

時雨「みんなッ!」

暁「分かってるわ!」

距離的に、間に合うかは五分五分だ。お願い、間に合って!!しかし、一隻の駆逐艦口級が響2たちを砲撃しようとしていた。

時雨「やめろッ!!」

ドオオオオオオン

僕は必死になって叫んだが響2たちが砲弾が放たれてしまった……。僕のせいだ……。僕が確認もせずに勝手に決めつけてしまったから……。

電「そん……な……」

響「……いや、決めつけるのはまだ早いよ……」

僕を含め、みんなが絶望していたのに、響だけが、まだ諦めていなかった。

夕立「響ちゃん……どうしてわかるの……?」

響「……そんなの簡単だよ、だってあそこには……」

煙が引いて、人影が見えてきた……

響「信頼できる馬鹿がいるからね……」

その人影の正体が……

秋人「誰が馬鹿だ、狂乱響。——っかこの流れ、2回目だな…助けた相手が違うけど」

——秋人だった。良かった、秋人が守ってくれた……。僕は安心した。

秋人「んじやまあ……反撃開始と行こうか!!」ニツ

プロローグ

1話 始まりからの出会い ※一部修正

約20年前、突如海に未確認生命体が現れた。彼等は一気に海を制圧し、次第には人間達が住む陸地へと侵略し始めてきた。そんな世界を脅かす存在を人間は深海棲艦と名付けた。人間達は、深海棲艦を倒す為にまず、特殊部隊を結成した。しかし彼等の前では、そんな部隊も無能で終わる。そして人間が絶望しかけた時、深海棲艦と互角に戦える存在を発見した。戦艦の記憶を持ち、艦装というものを使って戦う少女、艦娘の存在を。その後政府は艦娘達の力を借りるべく、艦娘達の居場所を作る為に新たな鎮守府を建設し、提督の育成を始め、再び深海棲艦を撃滅する事を表したのだ。たーーーーーーーらしい。……何故、そんな曖昧な表現をしているのかと言うと、俺はそんな事なんてこれっぽっちも知らなかったからだ。まあ深海棲艦ぐらいは知ってるけど……そんな長話は置いといて、当時、まだ高校生2年生だったこの俺、櫻川さくらがわ 秋人あきと が突然提督になった話武勇伝でもしよう。え、今は何してるかって？それはーーーーー言うのをやめておこう。 ” 話は最後までとっておくもんだぜ ”

“ って言うだろ？じゃ話を始めようか！ ”

5月18日 16:30

私立高等学校（名前は言わないよ！）

理事長室にて

理事長「櫻川君、君は提督に就任することになったから学校を辞めてもらうよ」

秋人「はあ!? —————」

放課後いきなり理事長に呼び出され、いきなり提督になれと言われた俺は少々混乱した。だってここは一般私立高校で、決して軍事学校ではないのだ。さらに俺は戦闘の経験や知識が全く、言うなればド素人。そんな俺が提督になるのだ、普通におかしいだろ!? ————何かの間違いだろうと思えば俺は一応聞き直すことにした。

秋人「：理事長、何かの間違いじゃありませんか？それに自分はまだバリバリの高校生ですよね？」

理事長「いや、これはまぎれもない事実だ。どうやら人手が足りなくて手伝って欲しいとのことだそうだよ」

ちよつと待てよ……人手が足りないからつてこんなバリバリ高校2年生のド素人に提督を任せるつて……何考えてんだよ運営は……。

自分は理由を聞いた後に思わず苦笑いをしてしまった。しかし、自分はこれまで学校以外で理事長にいろいろとお世話になっていたので、断ることができなかつた。そのため、仕方なく依頼を承認(仮)することにした。だが正直本音はやりたくない……↑コ
コ重要

秋人「はあー…分かりました…自分やります！」

理事長「そう言ってくれろと信じてたよーありがとう櫻川君く！さすが僕が見込んだだけのことはある!!」

秋人「あんたほんとお気楽だな……じゃあ俺はこれで。また何かあるなら呼んでください」(#、ω、)

理事長「あ、ちよつと待つて。」

秋人「はいはいなんですしよ(言ったそばから呼んだよこの人)」

ムカついたからさっさと出ようとしたとき、止められてしまった。無視をしたかつたが、そういう訳にはいかなかつた。

理事長「提督の一番の偉いさんが「明後日までには大本営に向かってくれ」と伝言を受け取っているからその予定で頼むよ。日本の為に頑張る櫻川君を僕は応援するよ
くガンバレ!」? (・|・☒)?

ブチッ!

やっぱり無視した方が良かった。

イライラが限界値に達したせいで理事長を思わず殴りそうになったー……いや待て、この際学校やめるし殴ってもいいじゃね? ……うん、いいよね……笑

理事長「ちよっ……櫻川君ツ!? なんか笑顔がめっちゃ怖んだけどおおお!?? それに周りから何やら黒いオーラ見えてるんだけどおおお!??」(;(;; 仄
。()()()()

秋人「ツ!?? ……き……気のせいですよ……それでは失礼シマスター………」

ガチャ

理事長「……………たまに櫻川君から異常なほどの威圧が感じるんだけど……………なんなんだろうな……………怖い」(; ω ;)

……………

理事長の部屋を後した俺は携帯で時計を見た。……………17時かよ意外と理事長と話をしてたんだな。時間も時間だし帰えらねーとな。

カバンを背負い俺は一步步正門へと進んでいく。そしてさっきまでの理事長とのやりとりを思い返していた。

俺が提督か……………今まで思いもなかったな。それに提督って何すんのかなあーまあ嫌な予感しかないんですけど 笑笑……………。はあ…あと一年の学園生活を楽しみたかったな……………

あと危うく理事長を気絶させてしまうところだったわ……………いやマジで焦った……………。

あれ?……………家の近くの浜辺じゃん、もうここまで来てたのかよ。気がつけば家の近くの浜辺まで近づいていた。

この浜辺は観光地として有名で、特に18日の晴れた日の夕日がかかなり綺麗だ。余談

負っていた。やっぱり俺の嫌な予感的中してしまったそれも最悪な形として。

やばいッ!!早く手当てをしないと手遅れになるッ!!!!

幸い彼女はまだ生きていた。けど、大分と衰弱している状態。

クソッ!!このまま病院までは距離がありすぎる!

こうなったらッ!!!!

俺は衰弱してる彼女を背負い俺の家まで一気に地面を蹴って走った。

絶対に助けるからッ!—————頼む、耐えてくれ……………!!!!!!

2話 彼女の正体

浜辺から少し離れたところに戦国時代を思い出すかのような木造の家が建っていた。その表札には「櫻川」と書かれている。ここでは秋人と秋人の親父2人で住んでいる。親父は黒髪で、少々顔にシワがあり、眉から右目の上を通り頬まで伸びた斬られたような傷跡がある、黒い顎ひげが少しのびていて、身長180cm前後で体格はスポーツ選手でも驚くような鍛え上げられた筋肉を持つている男だ。その男こそ秋人の実の父、櫻川さくらがわ頼長よりながと言う。

彼は着物を上半身だけ脱いで木刀で素振りをしていた。

頼長「ooooooooooooふう……しばらく素振りをしてなかったせいかな大分と鈍ってるな……俺もまだまだ修行が足りんな……」

ガラガラガラツ

ん？秋人かoooooooo

秋人「親父ツ!!!」

?……いつもはけだるそうな声で呼んでくるが今日は違うな。

確實何かあつたのは明白。しかし、あいつがあんなに動揺するなんて珍しい………
そんな人間には育てた覚えがないのだから………。

頼長「どうした秋人。そんなに慌てて……まさかまた学校でけん……」

秋人「そんな事はどうでもいいツ!!この子を見てくれツ!!」

秋人に言われるがまま女の子を見た………ツ!?これはひどいな
………

秋人が背負ってきた女の子は常識では考えられないほどの傷を負っていた。まず頭部や腕、足からは血が流れ、体全体には痣ができていた。破れた服の隙間から火傷の傷が見える。そして彼女が付けていたであろう武器が使い物にならないくらいポロポロになっていた。今の彼女の状態は生死をさまよっている………

まさか俺まで動揺してしまうとはな、これで2度目だ。……今の彼女は完全に死の道

へと近づいている………だが、まだ間に合う。

秋人「親父何か手当てするものはないかッ！早くしないと手遅れになるッ！……」
頼長「落ち着け秋人。」

秋人のやつ気持ちが焦って心が乱れているな。だが早くこの場を抑えないと、どんどん彼女の生存率が下がってしまうのは事実だ………仕方ない、あの手を使うか………

秋人「これが落ち着いていられるかよッ!!ただでさえ女の子が危ないつてのにッ………」

バチンッ!

秋人「………いってえええええッ!何すんだよ親父ッ!!」

俺は秋人の気持ちを抑えるためにデコピンをした。

頼長「落ち着けといってるだろうが秋人。焦ってしまえばできることもできなくなる。少しは頭を冷やせ馬鹿息子

秋人「す……すいませんでした……。けど、早く治療をしないとツ！」

頼長「大丈夫だ俺に任せろ。」

秋人「親父？何すんだよ。」

頼長「俺のやり方で治療をする……久しぶりやるから完全には治せるかわからないがな。」

秋人「ああ、頼む親父。この子を助けてくれ。」

頼長「いくぞツーーーーー！」

そう言つて頼長は女の子のお腹の上に手を置いたーーーーー

s a i d o u t 頼長

s a i d i n 秋人

「……………何だよ？……これツ？」

親父に彼女を託したのだが、親父の手からは、とめどなく光が溢れ出ている。そしてその光は彼女を包んだと思ったら一気に傷を治していく。俺はその光景を黙って見ていた……………いや、見ることにできなかった方が正しいな。

親父……………あんたは一体何者なんだよ……………人間なのかと疑うレベルで……………てかほんとうに、俺の親父なのかと、不安になってくる。そんなことを考えていたらいつの間にか、彼女の処置は終わっていた。まだ数ヶ所にかすり傷やあざは残っていた、けどさっきの傷よりは遥かにマシだ。

頼長「これで大丈夫だ。後は彼女の自然回復だけで何とかなるだろう。一応念のために絆創膏や湿布を貼ってやれ。いいな？」

秋人「ありがとう親父。ところで、今の力？は何なんだよ……………」

頼長「あーこれか。これは治癒術と言って軌道の種類だ。そうか、秋人に見せるのは初めてだったな」

そう言った後親父は再び光を出した。確かに見るのは初めてだ、それと同時にある感情が出てきた。俺もできるようになりたい……………

秋人「親父……それ、どうやったら取得出来る？」

頼長「自分の気を操る」

秋人「分かるかあー！」（#、□）

……そんな説明だけで分かっただら苦労しねーよ……けどいつか絶対に取得してやる……。

頼長「明日には治癒術のコツを分かりやすく教えてやる。秋人は明後日には大本宮に行くんだからな。」

「……………今なんて……………大本宮へ行く？何で親父が知ってるんだよツ？今日理事長に知らされたばっかだぞ……………まさか親父に限ってそんな……………」

秋人「何で親父が知ってるんだよ……………」

頼長「そんなの、俺が元帥にお前を紹介したからに決まっているだろ。嫌だったか？」

秋人「そんなの………嫌に決まってるからおおおおおッ！」

ほんとうに俺の嫌な予感によく当たる。それも最悪な形として……。え？………なぜ俺が提督をするのが嫌かって？そんなのメンドくさいからに決まってるじゃん。俺は基本メンドくさいことは苦手で、いつもそこから逃げてきた。だから今回の提督をするという依頼も確実にメンドくさくなることが目に見えている。だからやりたくないのだ。親父もそれを知った上で元帥という人に紹介したに違いない………本当なにしてくれたんだよ………。

頼長「文句なら明日にでも山程聞いてやる。だが秋人お前にはまだやることがある。彼女を連れてきたのは誰だ？お前だろ、だから秋人は彼女の様子を見ないといけない。そうだろ？」

秋人「そうだった………ありがとう親父」

俺がそう言った後「全く世話のかかる馬鹿息子だ………」と言って入れの部屋から出て行った。気のせいか………親父が一瞬微笑んだような………まあいいか。俺はまだやることがある、残った傷の手当てだ。俺は彼女の傷の手当てに取り掛か

る。

彼女の手当てをしてる最中俺はふと浜辺での事を思い返した。それにしてもこの子は本当に人間なのかな？普通では絶対見ない大砲？を背負ってたし、家に運ぶ為におんぶしたんだけど、背負った瞬間オイルの匂いがしたし……………何だろうな？俺があれこれ彼女について考えていると—————

女の子「……………んっ……………ここ……………は？」

彼女の意識が戻った。良かった—————これも全部親父のおかげだ。俺一人だけだったら絶対に助けられなかった。とりあえず、一連の流れを彼女にゆっくりと話そう。

秋人「目が覚めましたか？良かったです！それとここは自分の家です。」

ちなみに何で急に敬語のなったかというのと、決して相手が女の子だからではない。親父から初対面の人には敬意を払えと、長く教えつけられたからだ。当初は結構メンドクさかったが慣れてしまえば簡単。

女の子「君は?.....どうして僕はこんなところに.....」

秋人「自分の名前は 櫻川 秋人 と言います。貴方をここに連れてきた理由ですが.....」

く秋人説明中く

女の子「そう.....だったんだ.....ありがとうございます.....僕を助けてくれて。」

秋人「礼は入りません。自分は当たり前のことをしただけですので!あの、名前を聞いていなかったのですがよろしいですか?」

女の子「そうだったね.....それじゃあ自己紹介するよ。僕は白露型駆逐艦 時雨だよ。」

えッ?.....シラツユガタ?何それ、美味しいの?。俺は別に漢検の勉強をしてる訳じゃないんだけど?てか俺漢検準二級まで受かってたわくくアハハハハハ(▽▽).....んなことはどうでもいいッ!とにかくもう一度聞かなければ。

秋人「すみません、言っておる意味がさっぱり分かりません.....貴方は人間ですよね

？」

時雨「……ごめんね。僕は人間じゃないんだ。艦娘って聞いたかとはあるかい？」

……」

秋人「いえ、初めて聞きます。」

時雨「じゃあまずそこから説明していくね……」

↳ 時雨説明中↳

時雨「……………ということなんだけど、分かったかな？」

秋人「……ウン、トテモワカリヤスカツタデス……………」

時雨「…本当に大丈夫かい？……」

正直知らない単語がいっぱいで頭がパンクしそうになる。とりあえず時雨の話を聞いて分かったことは、艦娘は時雨以外にもたくさんいること、深海棲艦を倒すために作られたこと、艦娘の管理と戦いの指揮をとる人がいるということ、艦娘が住んでいるところは鎮守府という場所。

秋人「…簡単に言うと深海棲艦を倒すために作られたという事ですか？」

時雨「……まあそういうことだね……」

ガラガラツ

頼長「秋人、ご飯が出来たぞ。——ん、目が覚めたかお嬢さん」

時雨「……ッ!?……」

秋人「時雨、大丈夫。この人は俺の親父だから——」

時雨「……う……うん」

やば、つい元の口調に戻ってしまった。後で親父に怒られるな笑。時雨も少しは落ちていた?かな。

時雨「……こんにちは、僕は 白露型駆逐艦 時雨 だよ。よろしくね」

時雨が自己紹介をし終わった後。おやじは時雨の前に立った。その時時雨は一瞬体がビクツと震えた。親父もそれ見て一瞬動揺したように見えた。しかし親父は正座を

し丁寧に自己紹介へと移る

頼長「私は、秋人の父親の 櫻川 頼長 と申します。以後お見知りおきを、時雨殿。」

時雨「……そんなに固くならなくてもいいよ。君も、えつと秋人だったかな?……」

頼長「そうか……話しは秋人から聞いていると思う、だから今日はここでゆつくりしてくれ。いくぞ秋人」

秋人「はいはい……」 はい は一回だけいいと何回言も言っているだろ。」ツ!!?

ツいつてえな親父………そういうことで、俺はご飯食べにいくけど時雨、一緒にどうだ?」

時雨「……僕は大丈夫、気遣いありがとう」

秋人「そうか、まあ食べないと元気にならないから食べ終わったら、ご飯持ってくるな。」

そう言つて俺は時雨の返事を確認してから、親父と食卓へ向かった。

—————

夕食後俺は時雨にご飯を届けた。時雨はご飯を見るなりものすごい勢いで口へと運

んだ。そして頬を真つ赤にしてとても幸せそうに食べていた。やばいめっちゃ可愛い!! (*・▽・*) ……そういうのはおいといて、時雨がご飯を食べた後いろんな話を聞いた、艦装のことや妖精のこと……深海棲艦のこと。とにかくいっぱい聞いた。時雨を、艦娘のことを知るために。そして時雨がいた鎮守府についても話してくれた。その話を聞いて俺は誓った、提督になると。偽りなんかじゃない本当の提督になると—————

次の日目がさめると何故が時雨は俺を抱き枕かのように絡みついて眠っていた。どうしてこうなった!? (・ω・) 俺も思春期なんですよ、ほんと勘弁してください。それにしても幸せそうに寝ているな時雨めっちゃ可愛い、駄目だ考えるな櫻川 秋人! ここで耐えてこそ真の男だ! ……そういえばどっかの不幸な少年もこんなことがあったような……………。

3話 みんなとの約束

? 「お前は本当に役立たずだなあ!!」

時雨 「すいませ、うぐつ……………」

出撃でSランクではなくAランクで鎮守府に帰還した僕たちを、提督が怒鳴りつけるなり、暴力を振るってきた。提督はいつも自分の思い通りにならなかつたら罵声を浴びせ暴力を振るう。さらにはセクハラ行為も……………もう嫌だ、こんな生活終わりにしたい……………」

提督 「何回言ったらわかるんだ貴様らはッ!!」

暁 「…うつ……………ぐつ……………ごめ…んなさい……………提督様」

提督 「こんな事になったのは貴様の責任だ時雨!!」

時雨 「…うぐつ…すいません、」

提督 「もういい役立たずどもッ!!今日は勝利ランクSが出るまでは出撃させるッ!!」

それを聞いたみんなはすぐに体が震え出した。

こんなの……勝てるどころか沈没するじゃないか!!……でも、誰一人と提督に逆らえない……弱みを握られているから……僕たちは、すぐに出撃した。

—————

吹雪「……暁ちゃんと赤城さんが大破……しました」

夕立「そんな……もう……ほとんどが大破っぽいよ………こんなの勝ちっこないよ………」

僕たちの戦いは想像を絶するものだった………前の出撃のせいかまともに戦えない状態。僕と夕立以外全員大破してしまった………

駄目だ……このままだと全員沈んでしまう!!もうこれしかない……

時雨「提督様、どうか撤退指示をお願いします!!このままだと僕たち全員沈んでしまいます!!どうか!!」

提督「ふん。貴様らみたいな役立たずに出す必要ない。」

赤城「提督様！さすがにやりすぎではありませんか!!」

提督「黙れ赤城、俺に逆らう気か!!加賀がどうなつてもいいのか？」

赤城「!?。……申しわけ……ごじいません……」

提督「まあいい、そこまで言うなら指揮している時雨。お前が囧になれ」

僕が囧に————

時雨「僕が囧になったらみんなが助かるのですか？」

艦娘「!?!」

提督「そうだお前が囧になったら、全員逃して今までのことを帳消しにしてやる。どうする?やるか?」

赤城「いけません!時雨さん!あの人の言うことを聞いては!!!」

夕立「そうだよ時雨ちゃん!時雨ちゃんが一人で背負うことなんてないっぽい!!」

時雨「……赤城さん、夕立、……でもごめん……僕が足止めするから、みんなは逃げ
て!」

みんなを守るためにはこれしか方法がないから……

吹雪「どうして、時雨ちゃん!!他に方法なんてたくさん……」

時雨「大丈夫だよ、吹雪。必ず帰ってくるから……」

吹雪にそう言っ て敵艦隊へと向かおうとしたとき体が動かなかつた。………夕立が後ろから僕を抱きしめて止めていた。涙を流しながら………

夕立「絶対に……絶対に行かせないっばい!」

時雨「夕立……」

夕立「こんなことで時雨ちゃんを死なせない……」

時雨「離して夕立……」

夕立「嫌だ!」

時雨「夕立!!」

夕立「!!」

時雨「僕は大丈夫。何があっても僕は夕立の所へ帰ってくるよ。正直、怖いけどさ、み

んなを守るためならいくらでも乗り越えられる。だから夕立も、信じて待つて欲しい」

夕立「……時雨……ちゃん……」

時雨「赤城さん、吹雪。みんなのことをよろしくね……」

吹雪「……うん！」

赤城「!!……わかりました。行きますよみなさん!!」

夕立「……待つて！赤城さん！時雨ちゃん!!時雨ちやああああん!!」

僕は敵艦隊に向かった。みんなを守るために………夕立が大声で僕の名前を叫び続けているのが聞こえた。大丈夫だよ夕立……必ず、必ず帰ってくるから!!

それから僕は敵艦隊の砲弾にあたって意識は暗い闇の底へと落ちてしまった

—————

目が覚めると知らない天井だった———そしていつの間にか戦いで負つてた傷はほとんど治っていた。……僕は生きている？どうしてだろう。そんな理由は直ぐ

に分かった。

?? 「目が覚めましたか。良かったです！それとここは自分の家です」

青年が横に座っていた。どうやらこの青年が、僕が眠っている間に傷の手当てをしてくれたみたいだ。そして僕を助けてくれた青年の名前は、櫻川さくらがわ 秋人あきと とう。秋人は、僕が近くの浜辺で衰弱した状態で倒れているところを、背負ってこの家まで運んできてくれたらしい。そして秋人のお父さんが、ほとんど僕の傷を治してくれた。

助かったんだ————僕を助けてくれた秋人や秋人のお父さんに感謝しないと。だけど僕は、ちゃんと見えなかった……。あの提督のせいで人間を信じられなくなってしまうから……。

秋人「——あの、名前を聞いていなかったのですが。よろしいでしょうか？」

秋人は丁寧に僕の名前を聞いてきてくれた。

そうだ、忘れていた……確かにこれじゃ不平等だよね……。僕はいつもの自己紹介をした——つもりだったのに秋人の顔は（。ん。）

としていた。もしかして……僕たち艦娘を知らないのかな？聞いてみたら、「いえ、初めて聞きます。」と言った。だから僕は簡単に艦娘について説明した。……つもりだったのに秋人はパンクしていた。だけど艦娘については簡単に理解してくれた。

——この後秋人のお父さんが入ってきて、見た瞬間無意識に提督の顔と重なって見えて体が勝手に震えた。そんな僕を見て秋人は、僕の手を握って「大丈夫だ時雨」と敬語じゃなくていつもの会話をかわすような口調で言ってくれた。……どうしてかな……とても安心する……今までこんなことは無かったのに。この人なら信じてても大丈夫かな。僕は少しずつそう思い始めた。

しばらくしてから秋人は、ご飯を持ってきてくれた。美味しそう……僕は一目見て思った。そしてお腹が空いていたせいか僕は直ぐにご飯を食べた。!!美味しい……こんな料理初めて食べたよ。今まで燃料やボーキサイトしか補給していなかったから、なんだか新鮮。みんなにもこんな料理を食べさせてあげたいな……。ご飯を食べ終わってから秋人にここに来る前までの事を話した。秋人は何も言わずにただ真剣に僕の話聞いてくれた。僕の話を通り終わってから秋人は口を開いた。

秋人「今までよく耐えてきたんだな時雨は、正直俺だったらとつくに逃げてたな……逆にするげーよ」

時雨「そんなことないよ……僕だってこんな生活、はやく終わりにしたいって思っているから……」

これはまぎれもない事実……僕は本当にあの鎮守府での生活を終わりにしようとしたから……けど、みんなのことを考えてしまうと勝手に終わってはいけないと思った。だから、死ぬことが出来なかった。そして僕が生きている以上、あの鎮守府に帰らないといけない。夕立やみんなに約束したから。守ると決めたから……

時雨「でも、勝手に死んではいけないと思ってきたんだ、みんなのことを考えると……そして僕はあの鎮守府に戻らないといけない。みんなをあの地獄から助けるために！」
秋人「やつぱり強いじゃん時雨。大丈夫、時雨ならきつとみんなを守る。なんか分かんねーけどそう言う気がするんだよな」

秋人は微笑んでそう言ってくれた。なんだろう……秋人に言われると勇気をもらえ

る。今までこんなことを言われたことがなかったからかな。もし秋人が僕たちの提督だったら――

時雨「もし秋人が提督になったら――」

秋人「え？俺、提督になるんだけど？」

うそ……思いがけない言葉が秋人の口から出て来た。――そうと決まれば早く提督について教えてあげないと!!――僕は直ぐに秋人に提督の仕事や妖精、建造について教えた。が、秋人はさつき以上にパンクしちゃったみたいだ。

4話 それぞれの思い

秋人「うーん、なんでこうなったんだっけー？」

俺は、朝起きると時雨が俺を抱きついて寝ているという状態の理由を考えていた。あの時は確か――

――

昨夜 就寝前

秋人「テスト？」

時雨「うん、秋人が提督の資格を持っているのかっていう」

秋人「もう大丈夫じゃん。俺妖精を見ることが、会話することもできたんだし」

時雨「次が1番提督になるための大切なことなんだ！」

秋人「ふーん。じゃあどんな内容なんだ？」

秋人「おはよう時雨、とりあえず朝ごはん食べたいからどいてくれたらありがたいなーって？」

時雨「むうー！秋人は僕じゃ満足出来ないのかい？」

秋人「ち、ちが：：そういう訳じゃなくて：：は、恥ずかしいっつか／＼」

時雨「ふふふ！冗談だよ秋人。じゃあ行こっか！」

秋人「なっ！！し、思春期の男をからかうんじゃねーよ！！／＼」

時雨「ごめんねー！：：秋人は本当に優しいんだね。覚悟していた僕がバカみたい：：「なんか言ったか？」な、なんでもないよ！！」

—————

親父と時雨で朝ごはんを食べた後、親父から治癒術のコツを一通り伝授してもらった。大体分かったけど、どうやってやんだよ：：自分の体力を引き換えに傷を治すって。まあでも焦ってたところで出来ることも出来なくなるって親父は言ってたし、コツコツとやりますかー。

次は時雨の様子でも見るか。確か「僕は艤装の調整をしてくるね」って言ってたから多分すぐその海かなーやっぱりー

秋人「あーいたいた。おーい時雨……つてはああああ!!」

海の上で立ってんのか、あれ。すげー……艦娘にしか出来ないことだよな。それに、まるでスケートのように滑って海の上を移動しているし、しかも速い。あと、背負っているのは大砲か？それも撃ってる。かつこいいな艦娘つて……俺が時雨を見てると俺に気づいたのか、少し暗い顔をしていた。そして調整が終わったのか俺の方へと来てくれた、暗い顔をしたまま……

side out 秋人

side 時雨

僕が艀装の調整をしている間、いつの間にか秋人が見に来ていた。……見られちゃった……秋人は今の僕のことをどうおもっているのかな。やっぱり怖がられて……

秋人「すげーな時雨。艦娘っていうのは!!」

時雨「!!」

予想もしない言葉が返ってきた。どうして、ほとんどの人は僕たちを怖がっているのに——————

時雨「僕のこと、怖くないの?……」

秋人「いや全然。むしろかつこいいって思う。海の上を立つことができるし、自由に移動できる。俺には出来ない事をしてるから!!」

秋人は笑顔でそう言ってくれた。だけど——————

時雨「僕は兵器だよ。深海棲艦を倒すための兵——」……ねーよ——え?」

秋人「そんな事ねーよ!」

時雨「!?」

秋人「確かに時雨、いや艦娘達は人間とは少し違うところがあると思う。けどその違いは機装があるかないかの話だろ?それ以外は人間と一緒にじゃなか!」

時雨「秋人……」

秋人「これは俺の勝手な考えだけど。兵器つてのはさ、心も無ければ会話すら出来ないと思うんだよ。それに比べて時雨は、心がある、手や足だつてある、会話が出来る。そんな存在を兵器だなんておかしくないか？」

そう言った後、秋人は僕の頭に手を置いて秋人は優しく微笑んで言った「……………」

秋人「それにさ、笑ったり、怒ったり、悲しんだり、いろんな感情を持つてるのに、兵器なわけねーだろ。」

その瞬間僕の中から涙が溢れ出てきた。それに気づいた秋人は優しく僕を包んでくれた。気がつけば僕は、声を出して泣いていた。秋人の胸の中で、今まで溜め込んでいたものが全部出てきていた。ありがとう秋人……僕は君のおかげで救われた……。助けてくれた人が秋人で本当に良かったって僕は思った。

side out 時雨

side 秋人

秋人「もう大丈夫なのか？時雨。」

時雨「うん、ありがとう秋人！」

秋人「どういたしまして。それじゃあ戻るか。」

時雨「うん、そうだね」

俺と時雨は歩き出した。その間俺はあの言葉を思い返した。「僕は兵器だよ……」
……あの言い方、おそらく時雨は言われ続けられていんだ、自分が兵器であるという事
を。ふざけやがって……!!一回その提督をぶん殴ってやりたいわあ。あ、一回どころ
じゃ済まないだろうなあ笑。多分半殺し……うん、絶対半殺し！

時雨「どうしたんだい秋人？さっきから何か凄いオーラが出ているけど……」

秋人「!!………いやいや、何でもない気のせい、気のせい」

俺は急いでそのオーラを消した。危なかった、危うくバレるところだったな。つて、

ちよっ……時雨さん!? ジト目でこっちを見ないで! 怖いから! 本当に何もなければね!!

時雨「仕方ないー……今回だけ何もなかったってことにしておくよ。けど次は説明してもらおうよ?」

秋人「りよ、了解っす……」

時雨も出てるけどなあ……オーラが……気がつけばもう家の前まで来ていた。そして俺が玄関の扉を開けた瞬間。それは起きた……

頼長「……」

秋人「!!」

時雨「秋人!!」

親父が俺に向けて木刀を振り落として来た。俺は驚きはしたけど普通に回避出来た。理由は簡単。いつも学校帰りに親父が待ち構えていたから。親父曰く、「俺流の迎えだ」との事。ほんとやめてほしい。時雨もいるのにさー。

頼長「ほう。これを避けるとは、成長したな秋人」

秋人「親父、今それをやる!? 時雨が一緒にいるんだぞ!」

時雨「秋人…これは一体?」

頼長「ああ、時雨さん。これは櫻川家流の息子に対しての出迎えだ!」

時雨「そうなのかい?」

秋人「ああ、そうだな。つてか親父空気読めよ!! 「空気? ナンダソレハ?」 つこのク

ソ親父がー!!」

親父「お、俺と殺るつもりか? まあ俺に勝とうなんて100年いや一生ないがな笑」

ブチツーーーーー

秋人「上等だゴラ!!! その親父のダサイヒゲを刈り取ってやるから覚悟しろお
おとおお」

親父「貴様……今、俺のヒゲをバカにしたか!! わかった……そこまで言うなら全力で
叩きのめしてやろう!!!」

時雨「あのー……二人とも……」

秋人&頼長 「野郎！ぶっ〇してやらあ!!」

時雨 「大丈夫かな……これ?……」

—————

3 時間後

秋人と頼長の戦いに決着がついた。結果は秋人の惨敗。秋人は頼長に半殺しにされていた。後になって秋人は「二度と親父と全力で勝負するかよ……」と語ったが「いつか絶対超えてやる!」とも語ったらしい。そしてその2人の勝負を見ていた時雨からは「本当にこの2人は人間かい?」と少々不安な声を漏らしていた。

5話 雨はいつか止む

親父との全力勝負で半殺しにされた後、いろんなことが起こった。まず、気がついたら時雨に膝枕をされていたり、俺が風呂に入ろうとしたら時雨が入っていて、また改め直そうとしたら腕を掴まれ「一緒に入ろう」と言ってきた。うん……いろんな事っついていか全部俺の自尊心を刺激するようなものだな……。

そして、翌日目が覚めると時雨はまた俺の布団の中に入っていた。何がしたいのかと聞いてみたところ。時雨はニコツとして「テストだよ！」と答えた。もう間に合ってます！

—————

秋人「荷物もまとめたし準備完了だな。時雨はどうだ？」

時雨「僕は何も無いから大丈夫だよ」

秋人「あれ？ 艦装は？」

時雨「隠してあるよ。ほらこうやったら——」

秋人「まじかよ……」

時雨は何も無いところからいきなり艷装を出してきた。カッコイイけど仕組みどうなってるんだろ？まあいいか。

秋人「んじや行きますか「待て秋人……」——親父？」

頼長「行く前にどうしても伝えておかない事がある。少しいいか？——」

秋人「行ってくる、親………父さん」

頼長「ああ、行ってこい！秋人」

秋人「帰って来て腕が鈍ってるってことには無いよにな、お・や・じ」

頼長「ふん。それはお前もだろ、バカ息子」

秋人「じやあ——」

秋人は時雨と一緒に扉を開け出ていった——

頼長「全く、世話のかかるバカ息子だ。一体誰に似ていたんだろうな、その性格は。

なあ あかね 茜 いや赤……——」

時雨「秋人、お父さんと何を話していたの？」

秋人「え!?! うーん……ヒミツだな」

時雨「むうー。あ、秋人もうそろそろ着くよ」

秋人「もう着くのか!?! 結構早いな。」

時雨と一緒に大本営へ向かって、1時間もかからないうちに着いた。うわあー、思ってた以上にでかいなあ! まるでビルー「あの。櫻川 秋人さんですか?」：建物を眺めていると声をかけられた。声をする方へ視線を向けるとそこにいたのは、赤いセーラー服?を着ていて、そして背が高く、スタイルが抜群な女性がいた。ちよつと待て綺麗すぎるんですけど!

女性「もしそうでしたら、私についてきて下さい」

秋人「あの、すいません。貴女は?ー」

時雨「大和さんだ! 久しぶりだね!」

大和「あ! 時雨さんじゃないですか! 久しぶりですね!」

どうやらこの綺麗な女性は大和というらしい。もしかしてこの女性も艦娘なのかな

?それにしても綺麗だなー、こんな人が親だったら絶対困らないのにー

時雨「紹介するよ秋人、艦娘である大和だよ」

大和「初めまして、大和型戦艦 大和 です。よろしくお願いします」ニコツ

秋人「自分の名前は櫻川 秋人と申します。こちらこそよろしくお願いします」

ーーーん?待てよ?さつき戦艦って言ったよな?しかも大和…大和…やま
…と!?

秋人「大和おおおおおおおお!?」

大和「ひやい!!どうされたんですか秋人さん!」

秋人「すいません!まさか本物の戦艦大和だったとは思わなくて、すいません…!」

大和「い、いえ!私は何も気にしていませんので。顔をあげて下さい、秋人さん!」

時雨「そうだよ秋人。ほとんどの人が大和を見たら、あんな風になっているから」

秋人「そうなんですか大和さん?」

大和「はい!なので私は大丈夫ですよ!」

そう言つて笑顔をする大和さん、この時俺は思った。女神だ、と――

大和「ここが元帥のいるお部屋です。元帥、つれてきました」

??「おう、入ってくれ大和」

俺と時雨は大和さんに元帥という人がいる部屋へ案内してくれた。そして部屋へ入るとそこには――

??「久しぶりだな、秋人よ」

秋人「尾形……さん……!? どうして……」

時雨「知っているのかい秋人？」

秋人「知ってるも何も、俺が小さい頃によく家に来ていたおじさんだよ……」

そう、この人はよく家に来て一緒に釣りをしたり、遊んだりして色々とお世話になった人だ。名前おがたは尾形、正義まさよしだ。まさか、ここで偉いさんをやっていたとは。

尾形「しばらく見ないうちに随分と大きくなつたな。それに、秋人のお父さんにそつ

くりになって……」

秋人「尾形さん！いつからこんな仕事を？」

尾形「秋人の家に来ていた頃からやっていたよ。あの時、隠すのは大変だったなあ」

秋人「そうだったんですか。けど、これで親父が俺をここに紹介した理由が分かりました」

尾形「そうかい。それよりも一緒にいる時雨はどうしたんだ？」

秋人「あーそれはー」「僕が説明するよ！」時雨……」

く時雨説明中だよ

時雨「ーーーーーという訳なんだ」

尾形「やはりか……どうやら私の仮説が当たったということだな」

時雨「元帥……それじゃあー」

尾形「うむ、すぐに憲兵を送る。そして時雨、今まで実行出来なくてすまんかったな……艦娘を守るのが私の仕事なのに………終わったら私も一緒に罰を受けよう」

時雨&秋人「!?」

大和「元帥!!」

秋人「……おう！俺も時雨と会っていなかったら正直、提督になるっていう覚悟が持てなかつた。俺の方こそありがとな!!」

時雨「うん!……なんか寂しいなあ……もっと秋人と話していたかったのに……」

秋人「雨はいつかやむ……だっけ?」

時雨「秋人その言葉!」

秋人「確か時雨の口癖だつたら?俺よりもまず、雨が止みそうな方に行くべきじゃないのか?そんでみんなを助けるって、守るって決めただろ?だつたらまずはみんなを雨から守って、新しい晴れ間へと連れ出してやるべきなんじゃないのか?それに俺も提督になるんだから、いつかはわからないけど、必ず会える日が来るって思うんだよ」

時雨「秋人……そうだったね。僕頑張るよ!みんなを助けて、新しく鎮守府を立て直していくよ!!」

秋人「そのいきだな!!じゃあまたいつか会おうぜ時雨!!」

時雨「うん!絶対に会おうね秋人!!じゃあ行ってくるよ!」

そう言つて憲兵と一緒に時雨は出て行つた。

尾形「随分と仲良くなってーりーこりや早く提督になって会いに行つてやらんな
！」ニヤリ

秋人「そうつすねー」(?▽?;) ;

――――

翌日時雨がいた鎮守府の提督は時雨と憲兵の力によつて拘束された。尾形さん曰く
確実に有罪判決とされ、牢屋行きは確定だということだった。そして、鎮守府側からは
しばらく提督はいらないと言つてきたらしい。まあ、そうなるわな笑。あと元提督さん
お疲れしたー笑笑。あとでこつそり一発殴つておこうかな。

6話 特別

時雨と別れて1週間が経った。そして俺は大和さんと提督の仕事について勉強をしていた――。理由は言うまでもなく俺が一般人で、前まで現役の学生をしていたからだ。

大和「――という事ですけど、わかりましたか秋人さん」

秋人「はい！つまり、艦娘たちの状態を把握しておかないといけないわけですよね？」

大和「そうです。秋人さんは物分かりが早くてすごいですね！」

秋人「いえ、そんなことないですよ……」

嘘です大和さん……今までの説明は、全部時雨に教えてもらいました……。俺は大和さんに悟られないように説明を聞いていた。罪悪感を持ちながら――

大和「ここまで分かかっていれば後は問題ありませんね！元に妖精さんが見えて、それにちゃんと会話ができていますから！」

秋人「はい！この1週間ご教授ありがとうございます大和さん！」

大和「そんなに固くならなくてもいいんですよ？どうせなら私の事も大和とお呼びく

ださい」

そう言って笑顔を見せる大和さん「……………美しい……。は?!?うかつにも見とれてしまった!俺としたことが……………」

秋人「そんなことでできないですよ!確実に自分より上じやないですか!それに出来ない理由がもう一つあります。と言つてもそれが1番の原因ですがね……」

大和「原因?」

秋人「はい、歳上の人には敬意を払え と親父からの教えがあつて。そのせいで癖付いてしまったんです……」

だから俺は大和さんにタメ口で話すことができない。まあ、俺的には慣れてるからいいんだけどな……………それに綺麗な人の前でタメ口っておかしいじゃんか!!!!

大和「そうだったんですね……じゃあ破つてしましましょう!その教えを」

いきなり何言い出すんだ、女神さん!人の話を聞いていたのか!?

秋人「大和さん？人の話を聞いていましたか？癖付いて出来ないとー」「だから言っているんです！」え？」

大和「秋人さん、今ここには秋人さんのお父さんはいません。私と秋人さんだけです。なので、秋人さんのお父さんには絶対に聞かれないと言うことです。それに癖付いてしまっても意識したら治せるんですよ？だからお願いします秋人さん……！」

綺麗なお姉さんにしやがまれて上目遣いでお願ひされてしまう。クソツ!!だめだ、断れない……俺は意を決して親父の教えを破った。親父ゴメン！

秋人「分かった……これからは意識するわ……大和さ……大和／／／」

大和「ありがとうございます秋人さん！」パアアアア！

秋人「じゃあ俺からも大和に要求な！」

大和「？」

秋人「お、俺のこと……秋人さん……じゃなくて……あ、秋人って、呼んでほしい／／／」

大和「……クソツ……わかりました秋人！」

大和にそう呼ばれて俺は少し、いや少しどころじゃないくらい顔が真っ赤になった。大和も俺を見て察したらしく、「まだまだ秋人も子供ですね」と笑いながら言ってきた。恥ずかしいからやめてくれ大和／＼／＼！！！！

大和にからかわれている最中、放送で尾形さんに呼ばれた。俺と大和はすぐに尾形さんがいる部屋へ向かった。

尾形「いきなり呼び出してすまんかったな秋人」

秋人「いえ、別に自分は気にしていません」

尾形「そうか、では本題へ入らせてもらおうぞ。秋人、お前が配属する鎮守府が決まった。場所行つてのお楽しだ☆」

秋人「なんですかそれ……」

尾形さんの言葉に俺は不覚にも苦笑いをしてしまった。別に言つたつていいじゃないか……焦らすなよ尾形さん……。と思つたが口にはしない。

尾形「行くにあたって秋人には最終テストをさせてもらう」

秋人「最終テスト……」

俺は少し身構えた。何をするんだ最終テストって……俺が思うのは時雨と一緒に寝たという感じのものだけけどな。

尾形「ああ、そんなに身構えなくてもいい。一つの質問に答えてもらうだけだからな……」

尾形さんも俺の心を読んだらしく、そう言って楽にさせてくれた。質問ってどんなんだろうな。

尾形「じゃあ最終テストを始める。秋人よ、お前は艦娘のことをどう思う？」

その質問は前にも聞いた。なんせ時雨がしてきたんだから……。そんなものの答えはとうに決まっている!!!

秋人「そんなこと、決まったますよ。自分達を深海棲艦から守ってくれるヒーローです！そして兵器って考える人や艦娘を怖がる人は一度自分の置かれている立場を把握してほしいです。自分が一番安全な場所で指揮してるってのに、兵器だの役立たずだの。ごちゃごちゃ言いやがって、調子に乗んなよ！って思います。」

尾形「秋人……」

秋人「これは前に時雨にも言ったんですが、艦娘には心があり、感情があり、手も足もある、そして何より会話ができる。そんな子達を俺は兵器と思わない!!!です」

尾形「ハツハツハツハ!!!まさか私が考えている答えの一枚上手をいくとは!!!流石、頼長の息子だな!!」

秋人「それってつまり……」

尾形「合格だ、秋人。お前は今日をもって提督になることを命ずる!」

秋人「ありがとうございます。尾形さん!!」

俺は晴れて最終テストに合格をして提督になることをが決まった。これで時雨に会う機会が作れるな。けどあの鎮守府は提督を受け付けていなかったから、結局無理じゃん!!!

尾形「提督になるにつれて秋人にはこれをきてもらうぞ」

そう言つて渡されてきたのは、白いスーツみたいないわゆる、海軍によくある服だつた。しかし俺は決めていた事があつた。それは誰になんと言われようと決して曲げない事————

秋人「あのすいません尾形さん。俺、その服着ずに提督をしてもいいですか？」

俺の発言によりあたりは静寂と化した。そして2人の顔も（。D。）としていた。まあ、当たり前か。いきなり提督と証明される服を着ないと言っているんだから————

尾形「秋人、一応理由を聞いてもいいか？」

秋人「自分は一般人です。そして、軍学校を卒業していませんし、何より、1週間前まで高校生でした。そんな自分がこの服を着るなんて出来ません。いや、むしろ着たくない」

尾形「つまり、一般人であつた秋人に、この服を着る資格がないという事だな秋人？」

秋人「その通りです。あとは、パウハラ、セクハラや過度な出撃という非人道的なことをする提督と並んで着るなんて嫌だ。それだったら自分は特別でありたいと思いました」

尾形「なるほどな……ふつつハツハツハツハ!!私をこんな形で2度も笑かすなんて、頼長以来だよ!分かった秋人の意志を尊重しよう。しかし何も無いっていうのは、こちらにも困るから腕飾りの提督と証明する物を作るよ」

秋人「ありがとうございます尾形さん」

そして、提督の帽子についていたエンブレムを腕飾りとして手首にぶら下げる形となった。俺が活動するにあたっての服装は、前まで通っていた高校の制服を着る、という事で決着した。尾形さんからは「こんなことを言うなんてお前が初めてだよ……」と少々呆れた感じで言われた。申し訳ないです尾形さん。(?!▽?!;)

第1章 鎮守府生活編

1話 始まりからの再会

僕が部屋から出ると何やら食堂が騒がしかった。一体何が起こったのだろうか？その時ちようど近くにいた夕立に聞いてみた。

時雨「夕立どうしたんだい？みんな騒がしいけどー」

夕立「時雨ちゃん……それがー」

僕は耳を疑った。今日から提督がこの鎮守府に配属されることになったから。そんなー……あの時大本営にしばらく提督はいらないって、手紙で送ったのにー……。

夕立「もう嫌だよ……また……また時雨ちゃんが……」

時雨「大丈夫だよ、夕立！もう僕は何処へも行かないから。これからもみんなを守るよ！」

夕立「時雨……ちゃん……うう……」

そう言つて夕立は僕を抱いた。僕も夕立を抱いて夕立の頭を撫でた。秋人にやつてもらつたように。

??「時雨。お前は頑張りすぎだ。今回は私たちに任せてはくれないだろうか？」

時雨「長門さん……一体何をするんだい？」

長門「私と陸奥、赤城達に早めに提督となる人を処罰する！これ以上奴の思い通りにさせない!!」

そう言つて長門さんは食堂を後にした。大丈夫かな……なんか僕、とてつもなく嫌な予感がする。けどもし、みんなに危害を加える提督だったら僕は容赦しない!!みんなを守るって決めたから……

side out 時雨

side 秋人

秋人「……………長い！」

俺は、1kmぐらいまである鎮守府までの一本道を歩いてきた。1人で。そして自分の荷物を持ちながら。なぜこうなったかと言うと、2時間前にさかのぼる。

……………
2時間前

尾形「お前が配属する鎮守府はここだ」

秋人「何処ですかここ!？」

尾形「W☆K A☆R A☆N。地図を見ていくことだな。まあ秋人ならその鎮守府でもうまくいけると私は信じているよ!」(？▽？) ニヤニヤ

秋人「それって……1人で行けってことですか!？」

尾形「まあ頑張れ!秋人」(？▽？)

おいふざげんな!!こうなったら大和にお願いするしかない!!そう思って大和にお願い

秋人「！」

何処からか分からないが砲弾が飛んできた。俺はいつも親父に「櫻川家流出迎え」をされていたのでこれといって焦らず、普通にかわした。そして俺はある答えを導き出した。これ絶対ブラック鎮守府だなとー！！ー！！ー！！まんまと、尾形さんにはめられてしまった。あのクツソ野郎後で覚えとけよ！！！！そう思っていると木の陰から「バカな！！」と言う声が聞こえた。

秋人「あのー。声、丸聞なんで、出てきてもいいじゃないんですか？」

そう言った後、背が高くして少し露出がある服？を着ている髪の毛の長い女性が出てきた。それにつられて髪は短いのはじめに出てきた女性とおんなじぐらいの露出をしている女性が出てきた。あ、命を狙われていても敬語は欠かさない、初対面だからね！

秋人「あのー、どう言うつもりかは知りませんがそういうのはやめといた方がいいと思いますよ？」

長髪「ふん、他人のことより自分のことを心配した方がいいがな！」

秋人「それってどういう……」

その瞬間数十との小さな飛行機が俺に向かって飛んできた。

秋人「つたく、貴方はもつと相手を慎重に見るべきでしたよ……」

長髪「なんだと!!」

秋人「さて、いっちょやりますか……」

そう言つて俺はカバンの中から一本の日本刀を抜いて、飛行機を叩き斬る事は出来なかつたが、飛行機からの全ての攻撃を防ぎながらかわした。こんなもんかよ……これだつたら親父との勝負の方が楽しかつたな……死にそうになつたけど。

短髪「嘘……全ての攻撃をかわすなんて……あなたは一体……」

秋人「見れば分かるでしょ?ここに配属された提督です」

短髪「あの、そういう意味で言つてないわよ……」

秋人「そうですか……自分はただの人間ですよ。あと、あなた方の名前をうかがつてもいいですか?」

長髪「長門型戦艦1番艦 長門 だ!」

長髪「私は、長門型戦艦2番艦 陸奥 よ」

秋人「それと、小さい飛行機を飛ばしていた人は？」

長門「それについては答える義務はない！なんせ貴様は今日をもって死ぬのだからな
!!」

秋人「すみませんが長門さん……自分は正直に「はいそうですか」って……言わない主義でね!!!」

俺はそう言つて鎮守府の中へと走つた。悪いな長門さん、俺、足は超早いぜ！

長門「な!? 貴様逃げるのか!!」

秋人「すみませんが、長門さん。逃げるが勝ちつて言うじやないですか。だから自分は戦略的撤退ですよー!」

長門「チツ! 追うぞ陸奥」

陸奥「……ふふっ……わかつてるわよ長門さん」

—————

side 夕立

何やら鎮守府内が騒がしい。どうしたのかな……ふと食堂からですると……「うわつと!!」ツ!!誰かにぶつかつたっぽい……誰だろうと顔を上げると知らない制服姿の男が立っていた。

男「すみません、大丈夫ですか？」

男の人は申し訳ない顔でそう言って、倒れた私を起こそうとしてくれた。そして私は無意識のうちに男に答えていた。

夕立「…私は大丈夫っぽい……貴方は？」

??「自分も大丈夫ー」「待て貴様あああ!!」やべ、では自分は失礼します!じゃあ……「待たないでしよう!常識的に考えて!!」

夕立「長門さん!?どうしたっぽい?……」

長門「夕立か、あの制服姿の男はどっちへ行った？」

夕立「あの人なら……あれいなくなつたっぽいよ……けどどうしてさっきの人を追いかけていたの？」

長門「さっきの男が今日、配属された提督だからだ。逃しはせん!」

そうやって長門さんは男の人を追いかけていった。……あの人が提督……「大丈夫ですか?……」「……………」でもなんでだろう。不思議とあの恐怖があんまり出てこなかった……いや違う! 私の思い込みだ。どうせあの人もあの時の提督と同じ……………」でも……………」

side out 夕立

side 時雨

また鎮守府内が騒がしくなっている。僕が廊下を歩いていると「時雨さん!!」陸奥さんが僕を呼んできた。少し不安な顔をして……………」

時雨「どうしたんだい陸奥さん?」

陸奥「時雨さん、制服姿の男の人を見なかった?」

時雨「見てないけど、それがどうしたの?」

陸奥「次の提督になった人だからね。長門さんが処罰すると言ったあと、すぐに鎮守

府に入って逃げ回っているのよ。」

時雨「……陸奥さんは、今回の提督についてどう思ったの?」

陸奥「うーん私は、前の提督よりは遥かにマシに見えたのだけど……長門さんがね……まあ私も会話だけだから、まだ分からないのだけど……。会ってちゃんと話しがしたいわね……」

時雨「そうなんだ……あ、陸奥さん、新しい提督の名前は聞いたの?」

陸奥「そういえば、あの男の人名乗ってなかったわね。けどすぐ見つけられるわよ。なんせ新しい提督、提督の服を着ていないから」

それって、もしかして!!あの人かなー……

時雨「わかった僕も探してみるよ!」

陸奥「ありがとね時雨さん」

そうやって陸奥さんは新しい提督を探しに行った。僕も探さないと……まさかそんな訳ないよね……僕はかすかな期待を持っていた。そんな時……ガチャン……と後ろから急いで部屋に入る音がした。もしかして新しい提督かな?僕は音のした部屋へ

入った。

時雨「誰もいない……」

気のせいだったかな……いや気のせいじゃない!!確かにこの部屋に誰かがいる!何故か僕は気配を感じた、しかもそれはとてつもなく懐かしい気配を。そして僕はゆっくりと目を閉じて集中した。わずかな動きを感じるために……そして……

時雨「そこだね!!僕からは逃げられないよ!!」

ドガアアアアアアアアアア!

僕はタンスに向かって砲撃した!大丈夫、生きているはず。僕はそう確信していた何故なら……

秋人「危なかった……誰だよ一体!……って時雨!?!」

時雨「久しぶりだね秋人!」

僕を助けてくれた人だったから——

2話 違い

どうもみなさん櫻川秋人です。今僕は、状況の処理が追いついていなく、固まっています。理由は、タンスに隠れていたら誰かにブツパされて、誰が撃つたのかと思つたら目の前に――――

時雨「久しぶりだね秋人！」

秋人「時雨……」

助けた時雨がいたからだ。そして時雨が笑顔と共に艤装をこちらへと向けられていた。あ、俺これ逃げないとやられるな笑。そう思つてすぐにドアへと走つた。悪いな時雨、俺足超速い――――あれ？動かない。なぜかと思ひ振り向いたら、頬を膨らませた時雨が俺の腕を掴んでいた。

時雨「僕からは、逃げれないよ秋人！」

秋人「分かつた降参だよ。それにしてもよく俺の手を掴めたな。緩急には自信があつ

たのに……」

時雨「秋人のすることがなんとなく予想がついたからだよ」

秋人「ああ、そうですね」

俺ってそんなに分かりやすい人間だったかなあ？まあいいか。

時雨「そんなことより、今日から配属される提督って秋人のことだったの？」

秋人「らしいな、俺は尾形さんにはめられたようなもんだけど……時雨も嫌だったろ？しばらく提督は要らないって手紙を送ってたのに」

時雨「確かに分かった時はそう思ったよ、けど今は思わない。だって秋人が提督だから。秋人だったら、この鎮守府を任せていけるって僕は思うよ！」

秋人「おい時雨、勝手にハードルを上げるなよ……ただでさえこっちは害虫とー」
「そままでだ!!」
「ーげ！長門さん……」

俺が時雨と話している時に突然、長門さんが入ってきた。またタイミングの悪いこ
と。

長門「これ以上動くな！もし動いたら、どうなるかわかっているだろうな？」

秋人「はあ……懲りないですね。長門さんは……どうぞ撃てるものなら撃つてみてくださいよ」

俺はそう言つて目を閉じた。傍から見ればバカな事をしているように見えるだろう。だけど俺は、本気で言っている。何故なら、視えているから。長門さんが撃つた瞬間に、逃げるかな……。そう考えていたとき、時雨が俺をかばうように前に立った。

長門「時雨!?なぜその男をかばう!!」

時雨「この人が、僕を助けてくれた人だからだよ」

長門「まさか!?こいつが櫻川 秋人なのか!？」

時雨「うん、そうだよ。だから長門さん、艤装を下ろしてくれるかい?大丈夫、秋人は信じていけるから!」

長門「ツ!……わかつた……今はそうしよう。だが、もし我々に危害をくわえようなら容赦なく撃つ!わかつたな」

秋人「わかりました。その時は、煮るなり焼くなり好きにしてください。あと提督室みたいところに案内してくれると有難いなあ……つて」

長門「執務室か。わかった、案内しよう」

俺は時雨と別れて長門さんと一緒に執務室に向かった。よっしやああああ!! やつとゆつくりできる! とりあえずその執務室というところに入ったら、横になつて s l e e p といこうか! ……いや違うな艦娘達に自己紹介とかしないとダメだな。いやでも ……いや ……俺は頭の中でこれからすることを考えた。そして、長門さんの足が止まった。金色の扉の前で ……

長門「ここが執務室だ」

秋人「……嘘つくと泥棒の始まりつて言葉は知っていますか? 長門さん……」

長門「嘘ではない。ここが正真正銘の執務室だ」

秋人「まじつすか……」

確かに金色の扉には執務室と書かれている。そして部屋に入ると、ふかふかのカーペットや2人用ベット、エヤコン、ピンク色の壁、e t c ……いわゆるイタイ部屋だった。お金かけすぎ……ここはあっち系のホテルですか!?! すぐに改装しよう、そうしましよう。

秋人「長門さん……」

長門「ん？どうした？」

秋人「……すぐに改装しましょう……」

長門「そうだな……」

俺の言葉に長門さんは、即答した。話が分かる人でよかった。後になって後悔したというのはまた別の話……俺はイタイ執務室に自分の荷物をおいて艦娘達に食堂へ来るように指示を出した。そして俺は長門と一緒に食堂へと向かった。

s i d e o u t 秋人

s i d e 夕立

私は今、食堂にいた。理由は新しい提督の紹介をするみたいだから、そして今後の方針も伝えるつばい……。周りにいたみんなも怖がつていた。だけど、時雨ちゃんだけは普通にしていたつばい。大丈夫なのかな……。そんな時にさつきぶつかった男の人が長

門さんと一緒に入ってきた。その瞬間みんなは驚いた、だつて提督の服を着ずに、学校の制服を着ているから。だけど、私達は直ぐに整列した。前提督に教えつけられたから――

秋人「うわっ!?!すげー綺麗に並んでる!?!まあいいや……ゴホンツ……えーと固くならず、楽にして聞いてください。今回ここの鎮守府の提督として配属されることになりました、櫻川 秋人 です。よろしくお願いします」

私達の整列を見て驚きはしたけど、提督は丁寧に自己紹介をしてくれた。周りのみんなもこの丁寧さにびつくりしてゐるみたい。当たり前だ、今まで前提督は一切敬語で話していなかつた。しかも私達を物のような扱いだつた。明らかに前提督と何かが違う。

秋人「まあ、まず見ての通り自分は提督の服を着ていません。理由は単純です。自分是一般人で2週間ぐらい前まで普通の学生をしていましたから」

天龍「ふざけんな!なんで素人に従わなきゃいけないんだよ!!」

秋人「後で説明します――」

天龍「それに、素人が提督として務まるのかよ!」

秋人「ですから後で説――」

天龍「俺はごめんだこんな奴——」「聞けやああああああ!!伊達正宗かぶりがああああ!!」——はあ?」

提督の話は一切聞かない天龍さんに、提督は怒った。その瞬間みんなは震えた。また、あれが来ると思ったから——提督はそんな私たちを見てすぐに機嫌を直したつぽい。けど——

秋人「いきなり大声で怒鳴って悪い。あ、普通の口調に戻すからな。——あのさ、人の話を聞くっていうのは大切な事なんだよ?今後の出撃とかでさ、仲間の指示を聞かなくて独断行動をしてみろ。いつか絶対に良くないことが起きることになる!」

天龍「だからどうしたってんだよ!!」

秋人「はあく。バカはほつといて「誰がバカだ!!」俺がここに配属された理由だけど、元帥に騙された、以上」

え、騙された?どういう意味?私はふと疑問に思った。そしてその疑問は自然と口に出して提督に聞いていた。

夕立「騙されたってどういう意味ですか？」

秋人「えっと君は？」

夕立「夕立です」

秋人「夕立さんか。どういう意味かっていうと、何も知らされずにここに配属されたんだよ。行く場所は言われたよ。けど地図で見せられて、詳しく説明してくらなかつたんだよ……」

夕立「もしかしてこんな鎮守府だったってことも知らなかつたっぽい？」

秋人「まあそうなるかな。けど、ここに助けた時雨がいたからまだよかつたけど」

「……助けた？もしかしてこの人が時雨ちゃんが言つてた命の恩人？そうだったんだ、だから時雨ちゃんはあの時。」

時雨「提督、今ここでいうのかい!？」

秋人「悪い時雨笑。あ、それと今後の方針についてだけど、俺はみんなに楽しく生活して欲しいと思ってるから。みんなは自由に過ごしてほしい。出撃はするけどみんなの調子を見ながら決めていくから、それと衣、食、住、の充実度は俺が保証するから安心してほしい。もし、不安があつたらすぐに相談しに来てくれ。あと、明日は休暇にす

るからその予定で。明後日以降はみんなの調子を見て、決めることにするから以上」

提督はそう言ったけど。みんなは——

北上「提督。流石に明日の休暇は納得できないな」

大井「私も北上さんと一緒の意見です。休暇を取る必要があります？」

金剛「そうデース。私達は兵器デス、出撃するのは当たり前ネ！」

明日の休暇に納得がいかないっぽい……。もちろん私も……。だって私達は兵器だから——そう教えられてきたから。

時雨「みんな——」……る……さい」提督？」

秋人「兵器、兵器うるさい！」

艦娘「!!」

秋人「確かにここにいるみんな、いや艦娘達は深海棲艦を倒すために作られた存在かもしれない。けど、ちゃんとこうやって会話して自分の気持ちを分かち合ったり、俺たち人間みたいに、自分の意思で動いたりしてるじゃん!!」

榛名「ですが私達には艤装がありません。あなたはこれを見てなお兵器ではないとおっしゃるのですか？」

秋人「当たり前だ。これは時雨にも言ったことなんだけど、俺からしたらたつたそれだけの違いだよ」

え？————

夕立「どういう意味ですか？——」

秋人「だ・か・ら！艤装があつたても見た目は人間！だから俺はみんなを兵器として見ないし、怖がりもしない。ていうか見る事ができない！……って考えてるの俺だけでしょか？」

提督は呆れたように言った。なんでだろう、胸が熱くなってきたら……今までこんなことを言われてこなかったからかな？

秋人「とにかく、みんなが兵器だろうがなんだろうが明日は休暇にする！絶対に無断でトレーニングすんなよ！それと今まで前提督がケチってた分の給料も今日中には配

るし。明日、気持ちのリフレッシュでもしてきてくれ。お風呂も全部解放してバケツの使用も許可するし自由に使ってもいいから。――間宮さん!!!」

間宮「ひやい!!何ですしゆか…提督さん!!」

秋人「今月の食費……ここに置いておくから……――頑張ってd。てこと
で、かいさんな――」

そう言つて提督は食堂から出て行つた。何人かは未だにポカーンとしているっぽいけど、さきに正気に戻つてるみんなは食費の通帳を見た。そこには、私達では信じられないぐらいのお金がついていた。その瞬間みんなはあの地獄からやつと解放されたと実感して泣き出した、私も。そして時雨ちゃんはホツとしているように見えた。

夕立「時雨ちゃん……!」

時雨「どうしたの夕立?」

夕立「私も、あの提督さんを信じて見るよ!」

時雨「本当に!ありがとう夕立!」

私もあの人を信じてみよう。絶対にこの鎮守府をいい方向へと持つていつてくれる

！私はそう思った。

3話 寝所探索

食堂の出来事のあと、俺は艦娘達に、今まで前任がケチってた分の給料を払って、お風呂の全解放をしたあと、妖精さん達に執務室の改装を頼んだ。そして俺は後悔した、次の日の朝に頼めば良かったと。時間は20時を過ぎていく。そして現在俺は寝所を探索中である。

秋人「やば……完全にやらかした………とりあえず今日は食堂で寝よう。布団借りたいけど、ほとんどの艦娘達は提督という存在を嫌ってるしな………」

赤城「あら、提督さん。こんな時間に何をしているのですか？」

秋人「あ、赤城さん。実は………」

く秋人説明中く

秋人「………」

赤城「成る程、それは困りましたね。では、布団をお貸ししましょうか？」

秋人「へ？」

赤城「ですから、私の部屋の布団をお貸ししましょうか？」

赤城さんから予想外の言葉が出てきた。俺は、女神さんが現れたと思つたら反面、素直に受けとることが出来なかつた。何故ならここはブラック鎮守府。みんな、提督という存在を嫌っている。そしてその目の前にいる赤城さんだつて例外ではない。

秋人「ありがとうございます。ですが、気持ちだけ頂くことにします」

赤城「どうしてですか？」

秋人「自分はまだ嫌われている身です。なので——」そんな事はありません——赤城さん……」

赤城「私達は今の提督のおかげで本当に救われたと思つています。ですから提督、自分を悪く言うのはやめて下さい！貴方は私達にこれまで持つことが出来なかつた感情を持たせてくれました。そして、私達に自由をくれました。提督には感謝しきれません。なのでこの気持ちは私からのお礼です。受け取つてくれますか？」

秋人「赤城さん……ありがとうございます！では、お言葉に甘えてお借りします」

俺は赤城さんと加賀さんいる部屋へ行き布団を借りた。そして俺は赤城さんからの

謎の強い視線を受けながら再び食堂へと向かった。

赤城「……………」

加賀「赤城さん。本当にあの人が……………」

赤城「ええ、そうですね。……………ふふ…しばらく見ないうちにとてもたくましくなりましたね……………秋人……………」

……………

秋人「はあ、今日は疲れたな。早く寝よう」

俺は椅子に座り机に伏せる体勢をとった。そして俺は誰かが近づいてきていることも知らずに深い眠りについた。

side out 秋人

side 吹雪

私は自主トレーニングのせいで遅くお風呂へ入った。そしてお風呂から上がって部屋へ戻るために食堂の前を通った。私はふと食堂に目を向けると、一人で机に伏せて寝ている司令官がいた。どうして食堂で寝ているんだろう？布団は、はおつてるみたいだけれど……このままだと風邪をひいちゃうかも。早く起こさないと……私はそう思っ
て司令官を起こしにいった。

吹雪「司令官さん。ここで寝ていると風邪をひいちゃいますよ！」

秋人「……んー……あ……え………だ……だれえく？……Z z ……」

吹雪「吹雪です。起きてください、風邪をひいちゃいますよー！」

秋人「んあ？……だ、だれえく？……Z z ……」

だめだ、完全に寝ぼけちゃってる……。どうしようー……

吹雪「吹雪です司令官さん!!」

秋人「ん……吹雪きい？……Z z ……」

吹雪「そうです！」

秋人「……ここは吹雪きじゃないよぉ……ZZZZ……」

ピキツーーーーー

吹雪「司令官!!!」

秋人「ツはい!!!寒い中、置き去りにするのはやめて下さい!!!!!!………つてあれ吹雪さん?こんな時間にどうして食堂に?」

吹雪「私は自主トレーニングで遅くお風呂へ入って、そしてお風呂から上がって部屋へ戻ろうとした時に、たまたま司令官さんが食堂で寝ているのを見えたので、風邪をひいちやうと思つて起こしに来たんです……」

秋人「そうだったんですか。けど、自分はわざとここで寝ていましたよ?」

吹雪「え!?!執務室で寝ないのですか?」

秋人「実は妖精さんに改装頼んでいました」

あ（察し）。そうだったんだ。だから司令官は食堂で。でもーーーーー

吹雪「それでもここで寝るのはダメです。あ、いいこと思いつきました!司令官さん、

私のいる部屋で寝てください!」

秋人「全力でお断りします」

即答だった。どうしてだろう?別に今の司令官なら大丈夫なのに――

吹雪「別に今の司令官さんなら私は大丈夫ですよ?」

秋人「吹雪さんが大丈夫でも他の艦娘達はどうなんですか?まだ自分のことを信じていないかもしれないですよ?」

吹雪「それはいつて見ないと分かりません!なので、一度来てください!」

秋人「え、ちょ!吹雪さん!」

私は司令官の腕を掴んで無理矢理私のいる部屋へと向かった。

side out 吹雪

side 秋人

俺は吹雪に無理矢理起こされた。そして無理矢理部屋へと連れて行かされ、現在俺は吹雪のいる部屋の前で絶賛待機中である。何この状況!?俺は今置かれている状況についていけない状態になりつつある。とりあえず今がチャンスだ!こっそり逃げるとしよう。じゃあなふぶーーーーー

吹雪「ーーーー何逃げようとしているんですか司令官さん?」

見事にばれてしまった。なんで俺はこういつもタイミングが悪いんだよ!俺は改めて、自分の運の無さに腹が立った。

吹雪「みんなOKって言っていました司令官さん。どうぞ入ってください」

秋人「いや、おかしいでしょ!?何でOKなんですか!」

吹雪「今の司令官さんだったら大丈夫ってみんなが言っていました!」

秋人「自分は嫌です。恥ずかしいです!思春期の男子には刺激が強すぎます。1人ならまだしも数人なんて!!」

吹雪「大丈夫ですって!早く入ってください!」

俺は吹雪に腕を掴まれる。こうなったら隙をついて逃げるか……ーーーーー

吹雪「逃げようとしても無駄ですよ。もし逃げたらわかってますよね？」ニコツ
秋人「……………はい」

吹雪に心読まれてしまった。何故バレたし!!

吹雪「司令官さんの考えていることが分かりやすいので」ニコツ

「またもや心を読まれた。時雨にも言われたけど俺ってそんなに分かりやすいのかな？」「分かりやすいですよ」吹雪。もう俺の心を読むのはやめてくれ!!怖いから!!!「分かりました」どんな俺の心を読んでいるんだよ!怖いよ、エスパ―かよ!!俺は吹雪にビビりつつ部屋へと入った。

秋人「し……………失礼……………します」(―――!)

睦月「あ!やっと入って来てくれましたね!」

如月「どうぞゆっくりしてください提督さん」

秋人「は……………はい」

3人「……………」じー…

き、気まずい……………なにこの状況……………みんな急に黙ってまじまじと俺を見ないでくれ。怖いつて！

秋人「あのーみなさん？自分の顔に何か付いてますか？」

睦月「い、いや別に何も付いていませんよ提督さん！だだー」

如月「何で提督の服では無くて学校の制服なのかしら？と思つて」

秋人「あー。えつとそれはですねー」

く秋人説明中く

秋人「……………」

吹雪「そんな理由で服を……………」

如月「でも私は、今の服より提督の服の方が似合うと思いますよ？」

睦月「睦月もそう思います！」

秋人「そうですか？でも自分は周りになんて言われようと思えば曲げないつもりで

す」

如月「そうですか……」

俺が提督の服を着ない、と断言したあと、3人は少し悲しい表情になった気がした。

吹雪「あ、司令官さん。私達に敬語で話す必要はありませんよ。食堂のときみたいに話してください」

秋人「い、いや、流石にそれは……」

吹雪「大丈夫です！それに私達は部下です。上司が部下に敬語だなんて、おかしいと思います！」

睦月「なんか見えない壁があるようで睦月は嫌です！」

やっぱりそうなっちゃうか………まあいいかこの際だし。

秋人「OK、じゃあそうするわ。俺もこっちの方がいいしな」

如月「やっぱり提督さんはそっちの喋りの方がしつくりきますね」

秋人「あのさ、3人も俺のこと　さん　付けじゃ無くてもいいぞ。前の提督はそうし

てたみたいだけど、今は俺が提督。だからもう過去に縛られるな」

3人「提督（司令官）」

秋人「つていうか早く寝ない？もう11時だよ!?明日休暇だからつて夜更かしは駄目だ！たとえ今日が月曜日でも!!」

3人「はい（わかりました）」

そうして俺達は寝る準備をした。幸い艦娘達の寝る場所は3段ベットである。なので俺は地べたに寝る事になる。それが一番。………あれ？これ以外といけるっぽいな………これなら安心して寝れる。………このとき俺は知る由もなかった。この甘すぎた考えが却って大事件になる事を。

—————

睦月「……提督寝たみたいだね。それじゃ始めちやおう！吹雪ちゃん如月ちゃん！

（小声）」

吹雪「本当に始めちやうの睦月ちゃん？（小声）」

如月「本当に信じてもいいかのテストよ。やるしかないわ！（小声）」

を――――
3人は秋人へよからぬ事を考えていた。次の日秋人が驚愕するであろう事

4話 秋人の人間性はいかにツ……!!

?? 「……………こつち……に来るな……!!」

……………え？

?? 「……この厄病神!!」

?? 「よくもうちの子を!!」

?? 「お前なんかもう友達じゃない!!!」

違う！俺は何も……………!!

?? 「お前のせいで……………!!」

?? 「ここから出て行け!!!」

やめろ……

?? 「消えろ!!」

?? 「○んでしまえ!!」

うるせえ……………!!

?? 「二度と来るな!」

?? 「この……………化け物め
!!!!!!」

うるせえええええッ
!!!!!!

—————

!?!—————

秋人「ハア……………ハア……………ハア……………最悪な夢を見ちやつたな……………まさかこんな形
で思い出すなんて……………クソッ!」

悪夢のせいで目が覚めしまった。もう思い出したくない、過去のトラウマの夢。そして目覚めが悪かったせいも、体がだるく感じた。窓から見える空は、朝日が昇る直前をさしていた。俺は今の正確な時間を確認するために起き上がろうと手を置
く—————

むにゆ……

? 「……………んツ／……………zz」

あれ? ……む…むにゆ…? 布団ってこんなに柔らかかったっけ? それに聞き覚えのある声……嫌な予感がする。俺は自分が手を置いた場所を確認し
た—————

秋人「うわああああ／／／?!?!?!」
((; ㇿ))

そこにあつたのは胸。その胸の犯人は下着姿の睦月だった。どうやら俺は、寝ている睦月の胸を触ってしまったらしい。そして気がつけば吹雪も如月も俺の寝ている布団

の中で寝ていた。吹雪は睦月同様下着姿、如月に関しては側から見たら裸姿である。この3人は一体何をしているのだろうか?誘っているのか?とりあえず俺は3人を起こさないようにゆつくりと布団から出た。そして時間を見る。

秋人「6時半か……ま、ちようどいいか。とりあえずこの3人は何がしたかったんだ?……てか、時雨の時と似てるな……もしかしてこれテストか!」

もうしそうだったら俺はまだ信用されてなかったんだな。それはそれでなんかシヨツクだわ……。

吹雪「ん……ふはあく……あれ、司令官おふあようございます……」

色々考えていると吹雪が起きた。あ、これ自分の置かれている状況を忘れてるな……多分。

秋人「おはよう吹雪。とりあえず風邪引くから服着た方がいいと思うけど……」

吹雪「え?……きやあああ／／!!!見ないでください!!」

秋人「ちよつと待て!! 見せてきたのは吹雪達の方だろ!? 逆に俺が被害者だわ!」

吹雪「ーあ。そ…そういうえ…そう…でした…:/:/」

秋人「まあ、なんでこんななことをしたのかは、だいたいわかるけど…:/:/ 結局はまだ信用しきつてなかったんだな」

吹雪「はい…:/:/ 私は良かったんですが、如月ちゃんの方が…:/:/ 如月ちゃん、この3人の中では一番ひどいことをされていましたから…:/:/」

秋人「マジかよ…:/:/。じゃあ起きたら如月に言つといてほしんだけど。俺は絶対そういうことはしないって。なんなら命かけるわ って」

睦月「えー、でも提督さつき睦月の胸を触ったじゃないですかー!」

秋人「睦月お前起きてたのかよ!!!」

睦月「提督が起きた30分くらい前に起きました!」

なんだってええええええ!!! だつたら演技うますぎだろ!? ちよつ…吹雪!? 遠い目でこつちを見ないでくれ、怖いから!

吹雪「司令官…:/:/」 遠い目

秋人「ち…:/:/ 違う! これは不可抗力であつて…:/:/ 決して下心があつて触ったわけじゃな

いんです!! えっと……その……すみませんでした!!!!

俺は誤解だと主張し、そして触ってしまったことに対しての謝罪を土下座で表した。その光景を見た2人からは一時的に沈黙が流れたがすぐに終わった。

睦月「大丈夫です提督。あんな事を言っちゃいましたけど睦月は全然気にしていません! それよりも、もつと睦月たちを観察してもいいんですよ? ねー吹雪ちゃん?」

吹雪「え、私!? ……司令官が……み……見たいなら……/」

あ、これやばいやつだ……完全に2人ともそういうスイッチ入ってる。とりあえず気を消してこの場から退散するか。じゃあなお二人とも。俺は部屋から全力ダツシュで逃げた。

睦月「吹雪ちゃんもそう言ってますし……あれ提督?」

吹雪「多分逃げたよ睦月ちゃん……」

睦月「えええええ! そんなあー!! ……けど本当に優しかったね吹雪ちゃん。睦月達に一切、あの不可抗力以外で手を出さなかったよ」

吹雪「だから言ったのに……如月ちゃんもこれでわかったでしょ？」
 如月「ふふ……そうね！……疑った私が馬鹿みたい」

side out 秋人

—————

side 時雨

今日は久しぶりの休暇だけど、僕はいつもより早く起きた。二度寝をする訳にはいかない。僕は食堂へ行った。食堂へ入ると間宮さんが朝食の準備をしていた。間宮さん、今日はいつてもより早く準備をしているね。

時雨「おはよう間宮さん！」

間宮「あ、おはようございます時雨さん！はいどうぞ、今日の朝食です！今の提督のおかげでご飯が変わりましたよ！」

ほとんどだ！秋人が昨日、食費を大幅に上げたおかげで、僕たちのご飯が燃料や傷んだ野菜ではなくちゃんとした美味しそうな料理になった。

時雨「ありがとうございます！ところで間宮さん今日はいつもより早いね」

間宮「そうですね。いつもは07:00に起きるんですけど、今日は06:00に起きちゃいました」アハハ：

やっぱり間宮さんも早く起きたんだ。本当にどうしてかな、休暇の日に限って早く起きてしまうのは。

夕立「ふあゝ……よく寝たっぽい……」

間宮さんとお話していると夕立が食堂へやってきた。

間宮「あら、おはようございます夕立さん！」

時雨「おはよう夕立！夕立も今日は早いね！」

夕立「おはようっぽい！うん、今日はなんで早く目が覚めたちゃったっぽい」

間宮「まあ夕立さんも。あ、今日の朝食ですよ夕立さん！」

夕立「ありがとうございます！わあすごい美味しそう!!時雨ちゃん一緒に食べよう？」

時雨「いいよ夕立。一緒に食べようか！」

そうして僕と夕立は食堂の席へと向かった。そして朝食を食べながら夕立と昨日のことや今日のやることの話をした。そして僕が奥の席を眺めていると夕立が不思議そうに聞いてきた。

夕立「ねえ時雨ちゃん。あれ提督っぽいけどどうしたのかな？」

夕立が指をさす方を見ると、そこに頭を伏せて疲れ切っていた秋人がいた。一体どうしたのだろうか？大分と息が上がってるみたいだけど。それに何かブツブツ言っている……。側から見たら怖いね。

時雨「ほんとだ……大分と疲れているみたいだね。どうしたんだろう？」

夕立「時雨ちゃん！ちよつと行ってみよう！」

時雨「え!?!ちよつと待……！」

僕は夕立に腕を掴まれ無理矢理連れていかれた。夕立、もしかしてご飯をほったから

かしにするつもりかい!? 伝えようとしたけどもう遅い。僕と夕立は秋人の元へついてしまった。

夕立「提督さん。どうしたのですか?」

秋人「!? ……あ、夕立さんか。どうしたとは?」

時雨「秋……提督が疲れ切っていたからどうしたのかなって思ってたさ」

秋人「あー。それはですね……」(; _ .)

秋人は目を泳がせて、すごく顔が赤くなっていた。何かを言いたそうにしているけど、言えない状態という感じである。

夕立「提督さん。隠さず教えてほしいっほい!」

時雨「そうだよ提督。素直に言った方が身のためだよ」

秋人「分かりました。実は……」

〈秋人説明中〉

秋人「oooooooooということがありまして……」

時雨「そもそも吹雪たちの部屋で寝る方が大問題だけどね……」

夕立「けどそれは仕方ないっほい……私達、今まであいつに強制的に夜伽をさせられていたから……提督さんを試したんじやなんかな？」

秋人「またですか!?!それと夜伽ってなんですか?」

秋人知らないのか……そりやそうだよ。ていうか知ってる方がおかしい。説明するのも恥ずかしいよ／＼……

時雨「いわゆる、せ……性行為だよ……提督……／＼」

秋人「嘘だろ、時雨?じゃあ今まで無理矢理させられていたってことか!?!」

夕立「うん……」

秋人「マジかよ……前任はほんとクズだな……」

時雨「そうだね。それに慣れてしまった僕たちもどうかしてるけどね……」

ほんとに僕も嫌だった。だけどずっとさせられてたせいか、僕でも怖いくらいに慣れてしまつて、それが当たり前になつてしまつた。多分気が抜けば僕でも秋人を襲うかも

しれない。

時雨「気を抜けば襲ってしまいかもよ?」

秋人「じゃ俺は全力で逃げるわ。俺そういうの嫌いだし」

夕立「やっぱり提督さんって私達を大切に思っているんだね!」

秋人「あたりだ!前任のせいで汚れてしまったと思うけど、俺はこれ以上汚れて欲しくない。だからそうなった場合は全力で止めるか逃げるかする!自尊心を維持するために!」

時雨「……流石秋人だよ(小声)……あ、提督。話の内容の中で何か忘れてないかい?」

秋人「忘れてるって……!……!……!ああああああ!赤城さんに布団借りたんだつたああああ!!やべえ急いで返しにいかないと!!!じゃあな夕立、時雨!!」

そう言つて秋人は急いで食堂から出て行つた。

夕立「時雨ちゃん、やっぱり面白いね提督さん!」

時雨「そうだね夕立」

夕立「ところで時雨ちゃん提督さんのことを名前で呼びかけていたけどやっぱり」

「言わないで夕立／＼／＼!!!」ーふふふ!はーい」

夕立にあっさり間違えて名前で呼びかけていた事を聞かれ僕は顔を赤くしてしまつた。夕立、酷いよ……。

5話 涙の再開といない存在

赤城「はあー……どうしたらいいのかしら……」

私は迷っていました。秋人^{提督}に本当のことを言うのか、言わないのかを。しかし、いつか言わないと絶対後悔するような気がするんです。本当にどうしたらいいのかわかりません……。

加賀「赤城さん。そんなに悩んでどうしたのですか？せつかくの休暇なのに……」

赤城「加賀さん……。提督に本当のことを言うか、迷っているんです……」

加賀「なるほど。私はちゃんと伝えた方がいいと思います」

赤城「!?。加賀さん、それはどうして……?」

加賀「提督は赤城さんの家族です。それを伝えないのはおかしいと思うのだけれど……?それに提督自身も心のどこかで待っていると思います」

やはりそうですね。提督は表情には出ていませんが必ず待っている気がします！

私は決心しました、提督に本当のことを伝えるとー

赤城「そうですよね……ありがとうございます！加賀さん」ニコツ

加賀「!!…い…いえ……私は当たり前のことをしただけです……／／／」

いつもクールな加賀さんが照れています。ふふ…可愛いですね。そんな時とー

コンコン…

誰かが来たみたいです。誰でしょうか？

赤城「はい、いますよ」

秋人「あの。赤城さんの布団を返しに来ました」

!!。この声は提督さん!? どうしてこのタイミングでくるんですかああああ!! まだ心の準備がとーとー

加賀「赤城さん良かったですね。いきなりチャンスが来ましたよ」(?-?-?) b

赤城「加賀さん!?!ちよっと待ってください、まだ心の準備がー!!!」(小声)

加賀「今言わなければいつ言うんですか?やっぱり今でしょ」(?+?-?) b

何故か加賀さんもノリノリになっています。あーもうこうなったらなるようになれ
です!私のやり方で伝えましょう!

赤城「あああもう!…私のやり方で伝えるので加賀さん…何も言わないでください
いね?」

(: @ ?? @)

加賀「赤城さん!?!流石にそれはまずいと思うのだけれど…」

赤城「何も言わないでって言いましたよね?」

(# ^ V ^)

加賀「…はい」

赤城「これより赤城、「櫻川家流出迎え」を実行します!!」

加賀「…赤城さん大丈夫かしら(小声)」

side out 赤城

side 秋人

俺は布団を借りていたことを思い出して急いで返しに来た。そして現在俺は待機中であるが、何やら中が騒がしい。加賀さんと赤城さんが言い合っているように見える何かあったのか？俺が心配していると赤城さんから「どうぞ入って来てください！」と言われたんでドア開けた。俺はこの時知らなかった。まさかあれが来るとは—————

秋人「失礼しま—————?!?!」

赤城「ふふ……これを避けるなんて、流石頼長さんの息子です…!!」

秋人「え?……」

いきなり赤城さんが物凄いスピードで箒を振り落として来た。ちよつと待て……このタイミング、このスピード、この威力、完全に親父からやらされた「櫻川家流出迎え」じゃん!!それに聞き間違いか？さつき赤城さんから俺の親父の名前が出てきたよう

な————まさか!!!俺は、大本営に向かう前の親父とのやりとりを思い出した

秋人「————で？話って何、親父。」

頼長「茜についての事だ」

秋人「母さんについて？なんで今更————：母さんはあの時……」

頼長「死んだ、って言いたいのだろう？」

秋人「ああ、しかも俺のせいで……だから今更、母さんの話なんて聞きたくない……」

頼長「お前には辛いと思うが聞いてほしい。実は茜のことでお前に隠していたことがある」

秋人「隠していたこ……？」

頼長「茜は人間じゃなくて艦娘なんだよ。そして茜の本当の名前は————」

—————

赤城……—————そうだ。親父は、「茜は必ず生きている」と確信した。そして母

さんを探したことを任されたんだった。ていうか今思うと息子に全てを託すって何考えてんだよ親父……。まあそれを思っている場合ではない。問題は今日の前にいる赤城さんが自分の親父の名前を知っていること。

秋人「なんで……赤城さんが…俺の親父のことを……」

赤城「もう気づいているんじゃないんですか？提督、いや秋人」

その声、その呼び方、その笑顔、俺にはわかる。何度も振り下がそうして、否定しても、それは重なって見えてしまう。何故なら、ずっと過ごしていたから……

秋人「……母……さん！……あれ？……涙が勝手に……」

俺は気がつけば涙がとめどなく溢れ出ていた。理由は簡単だ。死んだと思つた母さんが今日の前にいるから。出ないわけがない……そんな俺を見て赤城、いや母さんは俺を抱きしめてくれた。

赤城「秋人……今まで隠してごめんなさい……」

秋人「母さん……俺、あの時……」

赤城「いいんです秋人……あなたは何も悪くありません!」

秋人「けど……俺が……あんなところに行かなきゃ……母さんは……」

赤城「もういいんです秋人……私は、お母さんは生きています。生きていることを黙っていた私にも非はあります……」

秋人「……母さん……母さああああんん!!……生きててよかった……本当に良かった!!」

赤城「私も嬉しいです秋人、私の子に会えて……秋人、いくらでも泣いてください、私の胸の中で……」

俺は母さんの胸中で思いっきり泣いた。今まで我慢していたものが全て出た。もう母さんを失わせない。俺が絶対に母さんを……

—————

赤城「もう大丈夫ですか秋人?」

秋人「あーうん、ありがとう母さん。もう大丈夫」

赤城「そうですか」ニコツ

俺は母さんの笑顔を見て思わず見とれてしまった。それにしても艦娘つてすごいな、年取らないってー。確かに母さんなだけど周りから見ればもう弟姉の關係だ。あ、母さん見つかったし後で親父に連絡しないと。後はー

秋人「じゃあ母さん、俺提督の仕事してくるわ」

赤城「わかりました。あ、秋人！この事はみなさんに内緒にしてくださいね？加賀さんもいいですか？」

加賀&秋人「分かった（分かりました）」

俺は母さんがいる部屋から出て改装された執務室へと向かった。

加賀「赤城さん、すぐに言つて正解だったでしょ？」

赤城「ええ、そうですね加賀さん。……あ、加賀さん今日はせっかくの休暇ですし、何処か行きませんか？息抜きに！」

加賀「え!?あ…わ、私は…「ダメですか？」……い…いえ、大丈夫です。行きましょ

う！……／＼／＼

俺は気持ちを切り替えて改装された執務室に入った。何という事でしょうー！ーあのイタイ部屋から。シンプルな部屋へと大変わり!! やつぱ Simple the best! だな。俺は机の中や、タンスの中にある書類の整理を始めた。が、俺は固まった。書類が多すぎるからだ。

秋人「はああああ!!! 何この量ふざけてんの！ 前任のやつはまともに仕事もして無かったのかよ！」

ざつと数えると1000枚ぐらいい書類がたまっていた。やべ胃が痛くなってきた。まあ、文句を言わずに早く始めるかな。言ったところで片付くわけじゃないし。

長門「提督、いるか？ 長門だ……」

秋人「いますよ。どーぞ入ってきててください」

長門「失礼すー！随分と変わったな」

秋人「でしょ？それで用件は何でしょうか？」

長門「敬語じゃなくていい。用件はそうだな大淀についてなんだが……」

大淀？確か提督の補佐をする艦娘……確かにいないな。鎮守府に必ずいるって大和から聞いたんだけどなーん？提督の補佐……ちよつと待て、大淀は嫌でも前任と一緒の仕事をしてたって事だよな……じゃあ前任に嫌ほどー！ー！ー！ー！ー！

秋人「なるほどな、大体言いたことがわかった。だったら無理にここに連れてこなくていい」

長門「いやそういう簡単な話ではない……大淀は前任が拘束される1週間前行方不明になっているんだ……」

秋人「え？ー！ー！ー！ー！」

なるほどそういうことかよ!!……つまり大淀は前任によって何処かへ閉じ込められたか、殺されたと言うことか。恐らく後者は無いな前任は欲求のまままで生きていたって聞いている。可能性があるなら前者だ。

秋人「つまりこの鎮守府の何処かに大淀が必ずいるって事か……」

長門「ああ、その可能性が高い。だから探してくれないだろうか！いや、探してください提督!!」

秋人「長門、頭を上げろあんたが頭を下げるなんてみつともない。わかったその願い引き受ける」

長門「それは本当か!？」

秋人「おう。長門にはドックと高速修復材の準備をしてくれ。大淀は俺一人で大丈夫」

長門「ありがとう提督。お前が前任から配属されていれば良かったのに……」

微笑みながらそう言って長門が出て言った。笑っている長門綺麗だな……思わず見とれてしまった。頭を下げられたんだし長門の思いも無駄にしたく無いな

秋人「久しぶりだけど。……んじやあやりますか……」

俺は大淀がいる監禁されている場所を探し始めた

6話 救出

俺は今、執務室で見つけた隠し通路を歩いている。通路を見つげるために、俺はちよつとした力を使った。その力とは気配を感じる力だ。ただ普通に気配を感じるのでは無く、何の気配が何処にいるのかを正確に把握することができるのだ。俺は目を閉じて鎮守府全体の気配を探った。結果、執務室の床の下から数人の艦娘の気配を感じ、隠し通路を見つげ出した。

秋人「つか執務室の床に隠していたなんて……ありきたりだつな。これならワンチャン、力を使わなくても良かったんじゃないかね？」

しかしこの通路、電灯一つも無いせいで無茶苦茶暗い。俺は仕方なく自分のiPhoneのライト機能を使って通路を照らして歩いた。そしてたどり着いたのは収容所みたいな場所だった。見てるだけで気味が悪い、つーかなんか生臭!?ここに大淀や他の艦娘がいるのか……。

秋人「あのー！誰かいますかー？」

??「ひッ……来ない……で……下さい……」

鉄格子の向こうから声が聞こえた弱々しく震えた声がー……

秋人「誤解です！自分はなにもしません！助けに来たんです!!」

??「助けに……？」

秋人「はい！あなた方を苦しめた前任はもういません。なので安心してください！」

??「だけど……この鉄格子私達の砲弾でも壊れなかつたんです……鍵も無いのにどう

やってー……」

秋人「自分を甘く見ないでくださいよ！」ニツ

??「え？ー」

秋人「大丈夫……すぐに解放させます……!」

俺はあらかじめ持っていた日本刀で鉄格子を斬り裂いた。こんなもんかよ……これ
だつたら初日の襲撃の方がまだマシだつたな。

秋人「ほら、早くここから出ましょう」

??「すごい……あなたは一体……」

秋人「自分は、櫻川 秋人 新しく配属された提督です」

大淀「私は……大淀……です」

俺が提督だと知った瞬間、大淀の体は震えだした。無理もない、なんせ大淀は前任に散々酷いことをされていたんだから――

秋人「大淀さん、無理も承知ですが他に監禁されている艦娘の所に案内してもらえませんか……？お願いします!!」

大淀「!!……分かりました」

俺は大淀と一緒に、他の艦娘たちが監禁されている場所へと向かった。そして俺はもう一度日本刀で鉄格子を斬り裂いて大淀以外の艦娘達を解放させた。

秋人「皆さん大丈夫ですか？」

??「大丈夫です……」

?? 「私も…大丈夫です…」

みんなそうはっているけど立つのがやっとの状態だった。やばい…どうしよう…：…確実に俺1人だけじゃ、みんなを上まで持ち上げるこなんて到底無理だ…：…：…。せめてあと3人いれば、この場の状況を切り抜くことができる。けどそれは叶わない。彼女達は今休暇中で、長門以外、内緒でこんなことをしているのだ。逆に言えば知っている方がおかしい。

大淀 「提督さん…：…私はみんなを運べるだけの余力がまだ…残っています…：…！」

秋人 「無理をしなくてもいいです大淀さん…：…肩を痛めているのは分かっていますから…：…！」

大淀 「…：…気づいて…：…いたんですか…：…」

秋人 「当たり前です！自分をなめないで下さいって言いましたよね？あと大淀さんそこに座って下さい！」

大淀 「!?…：…：…はい…：…」

大淀は素直に俺の前に来て正座をした。けど、体がとても震えていた。恐らく大淀は

また暴行を受けられると勘違いをしているのだろう。許せない……なんで彼女が、英雄がこんな思いをしないとイケないだよ！俺は強く歯を噛み締めた。そして俺は体を震わせながら目をつぶって正座している大淀の前に座って、おもむろに大淀の頬に絆創膏を貼った。

大淀「!?……提督……?」

秋人「傷、手当てしないとイケませんから。……じつとして下さいね」

大淀「わかりました……あの……ありがとうございます……ごじます」

秋人「いえ、自分は当たり前のことをしていただけです。皆さんも傷の手当てをするのでこつちに来て下さい！」

—————

みんなの傷の手当てはしたけど、どうしようかな……助けを呼びに行く………つて言ってもせつかくの休暇の邪魔をしたくないし、5人一気に運べないし、かといって自力に歩かせるわけにもいかない。さっきも言ったけどほんとどうしよう。そんな時—————

コツン……コツン……

誰かが降りてくる音がした。一体誰だろうー

金剛「HEY提督！何処にいマスカー？」

金剛だった。なんていいタイミングなのだろう。

秋人「金剛さん、ちょうど良かったです！大淀さん達がここに閉じ込められていたので、解放したんですけど人手が足りなくて。手伝ってくれませんか！」

金剛「!!わかりマシタ提督！私一人じゃ出来ないの、妹達を呼んで来マース!!」

—————

この後金剛が姉妹艦を連れて戻って来た。俺達は大淀達を上へと運び、すぐに入渠ドックへと向かって入渠させた。

秋人「手伝ってくれてありがとうございました！大切な休暇の時間をさいてまで……」

榛名「気にしないでください。それに感謝するのは榛名達の方ですよ」

金剛「そうデス提督！大淀を助けてくれて thank you ネ！」

秋人「皆さん……」

霧島「それに提督、もう私達に敬語を使わなくても大丈夫ですよ？提督はありのまま
でいてくれると嬉しいです」

秋人「……わかった、これからはそうするわ」

比叡「やっぱり提督はそっちの喋り方がいいですよ！ねえ？金剛お姉様！」

金剛「え!?そ、そうデスネ。それじゃあ私達はこれで失礼するネ！see you
提督!!」

金剛達と別れてから俺は執務室に向かった。ふと時計を見ると短い針が2を指して
いた。

秋人「うっそ！もう昼過ぎたの!?……まあいいや、久しぶりにマ○クにでも行こ……」

こう考えてしまうのは高校生の特権といつても過言ではないだろう。しかし、俺は気づいてしまう。ここは、マ○クのようなファーストフード店がある場所なのかと。鎮守府の前は海だ、そしてその後ろは山が近い。そんなほぼ田舎のところに果たしてあるのだろうか？俺はすぐに執務室の窓から外を見た。――あ、あつたわ、海沿いの町に：しかもライブル店であるケンタ○キーもあるじゃん。あと、ゴール付きの人工芝も見えた、部活でサッカーをしていた自分からするとけっこう嬉しかったりする。暇なときあそこに行つてボールでも蹴ろ。

秋人「大体この町のことかわかったし行くかな……」

長門「提督！」

声をかけられ振り返るとそこに長門がいた。

秋人「長門？どうしたんだよ」

長門「大淀を見つけてくれてありがとう！」

秋人「いいって、お願いされたら最後までやり通すのが筋だし。それと、俺が見つ

るまで大淀が何処にいたのかわからなかったのか？」

長門「ああ。まさか、執務室にも隠し通路があつたなんて想像がつかんくてな……」

秋人「なるほどね。あ、長門今暇？」

長門「へ？……あ……ああ、空いているが……どうかした？」

秋人「いや、もう2時半なんだけど、一緒に昼ご飯食べに行かない？てか来てほしいんだけど」

長門「!?……へ？……あ……わ、私とか!？」

秋人「？長門以外に誰がいんだよ」

長門「そ、そうだったな……すまない。では、一緒に行こうか。お礼もしないといけないしな……」

そうして俺と長門の2人でマ〇クに向かった。

side out 秋人

side 長門

私は提督に昼ごはんを誘われ行つて見たのだから、そこは初めて見る店だった。その店はMという文字がトレードマークの不思議な店だ。メニューを見たが初めて見る食べ物だったため、提督にオススメしたものを頼んだ。しかし、初めて食べたが凄く美味しかった。ドリンクは、口の中でシュワつてなるものを飲んだが、私には合わなかった。お会計では提督に奢つてもらう形となった。私としたことが提督にまたもや借りを作つてしまった。そして今は提督と、歩いて鎮守府に帰っている最中だ。

長門「すまないな提督、私としたことがまた借りを作つてしまった」

秋人「あー気にすんな。俺も無理矢理連れて来たよんなもんだしな」

そう言つて提督は苦笑いをした。そして私はふと、昨日の自己紹介の時の事で疑問に思つたことがあつたので、この際に聞くことにした。

長門「なあ提督」

秋人「どした長門？」

長門「昨日私達が兵器と言つたとき、お前はやけに荒々しくなつたが何故だ？」

秋人「…いや……別にそんなつもりは無かったけど？」

長門「とぼけても無駄だ、私は前の提督のせいかそういう事に関しては敏感になっているのだ！……正直に話してくれないか？」

秋人「……はあ……隠していたはずだったんだけどな……バレたらしようがないか……」

提督は諦めたようで、話し始めた。

秋人「そうだな……理由を言うなら俺も艦娘と……」

そして、提督が振り向いてから私にこう告げる。

秋人「……同じ目にあっていたかな？」

その瞬間、私の背中が冷たくなるような感じがした。それと同時に、体が押し潰されるような感じがした。

秋人「悪い、今の話聞かなかった事にしてほしい……」

提督は歩き始めた。しかし、私はまだ立ち止まったままだった、いや動けなかった。それを救ったのも提督の声だった。

秋人「おい長門、早く行くぞ〜！」

長門「あ、ああ。すぐに行く提督！」

“ 同じ目にあっていた かな？ ” あの言葉を言ったときの提督の目には光が無かった。提督……お前は一体何をされていたんだ……!? もしかして私達以上に大変なことが……考えても仕方がない、提督の事は少しずつ考えよう。私はそう決めた。

7話 主人公ならお約束ごとです！

『ラツキー スケベ』という言葉をご存知だろうか？不意に女性とちよつとエツちな接触、または光景を目の当たりにするという大変不幸な事態である。予期していなかったせいか、パニック状態になる（主に男性が）そしてこの『ラツキー スケベ』というのには主にハーレム系小説、アニメ、漫画などが多い。俗に言う物語の主人公のお約束という奴だ。それを踏まえた上で話を始めていこう。by 作者

俺は長門とマ○クへ行つた後、前任の残して逝つた大量の資源書類ゴミを片付けていた。夜も食わずに！5時間ぶつ通しで！！5時間だよ！？5時間！！この苦勞を分かりやすく例えるとすると、長期休みの最終日に、溜まっていた課題を追い込んでやるレベルだよ！？ほんと何やってんだよ、あのクソ野郎前任が！！駆逐ししてやる！駆逐艦だけに……………すいません調子に乗りました。ーーまあ切れてもしょうがない。現在の時刻は10時だ。この時間なら誰もお風呂に入っていないはずーー。よし、お風呂に行こう！

棒たち「そうしよう!!」

そして俺は入渠ドックへと足をふみいれた（変な乱入者が来たことはスルーしてお

く) | | | | | | | | | |

side out 秋人

side 吹雪

昨日司令官は 無断でするな! と言っていたけど私は内緒で昨日同様の自主トレニングをした。内容は外に出てランニング、バランスを良くするために小さなポールを踏んで立ち続けるといったものだ。そして自主トレニングが終わり、今私は脱衣場で服を脱ぎ終わって、タオルで体を隠し、入渠ドックの扉を開けようとしていたその時 | | | | | | | | | |

ガラガラガラ……

誰かが入ってきた。それが誰かというとき | | | | | | | | | |

秋人「はあー、疲れた……マジで頭おかしくなって……く………る!？」

司令官だった……

吹雪「ひゃあ／＼／＼!!!し、司令官何しにきたんですか……／＼／＼!?!」
秋人「……………」(。D。)

司令官は私を見て石になったように動かなくなつた。

吹雪「あの司令官……………／＼／＼?」

ガラガラガラ……………タツタツタツタツタツ……

私がそう呼ぶと司令官は顔を赤くして、無言でドアを閉めてダッシュで逃げて行つた。

吹雪「え、ちよ!司令官!?!なんで逃げるんですかあああああ!?!」

私は司令官のした行動により思わず突っ込んでしまった。しかし、今思えば司令官は私の裸を見てしまったのだ。逃げるのは当たり前かな…。私は逆に見られた側だからもつと恥ずかしいな／＼。私は顔を赤くしたまま入渠ドックへと入った。

side out 吹雪

side 秋人

最悪だ……。俺は入渠ドックでのハプニングから逃げて現在食堂で絶賛廃人中である。また、やってしまった……。これで何回目だ？時雨の時に1回、睦月の時に1回、さっきの吹雪ので1回、合計3回……。ん？おいちよつと待て!!そういえば今日で2回も起こってんじゃない!!やめてくれー!何処かの不幸なラノベ主人公にはなりたくねーよ!確かにあの人はかっこいいよ?俺の憧れでもあったし、でも、でもね?そんな頻繁にラッキー スケベに合うような事はしてほしくないんだよ!分かる!?!それこそ、そのフラグの幻想をぶち○ろす!!だよ!!

秋人「はあ……。今日はマ○クから帰る途中で、見つけたスーパー銭湯で我慢しよ……」

そして俺が食堂から出た時、偶然風呂上がりの吹雪と会ってしまった。吹雪は驚いた後、顔を赤くして何かを求めている感じだったが、俺はそれをあえてスルーする。決して虐めてるとかじゃないからね？こつちも見ちやつたから……恥ずかしいから。そしてもう少しで通り過ぎるところで吹雪に腕を掴まれる。艦娘つて結構力あるんだな……掴まれてるところ結構痛い。振り返ると、吹雪が顔を赤くして涙目になっていた。

吹雪「なんで無視するんですか……？」

秋人「恥ずかしいから。だってそうだろ……？そ……その……見ちやつたんだし……／＼

吹雪「それでも、謝罪とかありますよね？見ちやつたなら……」

秋人「そうだった……完全に忘れてた……えつと……すいませんでした吹雪さん!!罰なら何でも受けます!」

俺は吹雪に土下座した。流石にこうしないと俺のやつてしまった罪は収まらない。

吹雪「わかりました。では私と来てください」

俺は吹雪に腕を引っ張られ、言われるがままになってしまった。そしてたどりに着いたのは、入渠ドックだった。あ(察し)俺これ陥ちるわ、絶対。わかるけど一応聞くか、分かるけど(大事なことなので2回言いました)。

秋人「吹雪、一応聞くけど何で入渠ドックで止まったの?」

吹雪「私と一緒にいるためです!」

ほら来たよ!!予想通りの回答ありがとうございました。

秋人「けど吹雪?1回入渠ドックに入らなかった?」

吹雪「入りましたよ?ですが、もう一度入ります!」

秋人「何だよ!俺は嫌!」罰は何でも受けるんですよね?」……………はい」

吹雪「では入りましょうか司令官!……着替えている最中は見ないで下さいよ!」

?

秋人「もう見ねーよ!」

そして俺と吹雪は一緒に、もう一回言うぞ一緒に！入った。俺と吹雪の入浴中の様子は皆さんのご想像にお任せします。しかし、これだけは言わせて下さい。俺は、純粋な男で根性無しで、先ほどのようにすぐに逃げる男です！でもまあ表現の自由つて言うのがあるので、そういうのにはあまり口出しはしませんかね……。

—————

吹雪「司令官おやすみなさい！さっきは楽しかったですよ。まさか司令官が—————」

秋人「おい吹雪。俺は何もしてなからな？……もう遅いから早く寝ろよ？」

吹雪「わかりました！」

そして俺と吹雪は別れた、俺は執務室に向かい明日のことについて予定を立てた。確か明日から実質、出撃解禁だつけ？みんなの調子を見てから決めるけど、一樣メンバーを組まないとな……。資源書ゴミ類は————後300枚程度か、5時間ぶつ通しで頑張った甲斐があったな。よし、明日からルーティンだった早朝ラン始めますか……。やば、

もう深夜0:00じゃんはやく寝よ。俺はすぐにiPhoneのアラームに6時と設定してベットに入った。疲れが溜まっていたせいかすぐに眠りにつくことができた。

—————

翌日

午前6:00

俺はiPhoneのアラームがなり起床した。目覚めは程よい感じだ。ーんじゃ準備しませうかな。俺はすぐに動ける服に着替えて執務室を後にした。外に出るとすでに太陽が出ていて気持ちが良いかった。

秋人「っしやあ!始めるか!!」

ある程度ストレッチを終えてから、気合いの一言と共に走り始めた。走っている最中、俺は物足りないのでよく音楽を聴く。今聞いているのは、魂○泉のテウ○ギストで、5本の指に入るほど好きな音楽だ。まず、リズムがいい!!そしてつい体を動かしたくなるような音楽。あ、東○p r o j e c t出しちゃった……まあいいか。俺は大体1時間

走り、ペースは1kmを大体4分とிட்டたとこだろう。運動をしていない人からするとかなりしんどいペースだろう。

秋人「やつぱこの時期の早朝ランニングは気持ちいいなく。もう、心がびよんびよんするんじゃないああああ〜」

あれ?————俺はふとあることに気づく。

秋人「ボール忘れた……………!!」

頭の中で、鼻からく〜♪というメロディーが流れたような気がした。まあいいか、明日持つていけばいいし。

—————

走り終わって俺は一先ずシャワーを浴びるためにドックへと向かった。誰も入っていないことを確認してから俺はドックへと入った。浴びた後は髪を乾かすのも面倒な

ので少し濡れたままの状態で食堂へと向かった。

秋人「おはようございます! 間宮さん」

間宮「!? 貴方は……あ、提督ですか! おはようございます!」

秋人「? どうしたんですか間宮さん」

間宮「い、いえ。知らない人が来たと思いつてしまつて……ごめんなさい……」

あ、そうか今は前髪を下ろしてる状態だったわ。俺は髪が長い方なのでいつもは前髪を横にか流している感じにしている。ドライヤーやワックスとかで。だから別人に見えるのは仕方ないか……

秋人「大丈夫ですよ気にしないでください! もともと言えば自分がいつもの髪型じゃないからいけないんですよ」

間宮「そうですか。……でもいつもの髪型よりそっちの方がカッコいいです／＼(小声)」

秋人「なんか言いました?」

間宮「い、いえ! なんでもありません／＼」

間宮の顔が急に赤くなっていた。一体どうしたんだろう？

この後もほとんどの艦娘達に知らない人扱いされた。そして説明することに、毎回小声で何かを呟いたあと、顔を赤くさせて何処かへと行ってしまふ。一体何なんだよ……俺は少し傷つきながらも朝食をとった。

—————
その頃食堂内の艦娘達は—————

睦月「前髪を下ろした提督、かつこよすぎるよ如月ちゃん！／＼（小声）」

如月「そうね。睦月ちゃん／＼（小声）」

天龍「まさか俺まで顔を赤くしてしまうなんて〜！／＼」

龍田「仕方ないですよ天龍ちゃん」

時雨「さすが秋人だよ…／＼」

夕立「私も惚れちゃったっぼい〜／＼！」

北上「いや〜あれは驚きだね〜？大井つち」

大井「わ、私は北上さんの方がいいです。あ、あいつのことなんて……／＼」

金剛「Why!?!どうしてあんなにも変わるんデスカー／＼／！」

榛名「榛名提督の事が好きになりました……／＼」

赤城「私の子なんですから当然ですよ!そうでしょ加賀さん!（小声）」

加賀「確かにそうですね赤城さん（赤城さんに少し雰囲気似ていますね／＼）」
以下略——

どうやら前髪を下ろしていた秋人に夢中になっていたようだった。

8話 出撃

朝食を済ませたあと、俺はいつもの髪型に直して再び食堂へと戻った。その時何故かみんなは俺に向かつてジト目をしていた。なんでだろう？わけがわからないよ。まあそれは置いておいて、今日から艦娘達の出撃が始まる。

秋人「今日から出撃が始まるわけだけど、どうやればいいのこれ？」

天龍「なんでだよ!？」

北上「そつかく。提督初めてだもんね〜」

大淀「え、そうだったんですか!？」

秋人「お恥ずかしながら……だってさー仕方ないじゃん！いくら勉強したっていきなりの出撃だよ？わかる方がおかしいだろ！」

大淀「ま、まあ……確かにそうですが……」

いきなりだが何故、俺と大淀がちやんと話ができるようになったのかというと、閉じ込められていた大淀達を助けて、手当てをして、入渠ドックへと運んだら普通に信じて

もらえたからだ。逆に俺は思った、簡単に信じすぎじゃね?…と。なんかこういうのつて後から裏切られそうな気がするんだよな。けど、俺は怯まねーぞ!!

秋人「大淀、ひとまず第1艦隊を発表した方がいいのか?」

大淀「そうですね、この中で6人選抜してください!そして出撃場所も発表をお願いします」

秋人「了解。んじや第1艦隊を発表する。まずは時雨、次に夕立、赤城、加賀、金剛、最後に吹雪でいこう。そして、攻める海域は南の海域で行く。あと出撃するにあたって俺から言うことはひとつだけ、絶対に沈没するな、だ!」

6人「!?」

大淀「提督、それは一体どういう意味ですか?」

秋人「意味? そうだな、今までの出撃だったら勝利ランクをSは絶対だったろ? それをもぎ取るのに多くの犠牲を生んだはずだ。けど今は違う、何故なら俺が提督だからだ! 勝利の為の犠牲なんて必要ない、必要なのはみんなが笑って帰る勝利だけ。相手が強くて手も足も出ないんだったら逃げたって構わない。逃げることは、臆病でも恥でもないんだからさ」

6人「提督(司令官)……わかりました(わかったよ)!!」

秋人「俺も無線機で出来るだけサポートしていくから。そんじや艦隊の指揮は時雨、お前に任せる」

時雨「!?……わかったよ提督！」

秋人「よし、そんじやあ出撃だ！」

時雨達は艦装を付けて出撃した。無事に、帰ってくるように……！俺は、時雨達の無事を祈った。

s i d e o u t 秋人

s i d e 時雨

僕たちは、南の海域へと向かっている。あれ？なんかいつもと違って体が軽いようになー。秋人が昨日休暇を入れてくれたからかな？

夕立「ねえねえ、今日はいつもと違って体が軽く感じるっほいの私だけっほい？」
吹雪「確かにいつもと違ってなんかこう、動きやすいような感じがするかな」

赤城「多分それは、昨日休暇のおかげですね！」

みんなも僕と同じ事を思っていたみたいだ。あと数キロで目的の場所につく。うん、そろそろかなー

時雨「赤城さん、加賀さん、そろそろ索敵機を出して！」

赤城「そうね！わかりました時雨さん。加賀さん、いきますよ！」

加賀「はい。赤城さん」

赤城さんと加賀さんは無数の索敵機を出した。そんな時――

秋人『あーあー、みんな聞こえる？』

6人「!?」

いきなり無線から秋人の声が聞こえた。びつくりした……。

金剛「oh！この声は提督ネ！」

加賀「ちゃんと聞こえるわ、提督」

秋人『まじ?!よかった〜!これでようやくサポートが出来る!ありがとうございます
大淀さん!』

大淀『いえ、大丈夫です!それよりも提督、敬語じゃなくてもいいですよ?』

秋人『そうか?それだったらそうするわ』

時雨「提督、今赤城さんと加賀さんが索敵機を出したところだよ」

秋人『分かった。じゃあみんな、ひとまず見つけるまで待機な』

6人「!?」

どうして待機なんだろう?本来の出撃なら、移動しながら敵の艦隊を発見して戦うはずなのに…。僕は今までの出撃と異なることに戸惑ってしまった。

吹雪「司令官、なぜ待機を?」

秋人『そんなの、余裕を持って敵と戦う為だよ』

夕立「どういう意味っばい、提督さん?」

秋人『意味か…えつと…もしそのまま移動しているとしよう。敵を発見するのが遅かったらどうなると思う?』

加賀「おそらく、対応が遅れてしまうでしょうね」

秋人『正解。まあでも、赤城さんと加賀さんならすぐに敵の艦隊を見つけれられると思う。だけど発見するのが遅れる可能性なんて、決して0ではない。だから敵の艦隊に、余裕を持って備えるようにしていきたいんだ』

そういうことなんだ。やっぱり秋人は僕たちの安全を第一に考えてくれているんだね。さすがだよ秋人。

金剛「なるほど、さすが提督、デース！」

時雨「そうだね。赤城さん加賀さん、索敵機はどうだい？」

加賀「私の方は見つかってないわ」

赤城「私は————見つけました、この先4kmほどです!! 敵は————駆逐艦2隻、軽巡艦1隻、戦艦2隻、空母艦1隻の計6隻です!」

思った以上に手強くなりそうだね…。けどつ————!

秋人『時雨!!』

時雨「大丈夫だよ、秋人！みんな行くよ!!」

僕たちは負けない、絶対に勝つんだ!!

—————

夕立「きゃあ……!!」

時雨「夕立、大丈夫かい!」

夕立「大丈夫!小破しただけっぼい」

赤城「夕立さん、無理をしないでくださいね。艦載機のみなさん、おねがいます!!」

駆逐イ級1「ガアアア………」撃沈

駆逐イ級2「ガアアアア………」

吹雪「あなたの相手は私です!沈んでください!」

駆逐イ級2「ガッ……アアア………」撃沈

加賀「一航戦を甘く見ないで」

戦艦ル級「ツ……!!」中破

僕たちは順調に敵の艦隊を倒している。このままいけば被害が最小限で勝てる！けど決して油断はしない、気を抜けばやられるからね。

金剛「さあ、いきますヨー！ Fire !!!」

空母ヲ級「ツ………！ ツツ………！！！！」小破 反撃

金剛「うっ………なかなかしぶといデスネ……」小破

時雨「金剛さん、僕も加勢するよ！」

金剛「時雨 thank youネー！！」

時雨「赤城さん達は敵の艦載機を撃破してくれるかい？」

赤城「わかりました！ 加賀さん！！」

加賀「わかってるわ赤城さん」

そして赤城さんと加賀さんは艦載機を出して敵の艦載機を撃破していった。さすが空母だね、かつこいい。

吹雪「時雨ちゃん、後ろ!!」

時雨「え？ ……うぐっ………!!」中破

失敗した……僕が赤城達に目を向けている時敵の魚雷を受けた。

吹雪「時雨ちゃん！大丈夫!？」

時雨「大丈夫だよ吹雪……僕もまだまだ甘いってことだね…」

金剛「思ったより相手が手強いデスネ…」

時雨「そうだね……」

駆逐艦、軽巡艦は倒したけど。後の空母艦や戦艦が思ったより手強い。このままだと僕たちが不利になってしまう……どうにかしないと。

秋人『なあ、一ついいか？時雨達ちよつと硬すぎじゃね？』

6人「……は？」

ほんとにそれしか言えない。こんな時に秋人は何を言ってるのだろうか。僕たちはまた秋人の言葉に戸惑ってしまった。

赤城「どういふことですか提督？」

秋人『どうつて何も、みんな緊張しすぎ！もうちよい肩の力抜いていこうぜ。それに、みんなの力はこれぐらいなのか？違うだろ？俺は信じてる、みんなの本気はこんなものじゃないつて』ニツ！

秋人「……ほんとに君は。」

時雨「そうだね、僕たちの力はこんなものじゃない！行くよみんな!!」

夕立「本番はここからっぽい!!」

金剛「私の本気見せてあげるネー！」

吹雪「絶対に負けないんだから！」

加賀「さすがに気分が高揚しますね」

赤城「ふふ……そうね加賀さん。絶対に勝つて見せます、一航戦の誇りに掛けて!!」

僕たちは秋人の言葉によって今まで以上の力を発揮させた。そして、誰一人大破無く、敵艦隊を撃沈させることができた。僕たちはまた、秋人に助けられた。この恩はいつか返さないかね。

時雨「敵艦隊を撃沈。僕たちの勝ちだよ提督」

秋人『お疲れ様。けど、無事に帰還するまでが出撃だから最後まで気を抜かないように、それで敵が来たら全速力で逃げろ、分かった？』

6人「了解！」

side out 時雨

side 秋人

時雨の勝利報告を聞いて俺は一気に体の力が抜けた気がした。多分安心したのだから、俺は人生で初めて本当の戦争というものを経験したのだから。

秋人「……………ふう……………」

大淀「お疲れ様です。提督！」

秋人「おう、ありがとう大淀」

俺はやることがあったので椅子から立ち上がった。

大淀「提督どこに？」

秋人「ちよつと食堂行ってご飯を作ってくる。頑張ったあいつらへのご褒美程度にな」

俺にはそれしか支えることしかできないから……。俺は執務室を後にした。

大淀「……本当は信じるつもりは全くなかったんだけどね……あの人なら信じてもいいかな……」

9話 秋人の「お・も・〇・な・し」!

俺は現在食堂にいる。理由は頑張った時雨達に料理を振る舞う為だ。とりあえず何作ろうか? うーん……やっぱカレーでいいや。俺はすぐに調理にとりかかった。おそらく時雨達が帰ってくるのに1時間ぐらいはかかるだろう、その前には完成させておきたい。

間宮「あら、提督さん。何をしているのですか?」

ちょうどいいところに間宮さんが買い出しから帰って来た。この際だし、カレー作るのが間宮さんに手伝ってもらおう。いや別に、一人で作れないとかそういうわけじゃないからね? ほんとだからな!!

秋人「間宮さんお帰りなさい。いや、時雨達のためにカレーを作ってあげようと思ひまして」

間宮「提督さんが料理を!? あの、私も一緒にカレーを作ってもいいですか?」

間宮さんから言ってくるというまさかの展開。え、ちよつと待って、めつちや嬉しいんだげど!これはお言葉に甘えて、YES と答えるべきだな。

秋人「間宮さんありがとうございます。ではお言葉に甘えて!」

間宮「はい!」

そして俺と間宮さんの2人でカレーを作り始めた。調理をしている際、俺はふと間宮さんの方へと目を向けた。……凄い、その一言しか出てこなかった。野菜を切る包丁さばきはもう職人である領域、さすが給糧艦だな。そして美しいし、品があつてなんかこう、絵になつてる。

間宮「どうしたのですか、提督さん?」

無意識に見すぎていたせいかな、間宮さんは気づいて聞いてきた。

秋人「あ、いえ／＼。間宮さんがなんか、こう、絵になつてるなあ」と

間宮「?どういう意味ですか?」

間宮さんは、全く意味が分からず頭の上には?マークを出して首をかしげてきた。ちよつ、間宮さん!いくら天然だからってどれは反則だわ〃〃。

秋人「あー、わからなければ大丈夫です……〃〃!」

間宮「?」首かしげ

—————

間宮さんと話をしながらもカレーはあとルーを入れれば完成というところまで来ていた。しかし、俺は疲れ切っていた。カレーを大量に作ったからだ。ざつと見るに60〜70人前ぐらいのカレーを作っただろう。最後の方は、ほぼ間宮さんに作ってもらった感じだ。自分から言い出したのに情け無く感じる……。

間宮「提督さん、大丈夫ですか?」

秋人「全然大丈夫じゃないです……腕が痛いです」

間宮「えつと……お疲れ様でした……」

俺はみんなをしつかり見た瞬間言葉を失った。理由は、提督をしているの人なら分かると思うが時雨達の服が……うん。破れていてね……色々と見えてしまっているんだよ……ここで俺が取るべき行動は……

時雨「提督？顔が赤いけどどうしたんだい？」

秋人「……が……えろ……」

6人「？」

秋人「お前から服着替えろおおお／／／」逃走

6人「なんで逃げるの（ですか）提督（司令官）！！！！」

「逃」だな☆

またもや、『ラツキー スケベ』が炸裂し、俺は全力逃走した。だから頻度が多すぎだつて！まじで勘弁してくださいああああああい！！！！

side out 秋人

s i d e 時雨

突然秋人が逃げたことによって僕たちはしばらくその場で放心状態となった。いきなりどうしたのだろう。そんな考えは僕たちの服を見てすぐにわかった。

金剛「oh…服がやぶれちゃってるネ……」

吹雪「だから司令官は……………／＼」

赤城「ふふ…そういうところに関しては、提督もまだまだ子供ですね」

加賀「これは仕方ないわ……………（提督に見られました／＼）」

時雨「とりあえずみんな、早く入渠ドックにいきましょうよ…」

夕立「そうだね、時雨ちゃん……………」

僕たちはすぐに入渠ドックへ向かい傷を癒した。あ、高速修復材は使ったよ。そうしないと、時間がかかりかかるからね（主に赤城さんや加賀さんが）。傷を直したあと着替えて僕たちは食堂へと向かった。するとそこには、カレーをテーブルの上にと置いている秋人がいた。

秋人「あ、みんな着替えてきたな。だったら直ぐに座ってくれ」

秋人は食堂に來た僕たちに気づいてそう言つて來た。

時雨「秋……提督、これは？」

秋人「あゝ、頑張つたみんなにカレーを作つてやろうと思つてな」

やっぱり秋人は優しかった。僕たちのためにご飯を作つてくれたから。

吹雪「司令官1人でこの量をですか!？」

秋人「いや。横にいる間宮さんと一緒に」

間宮「最後の方は私1人で作りましたけどねゝ」

秋人「ちよ!間宮さん、今言いますかそれ!？」

間宮「ふふ……ごめんなさい。でも最初に作り出したのは提督ですよ!私は途中からお手伝いしました」

どうしよう……凄く嬉しい。提督がご飯を作るなんて、今までだったら考えもしな

かった。それが当たり前だと、普通だと感じていた。だけど、その普通は秋人によって、ことごとく覆された。ほんとに秋人は僕たちに無かったものを持たせてくれるね……僕はいっしょか秋人の優しさに心を奪われつつあった。

秋人「まーそういうことだから、冷めないうちにどーぞ！」

6人「いただきます！」

僕たちは一斉にカレーを食べた。なにこれ……凄く美味しい……。今まで食べた料理の中で一番と言っていいほどに。頬が落ちるといふ意味がわかった気がする。つていうか赤城さんと加賀さん、その量を一人で食べるのかい!?驚くことに赤城さんと加賀さんのカレーは30〜40cmぐらいの山と化していた。うっ………胃の調子が……。それに吹雪は赤城さんの食べる姿に見とれているし、金剛さんに至っては秋人の事をぶつぶつ言いながら食べているみたいだし……もう訳がわからないよ……。

夕立「時雨ちゃん、提督さんが作った料理美味しいね！」

夕立だけが普通に食べていた。良かった、僕だけおかしいのかと思ったよ……。

時雨「夕立ありがとう……」

夕立「いきなりどうしたの、時雨ちゃん!？」

時雨「気にしないで夕立、こつちの話だから」

夕立「時雨ちゃんなんか変っぽい」

変じゃないよ夕立!!吹雪たちの方がもつと変だよ!僕は夕立に「変」と言われて少し傷ついた。

秋人「じゃあ俺やる事あるから執務室に戻るわ」

時雨「やる事?」

秋人「前任が残して逝った資源書類ゴミを………な」

6人「あ……(察し)」

秋人「じゃーそういうことで」ノシ

時雨「あ、ちよつと待って!」

僕は大事なことを思い出して秋人を止めた。

秋人「?。どうした時雨」

時雨「お礼してなかったから……ありがとう僕たちのためにカレーを作ってくれて! 凄く美味しいよ!!」

秋人「ふ……そうか! そう言ってくれて良かったわ。じゃあ俺仕事戻るから、ゆつくり味わって食べるよ。あと、お礼は間宮さんにも言っておけよ?。……はあ(萎え)あのクソ提督が……ぜってえブン殴ってやる……(小声)」

6人「う、うん……」

秋人は最後に何か良からぬことを呟きながら食堂を出て行った。大丈夫かな……僕は2つの心配をした。1つは提督の書類を捨てないかという心配、もう1つは秋人の体が大丈夫なのかという心配。多分どっちも大丈夫だろう、何故なら秋人だから。秋人ならめげずにやってくれると僕は信じた。そして秋人が出て行つてからも僕たちは楽しくカレーを食べた。しかし、突然信じられない事が僕を襲う。

夕立「時雨ちゃん、もう提督さんのことを隠さずに名前で呼んでもいいと思うっばいけど?」

時雨以外の4人「!?」ガタツ!↑赤城だけが立ち上がる

時雨「ちよっ!夕立、それはああああー／／／!?」

いきなり夕立は内緒にしていた事を暴露したのだ。口が滑るといふのはこういうことをいうのだろう。本当にどうしてくるのさ、夕立……言わないでって言ったのに／。

赤城「時雨さん、それは本当ですか？」

時雨「う、うん……」

僕は赤城さんの押しに負けて、そう言ってしまった。僕の思い違いかな?赤城さんだけが、みんな以上にこのことについて、反応しているような気が……。

加賀「赤城さん、素が出ています」

赤城「え!?ああー、ご……ごめんなさい時雨さん!」

時雨「僕は大丈夫だけど、素ってどう言うこと?」

赤城「気にしなくていいの時雨さん!何もありませんから!!(焦り)」

時雨「うん、わ…わかったよ………」

僕は赤城さんが何故焦っているかわからなかった。また秋人にでもこつそりと聞こうかな。夕立の急な暴露から、みんなは「別に名前で呼んでも今の提督なら大丈夫だろう」って事になり僕は秋人のことを「秋人」と呼ぶことにした。けど僕だけが特別みたいでなんか恥ずかしい……／＼／＼みんなも名前で呼んだらいいのに…と僕は思った。

10話

秋人の過去カツコカリと明石達の不安

秋人「やっと終わったああああー！！！！」
「（……）」
「コロンビア」

俺はようやく資源書類ゴミの整理が終わった。約300枚片づけるのに2〜3時間かかった、マジでつらたん……。もうやりきったせいかな燃え尽きたようなだるさが俺の体をおそった。だが俺にはまだやることがあった。俺はこれから親父に母さんが見つかったことの報告をしなければいけない、クソメンドクサイぜ……。

秋人「もしもし親父？」

頼長『どうした秋人』

秋人「母さん見つかったわ」

頼長『本当か!?!』

秋人「うん。夏ぐらいに一時的に一緒に帰って来るわ」

頼長『分かった。それはそうと秋人、茜に何かあつたらタダでs—————』

プツンーーーーー

俺は親父が最後まで言い終わる前に通話を切った。親父もどんだけ母さんが好きなんだよ……ある意味マザコンだな……俺もだけど。そういうところだけ親父と性格が似てしまう……なんか嫌だな。そんな時……

陸奥「提督、陸奥だけどいるのかしら？」

いきなり陸奥がドア越しで俺を呼んできた。

秋人「はい。居ますよ」

陸奥「じゃあ失礼するわね……あら？執務室ってこんな感じだったかしら？」

陸奥は変わった執務室を見て少し驚いたようだ。やっぱりそういう反応するよね。俺もしたし。それにしても陸奥がくるなんて珍しいな。

秋人「妖精さんに頼んで改装しましたからね。それよりもどうしたのですか陸奥さん？」

陸奥「私を秘書艦にして欲しいって言うお願いをしにきたの」

秋人「秘書艦って確か大淀みたいと一緒に仕事をすることですよね？」

陸奥「ええ、そうよ」

秋人「けどなんでいきなりですか？」

陸奥「提督と一緒に仕事がしたいから……」

秋人「本当は？」

陸奥「あなたの事を知りたいから!!……あ……」

陸奥は見事に俺の作戦にかかってしまった。見た目の割にはちよろかった。結構大人って感じが出てくるのに……。それにしても俺の事を知りたいって……。とらえ方次第だと絶対にキユンとなるよな。俺は違うけど、いやマジで！本当に惚れてないからね!!? その言葉で俺のドキがムネムネしたとかそういう訳じゃないから!!!

秋人「その考えに辿り着いたきつかけは何ですか？」

陸奥「長門さんが私に提督の事を話してくれて……」

秋人「だったら、わざわざ秘書艦にならなくても素直に聞いてきたら良かったじゃ無いですか…」

陸奥「教えてくれるの？」

秋人「いえ、教えませんが。笑」

陸奥「なんですかそれ!!」

俺のちよつとしたからかいに陸奥は顔を赤くしながら叫んだ。あれ陸奥つてからかうと子供みたいな反応するな……なんか可愛い…。それよりもどうしようかな……。このまま黙つてると絶対に戻らなさそうだしな……。

陸奥「て、提督が話してくれるまで私は戻らないわ!」

やっぱりそうなんのかよ……はあ……まあいいや、ちよつとだけ話そう。

秋人「分かりました陸奥さん、自分の過去を話しましょう」

陸奥「ほんとに!?!」

秋人「はい、ですが話す代わりに、約束してもらえますか?」

陸奥「約束ですか？」

秋人「はい、絶対に長門さんと陸奥さんだけの秘密にして、誰にも言わないでください」

陸奥「分かったわ！」

俺は陸奥に少し嘘の入れた過去を話した。その内容はと言うと――

俺は中学1年生の頃、水難事故に会い、そのせいで母親を亡くした。以来俺は何かの能力に目覚めた。きっかけはわかるが理由が分からない、どうして発動したのか、何が原因なのか。その能力のせいで友達や近所の人達を傷つけ、疎まれるようになった。最終的には疫病神や化け物呼ばわりされ、俺を殴るなり蹴るなり、石を投げられた挙げ句、知らない奴らに殺されかけた事もあった。親父はそんな俺を見て我慢出来なかったのだろう。俺と親父は逃げるように引越しをすことにした。

秋人「それで親父の地獄の修行を積んで、能力をコントロール出来るようになって、今の状態に至るわけです。そして自分の身体能力がかなり上がったのはそのお陰ですね」

陸奥「……………」

陸奥は俺の少し嘘の入った過去を話を聞いて固まっていた。確かにそうなるわな、少し話が異なるけど。なんなら母さん生きてるし……。まあでも能力がコントロール出来なくて周りの人を傷つけ疎まれ、暴力を受けたのは本当だ。違うのは初めの水難事故の部分とさつきも言ったように母さんを亡くしたと言う部分。母さんが、ここにいる赤城だということももちろん隠した。

秋人「だから、みんなが前任に暴力を受けていたその気持ちだが、自分は凄く分かるんです」

陸奥「提督……ごめんなさい………私は……あの時……」

それを聞いた陸奥は泣きながらそう口にした。

秋人「陸奥さん気にしないでください。あの時は知らなかったのですから仕方ありませんよ」

陸奥「提督………ありがとうございます……！」

秋人「／／!?」

俺が泣いていた陸奥に優しく頭を撫でながら言ったら、陸奥はいきなりお礼と共に俺を抱きしめた。ちよ、陸奥さんそれは反則……／＼!!!陸奥さんの胸に当たってドキドキが止まらない!!身体も柔らかい……ハッ!!だめだこんなことを考えるな櫻川 秋人! うっ……とりあえず陸奥さん力強すぎ……!!待って墮ちるほんとに墮ちるから……。

秋人「陸奥さん……く……るし……です……!!」

陸奥「!?。すみません提督……私つい……」

秋人「大丈夫です……話しをしたんで秘書艦の件は無しということで良いですか?」

陸奥「むく……」

陸奥は急に頬を膨らませて拗ねた。拗ねてる陸奥も可愛い……何となく時雨に似てるな。どうにか陸奥の機嫌を直さないとな……あ、そうだ……

秋人「陸奥さん秘書艦をやめる代わりに、建造のやり方を教えてくれませんか?」

陸奥「うーん……分かったわ。その件はそれで許してあげます!」

秋人「ありがとうございます！」

そして俺と陸奥は早速工場へ向かった。その際俺は今までの陸奥との会話を思い返して、あることに気づいた。

秋人「陸奥さん、会話している中でたまに敬語になるのは何故ですか？」

陸奥「ふえっ!?!いや…そのお……」

秋人「何ですか？」

陸奥「えっとう……」

陸奥の目が泳いでる。これ絶対なんか隠してるわ……。

秋人「陸奥さん、自分は過去を話したのに陸奥さんは何も話さないのは不平等だと思いますけど？」

陸奥「う……確かにそれは一理あるわね……」

秋人「はい」

陸奥「実は……これが本当の私だからです！」

秋人「はい!？」

陸奥「このことは内緒にしてくださいよ? 長門さん以外知らないのよ」
秋人「それはお互い様でしょう」

まさか敬語を使う陸奥が素の陸奥だったなんて。思いっきり見る目が変わったな……。陸奥曰く、この鎮守府に配属される前に、いつものように敬語で話していると、提督から、「陸奥が敬語なんて似合わない」だの「もう少し気の強い喋り方にした方がいい」だのしつこく言ってきたから、仕方なく今の性格を作ってしまったらしい。そして、ここに配属されてからも前任によってさらにその性格を強くしてしまったようだ。陸奥は戻りたくても周りがその性格に執着していて、もう手遅れになってしまったそうだ。なんて言うか不運だな……。

陸奥「着きましたよ。……では…ゴホンッ! ……明石さん、陸奥だけどいるのかしら?」

いつも通りの陸奥に戻った。すげーな、喋り方が変わるだけで雰囲気も変わるなんて。っていうか素の陸奥との差がすごいんじゃないやあー（ある芸人風）陸奥がそう言うとき、中からセーラー服を着たピンク色のロングヘアーの女の子が出てきた、おそらく彼女が明石なのだろう。

明石「陸奥さん、こんにちは！そちらの方がみんなが言っていた……」

陸奥「ええ、そうよ。新しく配属された提督よ」

秋人「はじめまして、櫻川 秋人 と言います」

明石「!?。私は明石と言います。気軽に明石と呼んでください！……」

明石が俺のことをまじまじと見てきた。艦娘達って初対面だったらすぐに見る習性があるのか？

秋人「明石さん？じーつと見ているんですがなんででしょうか？」

明石「いや、ほんとに提督の服を着ていないんですね。それと敬語を使っているんですね……疑って損しました……」

秋人「何故に!？」

損したって……逆に横暴な態度を取ってればよかったの!? 出来ねーよんなもん!

陸奥「明石さん、提督に建造の仕方を教えに来たの」

明石「……そうですか、分かりましたこつちへどうぞ……!」

明石が一瞬寂しそうな顔をした。理由は分かる、絶対前任が資源を必要以上に使っていたんだろうな……それと完成した艦娘を……

秋人「明石さん、安心してください。自分は資源を無駄に使いません。そして完成した艦娘は被っていたとしても大事にします、解体なんて絶対にしません! 命をかけて!!」

明石「!?。分かっていたのですね………分かりました、あなたを信じます!!」

そして俺達は建造場所に着いた。ーーーーーうん着いたんだけどさ……何建造しよかな……。それより資源を確認つとーーん?ーー燃料 50000 弾薬

50000 鋼材 50000 ボーキ 50000………はあ!?……何こ

の桁違いの量は!?俺の思ってた量と違うんだけど!!?

秋人「何ですかこの異常な資源の多さは!？」

陸奥「あー、これは前任が隠し持っていた資源を見つけて補給したのよ」

明石「見つけるのが大変でしたよね…地面の中に埋まっていたんですから…」

秋人「何その徳川埋蔵金みたいな感じ!？」

明石「それよりも何を建造しますか?これぐらいの資源があるので大型建造も2〜3回ぐらいは可能ですか?」

うーん、はつきり言って考えていなかった…あ、そういえばー

秋人「いや大型建造よりもまず、空母が少ないので空母を建造しましょうか…」

陸奥&明石「え!？」

秋人「え!？」

何故か明石と陸奥の不安の声が工廠中に響き渡ったのだった。

1 1 話 建造、仲間

陸奥&明石「え!?!」

俺が空母が少ないから空母を建造すると言った瞬間に陸奥と明石が何故か不安の声を上げた。いきなりどうしたのだろうか、俺は別にな変わったことは言っていないのだが……。

秋人「あのく自分何かまずいことでも言いましたか?」

明石「不味いつて言いますか?何と言いますか?……アハハ」

陸奥「提督、ここの鎮守府の空母は誰がいるか分かるわね?」

秋人「はい、確か誇れる一航戦の赤城さんと加賀さんですよ?それがどうしたのですか?」

陸奥「……えっと、説明するとね提督……」

く陸奥説明中く

陸奥「……と言うことになり兼ねないから慎重にして欲しいの……」

秋人「なるほど……」（・―・；・）

つまりもし五航戦が建造されたら今の空母の仲が崩れる可能性があるのか……これ結構ハイリスクだな……。いや違うな、裏を返せばその五航戦の翔鶴型が出にくい空母レシピをすれば良いんだよ！そうだそれだよ、なにに悩まされる必要があつたんだよ俺は!!!

明石「ですから、空母の建造は……」

秋人「いや大丈夫です！その翔鶴型が出来ずらいレシピにすればいいんです！」

陸奥「まあそういう選択肢もあるわね……」

明石「それでも私は心配ですよ……」

俺は直ぐに2つにレシピを記入した。

燃料 300 弾薬 30 鋼材 400 ボーキ 300

これだったらず少ならず翔鶴型とやらは出来ずらいだろう。

秋人「これでどうでしょう？」

陸奥「これだったら何とかなるわね！」

明石「そうですね、ですがその分かぶってしまう恐れがありますが……良いでしょう！妖精さんお願いします!!」

2人もそう言っているし大丈夫だ問題ない。このとき俺は知る由もなかった、この安心した気持ち返って最大級のフラグを生んでしまうということに……

時間 06:00:00

3人「……」

秋人「あの……これってまさか……」 冷汗

陸奥「間違いなく……翔鶴型空母ですよ……」 涙目

秋人「いやでも、もう1つの方がまだ……」

時間 05:59:39

＼(・o・)／オワター

明石「2つとも翔鶴型です……」涙目

秋人「俺、ちよつと飛び降りてくるわ」真顔

明石&陸奥「わああああ!!ダメです提督!!早まらないでください!!」

秋人「うるせー!これは夢なんだよ、俺は今夢見ているんだよ!目を覚ますために飛び降りるのにながが悪いんだよお!大体何これ!?2つ造ったのにこれ、全部翔鶴型じゃねーか!!何で出来ずらいレシピから、しかも2つとも出来てんだよこれええええ!!」

明石「提督、落ち着きましたよう!!」

秋人「これはあれですか!?いわゆるフラグってやつですか!?ぎげんな!?こんなフラグ、俺は認めねー!」

陸奥「提督落ち着いてくださあああいい!!」

秋人「あべしツ!!」

俺は怒り狂ったかのように不満を吐き出していたら、陸奥に顔面右ストレートを喰らった。流石艦娘……めっちゃ力強いな……。喰らった瞬間一瞬だけ三途の川が見えた気がした。

秋人「すみません……かなり取り乱しました」

明石「仕方ないですよ……流石にこれはねえ」

陸奥「そうね……私もびっくりしたし……」

明石「どうします？直ぐに完成出来ませんが……」

秋人「そうですね……直ぐに完成させて、まず謝りましょう……」

そして高速建造材を使い、直ぐに艦娘を完成させた。と言っても翔鶴型が確定事項だけだな……。でもかぶってしまいか心配だ。まあ、どうせ俺の運のことだからかぶるのが当たり前だろうな……。そう思いながらもまず1つ目の扉を開けた。

瑞鶴「翔鶴型航空母艦2番艦、妹の瑞鶴です。幸運の空母ですって？そうじゃないの、一生懸命やってるだけ……よ。艦載機がある限り、負けないわ！」

瑞鶴だった。うん、知ってた。とりあえず挨拶しよう。

秋人「はじめまして瑞鶴さん自分がここの提督、櫻川 秋人って言います！」

瑞鶴「え!? 提督なのにどうして提督の服を着てないの!？」

秋人「それは後で説明します。それよりも先にこれがあるので」

瑞鶴「もう1つ造ってたんだ」

秋人「はい! それじゃあ開けますよ!」

俺は2つ目の扉を開けた――

翔鶴「翔鶴型航空母艦1番艦、翔鶴です。一航戦、二航戦の先輩方に、少しでも近づけるように瑞鶴と一緒に頑張ります!」

秋人「はじめまして提督の櫻川 秋人 です! 制服のことはのちに説明しますので気にしないでください」

翔鶴「そう、よろしくおねがいますね提督!」

瑞鶴「翔鶴姉!」

翔鶴「あら、瑞鶴も来ていたの! 嬉しいわ!!」

瑞鶴「私も!!」

翔鶴だったから一応かぶらなくて良かった〜……。2人とも嬉しさのあまり抱き

合っている……うん、いい目の保養だ……じゃない!!そんなことをいちいち考えるな櫻川 秋人!!とりあえずやらなければならぬことがあるよ……!。」

秋人「あの!嬉しい気持ちは分かりますが、いいですか?」

翔鶴「何でしょう?」

秋人「謝りたいことがあるんです」

瑞鶴「謝りたいこと?」

秋人「はい、実は……」

く秋人説明中く

秋人「……」ていうことなんです。本当にすみません!」

俺は翔鶴達に赤城さんと加賀さんがいることを説明して謝った。

翔鶴「ふふ……そんなことですか。大丈夫ですよ私達は、むしろ尊敬する先輩方がいるなんて嬉しいですよ!瑞鶴もそう思うでしょ?」

瑞鶴「うん！翔鶴姉の言う通り私は全然気にしないわ！むしろ私達の力を認めさせてやるんだから！」

秋人「そうですか。なら良かったです！では改めて、ようこそ鎮守府へ！！」

瑞鶴&翔鶴「はい！！提督、よろしくおねがいます！！」

—————

俺は翔鶴と瑞鶴を歓迎したあと、食堂に向かって歓迎会をした。しかし案の定、加賀さんと瑞鶴の仲が悪くなった。まあ話の内容を聞くと、仲がいいからこそその喧嘩だと分かった。加賀さんも加賀さんで素直じゃないな……。そして俺は歓迎会のあと執務室に戻った。戻ってからはお風呂に入るまでの時間潰しに高校の部活仲間達とグループ通話をした。

秋人「もしもし、お前ら元気にしてる？」

拓海『おう、秋人久しぶり。元気にしてるぜ！部活の方も秋人がいなくなってからも、順調に結果が残せるようになってきたよ！』

すぐに反応してきたのは大親友の島崎しまざき拓海たくみ

ディフェンス

サッカー部の頼れるキャプテン候補の拓海はD F担当で、ディフェンスとしては全
てがパーフェクトに備えていて、パスの精度もずば抜けている。しかし、攻撃になると
……うーん。あと結構学校の女子に人気だ、最近は一気に5人の女子生徒に告白され
らしいけど全員断ったとか……拓海曰く部活に集中したいから誰一人付き合わな
いとのこと。

秋人「マジか！それは良かった〜！」

??『リア充組爆発しやがれ!!』

秋人&拓海「『あゝ?』」

いきなり死ね宣言をして来たのは、伊口いぐち良りょう

良はFDフオワードでスピードがあることで、他校サッカー部でもかなり有名になっている。

俺よりも早いスピードの持ち主だ。ただ足元の技術が……うん。そして学校の全校生
徒の中で指に入るくらいの馬鹿で、変態で、調子乗り男。でも結構メリハリがあつてい
い奴。

良『ちよっ……冗談だつて！そんなにキレイなよ』

拓海『悪い。マジで冗談に聞こえなかったからつい』

秋人「同じく」

良『酷くね!』

??『良はそう言われるタイプだから仕方ないよ』

良にそう言ったのは あまみ 雨見 ときね 時音

時音はスピードが遅く、身長も150cmの小柄なやつだが足元の技術がめちやくちやあつて、『M Fの教科書』と言う2つ名を持っている。そして学校の男女構わず人気な奴だ。理由は女の子に見えるかららしい、いくなれば男の娘だ。

良『うるせーよ時音!!』

時音『え、いいじゃんw wそんなことより秋人、珍しいね秋人からかけてくるなんて』

秋人「あー、時間に余裕ができたからな。それと艦娘つて知ってる?」

良『知ってるぜ!俺たちのために深海棲艦を倒してくれる美少女戦士だろ!!俺めっちゃや会いたいんだよ』

拓海『流石変態だな……で、艦娘がどうしたんだ?』

秋人「俺その提督になったんだよ……だから俺以外女性しかないから、精神的にな」
拓海『参ってるって感じだな』

秋人「流石に……けど楽しいぞ！」

良『なんだよそれええええええ!? 秋人、艦娘達と一緒に暮らしてんのか!? 羨まし過ぎけ
しからん!! 俺と変われ!!!』

秋人「無理、拒否、諦めろ、良の脳味噌タケ○味噌♪」

良『クソがああああ!! w w w』

秋人「笑ってるし w w あ、ついでにさ〜久しぶりにゲームしね？」

拓海『何すんだよ?』

秋人「んなもん、A g ○ r . i o に決まってるじゃねーか!! みんなもやってるだろ?」

時音『うん、いいよ秋人!』

拓海『俺もいいぞ!!』

良『俺も!! オタクの力見せてやるぜい!!!!』

時音『でも僕苦手なんだよね……』(―――;)

秋人「安心しろ時音、俺が守ってやる」

(?+―?) キリッ

時音『ありがとう秋人!』(*、▽、*)

拓海&良『……………』(。D。)

秋人「っしやああ!!じやあやるか!!!」

それから俺は部活仲間達と一緒にAgOr.i oをした。久しぶりの仲間達と携帯越しだけど遊ぶのは楽しい。艦娘達と一緒に暮らすぐらいに。

秋人「拓海補充してくれ。こいつ吸収したいから!」

拓海『任せろ秋人!!』

良『な!?!時音テメエ、何裏切ってんだよ!!』

?。(。D。)

時音『そうしないと良が別のプレイヤーに吸われていたよ?ww』^ ^

~~~~~

~~~~~

拓海『ヤベエ秋人! Help me!!』(((;。D。))

秋人「持ってけドロボーww」

時音『良!?!どうして僕の半分を!?!』(。o。;;;

良『さっきの仕返しだよ! って秋人何吸ってんだよ!!』?(。D。)

そうして部活仲間達との通話が終わった。

秋人「いい時間だし風呂入ろうかな。明日の早朝ランがあるしー」

俺は入渠ドックへと向かった。

俺は入渠ドックへと向かっていた。

時雨「あれ？秋人、まだドックに行つてなかつたの？」

もうすぐ入渠ドックへ着くというところで、入渠ドックに入つたであろう時雨とばかり会つた。

秋人「あー時雨か。まあな、みんなが入り終わるまで待つてたんだよ。時雨こそ、なんで遅いんだ？」

時雨「僕は赤城さんと歓迎会の後片付けをしていたからね。あ、ドックに入るなら早く入つた方がいいよ！まだ赤城さんが入っていないと思うから！」

秋人「マジか！だったら早く入つて来なきやな！」

時雨「秋人、僕の方からも 秋人が先に入っている って赤城さんに言つておくよ！」

秋人「お、サンキュー時雨。助かる！じゃあ！」ノシ

時雨「あ、秋人！ちよつと待つて！」

俺が再び入渠ドックへと向かおうとした時、時雨に止められた。

秋人「何、時雨？」

時雨「聞きたいことがあるんだ！」

秋人「聞きたいこと？」

時雨「うん。秋人と赤城さんはどんな関係なのかなっていう」

秋人「え?!？」

時雨からいきなりのドストレート質問に俺は固まった。何で時雨はいきなりそんなことを――――

時雨「教えてよ秋人！」

!!
クツソどう説明すればいいんだよこれ!!! あーもう! こうなったらなるようになれだ

秋人「えつと、赤城さんの関係だっけ? それはだな――」

赤城「秋人おおお……!!!」泣

秋人「ぐふツ!!!」

時雨「!?」

俺が時雨に適当に母さんとの関係を説明しようとした時、いきなり母さんが走ってきて俺を抱きしめてきた。母さんタイミングツ!!

赤城「秋人、加賀さんは酷い人ですうう……。また私を茶化してきましたあああゝ……!!!」泣

秋人「ちよつと母さん!? 見てるから、時雨が見てるから!! (小声)」

赤城「!!」

時雨「……………」

俺が声をかけた時にはもう遅い、なぜなら時雨がガツツリと俺が母さんに抱かれてるところを見ていたのだから。時雨も時雨で固まってるし。

秋人「時雨、これはだなーー」

時雨「赤城さん! これはどういふことなんだい／＼!?」

赤城「え？」

時雨「赤城さんは秋人の『何』!?」

赤城「えつとくく……」

あーこれ時雨混乱してるな絶対。まあいいや、母さんにちよつとした演技をしてもらおう。

秋人「母さん（小声）」

赤城「どうしたのですか秋人?（小声）」

秋人「とりあえずー」

俺は母さんに演技してもらおうよう説得した。

赤城「わかりました秋人!私に任せてください!（小声）ーーーーーどうい関係なのか、でしたよね時雨さん」

時雨「そうだよ!」

赤城「それはですねく……私と秋人は運命の赤い糸の関係なのですよ!!」

秋人&時雨「!?」

おいおい母さん!!演技しろとは言ったけどこの演技は違うだろ!?!さすがに俺でも合わせずらいって!せて時雨と一緒に俺に助けてもらった艦娘とかの設定にしてくれよ!!!

時雨「……それは本当なのかい?……」

赤城「ええ、本当ですよ!なので今から愛する秋人さんと一緒に入渠ドックへ行こうと思っっているんです!」

時雨「え……」青ざめ

ちよっ!母さん暴走しすぎだつて!時雨が可愛そうになってくるから!ほんともうやめてあげて!!!

赤城「残念でしたね時雨さん!秋人は小さい人より私みたいなお姉さんの方が好きなのですよ!」

時雨「……」プルプルツ……

赤城「ですから、時雨さんには秋人さんを諦めてもらいます！それでは秋人さん、行きますよー！！………こんな感じでもいいですか秋人？（小声）」

秋人「やりすぎだつて母さん！！時雨絶対俺たちのこと嫌いになったぞ！！（小声）」

赤城「………まあ、なんとかなるでしょう☆。それにこれぐらいしませんが時雨さんは諦めませんよ（小声）」

秋人「確かにそうだけ………（小声）」

本当にこれで良かったのか？なんかこう、とてつもなく嫌な予感がする……。俺はそんな気持ちを持ちながらも母さんと2人で入渠ドックへ向かおうとした。その時………

時雨「ツ！………待つんだ赤城さん………いや………赤城！！！」

時雨が母さんを止めた。やっぱり俺の嫌な予感は当たった。

赤城「!?………まだ何かありますか？時雨さん」

時雨「そんなこと、赤城さんが勝手に言ってるだけで、秋人が好きかなんて分からない

といったものだった。もう嫌だ早く上がりたい……。全国の艦これファンの皆さんごめんさい……。あと、マジで助けてください!!

秋人「ちよつ、お2人さん!?身体ぐらい自分で洗えるから!そういうのは間に合ってるから!!」

時雨「駄目だよ秋人!これは秋人が本当に赤城さんのことが好きなのかっていうのを確かめているんだから!」

赤城「そうですねよ秋人さん!!」

2人とも俺の言うことを聞いてくれない……。あく逃げたい。けど2人が俺の腕を掴んでいるから逃げれないんだよなあ……。クソウ!!ここまできたらもう本当のことを言うしかないのか……

赤城「時雨さんどうしたのですか?秋人さんの前は洗えないのですか?」

時雨「うっ………!あ、洗えるよ/」

あ、言うわ、もう限界だわ。主に自尊心の維持が。

秋人「お前らしい加減にしろおおおおお!!!」

そして俺は叫ぶ、2人の暴走を止めるために。もう無理、こんなハーレム、俺の精神力が持たない!!!（しかしながら心のどこかでは嬉しい気持ちがあつたりする……腐つてゐるわ俺。笑）

時雨「!!。どうしたの秋人!」

秋人「もう無理、限界、俺のライフポイントは0よ／／!!。もう正直に俺と赤城さんの関係を言うから!!……赤城さんもいいだろ?」

赤城「……仕方ありませんね秋人。いいですよ時雨さんなら」

時雨「え!? どういうこと……!」

秋人「時雨、あのなーーーーー」

俺は時雨に赤城さんが俺の母親だということを打ち明けた。

時雨「……それは本当に本当なのかい……?」

秋人「ああ、本当だよ。なんか悪かったな……内緒にしたいがためにこんな嘘をついちゃって……」

赤城「私もすみません時雨さん……ちよつと悪ふざけが過ぎちゃいました……」

時雨「……」

俺と母さんは嘘をついたことへの謝罪をしたとき、時雨は何も言わずにただ立っているだけの状態になった。そりやそうだよな、これで許してもらえるなんて俺も思っていないし……。

時雨「……ふふ……あはははは！」

赤城&秋人「!?」

突然、時雨が大きく笑い出した。

時雨「なんだ！それだけの事だったんだね!!」

秋人&赤城「え……?」

時雨「だから、ただの親子だけの関係だったんだね！」

秋人「……驚かないのか？」

時雨「別に驚かないよ。さっきのが強烈だった分……」

秋人「そういえばそうだったな……」

流石にあれは自重しないといけない、主に母さんが。

時雨「でも、どうして赤城さんは鎮守府に？秋人のお母さんだったら一緒に……」

秋人「それは俺のせいだ」

時雨「どういうこと？」

秋人「俺があの時……」秋人!!「……悪い時雨、この話は聞かなかったことにしてほしい……」

そうだ、俺は時雨に何を話そうとしているんだ。母さんが生きてる、それだけで十分じゃないか！

時雨「う、うん……」

秋人「……………俺そろそろ上がるわ、のぼせたし」

時雨「あ——」

俺は入渠ドックから出た。その時、時雨は何かを言いたそうにしていたが、俺は気にしなかった。

—————

時雨「……………」

赤城「時雨さん、秋人がちゃんと話ができるまで待つてくれませんか？今の秋人だったらおそらく、感情的になってしまいますので」

時雨「赤城さん……………」。分かった、僕は待つよ！秋人がちゃんと話をしてくれるまで！！」
赤城「時雨さん、ありがとうございます！あとこのことは内緒にしてくれるとありがたいです。バレるとちよつとややこしくなるので……………」

時雨「……………分かったよ！」

13話 朝

6月1日 6:00

iPhoneのアラームが鳴った。

秋人「もう朝か……」

目覚めはあんまり良くない。昨日の疲れが残っているせいか体がだるく感じた——ていうか2度寝したい。けど俺は早朝ランニングが日課なため、そういうわけにもいかない。

秋人「クツソ眠たいけど準備しますか！」

俺はいつもの動ける格好に着替えた、そして小さなりユックにサッカーボールを入れて背負った。言い忘れていたが昨日、俺は入渠ドックから出た後、執務室に向かいアラーム設定をしてからすぐに寝た。え、前髪？大丈夫、入渠中ずっと横に流していたか

ら。準備を終えて早速みんなを起こさないように静かに外へと向かった。しかし、俺は気づかなかつた誰かが見ていることに――

睦月「……」

――

俺はまた、ある程度ストレッチを終わって、日課の早朝ランニングを始めた。今回は1kmを大体4分半ぐらいのペースで走った。体がちよつとだるいから。そして、聴いている音楽はU○ERw○rldの、Don×t ○hink、○eelだ。これも聴いているだけで体を動かしたくなくなり、疾走感があつてすげー良い。でもまあ疾走つていうほどのペースじゃないけど。笑

秋人「やつぱらランニングするときの1番の音楽はこれだよな」

俺は歌のサビに入ると同時に走るペースを上げた。そしてゴール付きの人工芝に着いて中に入り、早速アップがてらにリフティングをした。え、フリースタイルのリフ

ティング？してないしてない。いくら身体能力が良いからってあんなパフォーマンスはできないわ！けど、いつかはマスターしたいな、とは思う。まあパフォーマンスっていうかは分からないけどサッカーゴールの上のバーに当てる、返ってきたボールをトラップして、そのままリフティングするのを繰り返してやるっていうのは出来るな。まあプロ選手のロナ○ジーニョが練習中にやっていたことを真似たけど。確かきっかけはその動画を見てすげーカッコいいと思って部活の自主練の時に挑戦したんだっけ。けど初めはバーに当てることすらできなかつたけどな。笑

秋人「つとこんなもんか。だいたい2週間ぶりだけど、なまってるって感じはしなかったから良かった〜」

この後もフリーキックの練習をしたり、ドリブルの練習、ロングキック、トラップと1人で出来る練習をした。もう1人いたらもつと色々な練習が出来るが、そうにもいかないのが現状だ。時雨達に俺の趣味を押し付けるわけにもいかない。それこそ前任がやってきたことと同じことになる。まあ、夏ぐらいに拓海達とフットサル大会に参加するからいいか。昨日そういう約束したし。

秋人「そろそろ時間だし戻るかな」

気づけば7:30になっていた。大体ここから走ったとしても15分ぐらいはかかるだろう。俺は直ぐに戻る準備をしたあと、人工芝を後にした。

—————

鎮守府についてから、俺はまた汗を流すために入渠ドックに向かった。そしてまた誰も入っていないことを確認してから入った。入ったあと、俺は食堂へ向かわずに工廠へと向かった。理由は明石に『ある物』を作ってもらうためだ。

秋人「明石さん、居ますか？」

俺がそう呼ぶと明石はすぐに出てきてくれた。

明石「はい……えっと、誰……あ、提督さん、おはようございます!!今回はどうされたのですか？」

俺はセツトするのが面倒だった為、前髪を下ろしていたら案の定、明石に一瞬だけ誰扱いされた。慣れてるけど、少し傷つく……。

秋人「おはようございます、明石さん！今回は『ある物』を作ってもらおうと頼みにきたんです」

明石「提督、その『ある物』とは何ですか？」

秋人「えつとく……」

俺はつい言葉を詰まらせた。何故なら俺が明石に頼もうとしているのは、水面上でも自由自在に歩けたり走ったりする事ができる靴を作るということだからだ。

明石「提督、詰まらせないで言ってください！」

秋人「分かりました。えつと……明石さんに、水面上でも自由自在に歩けたり走ったり出来る靴を作って欲しいんです！」

明石「え!?!」

明石は俺の言葉を聞いてびっくりした。そりやそうだ、いきなり非現実的な装置を作ってくれて言っているんだから。正直無理だろうな……。

明石「……………分りました、私に任せてください!」

秋人「ですよね〜やっぱり作れる訳が……………?」

明石「ですから、提督が言つた靴を作りますつて言っているんです!」

秋人「え……………ええええええ!!!!出来るんですか!!!」

明石「当たり前です!こんなのは お茶の子さい!ですよ!」

まじかよ…諦めてた俺が馬鹿みたいだな。流石明石だ、ほんと何でも出来るんだな……………。

明石「私を甘く見ないでください!それに、私達艦娘つていう存在もいるのに作れない筈が無いじゃないですか!!」

秋人「言われてみればそうですね……………あはは…」

すっかり忘れていた。もともと艦娘という存在自体が非現実的なのに。あと深海棲

艦とやらも。

明石「それでは大体2〜3時間ぐらい待ってて下さい！」

秋人「そんなに早く出来るんですか!？」

明石「はい!!」

そう言つて明石は大きな笑顔を見せる。うわー、すげーキラキラして見えるよお〜
……ふつくしい〜。そんなことは置いといて、俺は明石に頼んだ靴をお願いして食堂へ
と向かった。

明石「さつきの提督の髪型、ちよつといいですね……!？」

—————

秋人「おはようございます〜」

艦娘達「!?!？」

俺が何気にみんなに向かつて挨拶した瞬間、みんなは俺を見るなりまた顔を赤くして隠した。またかよ………！……！……！ほんと俺何か悪いことしたっけ？とりあえず間宮さんに聞こう。

間宮「あ、提督おはようございます！」

秋人「……間宮さんおはようございます。あのく何でみんな自分の顔を見るなり顔を赤くして隠すんでしょうか……？」

間宮「え!? 提督分からないんですか？」

秋人「何がです？」

間宮「分からなければいいです……！……！……！ほんとそういう所だけは鈍感なんですから………！／＼（小声）」

秋人「は、はあ………」

間宮さんは最後に何か呟いていたが聞き取れなかった。分からなければいい って どういう意味だよ！誰か教えてくれよ!!

間宮「どうぞ、提督。今日の朝食です！」

俺が間宮さんの言っていた意味を考えている途中で、間宮さんは俺に朝食を出してきた。ほく今日はベーコンレタスマフィンか。めっちゃ美味しそうんだけど!!早く食べに行こ〜(o^v^o)

秋人「ありがとうございます間宮さん!!それでは〜」

俺は間宮さんにそう言って直ぐに席に座った。そして俺は食べながら今日することを考えた。うーん……今日も出撃かな? いや遠征って言うものも試してみたいな。

「〜〜とく〜」

いや待て。そもそも遠征って何だよ、もしかして遠出して試合をすとかそういうやつか?

「〜〜いとく〜」

いやいやいや、そんなことある訳が無いじゃん。鎮守府だし、艦隊だし。

「提督〜！」

さつきから誰かさんが俺のことを呼んでいるみたいだけど無視しよう、関わったら終わりだ。何故なら〜！〜！〜！

睦月「何で睦月を無視するんですかあ〜！提督〜！！！」

「〜！〜！〜！睦月だからだ。ちなみに俺は何故睦月に関わったら終わりだと言っているのかと言うと、以前の睦月が発した言葉にあるからだ。『もつと睦月たちを観察してもいいんですよ？』」 これのせいで俺は異常に睦月を意識してしまったのだ。まあ1日で克服したけどな！！

秋人「無視しないと俺の身の危険を感じるから」

睦月「ふえ〜提督まだ、あの時のこと気にしてるう……。あれは如月ちゃんのために〜！〜！〜！」

秋人「その次の発言だよ!?俺が気にしてたのは!!何であんなこと言ったの!?俺じゃなかったら絶対に襲われてたからな!」

睦月「……そんなの今の提督だから言ったんです……。今の提督は何もしないって思ったから……」

秋人「……あつそう。んで睦月、俺になんか用でもあるんだろ?」

睦月「え……うん!」

そうやって睦月は一番の笑顔を見せてうなずいた。やっぱり笑顔が一番だよなあ、癒される。いや決してロリ○ンとかじゃ無いから、笑顔を見て抱きしめたいかと思つてるとかじゃ無いから!マジで!!!

睦月「提督あのね、今日の早朝、外に出て何してたのですか?」

秋人「え!?睦月見てたの?」

睦月「うん!はつきりと提督を見ちゃいましたにやしい☆!!」

秋人「マジかよ……みんな寝てる時間だと思つたのになあ……。えつとく何してたかだっけ?日課だよ」

睦月「日課?」

秋人「うん、日課。親父に勧められてな」

睦月「なんか凄いです!!提督、その日課ってどんな事をするんですか!」

お、睦月えらく食いつてくるな。いいやこの際ちよつとからかってみるか。あの時の仕返しもかねて――

秋人「それは、明日の朝6:00に来たらのお楽しみ」ニヤ

睦月「そんなく!!――わかりました、睦月以外のみんなも誘ってもいいですか?」

秋人「良いよ人数多い方が後々楽しいしな。まあ来たらの話だけ」

睦月「むう……今ので睦月は怒りました……。絶対に行きますからね!!」

秋人「お、じゃあ楽しみにしてるわくことで俺執務室に戻るから」

睦月「あ、待ってください!睦月も行きます!!」

14話 4人の駆逐艦

俺は、拗ねている睦月と一緒に執務室に向かっていた。

睦月「提督、今日は何をする予定ですか……!!」

秋人「ちよつ…悪かったって！俺もからかい過ぎた。これで機嫌なおしてくれる？」

俺はそう言つて睦月の頭を撫でた。

睦月「ふえ!? ……分りましたよ。その代わりもつと睦月の頭を撫でて下さい！」

秋人「はあー、分かったよ。これで良いか？」

睦月「ふにやああ…提督頭撫でるの上手です」

秋人「そりやビーも。で、着いたけど睦月どうすんの？」

睦月「提督のサポートをします！」

秋人「お、ありがとう睦月」

俺は再び睦月の頭を撫でた。睦月もまた癒される表情を見てた、こう見るとなんつか子動物だな。そして俺は執務室に入った。その瞬間睦月はとても驚いた顔をした。理由はわかるけど流石に驚き過ぎでは？それに驚いたあと何故か目をキラキラさせて周りを見てるし、まるで小学生の友達が初めて家に来たみたいな感じだ。

睦月「提督！ここの部屋すごく変わりましたね！睦月感激しました！」

秋人「そう言われると嬉しいな。あ、けど近いうちに執務室をまた変えても良いかな？」

睦月「何故ですか？」

秋人「simple も良いけど、自分風にアレンジしたいから」

睦月「それなら良いですよ！でも流石に前の執務室はやめて欲しいかな……」

秋人「それは絶対に無いから安心しろ！」焦

俺は睦月と話をしていると疲れる。理由はそうだな、気持ちの変化がはげしいからかな。睦月は何かしたら直ぐに怒ったり、悲しんだりする。表情が豊かで良いけど、豊かすぎるのも辛い。機嫌を癒す時とかが特に。

睦月「そういえば提督、今日は何をするんですか？」

そうだった、すっかり忘れていた。

秋人「今日か………あ、そういえば遠征っていうものがあつた気がするから今日は遠征を試みよう」

睦月「え………」

俺はが遠征しようと言つた瞬間、睦月の顔は青ざめた。あれ？俺地雷踏んだかな？

秋人「睦月どうし………」

睦月「提督！それだけはやめて下さい!!」

秋人「へ!？」

いきなり睦月は声を荒立ててそう言った。どうしたんだ睦月!?その答えを導き出すのにさほど時間がかからなかった。………また前任かよ。…あの野郎、全てにお

いて、傷跡という置き土産を残しやがって……マジでふざけんよ!!!

睦月「提督それだけは……暁ちゃんたちだけは……」

秋人「睦月、流石にそこまで言われたら逆に気になるわ。無理も承知なのは分かっているよ、だけど話してくれないか？聞いた上で今後のことを決めていくから。でもこれだけは言わせてくれ、絶対に前任のような事はしないって。命賭をかけてでも！」

睦月「!?…………」どれぐらい命賭けるんですか……」

秋人「それが口癖何なんだよ……」

睦月「変な口癖ですね……分かりました、話します!!」

睦月はゆつくりと日の出来事を話し始めた……

side out 秋人

side 響

私は前任が……いや、提督という存在自体が嫌いだ。理由は山程ある、暁たちを傷つ

けた挙句、奴隷のように資源を取りに行かせられ、失敗すれば暴力、成功しても提督が納得いかない数だと暴力……そして夜になれば私達を汚さしてくる。はつきり言っている都合が良い時だけ私達を利用して且つ、資源を取りに行く為だけに残されていたからである。けど、時雨のおかげであの前任は憲兵に拘束されたて、私たちは地獄から解放された。けど一週間も掛からないうちにまた提督がこの鎮守府に配属されることになった。私達はまたあの地獄が返ってくると思い、部屋に閉じこもる事を決めた。

暁「響、大丈夫？また怖い顔をしてるみたいだけど……」

私が今までのことを振り返っていると、暁に私が怖いをしてると言っていて心配してくれた。表情に出ていたのか……気をつけないとね。

響「問題無いよ暁、ちよつと考え事をしていただけだから」

暁「そう……なら良いけど……」

電「暁ちゃんどうしよう……いずれ提督は私たちが閉じこもっているの事を分かかってしまうのです……」

暁「その時は、私がいみんなを守るから電は気にしないで良いのよ！」

雷「暁だけじゃ無理じゃない！私も一緒に守るから！」

暁「私たちはそう言っているけど私には分かる。2人とも、心の中では怖がっているということに。私がみんなをしつかり守らないと……そんな時……」

コンコン…

誰かがドアを叩いたみたいだ。睦月たちかな？そんな考えは一瞬にして砕け散る

秋人「あの提督です、話がしたくて来ました。一度、開けてくれませんか？」

私が嫌いな提督が来たから……

side out 響

side 秋人

俺が扉の前で開けて欲しいと言った瞬間、かなから怖がるような悲鳴をあげたのが聞こえた。こりや、敵しいっていうレベルじゃないな……ほほ無理ゲーな予感しかしない。俺は睦月に彼女たちの事情を聞いた。部屋の中にいる彼女達は前任に、過激に資源運びをさせられ、暴力を受け、汚されていた。

秋人「睦月、多分開けてくれないと思うけど……」

睦月「いえ、絶対に暁たちは開けてくれます！」

秋人「そこからが本当の勝負って訳な……」

そう会話しているもつかの間部屋の扉が開いた。そして中からは中学1年生ぐらいの制服を着た黒い髪色をしたロングヘアーの女の子が出て来た。

暁「な……何よ……!!」

秋人「ちよつと話しをしたくて来たんです……」

暁「あ……あんたに……話す事なんて無いわよ!!」

彼女は強がっていたが、体だけは正直な反応をしていた。すごく震えているの

だーーーーーなんでこんな小さな子をツ!!。俺は前任に対して殺意が湧いた。

秋人「自分はあるから来たんです……ちよつと失礼しますよー。あ、睦月は戻つてくれ、俺一人で大丈夫だから」

睦月「!?。……分かりました!」

暁「あ……ちよつと!!」

俺は睦月を戻らせてから、黒髪の女の子をすり抜けて部屋の中に入った。中に入ると白髪の女の子、茶髪の双子?らしき女の子がいた。3人とも身長は黒髪の女の子と一緒ぐらいで、同様に制服を着ていた。そして俺を見た瞬間、白髪の女の子以外は、震えていた、特に髪を結んでいる茶髪の女の子は化け物を見るような目で見ていた。……あの時と感覚は同じだな。

電&雷「ひっ……!!」

秋人「悪い、怖いよな……いきなり変な男が部屋に入ってくるんだから……」

響「それで、君は私たちに何の用かな?」

秋人「あなたは?」

響「自己紹介がまだだったね。私は駆逐艦の響、後ろにいる2人は電と雷。そして提督の後ろにいる子が暁だよ」

響は淡々と自己紹介をするが、目に光がない。全てを諦めてるようなそんな目をしてる。なんか昔の俺にとめどなく似てるな。

秋人「自分は新しく配属された提督の櫻川 秋人です。ここに来た理由は、ちゃんと話しをしたかったからです！響さんたちが前任に散々酷いことをされて来たということとは睦月から聞きました。」

だからこそ俺は彼女たちを助けたいのかもしれない。

響「それで何？自分は何もしないからまた1からやり直そうって言うのかい？信じられる訳無いよ！」

秋人「そうじゃねーよ」

響「だったら何のー」

秋人「なんでまだ部屋秘に閉じこもって現実逃避してんだ」

響「!?」

俺はいつのまにか敬語ではなく普通の喋り方で話していた。

秋人「つたく、あのクソ前任は居なくなつたつてのに……この部屋にずっといる必要あるのかよ！」

暁「…あんたに……あんたに何がわかるつていうの!!! 私たちの苦しみを知らないあんたに!!」

秋人「そんなのわかる訳無いじゃん……」

暁「ツツツ……!!」

そうだ、わかる訳が無い。だって俺はその場に居合わせても無いし、実際に見た訳でも無い。そんな奴が簡単にわかるなんて言い切ったら、それこそ相手を侮辱している事になる。

秋人「じゃあ逆に聞くけど、お前は俺の苦しみ、分かるのかよ」

暁「!?……それ……!!」

秋人「それと一緒にだよ……結局お前らは理解者が欲しかったただけだろ？ 苦勞を分かち合うことができる理解者が……」

暁「ち……違う!!」

秋人「何が違うんだよ……本当のこと……」

響「提督、無駄な話はそこまでにしよう……!!」

3人「!!」

響は何処から取り出したのかはわからないが、刃渡り数十cmほどの短刀を俺に向けて来た。だいたいはシナリオ通りだな……。

電「響ちゃん！それだけはやめるのです!!」

響「構わないで電……私だけならまだしも、あいつはみんなをも悪く言った……!だから……」

秋人「許さないか……良いんじゃないね。だって響、お前は提督という存在自体嫌ってんだから」

響「ッ！」

秋人「それとも刺さずにずっと怯えながら過ごすのか？ それもありだな。でもお前は

提督を殺そうとしたんだから、罰は受けてもらうけど…」

響「罰……？何を……」

秋人「そんなの、もう一度遠征に……」

グサツ…

何か刺さった感覚が痛みと同時にきた。見ると響が短刀で俺のお腹を奥まで刺していた。まあこれが狙いだっただけ……。

side out 秋人

side 響

電「キャアアアアア!!!」

雷「響!!どうして」

暁「うっ……!!」

私は一体何をしていたのだろう。新しい提督と口論していて、提督が私たちを遠征に行かせると言った瞬間、私は頭に血が上って気づけば提督を刺していた。刺した瞬間、しっかりと頭に伝わってきた、肉を貫く生々しい感覚、生き血の生々しい感覚……。私は初めて人を、提督刺した。何故か全く気持ちが良いとは思わなかった。どうして？願っていたのに、分からない……。そんな思考は次の提督の言葉で更に一層強くさせてしまう。

秋人「……これでちよつとは楽になった？響……」

提督は提督を刺した私に、優しい声をかけてきた。分からない、私は提督を刺したのに、怒っても良いはずなのに、恨んでもいいはずなのに――

響「……提督、どうして……」

秋人「……こうでもしないと、本当の話が出来ないから……それよりも響、すげ〜グッサリと刺したんだな……。まあ嫌いだったんだし無理もない……。よな――」

響「提督!!」

気づけば私は提督に近づいて叫んでいた。なんで、どうして、分からない。ただ、今提督が死んだら本当の理由が分からなくなる、それだけは嫌だ！

響「どうやって提督を……」

電「……早く誰かを呼ぶのです響ちゃん!!止血は私達に任せるのです」

響「そうだ……分かった直ぐに呼んでくるよ!!」

何故か私は提督を助けるために体が動いていた――――

15話 影響

秋人「……………あれ……………ここは医務室？」

気がつけば俺は医務室で寝ていた。なんで医務室に居るのかと考えた。そしてある答えを導き出した。

秋人「あ、俺響に刺されたんだった…」

あの時の俺もどうかしてたな……………なんで逆に刺されにいったんだろう……………。てか刺されたのに全然痛みが無い気がする。俺は不思議に思い腹部を見る……………。んという事でしょう!!刺された後が綺麗さっぱりと消えているじゃあ無いですか!!!これは夢か、夢なのか?!「ルーミア「そーなのかー!」」変な乱入者は気にしないでおこう。まあ傷が治ってる理由は大体わかるけどな……………

響「起きて早々酷く荒ぶっているね…」

秋人「!?……………いつから居たんだよ響…」

響「ずっと居たよ…提督を刺してしまった罰だからね……」

秋人「そーですか…。ところで響、俺が気を失った後どうなったんだよ」

響「そうだったね……………」

……………

響は俺が気を失った後、誰か助けを呼びに部屋から出た。そして運良く母さん（赤城）を見つけて、そして直ぐに入渠ドックへ俺を入れたらしい。

秋人「なるほどなく」

響「それよりも提督、君は本当に人間なのかい？」

秋人「その心は？」

響「本来入渠ドックは私達艦娘以外の傷は治せないんだ、だけど君の傷は治った。何故だい？」

あー流石にバレるか……っていうか入渠ドックって普通の人間には効かないのかよ

！初耳なんですが。

秋人「そうだな、分かりやすく言うと俺は艦娘と人間のハーフなんだよ。察しはついていたと思うけど」

響「そうだね……てことは君は艦娘から産まれた子なのかい？」

秋人「あーここにいる赤城さんからな。あ、このことは皆んなには内緒な、色々めんどくさくなるから。――――まあそういうことで体は結構頑丈にできてると思うな、そんで飛んでくる砲弾も多分素手で止められるはず」

響「じゃあ試してみようか」

そう言って響は何処からか分からないが艀装を出して俺の方へと向けてきた。ちよつ響目がマジなんだけど！怖いからやめてくれ!!

秋人「やめろまじで！俺さつきまで病人だったんだぞ！」

響「けど今はピンピンしてるよね？」

秋人「こいつ……」

まじで、俺のこと嫌いすぎだろ!!

響「冗談だよ。それにまだ話の続きして無かったし…」

秋人「冗談に聞こえねえ…。——話しか…そういえば途中までだったな」

響「提督、どうして君はわざと私たちを挑発するようなことを言っただい?」

秋人「そんなの、わざと刺される為に決まってる」

響「君は馬鹿なの? どういう考えをしたらそんな答えを導き出したの?」

秋人「今まで前任から受けられた暴力を全部俺のせいにしたかったからだな」

響「!?。どうして、まだ君は私達に何もしていないのに、私達が一方的に嫌っているのに…分からないよ私には…」

そう、分からないのは当たり前だ。響は前任によって建造されてこの鎮守府にいる。だから初めから提督の愛情なんて貰っていなかった。あつたのは暁達やここにいる艦娘の僅かな愛情だけ…だからこそ俺は——

秋人「響達が少しでも前に進むために俺のせいにしたかったんだ」

響「————前には?」

秋人「そう前に。ずっと恨んでばっかじゃ、何も進めない。むしろ自分と止めてしま
う！だからこそ、許せなかったことをほんの少しでも許して進んでほしんだよ！」

響「……悪いけどそれはできない…私は前任が——」

秋人「だから、前任の分も俺のせいにして!!」

響「!!」

秋人「確かに前任の奴は響達に散々酷いことをしてきた。それは絶対に許せないこと
だと思う。だけど前任がしかした分まで全部俺のせいにして、綺麗さっぱり無かつた
ことにしたら案外、楽に過ごせるんじゃないのか？」

響「……けどどうやって君のせいにするんだい？」

秋人「そんなもんいくらでもあるだろ。俺がもつと早く提督に着任していれば響達を
早く助けることができたとか。さらにもつと早く着任していればこんな事にはならな
かつたとか」

そう、こんなものはいくらでも自分のせいに出来る。だからこそいい。

響「……全く、全て君のせいにするって考え、流星に思いつかないよ…君はもしかし
てMなの？」

秋人「俺らしいやり方って言って欲しいな」

響「……………馬鹿だね君は——ほんとに馬鹿だよ…」

そう言つて響は僅かに微笑んだ。

秋人「馬鹿で良いんだよ」

響「提督、これからどうするんだい……………おそらく私は、いや私達は簡単には馴染めないと思う……………」

秋人「大丈夫、心配すんな。俺が馴染みやすく出来るようにこの鎮守府を変えていくから」

響「でも……………」

プチン——！

秋人「あーもうムカつく奴だな!!!俺がお前らのためにこの鎮守府を変えてやるからお前もこんなところでうじうじしないでいい加減一歩でも前に進んでみろよ!!!立ち止まるんじゃない!!!」

響「それで失敗したら……?」

秋人「それも全部俺のしろ!!そんでまた1から一緒に考えてやる!!あと、前任みたいな奴が笑う世界なんてもう終わりだ!!」

そんな世界は俺がぶっ壊して、少しずつでもいい、いい方向へと俺が作り変えてやる。これが俺の覚悟だからな。

響「……ふふ……あははは!!ホントに提督、君は馬鹿だね。分かった、だったら言われた通り全部君のせいにして、君以外許して進んでいくよ……でも後悔するかもよ?」
秋人「馬鹿って言い過ぎな。つかここに配属された時点で既に後悔してるから関係ねくよ。んであと3人……どうしようかな」

響「心配ないよ、ほら」

3人「!?」

俺は響が指差した方向を見た。そこには扉を半開きにしてのぞいている3人の姿があった。

雷「響!なんで言ったのさ!こつそりとこいつをいじめようと思ったのに!」

おい今酷いこと言わなかったかこいつ……！

響「いじめる意味がなくなったからだよ。暁もそう思うだろう？」

暁「……」

暁は無言でゆつくりと俺の方へと近づいてきた。

暁「もう一度確認させて……あんたは、提督は私達に酷いこと、しない？」

暁の話し方が徐々に変化していった。おそらく最後の話し方が本当の暁なんだろう。やっぱり中身は子供なんだなと実感が湧く。

秋人「しない……なんなら命賭ける！」

響「あ、言ったね。男に二言はないよね？」

秋人「響、お前ほんとタチ悪いな」

俺は断言する。響は敵に回すと駄目だ。

響「それをウリにしているからね」ピース

暁「提督：今は信じることにするわ」

電「提督さん……改めましてよろしくなのです……」

秋人「おう！よろしくな」

そう言つて俺は電の頭を撫でた。

電「はわわっ!!………わっわっわっわっわっわっわっわっわっわっわっわ!!」

雷「あー電ズルイ!私もして〜!!」

秋人「はいはい」

雷「うわあ〜〜!ホントだ気持ち良い〜!!あんた撫でるの上手いわね!」

秋人「まあな。(男の娘を撫でてたからなんて言えない…)なんか妹を持った気分だな」

雷「じゃあ妹になつてもいいわよ!私もお兄ちゃんって呼ぶから!ほら電も」

電「えっと、お兄さん／＼!」

何これ？何この状況……絶対ヤヴァイ気がするんだけど……

side out 秋人

side?? (ほぼ会話だけ)

暁「……」

響「やってもらったら？」

暁「べ、別にいいわよ！レ、レディーには不要なもの／＼！それにお姉ちゃんなんだから!!」

秋人「……こう？」

響「ハラシヨ」

暁「ちよつ響!?!何やってんのよ!?!」

響「暁、君は不要と云ったのだろう？だから私が撫でられにいったのさ。だけど、これは本当に気持ち良いな……／＼」

暁「ううう……私も撫でてえええええ!!」泣

秋人「はあ!?!ちよっ!!」

響「暁、お姉ちゃんだから要らないってー」

暁「みんなやって貰ってるからいいじゃないくく!!」

雷&電（やっぱり暁へちゃん）はかわいいへのですわね!

—————

秋人「つーか俺夕方まで寝てたんだな」

響「うん、このままずっと目覚めなければ良かったのに…」

秋人「それ戦線布告ってヤツ?上等だ表でろ…」

響「冗談だよ」

電「お兄さんやめるのです…」はわわ…

雷「響もからかわないの!」

秋人「あーお腹すいた…」

秋人が食堂へ入った瞬間ー

赤城&金剛「提督（秋人）……………」

秋人「へぶしツ!!!」

赤城と金剛が思いつきり秋人に抱きついてくる。

赤城「秋人、どうしてあんな危ないことをしたのですか!!!私の子では無ければ死んで
いましてよ!!!」

金剛「提督、もうこんな方法で私達を救うのはやめて欲しいネ!!!」

秋人「あく悪かったよ……………すいませんでした!!」土下座

赤城「それに謝るのは他にもいますよ」

時雨「……」

秋人「あ、時雨……」

時雨「秋人、どうしてそんなことをしたの!!下手したら死んでいたんだよ!!」

秋人「響達が昔の俺に似てたからかな、けど響達は何も悪くない。悪いのは俺の方だ。
だから響達を責めるなら俺を責めろ」

時雨「そのつもりだよ!!!秋人…もう2度と……こんな真似はしないで……………」

秋人「分かったよ……!だから泣くな時雨もうこんな事はしないから!」

時雨「本当かい……?」

秋人「本当だつて!」

時雨「……………分かつた! だけどしつかり罰は受けてもらうよ!」

秋人「何? (嫌な予感しかない)」

時雨「僕と一緒に入渠ドックに入ろう!」

秋人「もう嫌だ……帰りたい……はあく……とまあ今はこんな感じだけど響達、これでも馴染めないって言うのか?」

響「ふふ……私の勘違いだったよ。改めてよろしく秋人」

暁「一樣社交じえ……辞令として挨拶するわ! 提督、よろしくね!」

秋人&艦娘達 (囁んだ……)

電「よろしくなのですお兄さん!」

雷「お兄ちゃんよろしく!!」

秋人「こちらこそよろしく! そんなで、ようこそ新しい鎮守府へ!!」

赤城「……今お兄さん……」プルプルッ

時雨「……今秋人……」プルプルッ

秋人 (やっぱ一滴、一滴の笑顔がこの鎮守府を変えていくんだな……!)

響 (私は気がついたら笑つてる……多分秋人やこの鎮守府の雰囲気の影響かな……だ

けどこの雰囲気も悪くない。むしろこれが私たちが求めていた日常だから……!!)

駆逐艦編完

—————

プロローグ？

大和「大変です元帥!!拘束したはずの矢倉やぐら元司令官が脱獄しました

尾形「何!？」

大和「そして、深海棲艦と共に逃げたという目撃情報もあります!」

尾形「馬鹿な!?あやつ、深海棲艦とまで手を組んでいたとは!!!おそらく狙いは秋人のいる鎮守府じゃ!早く伝えねなければ」

頼長「話しは聞かせてもらった、尾形さん…」

そう言つて頼長は扉から出てきた。

尾形「頼長、聞いておったのか」

頼長「尾形さんに挨拶をしたくてな…それよりも秋人が」
尾形「ああ、そうじゃった。頼長——」

—————

矢倉「ふははははは——!!!!! これで私は自由だ!!」

戦艦水鬼「オイ、コレカラドウスルンダ……」

矢倉「——鎮守府へ向かう。気に喰わない奴がいるのでな……」

戦艦水鬼「ソウカ、ソレハタノシミダ……!!」

矢倉「これより復讐を始めよう……待っている……時雨!!!」

第2章 復讐編

16話 夜

17:00 執務室にて

秋人「……」

あの後俺は直ぐに執務室に戻った。そして俺は周りを確認した。よし、誰も居ない……てことは俺は今1人……。——————しやああああああああ!!!!俺は心の中で歓声を上げた。何故なら1人だから、自分の趣味に没頭できるから。まあ、趣味つつても音楽を聴くだけだけ……笑。しかし、誰もいなければ周りに気を使わずに聴ける。——俺がまだがつつり高校に通ってる時は部活仲間と一緒にカラオケとか言ってたな。そんな時は声真似とかしてすぐふざけてたを覚えている。あん時は楽しかった笑笑。

秋人「まあ1人だしiPhoneの音量を最大にして音楽を流すか!ここWi-Fi

あるみたいだし！」

そして俺は趣味の1つである音楽を聴き始めた

—————

うんやっぱり音楽という世界は素晴らしいな!!聴いているだけで気持ちが悪く落ち着く。まあ自分の好きな音楽だけを流しているから、落ちつのは当たり前か。

秋人「次は CH○NCE!でも聴くかな！」

俺はその歌を聴いてテンションが上がってつい歌ってしまった。しかし運悪く、俺がテンションMAXで歌っているのを誰かに見られた。それが誰なのかというところ

大淀「……………」

秋人「……………/ / /!!?’」

——大淀だった。俺は歌っているのを大淀に見られて顔を赤くしたが、逆に大淀は石化していた。俺よりもやばい反応だったので少々戸惑った。どうする？ほつとか——いや声をかけた方がいいな。

秋人「あのく大淀さん？」

大淀「えつと……貴方は……／＼——ハ!?し、失礼しました提督!!」

大淀に誰扱いされた。そして俺はあることに気づく。前髪を下ろしていたことに。

秋人「大丈夫、大丈夫、慣れてるからく」

大淀「ですが、前髪が変わるだけで別人になるなんて凄いですね!」

秋人「よく言われる……。あと、俺がこの髪型にしたらみんな顔を赤くしてどっか行くんだけど、大淀何かわかるか？」

大淀「え!?!……それはですね……——おそらく提督がカッコいいからでは？」

大淀から信じられない言葉が出来た。——は!?!カッコいい!?!絶対嘘だろ!!

秋人「大淀、それ本気で言ってる？」

大淀「勿論ですよ。私は好きですよ、そっちの髪型の方が」

秋人「マジかよ……」

大淀は前髪を下ろしている方が良いと言ってきた。ん？……ちよつと待てよ、そうなるなら、俺のクラスの男子は俺が前髪を下ろしていたとき、嫉妬して敵意を見せてたのかよ!?!これで俺は、今までのことをある程度理解した。

秋人「でも俺、やっぱ横に流してる方が良いや、楽だし。それにこっちの髪型は、主に集中するときとか、変装するときとかにやるから」

大淀「そうですね。ですが、そういうギャップがあるのは良いですね!」

秋人「大淀、褒めるのうまいな!」

大淀「いえいえ」

—————

この後、俺は大淀と一緒に書類の整理をした。大本营から届いた書類の整理だけだったので直ぐに終わった。書類の整理が終わったあと、俺は工廠へと向かった。理由は頼んだ靴を取りに行くためである。

秋人「明石さん出来ましたか？」

明石「あ、提督！出来ましたよ、どうぞ!!」

俺は靴を受け取った。そして中を見ると見た目は普通のハイカットの靴だった。これが本当に水面上でも歩けるのか？

明石「提督疑ってますよね……？実際に試してみてくださいよ。結構いい感じに出来ましたから！」

秋人「分かりました……では港へ向かいましょう」

—————

秋人「では行きますよ……」ガタガタ……

明石「提督大丈夫ですから!!心配しないで下さい！」

秋人「分かってますよ……」

しかしいざやって見ると少々怖い。疑っているとかじゃない……初めてだから怖いのだ。俺は恐る恐る水面に足を乗せた。すると――

秋人「……立ってる……マジで立ってるぞこれ!!」

俺は海の上に立っているのだ。スゲエエエ!!なんか海の上なのに地面に立ってる感じとあまり変わらないなこれ!!!

秋人「うお!!歩けるし普通に走れる!!!後ジャンプも余裕だな!」

明石「だから言ったじゃないですか!――あ、ですがこけたり、尻餅や手をついた瞬間終わりですのでご注意ください」

バシヤアアアン!!

俺はついバランスを崩して海の上に手をついた瞬間一気に逆さまになった。靴だけが水面に浮いていてそれ以外は全て水中というなんともシュールな状態だ。

秋人「ぶはく!!それ早く言え!!」

明石「すみません。ですがまたそういう海の上でも転がれるようなスーツ作っておきますよ……」

秋人「あ、ありがとうございます……」

とりあえずバランスを崩さのように体感を鍛えとかないとな。この後明石は工廠に戻って、俺は引き続き海の上でいろんな動きを試していった。が、結局バランスが崩れるのでまた靴だけが浮きそれ以外は全て水中の形になる。俺は思う艦娘っていいなど。だって普通に海の上で手をついたり、こけても沈まないし最高じゃねーか!!

秋人「もう暗いし今日はこれくらいにしよ……逆に悲しくなってくるし……」

俺は港に上がって直ぐに鎮守府向かった。

北上「あれ〜?提督どうしてそんなに濡れてるの〜?」

鎮守府の中に入って直ぐに北上が俺の異変に気付いて聞いてきた。ここはひとつ嘘

でもつこう。大馬鹿キャラを演じて、馬鹿にされにっこう。

秋人「すぐ近くの港でランニングしてたら、足滑らせて海に落ちた……」

北上「提督嘘が下手だね〜笑」

北上は俺の嘘を、いとも簡単に気づく。こいつエスパーだろ絶対……

秋人「なんで分かったんだよ……」

北上「だって足首辺りから下は全然濡れてないもん〜」

秋人「視野広すぎたろ……」

北上「で、結局何したの〜?」

俺は北上に今までの明石とのやりとりを全て説明した。もちろんこけた状態のこともキツチリと……。

北上「へ〜提督も苦労しているんだね〜!ま、焦らずにゆつくりとやっていけばいいんじゃない〜?焦ってしまえば、出来る事も出来なくなっちゃうし〜」

なんかその言葉、親父に言われた事と似ている気がする。

秋人「北上ありがとな！」

北上「いいよ別に〜じゃあ私はこれで〜。大井つちが待っているからね〜」ノシ

秋人「おう！〜〜〜〜〜とりあえず着替えるか……」

――――

俺は執務室に戻って、まず体を吹き、そして服を着替えた。そのあと何もすることが無かったため、食堂へ行つて夜ご飯を食べた。いや〜スゲー美味しかった。ほんと、間宮さんの料理の上手さは尊敬するな。こんな人をお嫁にしたぐらい。夜ご飯を食べた後はまた執務室に戻った。そしていきなり俺の iPhone に電話通知が来た。知らない番号だな……誰だ？ 一様出てみるか。

秋人「もしもし、櫻川秋人です」

尾形『秋人か！繋がつた繋がつた！』

その番号の主は尾形さんだった。今後何かありそうだし後で登録しておこう。

秋人「それで、どうしたんですか……自分の携帯にかけるぐらいだから相当なものと予想しますが」

尾形『察しがいいじゃないか秋人よ、そうだこれはお前、いやこの鎮守府に関わることじゃ!』

秋人「それは一体どういう……」

尾形『この鎮守府の前の提督が深海棲艦と手を組んで脱獄したのだ! 狙いは確実に秋人、お前の鎮守府じゃろう』

秋人「あーそうですか……どうでもいいです」

尾形『なんか軽いんじゃない?』

秋人「はい。……前任が来ても自分がいるじゃないですか、尾形さんも知っていますよね? 俺の身体や力のこと。それに前任を殴れるチャンスなんですから最高じゃないですか。笑笑」

尾形『はあ……そうだったな。心配していた私が馬鹿だったよ……。じゃが用心はしておけ、分かったな?』

秋人「それは大丈夫です。俺は手を抜きますが、油断したことが一切ありませんので」
ニヤ

尾形「秋人らしい答えじゃな。分かった私も随時秋人に情報を伝えるからそのつもりで頼む」

秋人「了解です！では」

俺は尾形さんとの通話を切った。近いうちに前任とタイマンか……上等じゃねーか！あ、でも前任の奴、俺のこと知らないよな……なら変装でピエロの格好してチエーンソー持ったら流石にビビって帰るんじゃないかね？メル○リで買って試してみようかな爆笑。

時雨「笑い方が怖いよ秋人……」ジト目

秋人「うおおお!!時雨いつから居た!?!」

時雨「秋人が電話に出たぐらいからだよ」

秋人「もう最初からじゃないですかヤダー!!!」

時雨「それより秋人。さっきの話ってー」

秋人「ああ、本当だよ時雨……でも安心しろ俺が絶対に守ってやる！あんな変態クソ爺なんかここに奪わせねーよ」

俺はそう言つて時雨の頭を撫でた。

時雨「秋人……………うん！そうだね！！ところで秋人、約束は守ってもらうから／＼！！」
 秋人「……………はあ……………分かったよ素直についていくから……………服引つ張んな！」
 時雨「引つ張るのを止めると逃げるじゃないか……………／／」

そして俺は安定に時雨と2人でに入渠のはずだった。中に入れば、誇れる一航戦の方々から駆逐艦まで、いろんな艦娘が入っていたのだ……………俺はその瞬間全力で逃げようと試みたが、なぜか加賀さんだけが俺の動きについて来たので捕まってハーレム入渠が決定した。後になつて聞くと、時雨以外は全員お酒に酔っていたらしい。てか誰だ！！駆逐艦たちに酒飲ませた奴!?完全に未成年の身体だろうが!!俺はお酒の主犯を恨んだ。

—————

金剛「oh カル○スウオーターと間違えてカル○スサワーを買ってしまったネ☆」
 榛名「大丈夫ですよお姉様、失敗はつきものです!!」

比叡「お姉様と榛名！私の料理の味見して下さい！」
金剛&榛名「!？」

バチが当たるといふのはこういう事だ。by 作者 b

17話 日課体験

戦艦水鬼「オイ、ジュンビハデキタノカ……」

矢倉「もうそろそろだ……それよりもまずは新しい提督を先に処分しよう……！」

戦艦水鬼「ソウカ……！」

矢倉「もうすぐで私の時代がやって来る……!!」

6月2日 6:00

俺のiPhoneのアラームが鳴った。目覚めは……あーもう言うのめんどくさいから良いや。まあ身体がだるくないだけは何言っておこう。俺はいつものように動ける格好に着替えて静かに部屋を出た。俺は外に出てある程度ストレッチをしてからあることに気づく。

秋人「あれ、睦月の奴絶対来るって言ったのにいないじゃんか……」

睦月「何言ってるんですか、提督！ちゃんと居ますよー!!」

秋人「うわあああ!?!急に声掛けて来るなよ……」

時雨「秋人、それは流石に酷いよ」

夕立「提督さん酷いっばい!」

吹雪「そうですよ!」

如月「流石にそれはね……」

響「やっぱり生かしておくのが間違이었다ね」

秋人「響、アンタだけ殺意が湧く……」

暁「ちよつと提督!それがレデイに対しての態度なわけ!」

雷「喧嘩するほど仲がいいって言うんだから別にいいんじゃない?」

電「なのです!」

秋人「それにしても睦月、結構連れて来たんだな……」

見るとこここの鎮守府にいる駆逐艦全員が来ていた。どう説明したらこんなにも集まるんだよ……。

時雨「トレーニングと聞いて」

吹雪「同じです」

夕立「時雨ちゃんが行くから」

如月「睦月ちゃんが行くから」

響「提督を虐めれると聞いて」

秋人「うん響、逆に俺がスポーツで虐めてやるよ」

響「冗談だよ」

暁「レディになれると聞いて」

雷「お兄ちゃんがいるから」

電「雷ちゃんと同じなのです」

それぞれに合った理由をつけたわけな。流石睦月だな誘い方がお上手なこと……。しかもみんな動きやすそうな格好で来てるし、大事なことはちゃんと伝えてる。案外しつかりしてんだな。

睦月「提督、それで何するんですか？」

秋人「ランニングだよ。それじゃあ今から始めるからみんなしつかり付いて来いよ」

駆逐艦「ちよつ、早いよ（のです）!!!」

俺は日課である早朝ランニングを始めた。後ろから付いて来てるみんなは、早いだの、もうちよつとゆつくりだの、ギャーギャー文句を言ってきたが、しつかりと付いて来ていた。ただ響は横に並んで俺を見てニヤニヤしながら走っていた。殴りたい、この笑顔……。そしていつものゴール付きの人工芝に到着。みんなすでに息が上がって近くのベンチに倒れ込んでいた。ただ響を除いて。

響「このくらいは、あの時と比べると楽なものだよ……」

秋人「そう言っているわりには身体は正直に反応してるみたいだけど？」

響「……………座って来るよ……」

秋人「素直でよろしい」

俺はベンチに座りに行く響を見送ってからリフティングを始めた

side out 秋人

side 時雨

僕が秋人のランニングがきつくてベンチで休憩していると、秋人はいきなり足でボールを上げだした。凄い……足でボールを自由自在に操ってる。そんな秋人を見て僕は、見惚れてしまう。――――僕も出来るかな……。

時雨「秋人！」

秋人「お、どうした時雨。息は整えたのか？」

時雨「うん、もう大丈夫だよ！それよりもそれ僕にもやらせてくれないかな？」

秋人「おお、いいぞ！」

秋人は笑顔で僕にボールを渡してくれた。僕は張り切って秋人がしていた事をやってみた。が、うまくいかない。それどころかあちこちにボールが飛んでいく。はつきり言って難しかった。

時雨「うわあ！そっちじゃないよ！――――いたっ！」

秋人「まあ、初めはこんなもんだから仕方ないよ時雨」

時雨「む……」

雷「ちよつとお兄ちゃん！それ私にもやらせろおお〜!!」

吹雪「私もやりたいです！司令官!!」

睦月「睦月も睦月も〜!!」

如月「睦月ちゃん、怪我したらダメよ！」

気づけばみんな秋人がやっていったものに夢中になっていた。だけどもみんなも張り切ってやっているけど。ボールがあちこちに飛んで言ってしまう。秋人はどうやって足であんなにボールを扱えるようになるんだろう。今度秋人にボールを借りて練習しようかな。

響「ねえ秋人。私もやって見たい」

秋人「じゃあ俺のボール取ってみろ」

響「いいよ。すぐに奪ってあげるから、命ごと」

秋人「上等だ。かかって来い！」

また響は秋人に喧嘩をふっかけて来たよ……大丈夫かな。と思っていたけど、響は普通に秋人に遊ばれていた。響も負けずとボールを奪いに行っているけど、秋人が簡単に

かわす。僕、だんだん響が可哀想になって来たよ。

響「秋人降参。取れないよ……代わりに！」

ドカアアアン!!

時雨「響!?!秋人に向かつて何やってるのさ!!」

響「大丈夫だよ時雨。秋人は艦娘と人間のハーフ多分今の砲弾も——」

秋人「そう来ると思ったよ……響」

秋人はそう言つて響が撃つた砲弾を地面に落とした

響「ほらね」

時雨「だからつて限度があるよ!!!」

みんなも今のでポカーンとしたみたいだし。けどその空気から助けたのは秋人の言葉だった。

秋人「みんなもう時間だし帰るぞ〜！」

駆逐艦「ええ……」

秋人「ゆっくり走ってやるから……」

駆逐艦「………はい」

その後秋人は本当にゆっくりと走ってくれた。みんなと話しをする余裕があったから帰りは楽しかった。明日からも秋人の日課についていこう！僕はそう決めた。

side out 時雨

side 秋人

15分の道のりを30分かけて鎮守府へ着いた。そして俺たちは固まった。理由は黒いスーツを着たSPみたいな男が何故か鎮守府の前に立っていたからだ。

吹雪「司令官あれ誰ですか？もしかして大本営の人とか〜」

秋人「あんな奴見たことがない。ちよつと待つてろ俺が一応聞いてくる」
暁「ちよ、ちよつと！提督!!」

—————

俺は知らない男に近づいた。男もそれに気づき俺に近付いてきた

秋人「あのくどうー」

男「おい！お前!!提督はいるか」

秋人「提督がどうかしたのですか？」

男「早く教えろ！痛い目に遭いたくなかつたらな!!」

秋人「は……？」

男はそう言って銃を出してきた。何こいつ……喧嘩をふっかけてきてると見た。
じゃあ俺も容赦は無く殺つちやうよ☆！

男「おい聞いてんのかクソガキ！」

ブチッーーーーー

俺の怒りパラメーターが最大限に達した。

秋人「……………おい、おっさん……………提督を出す前に、まず俺を通してからにして頂きたいですね……………」笑顔

男「へ? ………………」

秋人「うーん……………○っちやうよ☆」

男「……………(声にならない声)」

俺は男をフルボッコにした。だってガキだからって舐めてたんだから仕方ない。それに俺に向かって銃向けてきたんだからなおさらだ。取り敢えず男の体を縄で縛って晒しあげた。

……………

秋人「で、おっさんは結局、提督に何したかったの? 下手な嘘ついた瞬間鉛玉でばい

しちゃうから☆」

男「ひッ……………いい、依頼されたんだよ！変な男に…………」

秋人「依頼ね。でその男の名前は知ってる？」

男「知らねーよ！…………ほ、本当だって！！だが、復讐のためとか変なこと言ってたよな…………」

秋人「あー、成る程ある程度分かったからいいや。おいおっさん！こんな依頼受けるんだつたらもつといい以来受けるよ！金の欲しさに危ない道に進んでんじゃねーよ！」

男「!?……………お前は強いな…………」

秋人「まーな、一応この鎮守府のガードマンとしてやってるからな（大嘘）」

男「ガードマンっ……………か。そりゃ強い訳だ……………早く警察を呼んでくれねーか？」

秋人「いや、それはおっさんから行って自首して来い！」

男「!?……………悪かったな……………あとありがとう！」

俺は男を解放した。男はすぐに警察の方へと向かって行くのが見えた。話すと結構いい人だったのになあ、勿体ない！！その後再びみんなの所に戻って色々と説明した。

睦月「そんな……………じゃあいつか」

吹雪「あの人が……帰って来るんですね」

如月「……」

響「まあ、あいつのことだから、いつかは来ると思っていたけど……まさかこんなすぐ……」

電&雷「うう……」

暁「そんな……アイツがまた……」

夕立「時雨ちゃん……」

時雨「大丈夫だよ夕立……」

みんなは怯えてしまった。仕方ないか……トラウマがもどつて来るんだから……

秋人「みんな大丈夫だ!!俺がいる、俺がみんなを守ってやる!だから怯えるな!あとクソ前任に俺たちは変わったって事を、見せつけてやろうぜ!!」

時雨「もちろん僕はそのつもりだよ秋人!」

睦月「睦月の力を、アイツに見せつけてやります!!」

吹雪「そうですね司令官!私は受けてたちます!」

如月「私も、もう逃げないわ!」

夕立「この鎮守府をアイツなんかに奪わせないっばい!!」

暁「へえ、言うじゃない提督!」

雷「やっぱりお兄ちゃんはかつこいいね!」

電「お兄さんかつこいいのです!」

響「逆に私達が提督を守ってるかもよ?」

秋人「それが本来の鎮守府のはずでは?笑」

響「……ふ……そうかもね。うちの提督が馬鹿なだけだね」

秋人「馬鹿は余計だ」

みんなの機嫌が悪くなったしそろそろ鎮守府に戻ろう汗流す時どうしようかな……。あ、もう一つ入渠ドックあったんだ。全開放してたの忘れてた。この際、男女分けよう。

秋人「おーいみんな中に入るぞ〜」

駆逐艦「はーい!!」

18話 最悪な形

駆逐艦達と日課の後、俺はひとまず入渠ドックに行つて汗を流した。そしていつもの髪型にセットしてから食堂へ行き朝食をとつた。朝食をとつた後、俺はすぐにみんなを集めた。今日行う内容を言うからだ。

秋人「全員揃つたなく。じゃあ今から今日行う内容を発表する。今日は遠征に行つて資源確保な！」

艦娘「ええ…」

俺の一言にみんなはめんどくさそうな声を上げる。

秋人「なんで急にお前らはだらけるようになったんだよ!? いつもなら

“はい!”

とか言うのに…」

龍田「流石に遠征はねえ」

榛名「いい思い出がありませんし……」

大井「それに、資源はまだいっぱいあるじゃない！」

秋人「仕方ない……じゃあ行ってくれたやつに間宮のアイス券あげるから……」

艦娘達「行きます!!」

期待通りの回答、ありがとうございます。何故彼女達は間宮アイスといった瞬間、一気に気持ちが変わるのだろうか……。

秋人「よし！じゃあ俺にじゃんけん勝った奴の中から先着6人な！」

艦娘「はい!!!」

—————

そしてじゃんけんして決まったメンバーはというと。天龍、暁、加賀、響、時雨、母さんの6人だった。こう見たら一航戦は、食べ物賭けになると本気を出すという事が分かった。そして、何かと時雨は “運がいい説” が見えてくるな……。

天龍「よっしゃああ!! 間宮アイス、ゲットだぜ!!」

秋人「あ、その代わり失敗したら無しだからな？」

赤城&天龍「そんな!!」

天龍が俺の一言に驚いて、突っ込んできた。何故か母さんもー

秋人「そりやそうだろ!失敗してるのに、そんなほいほいとアイス券あげたら、じゃんけんに負けたみんなはどう思うよ?」

艦娘達(流石提督…分かってくれてる…)泣

赤城&天龍「うッ……」

秋人「だから勝った6人は成功できるように、最善を尽くすよーに」

6人「はい!」

秋人「それと天龍、お前仲間の指示を無視した行動を取った時点でアイス券無しな」

天龍「わ、分かってるよ!!そんなことツ!!」

秋人「なら良し。じゃあみんな行ってこい!」

俺は6人を見送った。

—————

その後はみんなのトレーニングの様子を見学しに行ったり、駆逐艦達の授業の見学に

行った。そして何故か、俺まで授業を聞く羽目になったことは黙っておこう。

吹雪「司令官、聞いてみてどうでしたか？」

秋人「うん、全く分からなかった。それよりも、ここに座るだけで俺の元気が吸い取られて行ったわ…学校がそもそも好きじゃなかったから」

極端すぎた。細かく言うと俺は、学校の授業が嫌いなのだ。それ以外は楽しい、休み時間とか昼休みとか部活とか。

吹雪「そうなんです…」

秋人「うん…」

何故か吹雪は残念そうに言ってきた、吹雪には申し訳ないことを言ったかな？でもまあ俺は気にしない、だってこれはあくまで俺の感想だから、周りの空気に合わせるのも大事だか、自分の考えを持つことも大事だ。

秋人「じゃあ俺は工場に行くから、吹雪も引き続き授業頑張れよ！」

吹雪「！ー！ーはい！司令官！！」

俺はせめてもの謝罪の証として吹雪の頭を撫でた。吹雪も頭を撫でられたことによつて、機嫌が良くなつた。うーん駆逐艦達は頭を撫でられると嬉しいのかな？まあ随時試してみるか……いやこれはあくまで試すためだからな？決してボディータッチをしたいからとかそういう訳じゃないからね！？そんな考えは置いといて俺は工廠へと向かつた、なんか明石が作ると言つていたスーツが気になるからー！ー！

秋人「明石さんく」

明石「はい、提督！どうしました？」

秋人「以前言つてたスーツは作つたのですか？」

明石「あー、その事ですか！それなら大丈夫です、もう完成しました！」

秋人「マジすか!？」

明石「マジです！」

だつたら幾ら何でも早すぎない!？あ、そういえば靴も大体2く3時間で出来たからそんなもんか。だけど流石明石だな……これはマジで “明石の科学は世界

「イイイイイ！」　　と言うべきだな笑。

秋人「一体どんな物ですか？」

明石「これです、どうぞ！」

俺は明石からスーツを受け取った。一旦見るとウエットスーツなのだが、普通のウエットスーツと違ってめちやくちや生地が薄くなっている。厚さ的にはインナーぐらいだろう、おそらく動きやすくするためにこれぐらいにしたと思われる。それと黒色のスポーツ手袋も一緒に置いてある。何故がメーカー付きなのが気になるが……。

秋人「明石さん、ありがとうございます！では早速試してきますね！」

明石「待つてください提督！私も行きます！」

秋人「では、明石さんは先に港に向かっています、自分に着替えてきますので」
明石「分かりました！」

俺はスーツに着替えるために、一旦明石と別れて執務室に戻った。そしてスーツに着替えて、まず感覚を確かめた。うん、感覚的にはインナーとロングスパッツを同時に着

ている感じだ、それに伸縮性があつてかなり動きやすい。

秋人「流石にこれだけで外に出るのはヤバイな……よし、いつも日課で着てる服を着よう！」

だつて身体のラインがくつきり見えているから。俺は日課で着る服を着て港に向かい、明石と合流した。

秋人「すいません明石さん！待たせてしまつて……」

明石「いえ、私は気にしていませんので大丈夫です！」

秋人「そうですか、なら良かったです。それでは早速行きますよ、明石さん！」

明石「はい！」

俺は速攻海へ飛び降りた。だつて、立つというのは確認済みだから、そして綺麗に着地を果たす。ここまでは予想通り、問題は寝転べるかどうかだ、明石から付け足して貰ったスポーツ手袋をつけて、覚悟を決めて寝転んだ。——————なんという事でしょう!!ちゃんと水面で寝転べているじゃあないですかああああ!!!!!!

秋人「うおおおおお!!! 俺今海の上で寝転んでる!!! 人類が到達できなかつた夢を俺はやってるううう!!!」

明石「良かった成功ですな!」

秋人「しかもこの手袋着けたら、水面に付いても沈まないぞ!」

明石「それは良かったです!」

てか本当に良かった! もうここまで来たら人間の時代くるんじゃないかね? と俺は思ったが、よくよく考えると普通の人間は自分よりも身体がタフじゃないから危ないな。つかこんな事すんの俺だけじゃね? と逆に思ってしまう。その後俺は、いくつかの動きを試して、海から上がった。

明石「それにしても提督、何故こんな物を?」

明石は不思議そうに、俺がこれを作って欲しかった理由を聞いてきた。そういえば明石には言つてなかつたな。てかみんなにも内緒だったわ笑。そうか…理由か、明石には言つてもいいか、作つてもらつた訳だし。

秋人「理由ですか？それは――――」

俺は明石に理由を説明した。みんなと、艦娘達と一緒に戦う為だと。

明石「提督!!それは本気で言っているんですか!!?」

秋人「はい本気でですよ明石さん」

明石「それは危険すぎます!!人間の提督が私たちと一緒に戦うなんて……」

秋人「ですが明石さん達も危険な目に遭っているのに、自分だけ安全な場所であつてただ指しを出すだけなのが嫌なんです。だから自分は、みんなと同じ立場にいて一緒に戦いたいです。それに自分はその人間ではありませんしね」

明石「どういうことですか？」

秋人「自分は艦娘と人間のハーフなんです。だからある程度の砲弾は弾けるんですよ」

明石「!?―――そ、それでもダメなものはダメです!」

ちよつ……こんなに言ってもダメなのかよ……。仕方ない、ここは最終手段のあれを

やるか。

秋人「明石さん、一回だけ！一回だけでもいいんで、みんなと一緒に出撃させて下さい！！このとおりツ！！」土下座

そう、DO☆GE☆ZAだ。これをして未だに許されないことなど無かった。だから明石もこれなら許可してくれるだろう。

明石「な!?……はあ……分かりました。ですが一回だけですよ……?それ以降は私が決めますからね！」

案の定明石は許可してくれた。やはり「DO☆GE☆ZA」は最強だ。

秋人「ありがとうございます明石さん!!では自分は一旦……」

大淀「提督ツ!!」

俺が明石に執務室に戻ると言いかけた時、大淀が焦りながら俺を呼んできた。一体ど

うしたのだろうか……何か嫌な予感がする。

秋人「大淀、どうしたんだよそんなに焦って」

大淀「遠征に行っている艦隊から敵の襲撃にあつたと報告があがりました!!」

明石「!?!」

秋人「ちよつと待て、大淀!! 本来、遠征つて安全区域で行うはずなんじゃ……」

大淀「はい……ですから敵の襲撃なんてありえませんか。しかし……」

秋人「実際それが起こってるって事か……敵艦隊の情報が入ってる?」

大淀「はい、それも戦艦棲姫、駆逐棲姫、空母水鬼、駆逐水鬼、空母ヲ級改flagship、雷巡チ級flagship、というありえない編成ですツ!!!」

秋人&明石「!?!」

マジかよ……しかも、ほとんどの敵艦が棲姫や水鬼じゃねーか!! やつぱり俺の嫌な予感の中してしまった。しかも、史上最悪な形として……

明石「そんなツ……!!!」

大淀「提督、支給援護の艦隊をお願いします!!」

秋人「ああ、分かった！艦隊の編成は大淀に任せる……だから決まり次第すぐに出撃させてくれ！俺は一旦執務室に戻る」

大淀「分かりました！」

俺は急いで執務室へと向かった。そして執務室から自分の護身用である日本刀を持ち出し、再び港に戻った。

秋人「大淀！艦隊は！」

大淀「今呼びました！」

大淀がそう言って時間が経たないうちに直ぐに援護の艦隊が集まってきた。そして集まったのは榛名、瑞鶴、翔鶴、龍田、大井、吹雪の6人だった。

榛名「大淀さん、どうしましたか？」

龍田「何か大変な事でもあったのかしら？」

大淀「実は……先程遠征に向かわれた艦隊から敵襲に遭っていると報告がありました！ですから皆さんには至急救助に向かって欲しいのです!!」

吹雪「遠征で敵襲って……そんなのありえないはずじゃ……」

秋人「けど、実際に遭っているんだ……だから早く助けに行かないといけない！まあ何が原因なのかは大体は予想は付くけどな……」

そう予想はつく、こんな事するのは――

瑞鶴「一体何が原因なの？」

秋人「おそらく前任……」

艦娘「!？」

榛名「そんな……いくらなんでもこれはツ!!」

龍田「許せないわね〜」

秋人「だからみんな、直ぐに遠征に行った6人の救助に向かうぞ！旗艦は龍田、お前に任せた！」

龍田「分かりました提督」

秋人「それじゃ俺も準備しますかな〜」

6人「……へ？」

俺もみんなと一緒に出撃の準備をしようとした瞬間、6人から気の抜けた声が聞こえた。まーそうなるわな。だって提督が出撃しようとしているんだから。

吹雪「司令官、今なんと……」

秋人「だから俺も準備してみんなと一緒に助けにー」

6人「ダメです!!!」

俺が最後まで言い終わる前にみんなは口を揃えて言ってきた。そして何か威圧を感じる……はつきり言ってる怖い。

秋人「大丈夫、大丈夫！俺、海の上に立つことが出来るようになったから！」

大井「そういう問題じゃないわよ！何で提督が行くの、死に行っているようなもんじゃない!!」

榛名「そうです提督！私達の事をすごく大事に思ってくれていることは、榛名にも分かります……ですが、提督が行くのはおかしいです！」

みんなは必死に俺の出撃を止めた。だけど……それでも俺は助けに行く、守るって約

束したから——

秋人「じゃあ榛名、話を変えるけど、提督は何の為に存在すると思う？」

榛名「そんなの、私達をまとめたり、出撃の指示を出したりするためにあります!! それ以外に何が——」

秋人「守るためだよ」

翔鶴「どういう事でしょうか、提督？」

秋人「それはな、出撃とかでき、撤退指示を出す時があるんだけど、何で分かるか？理由は艦娘を守るために出しているんだよ、沈まないようにや、無理しないようにな。おそらく艦娘って言うのは全てじゃないけど、自分を兵器として見てる、だから敵を倒すために、自分の限界を超えてまで戦うんじゃないかって俺は思うんだ。そして、耐えきれなくなつて沈んでしまう……——だからそうならない為に提督は存在しているんだよ。まあ瑞鶴と翔鶴以外はピンとこないと思うだろうけど」

吹雪「司令官……」

秋人「だから俺は艦娘を、ここの鎮守府にいるみんなを守りたいんだよ！鎮守府内で指示を出して守るのじゃなくて、みんなと一緒に場所、海の上で!!!」

そう、守りたい、誰かが居なくなるのはもう……

龍田「それでも私達みたいな丈夫な身体を持つても、提督には深海棲艦を倒す力なんて……」

秋人「無い、か……だったら……」

ズバアアアアアン!!!!

俺は片手で8割程度の力で刀を振り下ろした、そしてその衝撃波が直径15〜20mぐらいまで広がった。

6人「!!」

秋人「これでもダメか?」

大淀「提督……貴方は一体……」

秋人「ちよーつと艦娘の力を持ったただの元高校生、だよ」ニヤツ

俺は彼女たちにそう告げる……

秋人「俺も助けに行くから大淀、時雨達の状況を随時報告してくれ！」

大淀「分かりました！では、提督は皆さんと一緒に助けに行つて下さい!!」

秋人「ああ、——————龍田行くぞ！」

龍田「仕方ありませんね、行きましようか提督！」

大井「でも私はまだ認めたくせぬわいよ！」

秋人「言われなくても分かつてるよ、そんなこと」

こうして俺達はgdgdしながらも時雨達を助けに行つた。—————待つてろみんな、俺が絶対に助けてやる！誰一人沈ませねーよ!!

大淀「本当に大丈夫でしょうか……」

明石「まあ信じて待つしかありませんね」

19話 絶対的絶望を覆す希望

天龍「あああゝー……資源確保って案外しんどいな……」

響「これが以前までの私達の気持ちだよ天龍」

暁「それにずっとやらされていたんだから、ほんとあり得ないわ!」

僕たちは資源確保の為に遠征に行っている、そして成功したら間宮アイスが貰えるという秋人からのご褒美がある。だから僕たちは楽しくやっていた。

時雨「だけど秋人が提督になってからは、僕は別に嫌ってわけじゃないよ、間宮アイスがあるから!」

赤城「それは成功したらの話ですよ時雨さん……流石は私の息子秋人……ヤツテクレマスネ……!」

加賀「赤城さん黒いオーラみたいなのが見えていますよ」

赤城「ハッ……! 私としたことが、秋人に腹を立ててしまうなんて……私もまだまだですね」

赤城さんが秋人を少し恨んでいた、でも直ぐに平常心に戻った——赤城さんが怒るところ久しぶりに見るけどやっぱり怖いね。それよりも今日はどの資源を確保しないといけないのかな？秋人は何も言ってくれなかったから分からないよ……

時雨「みんな、資源確保はどうしようか？」

響「今回は弾薬優先で行こうか時雨、帰還後の補充を安心して出来るように」

時雨「確かにそうだね！分かったよ響！」

僕は響の提案で、弾薬の確保に取り掛かった。

天龍「思った以上に落ちてるもんだな、弾薬って」

言われてみればそうだ、確かに思った以上に落ちている気がする。これなら早めに帰還できるね。

暁「……何か変じゃない？資材が余りにも落ちすぎているわ……」

響「確かに……これは多すぎるね。ひよつとしたら何かの戦いの後かもよ、それもとでも大きな……!!みんな避けて!!」

ドオオオオオン!!

6人「!?」

響がいち早く知らせてくれたおかげで、奇襲を間一髪で回避することができた。後コンマー秒遅れていたら、ただ事では済まなかった。

赤城「ありがとうございませす響さん……今の攻撃は一体……」

戦艦棲姫「チツ!避ケラレタカ……マアイイ」

奇襲の主犯の姿が見えた瞬間僕達は、驚愕した。何故なら戦艦棲姫だからだ、そしてここは安全海域、絶対に敵艦隊がこない場所なのだ、棲姫ならなおさらだ。だけど今僕の目の前には戦艦棲姫がいる。どうして……

天龍「お前は、戦艦棲姫……なんでこんなところにいんだよッ……!!」

戦艦棲姫「命令ダカラダ。才前タチノ元提督ノナ」

天龍「あの野郎……深海棲艦とまで手を組みやがったのか!!」

暁「ありえないわ……!!」

やっぱり前任の仕業だったんだね……許せない……だけど……

時雨「だけどいくら棲姫でもこの人数だったら……」

戦艦棲姫「誰ガワタシ1人ダト言ツタ?才前タチ、出デコイ!!」

6人「!!」

僕は、いやこの場にいる全員が目を疑った。何故なら出てきた敵は、駆逐棲姫、空母水鬼、駆逐水鬼、空母ヲ級改flagship、雷巡子級flagship、なのだから。

暁「ひッ……」

響「これはマズイってレベルじゃないね……」

戦艦棲姫「コノ弾薬ヤ鉄ノ残骸ハココニ来タ、艦娘ノ末路ダ!!」

天龍「まさか、ほかの鎮守府の艦娘までツーー!!」

戦艦棲姫「ソウダガ? イヤハヤ愉快ダツタゾ!! 艦娘ガ沈ンデイク姿ヲミルノガ!!」

ドカアアアン!!

僕は気づけば戦艦棲姫に向かって砲撃していた。許せない…僕達の鎮守府ならまだ分かる……だけど全く関係の無い鎮守府の艦娘までもを沈ませるなんて!!

時雨「許さない……僕は絶対に許さないツ!!!」

赤城「時雨さん!!」

戦艦棲姫「ホウ、随分ト気ガ強クナツテイルデハナイカ。アイツノ話ト全く違ッテイタヨウデヨカッタゾ!!! 楽シクヤレソウダ!! 才前タチユクゾツ!!!」

天龍「ちツ……やるしかねえ!!!」

響「暁は、私の後ろに隠れていて!」

暁「わ、私も戦える……!! お姉ちゃんなんだからツ!!!」

加賀「赤城さん行きます!」

赤城「分かっています、加賀さん!!」

そして僕達と、深海棲艦との戦いが始まった。

side out 時雨

side 秋人

秋人「……大淀、距離的にあとはどれぐらい?」

俺たちは時雨達を襲撃から助け出すために出撃している。そして俺はかなり焦っていた。相手が相手だからだ、ボス級の深海棲艦がほとんどの編成だなんて、聞いたことがないし、尾形さんの話でも出てこなかったぞッ!!

大淀『あと2km程です提督!』

龍田「もうそろそろつとところかしら?」

大淀『はい、ですから見つけ次第直ぐに————ツツ!!?』

大淀が最後まで言い終わる前に、恐怖と焦りが混ざったような、そんな声を一瞬だけ漏らした。何か嫌な予感がする……頼む俺の思い込みであつてくれッ!!

大井「どうしたの大淀さんッ!!」

大淀『天龍、暁以外は…沈没……寸前と報告が上がりました…』

7人「!!」

やっぱり最悪の形で的中した……沈没寸前…マジかよッ!!

瑞鶴「そんなッ!」

大淀『このままではおそらく飛ばさないと間に合いませんッ!!』

嘘だろ……ここまで来て……こうなったらッー

秋人「報告ありがとう大淀!だったら、俺が全力で飛ばして間に合わせてやる……」

榛名「提督幾ら何でもそれは……それに私たちにだって……」

秋人「大丈夫だ榛名。7分……7分で行ってやる……だからみんなは後から合流しろ！
頼んだツーーー」

そう言つて俺は、海の上を全力で走り出して時雨達を助けに行つた。——母さん、天龍、響、暁、時雨、加賀さん。絶対に助けるから、待つてろツ……！

榛名「……行っちゃいました……」

大井「何よアイツ、ホント人の話を聞かないんだから……こんなスピードが私たちの限界なわけないのに……」

龍田「流石提督ね〜」苦笑い

翔鶴「確かに、提督らしいですね」ふふっ

吹雪「アハハ……」

瑞鶴「——でも、こうしてる暇なんて無いわ！ 私たちも早く助けに行かないとツ！！」
龍田「そうね瑞鶴さん〜！ みなさん私に続いて下さい〜！ 飛ばしますよ〜！」

5人「分かりました（分かったわ）！！」

side out 秋人

side 時雨

時雨「はあ……はあ……はあ……はあ……」

戦艦棲姫「オイ、ドウシタ？アレホド言ツテオイテコンナモノカ？」

時雨「……ぐっ……！」

僕たちは敵艦隊に全く歯が立たない状態でした。僕たちは全員大破に対して相手はほぼ無傷な状況……。はつきり言つて絶体絶命だ……。だけど！

時雨「ま……だ……だよ！まだ僕は……戦える！」

僕は諦めない、絶対に！たとえそれが不可能に近くても——

赤城「時雨……さん」

戦艦棲姫「ホウ、随分トタフダナオマエハ。デハ才望ミ通り、痛ブツテヤル！」

戦艦棲姫はそう言って僕に砲弾を飛ばして来た。僕は重たくなった身体を必死に動かして砲弾を避けた。だけど、身体は言うことを聞かず、砲弾が当たってしまう。

時雨「……………うあああああッッ……………!!」

赤城「時雨さあああああん!!!」

僕は、砲弾に直撃して数メートルぐらい飛んだ。それでも僕は起き上がろうとしたけど、身体が拒絶していて起き上がれなかった。それと同時に徐々に、沈んでいく感じがした。戦艦棲姫も僕の状態を見て艀装を向けてきた。僕ももうここまでかな……………。

戦艦棲姫「コレデオワリダ」ニヤッ

天龍「やらせてたまるかああああ!!!」

響「そう簡単に沈ませないッ!!」

戦艦棲姫「無駄ダ!!」

響と天龍が戦艦棲姫に攻撃することなく駆逐水鬼や空母水鬼に砲撃された……………。

……。

響「素晴らしいッ……!!!」

加賀「そんなッ……!!!」

戦艦棲姫「フハハハハッ!!! マズー人！」

僕は暁を助けることができなかつた……守るって決めたのに……。もうダメだ
……僕たちはここで……

戦艦棲姫「次ハオマエタチダ」

そして再び僕たちに艤装を向けきた……助けて……

時雨「……助けて……秋人……」

戦艦棲姫「沈メツツ!!!」

??「……おい……何勝手に沈ませた気でいんだよ……」

戦艦棲姫「!!」

暁を砲撃した場所の煙の中から声がした。何処かで聞いたことのある声が……。煙は徐々に引いていき、その声の正体はつきりと現れてきた。そして、その正体が――

秋人「随分と遊んでくれたみたいだな……。あんた」

秋人だった……。秋人が暁を守ってくれた……。秋人が助けに来てくれたツ!!!

秋人「大丈夫か、暁」

暁「提督……。どうしてツ……!」

秋人「みんなを助けるために決まってる……。つたくー時雨達も大丈夫か!助けに来たぜ!」

時雨「秋人……」

天龍「お前……」

加賀「……。提督」

赤城「秋人……全く、頼もしくなって……」

響「まさかもう……秋人に借りを作るなんてね……」

本当に嬉しい、僕はいつのまにか涙を流していた。

戦艦棲姫「ホウ、助けニ来タ……カ。笑ワセテクレルナ、タダノ人間ゴトキガ我々ニ
勝テルトデモ思ツテイルノカツ!!」

戦艦棲姫はそう言つて秋人に砲撃する。

秋人「ちよつと失礼暁」

暁「ふえ!?!ちよつと何やつてるのいきなり／＼／!!」

秋人は暁をお姫様抱っこをして、すんなりと砲弾を避けて僕たちの方へと向かって来た。

時雨「秋人……ごめん……秋人の指示を無視して僕たちは……」

秋人「時雨、今はそんなことどうでもいい。この中で誰一人も沈まなかっただけでも

俺は嬉しかったから！あと、時雨よく頑張ったよ……！！」

時雨「……うん！」

秋人はそう言つて僕の頭を撫でてくれた。やっぱり秋人がいると安心する……。

秋人「そんでみんなも、よく耐えてくれた。後は……俺に任せろ」

天龍「な!?何言つてんだよ……！お前一人だけじゃ無理だ!!ただでさえ俺たちでも敵わなかつたのに……」

秋人「心配すんな天龍。一瞬で、終わらせてやるから……」

天龍「!!……分かつた……」

秋人「よし。みんなは絶対に俺の後ろにいてくれ。そんで母さんと加賀さんはみんなを頼む。流れ弾を艦載機で止て欲しい」

赤城「分かりました秋人！」

加賀「……」無言で頷く

秋人「頼んだ」

そして秋人は戦艦棲姫達の元へと向かう。

響「ほんとに秋人は大丈夫かい……？相手はまだ無傷だよ……」

時雨「秋人だから大丈夫だよ、響！何があっても！」

響「……まあそうだったね！……秋人……信じているよ……」

side out 時雨

side ?? ほぼ会話だけ

秋人「待たせたな、ここからはアイツらに変わって俺が相手だ」

戦艦棲姫「フン、オモシロイ冗談ヲ言ウンダナ！タダノ人間ガ我々ノ相手？ナメラレ

タモノダ……」

秋人「冗談じゃーよ、本気で言ってるんだよ俺は」

戦艦棲姫「貴様ハバカダナ、我々ニ勝トウナンテ100年早イ！」

秋人「だったらこの際はつきり言ってる、ただの人間を舐めん……そんで宣言してやる、ここからが本当の勝負だツ!!!」

戦艦棲姫（!?何ダコノ威圧ハ……ソレニ一瞬、眼ノ色ガ……!）

秋人「時雨達に散々酷い事をさせたんだ、それなりの覚悟は持ってんだろぅな？」

戦艦棲姫「チツ……!!」

秋人「始めようぜ、深海棲艦……。一瞬で、終わらす……」

秋人は横に流していた前髪を下ろして、集中モードに入った。

20話 決着

side ??

戦艦棲姫「一瞬で終わラス…カ。ナルホド、我々ハダイブト、人間ゴトキニ甘ク見ラレテイルトイウワケカ。ダツタラ思イ知レ、貴様ノソノヤル気モ、我々ニトツテハ微塵モナイトイウコトヲ！」

ドオオオオオン!!

そう言つて戦艦棲姫は秋人に向かつて一発砲撃する。しかし、それを秋人は少し笑みを浮かべながら刀で斬り落とす。

秋人「どうした、こんなもんじゃねーだろ？」少し笑う

戦艦棲姫「ホウ、刀で砲弾ヲ斬ルカ。ーーーデハ、ダツタラコレナラドウダ！オマエ達ユクゾ」

戦艦棲姫は連れてきた仲間と共に秋人を砲撃していった。しかし秋人はそれも、刀で砲弾を斬ったり艦載機からの攻撃を避けていったりした。

戦艦棲姫「オマエコソドウシタ人間、避ケテバカリデハ我々を倒センゾ!!」

秋人「別に、ただアンタらの攻撃パターンが知りたかったただだよ」ニヤツ

戦艦棲姫「ソウカ、……フツ」

秋人「急に笑ってどうしたよ？」

戦艦棲姫「イヤナニ、タダ見極ル為ニ刀デ砲弾ヲ斬ツテ防イダトシテモ限界ハアルダロウト思ツテナ。マア我々ニトツテ、ソレハ好都合ダガナ!!」

ドオオオオオオン!!

戦艦棲姫は秋人にさっきの威力よりも倍以上で砲撃した。

戦艦棲姫「コノ威力ナラ貴様ノ刀モ破片ニナルダロウ！」

秋人「ふっ……それはどうかな」

だがこの時、戦艦棲姫は秋人を甘く見ていた。その結果、次の秋人の行動を見て驚愕

することとなる。——秋人は戦艦棲姫が砲撃した砲弾を何も使わずに、片手だけで止めたのだった。

秋人「いつてええ……艦娘と人間のハーフだけど流石に手で止めるもんじゃねーな……これ」

戦艦棲姫「馬鹿ナツ!？」

秋人「大体の攻撃パターンも把握できたし、今度はこつちから行こうか!!」

そういつて秋人は一気に戦艦棲姫に詰め寄る

戦艦棲姫（——速イ!?)

秋人「いくぜ!」『櫻川流 雷斬らいぎり』!!」

『櫻川流 雷斬』、相手に一瞬で詰め寄り、胴体を斬りつける技。斬る瞬間、稲妻の様な斬撃が見える。

戦艦棲姫「チツ!」

秋人「へえ、今の回避すんのか。やるじゃん」

戦艦棲姫「調子二ノルナヨツ!!」

戦艦棲姫は仲間と共に再び攻撃を仕掛けた。

秋人「ふっ…甘いぜ!」

だか秋人はその攻撃もいとも簡単にかわしていく。

戦艦棲姫（ナンダ、コイツノ異常ナ身体能力ハ!?）

秋人「流石に人数的にきついからまずは、アンタの仲間から片づけようか!」

そして秋人はヲ級に一気に詰め寄る

ヲ級「!？」

秋人「まずはアンタからだ、いくぜ『一刀両断』!!」

ヲ級「ツ……」 気絶

秋人「安心しな峰打ちだから。まあ防具はぶつ壊しといたけど……で、まず1人。次!!」

次に秋人は駆逐棲姫に近づいた、が……

戦艦棲姫「ソナ簡単ニ仲間ヲヤラセルト思ウナツ!!!」

戦艦棲姫が秋人に向かって魚雷を放つ。

秋人「だろうと思ったよ!」回避

戦艦棲姫「チヨコマカトツ!!」

side out ??

side 時雨

僕たちは秋人が1人で深海棲艦と戦っているのを少し離れたところで見てい

た。——凄い…僕たちでも敵わなかった敵を、秋人は1人で戦っているのだ。

天龍「すげえ…：…本当にあいつ、1人だけで戦えてる…：…」

響「ほんとに秋人は人間と艦娘のハーフなだけ…？」

加賀「提督…」

みんなも僕と同じことを考えてたみたいだ。——そして秋人は五隻相手に苦しかったせいには分らないけど、こつちに下がって来た。

秋人「はあ…：…流石にここまで飛ばした挙句、5人相手は流石に体力的にきついつての…：1人は倒したけど 笑」

時雨「秋人大丈夫!?!」

秋人「まあ、大丈夫だ時雨。心配すんな、元クラブ生はだてじゃ無いから」

響「確かに言われてみれば、表情と身体は全然大丈夫そうだね。むしろ、まだ全然余裕そうに見えるよ」

!?!——ちよつ、響!?!今の僕たちは傷だらけだよ!?!何で秋人に上からの態度なんだ

い!?

秋人「響、大怪我負ってるお前が言うなよ……まああなたがち間違っではないけどさあ……。……。……。……でも、これ以上やるとマジできつくなるから一気に決めるわ……」

暁「……。何をするの提督?」

秋人「まあ見てなって!……。……。……んじゃあ、やるか……」

秋人がそう言い終わったあと、目の色が黒から赤へと変化した。いったい秋人は何をするのだろうか……。そう思った瞬間秋人の周りから黒いオーラの物が見えたような気がした。それも何処かで見たとのことのあるようなそんなオーラを。

side out 時雨

side 秋人

俺は目をつぶり徐々に力を溜めていく、それにより俺の周囲に風が発生した。

秋人「んじや一気に決めてやるよ、戦艦棲姫」

戦艦棲姫「ー！?。貴様何ヲスルツモリダツ!!」

秋人「それは、受けてからのお楽しみだ。ー！ー！ー！いくぜ……『アツ』!!!」

俺は一気に目を開いた。俺の後ろ以外、風が広がって戦艦棲姫達を襲う。

戦艦棲姫「ー！ー！ー！ツツ!!?ナンダツ……コノ……異常ナ圧力ハツ……」

秋人『アツ』、俺の威圧を相手に直接押し付ける俺唯一の技だ。範囲は約10mくらいだな」

戦艦棲姫「ツツツ!!ー！ー！身体ガ……」

秋人「動かない……だろ?この技は圧力によつて動きを封じる効果があるから。まあでも俺はまだ5割も出してないけど……」

戦艦棲姫「ナン……ダトツ!!」

秋人「だつて一般の人だったら3割程度で失神寸前までになるから」

戦艦棲姫「私ガタダノ人間ト一緒ノレベルダト!?!ー！……コンナモノツ!!!」

戦艦棲姫は俺のアツに抗がって体を動かす。やっぱり一般の人と比べるのは違うよな。だって相手は人ではなく深海棲艦なのだから。

秋人「だろうな。いいぜ、だったら5割!」

俺はもう一度、大きく目を開いた。

戦艦棲姫「…グオ…ツ!ハア…ハア…ハア…」

秋人「流石に限界だったか、アンタ以外は」

俺が5割の力でアツを出すと戦艦棲姫以外全員が倒れ込んだ。やっぱり耐えきれなかったか。まあ俺は好都合だけど、だって残るは戦艦棲姫ただ1人なのだから。

戦艦棲姫「!?…オマエチツ!!」

秋人「安心しな気を失っただけだよ、別に死んじやいないから。——これでやっとアンタ1人だけになった、だけど動けないから一気に終わらす!!!」

俺は戦艦棲姫に距離を詰めに行った。しかし————

戦艦棲姫「ツ……………私ヲ……………舐メルナツツ!!」

——戦艦棲姫が叫んだ瞬間、俺に向かって凄いい風が襲ってきた。まるで俺のアツのよ
うに、だがアツのような圧力は来なかった。

秋人「うおッ!?。————ふう————まさか俺のアツから逃れられるなんて……………ほ
んと、アンタが初めてだよ……………」

戦艦棲姫「私ヲ舐メルナト言ツタハズダ。——オマエノ状態ヲ見ル限リソロソロ限
界ノヨウダナ」

————確かに全力で海の上を走って、時雨達を庇いながら深海棲艦6人相手に戦っ
ていて、俺の唯一の技、アツを出したのだからから、戦艦棲姫の言う通り、流星に体力
の限界だ。

秋人「アンタこそ、強がっているけどどうなんだよ……………」

戦艦棲姫「何ヲ言ツテイル、私ハマダ余裕ダガ？」

その言葉に嘘も偽りもない、戦艦棲姫はまだ全然戦う余力が残っていた。アツも受けたのに何だよこのタフさは……さすが戦艦だな……。はあ……ここまで来たら使えないのかなあー俺の切り札を……いや待てー……。。

戦艦棲姫「人間ガ私達相手ニココマデヤリアエタダケドモ褒メテヤル。ダガ、コレデ終ワリダツツ!!」

秋人「いや、終わりじゃねえーよ。まだあるぜ、とびっきりの攻撃がここにー……。」

ドオオオオオオン!!

戦艦棲姫「ツ!!誰ダツ!!」

戦艦棲姫に向かってー発の砲弾が放たれる。ー別に切り札を使わなくても良いじゃん、何故ならー……。。

龍田「思った以上に飛ばせなかったの……ごめんなさい提督……」

秋人「成る程なー、じゃあ後で説教な。まあでも今はこれに集中だよ龍田」

龍田「提督……分かったわー！」

秋人「でことで戦艦棲姫、これを見てまだ戦うのか？」

戦艦棲姫「oooooooooooo!!……ソウダナ……オマエノ言ウ通り、ココハ一旦引コウ

……ダガ覚エテオケツ！次ハソウナライトツツ!!」

戦艦棲姫はそう言い残し気を失った仲間と共に海の底へと沈んでいった。

side out 秋人

side ?? ほぼ会話だけ

帰還中

榛名「はあ……」

暁「どうしたの榛名さん？」

榛名「いえ、救助に来たのは良いのですけど、私達つて来た意味があったのかなと……」

響「まあそうだね。だつてほとんど秋人が倒していたから」

大井「ほんと、私達を呼ばなくてもよかつたんじゃないの？」

秋人「そんな事ねえよ、だつて大井達が来なかつたら正直俺も艦娘でいう大破並みの傷を負っていた可能性があつたから。まあ今回は俺の責任だから、遠征に行つた組と救助組に間宮アイス券と2日ほどの休暇を取ることにするわ」

12人「!?」

吹雪「ー!?司令官、私達は何もしていないのにですかッ!?」

秋人「何もできなかったのは俺が1人で戦つてしまつた責任でもあるし、っーか普通提督が戦うなんておかしいけどな」

時雨「全くだよ、ほんと秋人は無茶するんだから……だけど、ありがとう助けてくれて」

秋人「おう!ーっーつかさ、ちよつと休憩してくんね?俺、エンジンとかそういうのついてなくて、滑れないから走つてんだけど、マジ体力の限界がーっー」

天龍「お前はそれでも男か？」

秋人「じゃあ逆に聞くけど天龍、お前はそれでも女か?男まさりのまな板娘!」

天龍「な!?! / まな板とは何だ、まな板とは!!! / /」

秋人「龍田を見ろよ、すげー良い体じゃん胸m……」

龍田「あらあら提督、これ以上言ったら締め上げるわよ?」

秋人「ごめんなさい……もう言いません、勘弁してください」

龍田「素直でよろしい……」

—————

瑞鶴「一航戦なのに随分と苦戦していたようね（煽り）」

加賀「いいえ、これはみんなを守った証と言ったところかしら。そういう貴方こそ言っているワリには随分と到着が遅かったわね、まさかびびったのかしら? まあ五航戦なら仕方のない事ね（煽り）」

瑞鶴「な!?! いつ私がびびったのかしら……?」

加賀「戦艦棲姫を見た瞬間よ。あなた、かなり真っ青になってたわよ」

瑞鶴「な、なっていないもん / /!!」

加賀「凶星ね。だからあなたは、まだ甘いだよ。それじゃあ私達一航戦には及ばないわ」

翔鶴「瑞鶴今のはあなたが悪いわ、加賀さんに謝りなさい。——私からも謝ります、ごめんなさい。瑞鶴の無礼な発言に……」

瑞鶴「翔鶴姉……うう……ごめんなさい」

赤城「いいえですよ、瑞鶴さん、翔鶴さん。加賀さんも言い過ぎましたから……でも瑞鶴さんの言う通り私達もまだまだ訓練が足りないみたいです。一航戦なのに何も護れなかったの……なので共に強くなりましょう！加賀さんも良いですね？」

加賀「そうですね赤城さん、しっかりと指導をしないとイケませんね」

瑞鶴「なんか怖いわ……」

翔鶴「よろしくお願いします、先輩方!!」

—————

そして秋人達が傷ついた時雨達を背負って帰還した後、鎮守府にいた艦娘達が出迎えてくれていた。そしてまず起こったことは、夕立が時雨に向かって泣きながら抱きついた、そして電や雷も同様、暁と響に泣きながら抱きついた、そのあと、電と雷は秋人も抱きついたのだった。

秋人「ちよつと……待って2人とも……抱きついてるとこ首……首だから……息が

……ガクツ」

電&雷「お兄ちゃん（お兄さん）!!!」

響 「ナイスだよ、2人とも！」

暁 「響、流石にそれは酷いわ……」

時雨 「やつぱり秋人は秋人なんだね……」アハハ

赤城 「ふふ……やつぱり秋人もまだまだですな……」

21話 提督の仕事とちょっとした思いつき

戦艦棲姫「申し訳アリマセン……沈マセルコトガ出来マセンデシタ……」

矢倉「そうか、だが構わん。貴様らのおかげで私の準備も完了したッ!!!」

戦艦棲姫「準備……」

矢倉「ああ、確実に時雨達を沈ませる事ができる準備をな」

戦艦棲姫「二体ナニヲ……」

矢倉「私が……」

戦艦棲姫「!？」

矢倉「では、鎮守府へ向かおうかッ!!!」

side out 矢倉

side 秋人

俺は電と雷におとされかけた後、入渠ドック（勿論男子の方）に入り、一旦執務室に

戻った。そして遠征の結果は言うまでもなく失敗に終わった。だけど、誰一人として沈まなかっただけでも俺は良かったと思う。だって沈む＝死んでしまうのと変わりが無いのだから。おっと、暗い話は置いて（誰に言っただろう？）この事は尾形さんにも報告しないとな。そう思っている時――

コンコン……

――と扉のノック音が聞こえた。誰だろ？

龍田「提督、いるのかしら……？」

龍田だった、けどなんか声が暗いような……まあいいや。

秋人「はい、いるから入っても良いよ」

龍田「失礼するわね……」

そう言って龍田は入ってきた、そのときの龍田の顔は少し暗かった。俺の思い違い

じゃ無かった。

秋人「どうしたんだよ龍田？」

龍田「提督……先程言っていた罰を……受けに来ました……」

秋人「罰……？……あ!？」

俺は思い出した……!?!俺はあの時、龍田に遅れた事に説教をするって言ったんだっ
たあああ!!すっかり忘れてたわ……。

秋人「あーそう言ってたな確か……でも、その前に何で飛ばせなかったかの理由だな」

龍田「それは……」

side out 秋人

side 龍田

龍田「……」

秋人「なるほどなー……」

私は時雨達の所へ向かっている最中に別の深海棲艦と遭遇してしまい、その相手をしていたせいで遅れてしまった事を言った。こんな事だたの言い訳にしか過ぎない……どうせ私は罰をー

秋人「だったら罰は無しな」

龍田「やはりそう………ー………?」

私は提督が言った言葉に理解できず、聞き取れなかったような声を上げてしまった。

秋人「だから罰は無しだつて」

龍田「どうしてですか提督ツッ!!」

罰は無し……!? どうしてツ!! 仲間が危険な目にあっているながら、遅れてしまったのにツ!!

秋人「どうしても何も、深海棲艦と遭遇して遅れたのなら仕方ないだろ」

龍田「ですが救助が遅れたのは変わりはないです、それに私が嘘をついている可能性だって……!!」

そうだ、私だって嘘をついているって思ってもおかしく無いのに。どうしても彼は――

秋人「それを言ってる時点で嘘じゃ無いだろ……」

龍田「ツツ!？」

私は言葉を詰まらせた。

秋人「それにあの時は触れなかったけど、龍田達の機装や顔とかにわずかな傷があったし、それに息が少し上がってただろ？」

龍田「!?――…気づいて……いたんですか……」

じゃあ、何でそこまで――

秋人「当たり前じゃん、提督なんだから〜！艦娘の状態を見るのも提督の仕事だし、いかなる時でも！」

もしかしてあの時も私達をしつかりと……。そう思った瞬間、私はやはり提督には敵わないと改めて思ってしまった。

秋人「だから罰は無しな、みんなにもそう言っておいてくれ。て事でこの話は終了〜」

提督はそう言っつて話を終わらした。提督、貴方は本当に部下思いな人なんですわ、若いのに〜。

秋人「じゃあ、俺は今から元帥にあのこを報告するけど龍田はどうする？」

提督はさっきの出来事を報告するみたい。じゃあ私は別にいなくても良いわね〜。

龍田「では私は私は部屋に戻ります〜」

秋人「分かった！そんじゃあ今日はお疲れ様〜龍田!!」

龍田「はい提督〜では失礼します〜」

ガチャ……

私は執務室から出た。

龍田「……」

響「大丈夫だったでしょ？」

龍田「ツ?!……そうね……全てお見通しだったわ〜、本当にあの人が提督で良かったって思う」

響「そうだね。あと龍田もありがと、救助に来てくれて」

龍田「いえいえ〜大切な仲間だもの〜そんな事は当たり前よ〜!」

響「確かにね」

side out 龍田

side 秋人

秋人「はあーお腹すいたな……」

時計を見ると気づけば6時を過ぎていた。結構進んでいたんだな……とりあえず食堂へ行こ。そう思い、俺は執務室を後にした。

—————

秋人「どうもですー間宮さん！」

間宮「あ、提督お疲れ様です！」

間宮さんは笑顔でそう言うてくれた。ああ……綺麗です、間宮さん……。

秋人「はいお疲れ様です、間宮さん！……ご飯の支度ですか、間宮さん？」

間宮「そうですねー夕食の時間がそろそろなので！」

間宮さんは包丁で野菜を切りながら返答してくる、なんかすげー器用だ。そして俺は

ふとある事を思ったので、間宮さんに問いかけた。

秋人「あのう間宮さん、1人で作るのって流石にしんどくないですか？」

間宮「うーん、そうですね……確かにそう思う時はありますが、全然大丈夫ですよ！」

秋人「そうですか。……ですが、いくら艦娘でも体調が悪くなる可能性だってあるのですから、無理はしないで下さい！あ、どうせなら、当番制にしましょうか？」

間宮「確かにその案は良いですね、提督！レシピや作り方なら私が教えますので！」

秋人「わかりました！では早速みんなを呼びますね！」

—————

秋人「……………て事なんだけどみんなはどう思う？」

俺はみんなを食堂に呼び、間宮さんとの一連の会話の内容を話した。

天龍「ええ……俺、料理作るの苦手なんだけど……」

吹雪「私も……」

比叡「私は全然大丈夫ですよ!!」

榛名「比叡お姉様はダメです!」

比叡「ええ……」

大井「別にいいんじゃない? 間宮さんの負担も減ると思うし」

時雨「僕もその案には賛成だよ秋人!」

夕立「私も!!」

―以下略―

俺が考えた案にほぼ全員が賛成する事になった。意外とそういうところでは賛成してくれるんだな。

秋人「分かった、じゃあ当番表は間宮さんと一緒に考えるから1日、2日ほど待ってくれ、後料理が苦手な人は間宮さんが教えてくれるから安心して」

艦娘「はい!」

秋人「よし! じゃあそういう事で。――んじゃご飯にするかなあ」

俺はそう言つて間宮さんからご飯をもらい、夕食をとつた。ー明日、明後日から当番制……早くある程度グループを考えないといけないな……とりあえず苦手な人と上手な人をセツトにしないと。ーうーうーんやっぱりいきなり考えるのは難しいな、やっぱり間宮さんと考えよ。

—————

ご飯を食べ終えた後、俺はお風呂に入つて執務室に戻つた。そして時間に余裕があつたからまた部活仲間だった友達とグループ通話をした。

秋人「しもしも〜」

拓海『しもしもつてw w ー どうした秋人?』

秋人「暇」(、、、、)

拓海『え“え”?!? (マスオ風) ーでも秋人、お前提督になつたんだから艦娘たちと遊べるだろ……』

秋人「それとこれとは別」(、、、、)

拓海『デスヨネ……ーで、今日は何?』(?、▽、?)

秋人「いやただちよつと話でもしようかなって」

拓海『話なく………うーあそうだ、この際だし恋バナとかでもする!?ww』(?▽?)

秋人「何それ嫌味？」

拓海『なんでそうなるんだよッ!?』Σ(。D。うー)

秋人「だつて拓海モテてんじゃないww」

拓海『ゆーてお前も前髪下ろせばイケメンだからなッ!?』

秋人「うん、最近になってやつと気づいた☆」テヘペロ☆

拓海『やつとかよ………うーそういや、前言つてた約束のことなんだけどさ』

秋人「ん?時音が言つてたフットサル大会？」

拓海『そうそう、人数が俺ら4人しかないじゃない?だから時音が弟連れて行くつて言つてるんだけど良い?』

秋人「全然いい、むしろ来てください!うーてか俺だけじゃなくて良にも言つたほうがいいんじゃない?」

拓海『いや、良にはすでに確認済み、最後は秋人だけだったんだよ』

秋人「あーね」

時音『呼ばれて飛び出てパンパカパン!!』? (?????) ?

拓海&秋人(何これ可愛い……)(*——)

秋人「時音今ならまだ間に合うぞ」

時音『え、何秋人ッ!?!』

拓海『時音、女の子になる気は……』

時音『拓海まで何言ってるのッ!?!怖いよッ!!——それに僕は……(ボソッ)』

秋人「ん? どうした時音?」

時音『あ、いや、何でもない!!』

良『お前ら俺抜きで何話してんだよ!』

拓海『良が来るのが遅いだけだよ……』

秋人「全くだな……」

時音『そうだねww』

良『お前ら腹たつなッ!?!』(*、ω)

この後俺たち4人はまたゲームをした今回はPCゲームの『お絵か○の森』をした。だつて執務室にパソコンがあるもん 笑。

良『ちよっ……時音何書いてんの!?!』

拓海『流石の俺でも分からないな……』苦笑い

秋人「東尋坊ww」

良『ま、そりや分からねーなwwwそもそも俺知らない!』(・ω・)
 時音『福井県の観光地らしいよ』

拓海『秋人の絵ってなんか可愛いよなww』

秋人「え〃、マジ!？」

良『まあ普段の生活でも女子力結構高かったしな』

時音『文字も女の子みたいな丸字だしねーでも見えやすく綺麗だよ!』

秋人「流石俺の『女子力』!!」(・ω・) キリッ

3人『流石ではないぞ(よ)』

秋人「嘘……」(・ω・)

そんなこんなでまた1時間以上も友達と遊んだ。いや〜やつぱ楽しいな、友達と遊ぶ

のは！俺はグループ通話を切って、アラーム設定をした後、俺は寝た。―――次の日、例のイベントが起こる事をこの時俺は知る由もなかった。

22話 やっぱり俺の朝は騒がしい……

目がさめるとそこは自分の故郷の海だった。——あれ、何で俺がここに……。どうやら俺は夢を見ているらしい、そして遠くの海岸に目を向けると——

秋人「やっぱり釣りは良いね、母さん!!」

茜「そうですね、秋人!」

——5年前の俺と母さんがいた。これは——母さんが居なくなる日の出来事……だったらツ……!?

中学生秋人「母さん、俺もつと奥の海岸に行つて釣りしてくるよ!」

茜「いけません秋人、これ以上行くと危ないです!」

中学生秋人「大丈夫、大丈夫!俺落ちないから!!」

茜「秋人……危なくなつたら逃げてくださいよ!」

中学生秋人「——?分かつたよ母さん」ノシ

俺は奥の海岸に行く俺を止めようとした「ーーーーー」が、やはり夢なので、すり抜けてしまい手を掴むことができなかった。「ーーーーダメだ、そっちに行ったらツ!!!」昔の俺は徐々に離れて小さくなっていき、それと同時に俺の視界が暗くなっていった。

秋人「ーーーーツ!?!」

完全に視界が暗くなった瞬間、俺は勢いよく目を開いた。そして目に入ったものは、いつも見えている執務室の天井だった。俺はそれでようやく夢から解放されたと実感した。

秋人「はあー……今度はあの日の夢かよ……ほんと最近になって多いな、嫌な夢を見るの」

「ーーーー愚痴を吐いても仕方がない、とりあえず起きるか今は「ーーーー」まだ5時半かよ……」。俺が起き上がる為に上半身を起こそうとしたが、何故か動かなかった、むしろ誰かに押さえつけられてるような感覚がする。何故かと思ひ、俺は動ける範囲で周りを見

た。するとそこには――

秋人「ツ!？」

赤城「……スウー……スウー……Z z z z」

気持ちよく寝ている母さんがいた。母さんは俺を抱き枕のように身体にしがみついていた。成る程、こりや動けない訳だ………つーかさつきから母さんの胸が当たり過ぎて苦し。え、別に興奮してないけど？だつて母さんだし、身内の人に興奮するのは違うだろ……。とりあえずこのままだと一生このままの予感がするから起こすか……日課もしたいし。

秋人「母さん、起きろ。朝だぞ……」

赤城「……んっ……秋人……z z z z」

秋人「母さん朝だつて……!」

赤城「秋人……そこじゃ……ないですう……z z z z」

ア、アカン……母さん、完全に夢の世界だわ……それに何の夢を見てんだろ、傍から

聞くとすげ〜意味深なだけ……。

赤城「や…あ／／…秋人…／／…zzz」

ちよつと待て!?!これ色々と危なくないか!?!…いや俺の考えすぎか……

赤城「そこつ…んんあ／／んくう…あ…／／／／…zzz」

はい起こします。すぐに起こします。秒で起こします。俺は母さんがすぐに起きるとっておきの方法で起こした。

秋人「母さん、ご飯ですよおおおお!!!」

赤城「ご飯ツ!!…あれ、秋人?…!!!!」

秋人「いやもう手遅れだよ母さん。あとおはよう、息子の抱き枕は気持ちよかつた?」

赤城「えつと…これは…そのお…すみません秋人…!!」

母さんは素直に謝ってきた。

秋人「悪いと思ってるんだったら、どいてくれたらありがたいかな。起きれないから」(――；)

赤城「はい……」

母さんはすぐに俺を解放して俺はそのまま起き上がった。日課の準備をする為に。準備をしながら俺は母さんにある疑問をなげた。

秋人「あと母さんは一体どんな夢を見てたの？」

赤城「え、夢……？あゝ夢ですか」

俺の疑問に対し、母さんは思い出したかのような声をあげた。

秋人「え、どんな夢だったの」

赤城「えーと、秋人にマッサージされてる夢を見ましたね。とても上手でしたよ秋人のマッサージ、もう癖になりそうでしたよ！」

秋人「はあああツツー!?あの寝言で……?」

嘘だろ……安全にあっち系の夢みたいだったじゃん……。やはり寝言というのは怖いものだな、俺は改めて寝言の恐怖というものを思い知った。……ひよつとしたら俺も、何処かで意味深な寝言を言っていることもあったのかもしれない……寝るのが嫌になってくる。

赤城「え、私何かまずい事でも言っていたんですか?」

秋人「いや、母さんの寝言が完全にあっち系だったから……」

俺が母さんに正直に伝えたら、母さんは一瞬にして顔を赤くした。

赤城「ツツ!?……そ、それは本当ですか秋人／／!!」

秋人「もちろんさく(あるピエロ風)」

赤城「本当に違うんですよ秋人!そんなやましい夢なんて一切見ていませんからねツ

／／!!」

(.;@??@)

母さんが顔を赤くしながら必死に訴える、まるで子供を見ているみたいで可愛い……。ーは！ダメだダメだ、そんなことを考えたら親父に殺されるぞ俺！ーーけど流石にそこまで言われると逆に怪しいんだが……まあいいや。

秋人「母さん分かったから……そんなことより何で俺の布団で一緒に寝てたんだ？」

赤城「いやうちよつと秋人と一緒に寝たくなくなってしまいました……」

秋人「そーですか。じゃあ俺は日課に行くから母さんは部屋に戻つてー」

俺は途中で言葉が止まった。何故なら母さんは下着しか着ていなかったから。

秋人「何で下着姿な訳……母さん……」ジト目

赤城「これは……」冷汗

秋人「まさか発情したとかじゃないよな……？」ジト目

赤城「……」目をそらす

秋人「ーーー貴方は……それでも母親かあああああ
!!!!!!」

この後母さんに無茶苦茶説教した、6時まで。まさか朝から説教をする羽目になるなんて、ほんとやってくれたな母さん……あと親父にはなんて説明しよう。——後になって聞いた話だが、偶然この光景を見た艦娘達から、俺から鬼が出ていたと口を揃えて語っていたらしい。

—————

母さんを説教した後俺は日課をする為、外に出た。

秋人「はあ……」

響「朝からため息なんて、らしく無いね秋人」

秋人「あー響か、おはよう。まあちよつとな……あれ、ここにいてってことは——」

響「察しの通りだよ」

秋人「響だけ？」

響「君は視野が狭いのかい？——ほら、あそこに」

響が指をさす方を見ると昨日と同様にこの鎮守府にいる駆逐艦全員十天龍、龍田など

が来ていた。

秋人「龍田は分かるけど、天龍は意外だわ〜」

天龍「何でだよ！〜〜〜〜べ、別に来ても良いじゃねーか／＼!!」

秋人「ああ、来ても全然良いよ〜人数が多いと後々楽しいし。じゃあ早速行くぞ〜!!」

駆逐艦「だから早い（のです!）よッ!!」

龍田「これは楽しみね〜」

天龍「〜〜〜〜嫌な予感がする」

俺は艦娘たちを連れて走った。うーん……朝だから良かったな……よくよく考えると、絶対に通行人の邪魔になるわ、人数が多いから。ある意味宗教だろこれ……。

例のゴール付きの人工芝に着いた後、またいつものサッカーの個人練習をした。みんなは昨日同様息が上がってベンチで崩れていた。しかし、響がすぐにコートに入ってきて俺のボールを奪いに来た〜〜〜が、俺はずっと響をかわしつづけた、その光景につられてみんなも俺のボールを奪いに来た。最終的には日課に付いてきた艦娘全員が俺のボールを奪いに来ているというなんともシニールな状態になった。〜俺も流石に10人以上相手にきつくなつてしまい、結局電に奪われてしまった。まあまだ俺は本

気は出してないけどなあ!! (負け惜しみ) ボールを奪われた後、みんながサッカーというのは、どんなものかと聞いてきたので、みんなにサッカーで大事なドリブルやパス、コントロールの基本を教えたーうーん、ボールが足りないから後で何球かア○ゾンで買っておい。みんなと楽しくサッカーをしていたらいつの間にか7時を過ぎていた。

秋人「んじや7時過ぎたし帰るぞ〜」

艦娘「え……」(・ω・)

秋人「ー帰るからゆつくり走るよ……」

艦娘「は〜い!!」(*。▽。*)

そうして俺たちはまた喋りながらゆつくりと鎮守府へ帰った。ーさて、今日は何しようかな……あ、この際みんなと一緒にトレーニングでもしよ!! 鎮守府へ着いた後、早速汗を流すために入渠ドックへ向かった、その後は、食堂へ行き朝ごはんを食べ、今日の予定をみんなに伝えた。

秋人「今日の出撃無しで訓練でいこうと思うんだけどどう?」

大井「私は出撃したいわ!」

霧島「私も最近出撃してないので出撃したいです、提督！」

吹雪「私は訓練がしたいです！」

瑞鶴「私も訓練がしたいわ！」

なんともまあ意見がバラバラになってしまった、——っというか——

秋人「吹雪と瑞鶴は今日は休暇日だろ？」

吹雪「休暇日でもトレーニングがしたいです！」

瑞鶴「私も、先輩たちに一步でも近づけるようになりたいの！」

秋人「そうか。うーん……どうしよかな」

夕立「提督、だったら模擬戦がいいっぼい！」

秋人「模擬戦？」

夕立「私たち同士で勝負することっぼい！みんなもいいでしょ？」

霧島「確かにそれなら艦装の調整ができて良いですね！」

大井「はあ……仕方ないわね、良いわよそれで（内心楽しみ）」

模擬戦ね、確かに出撃に最も近い訓練だからいいな、けど——

秋人「まさか実弾で戦うとかじゃ無いよな？」

時雨「大丈夫だよ秋人、使うのは実弾じゃなくてペイント弾だから！」

秋人「へえくペイント弾か。——でもペイント弾って被弾するとインクがつくから落とすの——」

大井「大変に決まってるじゃない、だから私たちは当たらないように回避するのよ」

秋人「ですよね……」アハハ

幾ら艦娘と言っても中身は普通の女の子なんだし、清潔には気をつけるよな

秋人「んじや今日模擬戦にするから10時くらいに港に集合で！」

艦娘「はい！」

さて、俺も参加しようかなくだって面白そうだし！

大淀「提督、模擬戦に参加しようと考えていませんか？」

あつさり大淀に俺の考えを見破られてしまった。ここの艦娘ってエスパー多いな!!

秋人「ダ、ダメ？」

大淀「ダメです」

秋人「ちくしょう……」(・ ω ・)

23話 開始前!

10時になったので俺とみんなは港に集まった。

秋人「おし、全員集まったな!」

霧島「しかし提督、模擬戦をやるにしてもこの人数は流石に多すぎでは?」

秋人「いや流石にこの人数で一気に模擬戦はしねーよ霧島……。ここからそれぞれ、チームを作って戦うんだよ」

霧島「そういう事ですか、了解しました!!」

秋人「んじゃ、早速この中から6人ずつの第4艦隊まで作っていくからー」「提督!」
「ーん?どうした、長門?」

長門「それでは1つの艦隊だけ人数不足になるぞ」

秋人「あ、ほんとだ!じゃあどうしようかなあ……。俺は参加しないし」

だって大淀に禁止されてるんだもん……。無理言つて明石か間宮さんか大淀に頼むのもいかないし……。

天龍「はあー!? お前参加しないのかよ!! 俺たちみたいに海の上で立つことができ、深海棲艦と戦ってたのに!」

秋人「いやあの時は大淀や明石に無理言っただけだ、やった事だから…」（――;）

そう、あの時は土下座をしてやっとなんと一緒に出撃できる機会を貰ったのだ、しかし明石は「一回だけ」と言っていたのでおそらく2度目は間違いなくないだろう。そんなことを思っていたらいきなり長門から――

長門「では私から大淀や明石にお願いしようか?」

秋人「what!?!」

俺の予想を超えるような事を言ってきた。長門がお願いしてくれるなんて……着任初日だったら絶対にありえない事だったな。

秋人「――うん、まあ出来るんだっただけならお願いしたいけど」

俺は明石と大淀を見た。

大淀&明石「ダメですッ!!」

秋人「……てな感じで許可してもらえないのが現状」(・ω・)キリッ

大淀「当たり前です!提督は提督らしく、しつかりここでみんなを見守っていて下さい!それに……幾ら丈夫でも怪我をしない可能性だって0ではないのですから……」

確かに大淀が言っていることにも一理ある。だって提督って普通、執務室や作戦部屋みたいなところで指揮するからね。……かマジレスするけど提督、いや人間自体、海の上に立つ事なんてまずおかしな話だ。それに俺も艦娘と人間のハーフだし、確実にこの世の理を覆してる存在だ……うん、気にしたら負けだな!(・ω・)キリッ

秋人「じゃあ、大淀か明石さんが、参加してくれたらありがたいんだけど……参加できる?」

大淀「私は出来ます!」

明石「私も出来ますよ?」

あつさり2人は参加OKしてくれた。じゃあどっちを選ぼうかなく無茶苦茶迷う……。俺はどっちを選ぶか考えていると――

雷「えええ！お兄ちゃん模擬戦に出てくれないの!？」

大井「あんたが参加しないなんて面白くないわよ！」

比叡「提督の力というものを私は見てみたいです!!」

陸奥「貴方が出たらきつと模擬戦も楽しくなるわよ」

く以下略く

――まさかのみんなが俺に模擬戦の参加を求めてきた。

秋人「お前ら話聞いてたか!?!明石さんか大淀が出てくれるって言ってただろ!?!」

榛名「それでも榛名は提督を指名します！」

時雨「僕もだよ秋人！」

夕立「私も！」

睦月「睦月もく！」

北上「私も提督だと思おうく！」

秋人「はあー……そんな訳なんだけど……2人ともお願い出来ない……?多分今のみんなだつたら、OK貰えるまで止めないと思うし……」

大淀「仕方ありませんね……」

明石「ーですが提督、これが本当に最後ですよ?」

秋人「ありがとう、大淀、明石さん!」お辞儀

なんとか2人の許可が降りた。その影響かみんなは「「(・・・)」な感じになっていた。みんな喜びすぎだろ、どんなけ参加して欲しかったんだよ……まあ俺も嬉しいけど。

明石「あと提督、思ったんですけど、私に対して敬語を使わなくても大丈夫ですよ?」

秋人「あ、そう?なら遠慮なく!」

雷「お兄ちゃん、早く行くわよ!」

秋人「ちよつと待て、雷!!まだ艦隊が決まってないから!準備しないといけないから

!!」

電「雷ちゃん、お兄さんがこまってるのです……!」はわわ……

それから俺は、参加が決まった事により、例のウエットスーツと手袋と動着やすい服に着替えるために一旦執務室に戻った。そして再び港に戻ってから俺は4つの艦隊を決めた。

秋人「んじゃ今から模擬戦の艦隊を発表するけど、第1艦隊、第2艦隊って言うのは別に強い弱い関係ないから安心して、ただチームを分かりやすくするためだから！」

艦娘達「分かりました！」

秋人「それじゃあ——」

く秋人発表中く

秋人「——という感じに分けたから」

第一艦隊	一金剛	比叡	天龍	赤城	電	雷
第二艦隊	一長門	陸奥	北上	大井	如月	睦月
第三艦隊	一霧島	加賀	瑞鶴	時雨	夕立	響
第四艦隊	一榛名	龍田	翔鶴	吹雪	暁	秋人

秋人「それと模擬戦はやっぱり4艦隊一斉に始める事にするわ。ちよつと良いこと思いついたし」

霧島「良いこと、ですか？」

秋人「そう、良い事!今回やる模擬戦は旗艦撃破式にしようかなって!」

加賀「提督、説明をお願いしてもいいかしら？」

秋人「OK、じゃあ説明するわ〜oooooooo……」

模擬戦 旗艦撃破式

各それぞれの艦隊の旗艦を狙って戦う模擬戦。

旗艦に5ヶ所ポイント弾があたった時点でその艦隊は敗北。

旗艦以外も5ヶ所あたった時点でリタイアとする。

旗艦が最後まで残った艦隊の勝利。

秋人「ooooooooって言う感じだけど理解できた？」

吹雪「つまりチーム戦という事ですか、司令官?」

秋人「そうそう吹雪!あと優勝したら間宮アイス券5枚と願い事を1つ叶えてやるよ

！まあできる範囲だけ……。」

艦娘達「やったー!!!」((((* * * *))))

秋人「勿論俺が入っている艦隊が勝ったら俺も願い事を叶えさせてくれよ？」

艦娘達「え……。」

俺がそう口にした瞬間みんなは急に元気が無くなったように見えた。あ、これ多分地雷踏んだわ……。

秋人「いやそんなみんなが思ってるような願いはしないから！普通の願いだから!!————てか俺の願いが聞きたくなかったら勝ちやあ良いだけだろ？勝ちやあ！それとも、俺に勝つ自信がないだけか？笑。」

ブチツ————

何か聞こえてはいけないような音が聞こえた気がした。

夕立「むう〜その言い方なんかムカつくっぽい〜！」

大井「黙って聞いていれば……!!」

加賀「頭にきました」

長門「ビツクセブンを舐めるなッ！」

時雨「流石の僕でもちよつとだけ秋人に失望したよ」

響「秋人は私にー（自主規制）ーされたいようだね……」

赤城「後でお仕置が必要みたいですね☆」

睦月「睦月は怒りましたよ！」

金剛「提督を Go to hell !!? ” させるネ!!」

（以下略）

俺の一言によってみんなはオコテイル。やべ、調子に乗りすぎた……。

秋人「ちよつ……皆さん?なんか後ろに鬼が……」

艦娘達「ー絶対優勝!!」

俺に向かって一斉にみんながそう言った。そして俺は後悔した、挑発するんじや無かったとー

その後、俺が決めたそれぞれの艦隊に分かれて旗艦を決めたり作戦会議を行った。

side out 秋人

side ??ほぼ会話

※ほとんど会話だけなので行を詰めて書いています。読みづらかったら申し訳ありません！ by 作者

第1艦隊

天龍「何だよあいつ!!」あ”あ”あ”あ”ームカツクツ!!」

赤城「仕方ありませんよ天龍さん。あれが秋人のやり方ですから」

雷「それよりもどうするの？旗艦決めと作戦会議」

金剛「ここは私任せるデース！」

比叡「大賛成です！金剛お姉様!!!」

天龍「いやダメだ！金剛が旗艦になったら主力艦隊が減って逆に不利になる。ーーかといって雷や電に旗艦と言う危ない役目をさせるわけにはいかねえ」

電「じゃあどうするのです？」

天龍「俺が旗艦になる！俺、結構回避力あるからさ！」

比叡「けど貴方が旗艦になれば誰が最前線に向かうのですか？」

天龍「いや、誰も絶対に攻めろとは言っていないだろ？これは生き残りの戦い、旗艦さえ守れば良いんだよ」

赤城「つまりむやみに攻めず、こっちに向かってきた敵をおとす、と言う事ですか？」

天龍「そう言う事だ！」

雷「成る程それは良い案ね！」

金剛「流石天龍！イケメンデース!!」

電「天龍さん、カッコいいのです！」

天龍「イ、イケメンは余計だろ!!／／／」

第2艦隊

睦月「旗艦は誰にしますか？」

大井「私は北上さんが良いわ！」

如月「やっぱりそうなるわよね……けど私は長門さんが良いわ」

北上「あゝ、私も如月の意見に賛成かな。その方がしつくりくるしく大井つちもいいでしょ？」

大井「え!? まあ…北上さんが言うのなら……」

長門「いや、悪いが今回だけ私が旗艦になるのは分が悪い」

陸奥「やっぱりね。貴女ならそう言うと思っただわ」

長門「分かっていたのか」

陸奥「ええ。今回の模擬戦は旗艦撃破式、つまりは旗艦を狙わなければいけない、もし長門さんが旗艦になれば狙われる対象となる且つ、敵の旗艦をおとしに攻める攻撃の力が弱くなってしまふ。だから少しでも敵より優位に立つ為には長門さんを旗艦してはいけない。つてところかしら」

長門「流石陸奥だな、全くその通りだ。それに私達の艦隊には空母艦がない。だからこそ攻めに特化した艦隊にしたい!」

大井「じゃあ一体誰が……」

長門「睦月だ、ここの艦隊の旗艦は睦月にしたい」

睦月「睦月が旗艦……」

長門「やってくれるか睦月……?」

睦月「……分かりました! 睦月やります!」

長門「ありがとう」

睦月「……けど、やっぱりちよつと不安……かな……」

如月「心配しないで睦月ちゃん、私が睦月ちゃんを守ってあげるから」
睦月「如月ちゃん……うん、睦月頑張るね！」

第3艦隊

響「さて、こっちはどうしようか」

時雨「多分秋人がいる艦隊の旗艦は秋人になるね。他の艦隊はおそらく長門さんと天龍つて感じかな」

瑞鶴「見た感じ、バランスが良いとは言えないわね…」

夕立「駆逐艦が多いっほいっ」

霧島「とりあえずこちらの旗艦は瑞鶴さんか加賀さんにしましょうか。空母艦なら艦載機で攻撃できますから下手に攻める必要がありませんし」

加賀「そうね、私もその意見に賛成です」

瑞鶴「じゃあ私が旗艦になるわ！」

加賀「貴女が旗艦だど少し危ない気がするから却下」

瑞鶴「何よ！私じゃ不満って言うの!!」

加賀「そうじゃないわ。貴女はまだ戦いの経験が薄い、だから旗艦という1番危険な役割りを、させるわけにはいかないだけよ」

瑞鶴「ーーツ!?／／／」

時雨「加賀さんっていつも瑞鶴のことを気にしているからね!」

加賀「別に私は……／／／」

夕立「てことは加賀さんが旗艦って事でいいっかい?」

響「そうだね。それじゃあどうやって攻めていこうか?」

時雨「こう言うのはどうだい?まず僕たち駆逐艦がスピードを生かして高速戦闘をして。後から霧島さん、瑞鶴、加賀さんが攻撃」

霧島「それは良いですね!」

響「動きながら攻撃すると更に狙いも定まらないしね」

加賀「では、その作戦で行きましょう」

第4艦隊

秋人「みんなの望みどおり、俺が模擬戦に参加できるようになったけど、旗艦どうする?」

龍田「そんなの決まっていますよ、提督」

龍田 秋人以外「うんうん」

秋人「え、何?」

龍田達が秋人を見る

秋人「……え、俺!?!」

暁「あんた以外に誰がいるのよ……」

秋人「いやいや、俺人間だよ!?!人間が旗艦っておかしいだろ!?!」

龍田「じゃあ提督、貴方は遠距離攻撃が出来るのかしら……?」

秋人「う……」

翔鶴「提督の力を使うのも禁止ですし……攻めに行っても砲撃や艦載機などで逆に返り討ちに合いますね」

秋人「うぐツ……!」

榛名「あと、提督の持っている木刀も護身用でしか使つてはいけませんし」

暁「はつきり言つて、いるだけ邪魔つて事よ。笑」

秋人「ぐはツ!!……お前ら……のことで言いききたる……!」

吹雪「あはは……」

秋人「はあ……わ……つたよ旗艦で。……つて事で俺はわざと突つ込みに行くから宜しく……」

暁「はあああ……!?!」

龍田「どうやら矯正が必要みたいね……」ゴゴゴ……

秋人「ちよつと待て!!ある意味いい作戦だろこれ!?だって俺、遠距離攻撃出来ないんだよ?だから俺があえて囿になって敵を引きつけて、みんなはそれを狙う」

吹雪「でも危険すぎます!司令官が最前線に出るなんて……」

翔鶴「それに提督は旗艦です!なおさら危ないですよ!」

秋人「相手の動揺を誘ういい作戦だろ。それに俺の回避率なめんな!(・ω・)キリッ」

榛名「ですが……」

龍田「はあ……分かったわ提督」

榛名「龍田さん!」

龍田「榛名さん、それにみなさん。今の提督は止めても無駄よく。それに私は前に借りを作ってしまったので止めることができないわ。だから私からもお願いできないかしら?万が一負けたら私と提督が責任を取るわ」

暁「龍田さん……」分かったわよ!だけど脱落したら承知しないんだから!」

榛名「そうですね、榛名は提督を信じます!」

吹雪「私もです、司令官!」

翔鶴「やっぱり提督は変わっていますね!」

秋人「おう!みんなありがとな!!!」

24話 模擬戦 ①

side ?

イチイチマルマル。海の上に4つの艦隊が集結した。

大淀「それでは、模擬戦を始めますが、各旗艦の人は大丈夫かどうかを報告をください」

天龍「第1艦隊は大丈夫だ！」

睦月「第2艦隊も大丈夫です！」

加賀「第3艦隊、こちらも大丈夫」

秋人「第4艦隊、準備オツケー」

大淀「分かりました。では、ゴホンツーーーーーこれより、旗艦撃破式の模擬戦を始めますツツ!!! ーーーー模擬戦、開始ですツツ!!!」

これより、間宮アイスと願いを賭けた模擬戦が幕を開けた。

天龍「良し、こっちは作戦通りで行くぞ！」

雷「分かったわ！」

赤城「かなりの持久戦になりそうですね」

金剛「いや、そうでもないみたいデース……」

電「長門さんの艦隊が攻めてきたのです！」

天龍「いや、それでも俺たちのやる事は変わらねーよ！」

比叡「腕が鳴りますねー！」

まず第1艦隊は作戦通り守に専念するようだ。

睦月「みなさん、まずは攻と守に別れましょう！」

長門「そうだな。では私は攻に入ろう！」

陸奥「なら私は、睦月さんを守ることにするわ。流石に戦艦が2人も攻に行ったら、守が薄くなるから」

如月「私も守に入るわ！睦月ちゃんを守りたいから！」

北上「じゃあ私達は攻だね大井っち」

大井「そうですね、北上さん！北上さんとなら私は負ける気しないわ！」
長門「頼もしいな。では早速、守に専念している艦隊から落とすに行くぞ！」

第2艦隊は第1艦隊を落とすに動き始めた。

響「長門さんが旗艦じゃ無かったのは予想外だったね」

時雨「だけど僕たちのやる事は変わりないよ」

夕立「一気に攻めに行くっばい！」

加賀「待って、ここは少し様子を見ましょう」

霧島「無理は禁物、という事ですわね！」

瑞鶴「じゃあどのタイミングで攻めるの？」

加賀「ある程度落ち着いてからの方が良いわ」

第3艦隊の方は少し様子を見るようだ。そして秋人がいる艦隊はというところ――

秋人「おー！早速やってるやつてる！」

榛名「提督、本当にやられないでくださいよ！」

秋人「分かってるって！んじやあ始めますかな」

秋人はそう言つて、3つの艦隊の近くに行き、持っていたメガホンを口元に当て、そして――

秋人「オラアアアアお前らああああ!!!」

――各艦隊に向けて叫ぶ。

艦娘達「!？」

秋人「俺は逃げも隠れもしねーから、さっさと撃つて来やがれえええ!!!」

艦娘達「あゝ？」

秋人の挑発によつて艦娘達はイラついた。

天龍「作戦変更……あのクソ野郎を徹底的に潰すぞ……」

長門「随分と舐めきつているようだな……提督は……」

大井「言ってくれるじゃない！」

霧島「私の頭脳を持って提督を倒します」

陸奥「提督は正気ですか!?(小声)」

〜以下略

そして逆に動揺どころか火をつけてしまう始末。

暁「やってくれたわね…」

吹雪「司令官、マズイですよ!?!全員、○る気スイッチが入っていますよおおー!!」

(; @ ?? @)

龍田「許可するんじゃないや無かったわく…」あらあら…

翔鶴「これは本当に…危ない気がします…(命が)」

榛名「全然大丈夫じゃないじゃないですああ!!(涙目)」

焦る第4艦隊の艦娘達。

秋人「いや、大丈夫だってー!狙われるのは俺だし…だから俺が砲弾を避けてる間、

みんなは敵を狙ってくれ！頼んだ〜」

秋人は龍田達にそう言い残し、○る気スイッチが入っている、艦隊の方へと向かった。

榛名「本当に大丈夫ですかね……？榛名は心配です……」

龍田「……あの人なら多分心配無いわ、多分全ての砲弾を避けてくれるはずよ〜」

吹雪「私は信じていますよ……司令官！」

翔鶴「二応艦載機を出して、提督のフォローをしておきますね……」

暁「ありがとう、翔鶴さん」

—————

長門「提督、降伏するなら今のうちだぞ」

北上「全艦隊が提督のことを狙ってるからね〜」

秋人「いや、降伏なんて一切しないな。俺が5ヶ所ポイントボールが当たるまで！」

ニッ

長門「そうか、では此方も容赦なく行くぞ！」

長門が勢いよく砲撃した。だが秋人は、その砲撃をいとも簡単に避ける。そしてそのまま、大井と天龍がいる方へと走る。その時、秋人の顔は楽しそうにしていた。

秋人「大井、天龍。俺を砲撃できるチャンスだぜ！」

大井「ええ、そうね。私もずっとこの時を待っていたんだから！」

天龍「俺もだ！このクソ野郎ツ!!」

2人は秋人めがけて、連射で砲撃した。秋人はそんな2人の砲撃を木刀で防ぎながら避ける。しかも、アクロバティックに——。

大井「当たらないツ…」

天龍「チツ…!!」

秋人「どうした、ついてこれねーか？」ニツ

大井&天龍「ツ!?!」

2人が気付いた時には、秋人は2人の間にいた。

秋人「まだもうちよい、早く行けるんだけどな！」ニツ

そう言つて秋人は2人の間を通り過ぎて行く。

大井「甘く見ないでツ！」

天龍「待ちやがれツ!!」

2人は秋人を追いかけてようとするが、翔鶴が出した艦載機で足止めをされてしまう。

秋人「ん、あれは翔鶴の艦載機……いい仕事してくれんじゃん！」

響「そんな独り言を言う暇はあるのかい？」

時雨「覚悟してよ、秋人！」

夕立「素敵なパーティーをしましょう、提督さん！」

次は第3艦隊の駆逐艦が秋人を囲む。

秋人「そうだな、受けて立つツ!!」

そうして3人はスピードを生かした高速戦闘を始めた。秋人も楽しそうに弾を避ける、避ける、避ける。

響「今のを回避するとはね…」

秋人「悪いけど響、俺の身体能力を舐めてもらっちゃ困るな」

時雨「まだだよ秋人!」

夕立「これからっばい!」

秋人「甘いな…!…じゃあこつちも反撃と行こうか!行くぜ、ジャンプショット!」

ジャンプショット。ただのハンドボールのジャンプシュートを秋人なりにかっこよく言っただけ。だが、近距離戦にはもってこいの技だ。みんなも一度はやってみよう!

夕立「きゃッ!…イ、インクが…!?提督さん、今何したの!」

秋人「いや、ただジャンプしながらペイントボールを投げただけだ。俺だけ何もできないって言うのも嫌だからな」

時雨「よくも夕立を！秋人、僕は絶対に君を当てるよッ！」

響「これは許せないね！」

秋人「良いぜ、来い時雨、響ッ！」

響と時雨は更に砲撃スピードを上げる。秋人は、その攻撃さえも一つも当たらずに避けていく。そして空中ひねりで弾を避けた瞬間、ペイントボールを今度は響にめがけて投げる。

響「ぐっ…！」

時雨「響ッ！」

秋人「次は時雨だ！オラア!!」

秋人が弾を避けた瞬間に、時雨に向かって得意のジャンプショットをした。この時、秋人と時雨との間は2〜3mちょっと、投げる距離ならほぼゼロ距離に等しい。その為、秋人は確実に当たると思っていた——

夕立「時雨ちゃん!!」

時雨「……………ツ!!」

——だが、時雨は秋人の投げたペイントボールをギリギリで避けたのだ。

秋人「ツ!?!」

時雨「はあああツツ!!!」

秋人「ツ……………——!」

結果、僅かな油断をした秋人は、時雨がペイントボールを避けたことに動揺してしま
い、一瞬だけ反応が遅れ、時雨が放ったペイント弾に当たってしまったのだ。

時雨「まずは1ヶ所だね、秋人……………」

s i d e ?

s i d e 秋人

金剛「外してしまったネ……」

比叡「今度は私達が相手です、提督！」

霧島「時雨さん、響さん、夕立さん、大丈夫ですか！」

——金剛姉妹艦の3人がいた。正直榛名がいたらやばかったな……

榛名「提督、大丈夫ですか！」

いや、いたよ……姉妹艦が揃っちゃったよ。けど、味方だから大丈夫だろう。

秋人「大丈夫！時雨に1発食らったけど……」

榛名「あんなに挑発して、逆に1発だけなのが凄いですよ!？」

言われてみれば確かに……。

金剛「榛名、邪魔をする気デスカ？」

榛名「すみません、金剛お姉様。敵になった以上、たとえお姉様でも聞けないです！」

比叡「流石榛名ね！だったら私達も全力で戦うのみ！」

やば、金剛と比叡が本気になってる……

霧島「皆さん今は一旦退きますよ。お姉様方が本気になったら私でも止めるのは難しいので」

時雨「分かったよ」

夕立「むうー…また攻めるまでリタイアしたらダメっぽいよ、提督さん！」
響「次は○るから、秋人」

時雨達は、危険を察知して一旦引いたみたいだ。だったら俺たちも——

秋人「榛名、流石に2対1はやばい！俺たちも龍田達がいるところに戻るぞ！」

榛名「大丈夫です、提督。龍田さん達なら提督が砲撃を避けている間に、敵を狙いに
行っていましたから！」

秋人「それ、大丈夫って言えんの!?——てか俺は榛名自身が大丈夫かって聞いていた
んだけど？」

榛名「榛名は……大丈夫ですッ！絶対にリタイアなんかしません！」

おい、榛名！なんか変なフラグが立ってるんだけど!?

金剛「榛名、もう大丈夫デスカ？」

榛名「はい榛名は大丈夫です、金剛お姉様……」

金剛「では始めますヨ！ー私は一度榛名と、真剣勝負をしてみたかったんデス！」

比叡「本気で行くから！」

榛名「はいッ！ー提督早く逃げてください！」

秋人「分かった、榛名も無理すんな、危なくなったら絶対に逃げろ！」

その後、俺は龍田達と合流して状況の確認をした。龍田達が言うには、リタイアまでにはいかなかったが、数発のペイント弾を当てることができたらしい。ーーーそして榛名の方と言うと、金剛と比叡相手に数発ペイント弾を当てることができたが、4発のペイント弾を受けたため、こっちへと退いてきた、金剛と比叡を連れて。しかし、龍田達がいいたから、何とか追い返すことに成功！

秋人「だから言っただろ？」

榛名「はい、身に染みました……」涙

暁「まあ、リタイアしなかっただけでも良かったわよ！」

吹雪「あはは……」

この後の戦いはどうなっていくのかは正直怖い、ただ言えることは、2度と俺は挑発をしないということだ。まあ楽しかったけど周りが本気になるから嫌だな。——
しかし、俺はこの時知る由もなかった、ここから大変な事態に巻き込まれると言うことを——

25話 模擬戦 ②

金剛姉妹を追い返した後、とりあえずいろいろなことが起きた。まず母さんや加賀さんから艦載機で狙われ、次に雷巡コンピから半端ないぐらいの魚雷をブチ込まれ、電と雷には、上目遣いの妹キャラで怯ませてからの砲撃をかまされた……っーか電と雷のやり方に関してはずるくない!? 男の最大の弱点を完全についてきてるよね!!? まあ全部回避したけどなあ!!!

秋人「思ったんだけどさ、みんな俺のこと狙いすぎじゃね?」

龍田「提督がみんなに挑発なんかするからだと思うけど……」

暁「自業自得ね!」

後の4人「うんうん」

えらく酷い言われようだなこれ。確かに挑発したのは俺だよ……けどなんか俺が思ってた事と違うんだよなあ……。

吹雪「あの、司令官！少し聞きたいことがあるんですけど、良いですか？」

秋人「ん？何、聞きたいことって？」

吹雪「それは……司令官の願い事が何なのかを知りたくて」

秋人「ブツツハツ……!!」？（。旦那）

いきなり吹雪から、ド直球な質問が来た。え、このタイピングでツ!?——まあ……いか、吹雪達に言っても。別に隠すことでも無いし。

吹雪「司令官？」

秋人「悪い、何でもない……。えっと、俺の願い事は——みんなが俺の事を提督や司令官で呼ぶんじゃないかって、名前やあだ名で呼んでもらえるようにする事かな」

6人「!?」

翔鶴「提督、それは流石に……」

龍田「難しいわね……」

秋人「いやだって俺も、そういう上下関係があんのも嫌だし……名前で呼んでくれる方が、俺は良い。——あと、こっちもなんか壁があるように感じるから、なおさらな」

榛名「提督……」

秋人「俺もまだ17歳だし、バリバリの高校生やってたし、みんなを上司と部下の関係じゃなくて、友達の関係にしたいんだよ！けど他の提督さんには、敬意を表しろよ？」

俺は、ある程度自分の思いをぶつけた。だっておかしいだろ、普通に!?17歳が上司だなんて、しかも軍事学校にも行っていないただの元高校生だったのにツ!!あ、けど高校生で普通に社長してる奴いるわ……「……いや、その人達は次元が違うだけだな!」
(. . .)

暁「本当にいいの?」

秋人「いいよ全然!てか時雨と響と赤城さんが元に俺の事名前で呼んでるし。あと、電や雷だつて兄呼ばわれしてるし!暁も俺になんかあだ名で呼んだら良いじゃん!」

暁「……じゃあ……秋兄で……/ /」

秋兄ねえ……結局暁も羨ましかつたんだなー。

秋人「秋兄か……」

暁「ダメ……？」

そう言つて暁は顔を赤くしながら上目遣いで聞いて来た——可愛い……抱き締めたい。しかしながら、俺も17歳、そんな事はすぐに考えるのをやめて、平常心へと戻る。

秋人「いや、むしろ良い！俺も好きだしその呼ばれ方！」

暁「そう……／＼／＼」

そう言つて暁は顔を赤くしながらそっぽ向く。ツンデレかよチクショウ!!!

龍田「じゃあ私も、『二十面相』って呼ぼうかしら〜」

秋人「龍田、それは流石にアウト」

吹雪「じゃあ私は秋人さんって呼びます！司令官——あ……」

秋人「呼んでないじゃん……（？▽？；）

榛名「榛名も吹雪さんと同じで！」

翔鶴「私も秋人さんと呼びますね」

やっぱりさん付けはなおらないよね。誰も君付けで呼んでくれないっていうな……。高校のクラスメイトの女の子は普通に櫻川君や秋人君って呼んでいたのにな……あとたまに、アツキーって呼んでた奴もいたな……。はいそこアツキーって聞いて『俺○イル』って思った奴、正直に手を上げなさい、ゴムバットだけで済ませるか。それで呼んでた奴も由比ヶ浜じゃ……無かつたと……思う……。あでも死んだ魚の目をした奴がいたような……。……とりあえず、あの頃が恋しくなるぜ！（・ω・）
決して今の生活が嫌ってわけじゃない、むしろ最高だ!!。……あと、なんか忘れてるような……そう思った矢先に

ドカアアアアアン!!!

……と一発の多分ペイント弾が俺たちの目の前に落ちてきた。

長門「提督、随分と楽しく話している見たいじゃ無いか……」ゴゴゴ……

天龍「余裕の表れか？」ゴゴゴ……

響「今度こそ○るよ秋人」ゴゴゴ……

秋人「あ、そうだ。模擬戦中だったー！ーとりあえず逃げるぞみんなあああ!!」

5人「あつ、ちよつと待ってええええ!!」

長門「逃しはせん!」

天龍「待てコラアアア!!!」

響「逃げれると思うなよ…」

3人は多分ペイント弾を放ちながら追いかけてきた。てか響については完全に○る気スイツチ入ってんじゃん!?響のヤツだけ完全に普通の砲弾だよね?どんだ俺のと嫌いなんだよ!

響「別に秋人が嫌いなわけじゃ無いよ。ただ気に入らないだけ」(?+?)

秋人「一緒じゃねえか!!」

響のやつ、さらつと俺の心を読みやがった…エスパークだよ…。

秋人「つーか何でそんなに怒ってんだよッ!まだ、あの事を根に持ってたんか!」

長門「そうでは無い!ー!ーただ提督が楽しく話しているのが気に食わなかっただけ

だ!!」

秋人「そつちかよツツ!!」Σ(。D。lll)

天龍「見ててイライラする」

響「全くだね」

秋人「なんつー理不尽ツ!」

本当にそれしか言えない……

龍田「秋人さんだからじゃない?」

吹雪「秋人さんって色々と災難ですよね……」

暁「秋兄……色々とお疲れ様」

秋人「同情するなら、逃げながら足止めぐらいしてくれよツ!」

翔鶴「秋人さんの身体能力だったら大丈夫かと……」

榛名「榛名はリーチなので難しいです……」

オワタ＼(^ o ^)／

てか何で長門達はそれだけでイライラしてんだろ……。――――まさかね……………

一旦聞いてみるか。

秋人「もしかして、さっきの雰囲気羨ましかったりする？」

3人「ギクッ！」

あ、固まったって事は、ぼいなく

秋人「おーい、3人方々固まってますよ？何か思い当たる節でもー」

長門「あーそうだ！羨ましいと思って何が悪いッ！／／」

天龍「こつちだつて楽しくやりたいんだよッ！／／」

響「わ、私は秋人が倒せればそれでいい：／／」

秋人「響、嘘がバレバレな」

結局は楽しくやりたかっただけかよ……まあ提督が入ってる模擬戦だからそうなるわな。ーーー思ったけどチーム戦の意味が無くなってる気がーーー。そんなこんなで地獄の追いかけっことはまだまだ続きそうだチクシヨウ。

side out 秋人

side 時雨

時雨「うわあー…秋人、まだ追いかけてるよ」

僕達第3艦隊は、響が「秋人にリベンジしてくるよ…」と言って、秋人達がいる方向へ向かったので、その様子を見ていた。それにしてもどうして秋人はあんなに回避が上手なのか？見た感じ、誰の砲撃にも当たっていなかった、僕以外。今度秋人に回避のコツを教えてもらおうかな。

霧島「思っただんですが、チーム戦の意味がなくなってきましたませんか？」

霧島さんがいきなり疑問を投げかけた。確かに言われてみればそうかもしれない。響と一緒に天龍や長門さんが秋人達を砲撃していたのだから。……まあ理由は大体わかるけどね。

加賀「提督がへんな挑発をしたからでしょうね」

夕立「あれは流石に怒るっばい……」

瑞鶴「確かに」

時雨「でも、気がついたら楽しく模擬戦をしていたよね」

夕立「……言われてみれば!」

霧島「私もいつの間にか、楽しくしてましたね」

「……全部秋人のおかげだね。」

加賀「それよりも時雨、あの距離でよく提督の攻撃?をかわしたわね」

時雨「え!? 加賀さん見ていたの!」

加賀「みんな見ていたわ」

時雨「そうなんだ。……あの時は、何となく秋人の投げる方向が分かったからかな。あと、夕立に応援されたからだね!」

夕立「……!? / /」カアアア:

加賀「成る程ね」夕立を見る

夕立「……と、ところで提督さんをずっと追いかけている響ちゃんはどうするっばい

? / /」

夕立は話をそらす為かな？顔を赤くしながら指をさした。僕は夕立が指をさしている方に顔を向けた。すると、未だに響が秋人を追いかけている姿が見えた、だけど顔は緩んでいる。……殺ると言っておきながら楽しんでるじゃないか……。まあ響らしいね——

霧島「あのままにしておきましょう。——あと、私達で別の艦隊を攻めに行きましょうか」

夕立「賛成っばい!!」

瑞鶴「腕がなるわね!」

加賀「あまり前に出過ぎないようにね」

瑞鶴「分かってるわよ!」

加賀「そう、なら良いわ……——頑張りましょう」

瑞鶴「ツ!!／／」

加賀さんは瑞鶴に小さく微笑んだ。加賀さんの笑顔って綺麗だね——僕は思わず見惚れてしまった。

加賀「時雨、どうしたの？」

僕が加賀さんをずっと見ていたせいかな、加賀さんは気づいて聞いてきた。

時雨「何でもないよ！」

加賀「？」首傾げ

side out 時雨

side ? ほぼ会話

第1艦隊

金剛「hey赤城！天龍の様子はどうですか？旗艦なのに提督を狙いに行きマシタガ
…」

赤城「大丈夫です、金剛さん。天龍さんはまだやられていませんよ。そろそろこつちに
戻ってくると思います」

金剛「thank you！流石赤城の艦載機ネ！！」

比叡「どうしますか？加勢して提督や長門さんや響さんをリタイアさせることもできませんが？」

雷「別にいいじゃない？あ、ほら天龍さんが帰ってきたし！」

電「お疲れ様なのです天龍さん！」

天龍「ごめん……旗艦なのに攻めに行っちゃまって……」

赤城「気にしないでください天龍さん。誰だってそういう失敗もありますから」

天龍「赤城さ……」

赤城「ですが……分かってますよね？」怖い笑顔

天龍「……はい……」(´；ω；´)

金剛「面白くなってきたネ！……？」

比叡「金剛お姉様、どうしましたか？」

金剛「ちよつと向こうの空の様子が……何か嫌な予感がシマスネ……気のせいだといいでスケド」

第2艦隊

陸奥「提督を狙いに行つてどうだったの？長門さん」

長門「ダメだ、全く当たる気がしない……」

北上「私達でも無理だったからね。それに私達得意の魚雷も回避したんだもん。ね、大井っち」

大井「そうですね、全てかわされました。あの、絶対前世の時、猿か何かだったはずですよッ！」

睦月「けど、カッコイイです！あんなに回避するなんて、睦月にも教えて欲しいです!!」

如月「回避力は大事よね」

北上「……それより、そろそろ私達も提督だけ狙わずに他の艦隊を……?」

大井「北上さん?どかしましたか?」

北上「いや、あんなに曇ってたかなあ〜って」

長門「確かにおかしいな、少し嫌な予感がする……」

陸奥「一応念の為、警戒だけはしておきましょうか」

—————

矢倉「もうすぐだ……準備はいいな?——」

戦艦水鬼「イヨイヨカ……オモシロイ……!!——」

い
―――秋人達の元に黒い影が近づいて来ている事はこの時誰も知らな

26話 襲撃者 ①

どうもみなさん櫻川 秋人です。今僕はかなり疲れています、体力的に。何故なら――

響「秋人、そろそろ脱落したらどう？」

秋人「絶対しねーよ！てか響こそ諦めたらどうだ!？」

響「悪いけどそれできないな……」

――未だに響に追いかけているからです。長門と天龍は諦めて戻ったのによくずつと追いかけてられて続けられるな。負けず嫌いにもほどがあるだろ……。

龍田「秋人さん頑張つてね〜」

吹雪「秋人さんファイトです！」

暁「秋兄もうちよつと頑張つてよね!!」

秋人「お前らは本当助けるとかそう言う気持ちはないのツ!？」

榛名「秋人さんですから」

翔鶴「秋人さんだったら大丈夫かと…」

秋人「それ2回目ツ!!」

ちよ……勘弁してくれ……。俺だから何でも大丈夫って思ってたら大間違いだぞ!流石の俺にだつて限界はあるんだし!あーもうこうなつたら!!

秋人「響、悪く思うなよ」

響「何を……ツ!!?」

龍田達「!」

俺は逃げるのを止め、響に向かって走り、響をお姫様抱っこする。止めないのなら止めるまでのこと……止めぬなら 止めさせてやる ホトトギス。あこれ、いい詩になつたわ……

響「秋人、一体何をして……」

秋人「やめないから、無理矢理でもやめさしたただけだよ、お前以外とこういうの弱

そうだし」

響「べ、別に…弱くなんか…：…ない／＼」

秋人「おいおい、そう言ってるけど、随分と顔が真っ赤っかになっているじゃないですか」ニタア

心は正直だなほんと、ツンデレにも程がある。

響「うう…：…分かった素直に戻るから下ろして／＼／＼」

秋人「言ったな？それで攻撃とか無しな？」

響「分かってるよ／＼／」

秋人「んじゃ、さっさと戻れ！」

響「また狙いに行くからその時は潔くやられてよ…」

秋人「断固拒否」

響は一旦響の艦隊のところに戻っていった…：…助かった。響っていつも強がついてるけど、中身は普通に子供で乙女なんだよなあ…：…けど毒舌でたまに何するか分からなから怖いけど…：…。…それから俺は安心してみんなが見てたところに戻ると何故

が不機嫌な顔をしていた。

秋人「あのさー、なんでみんなそんなに不機嫌なわけ？」

吹雪「自分で考えて下さい……」むすうー

榛名「榛名怒りましたよ……」むすうー

暁「別になんでも無いわよ……響ずるい……私もやってほしい……（小声）」

龍田「あらあら、秋人死にたいようね〜」笑顔

翔鶴「えつと……秋人さん自身で考えた方が良いでしょう……」

秋人「なんだよそれ……」（ーー……）

ほんとなんだろうな……。ほんと相手の心が読めたたら人生どんなに楽か……。相手心が読めるのは2次元だけだしな、2次元の世界羨ましい限りだわ！ーーそんな八つ当たり文句を心の中で思っている時、俺はふと空を見て、何か違和感を感じた。

秋人「ーーあれ？　そういや今日って雨降る予報だっけ？」

龍田「何言ってるんですか秋人さん、今日は1日中晴れですよ〜」

秋人「そうだよな……でもなんか向こうの空が異常なほどに曇ってきてるからさ〜」

翔鶴「確かに言われてみれば……何かとても危険な感じがしますね」
秋人「何か嫌な予感が……ッ!?」

俺が嫌な予感を感じた瞬間、異常なほどの危険な気配を感じた。それも小さいものはなく巨大ものの。

榛名「秋人さん？」

秋人「榛名、今すぐ模擬戦を中止にして全員鎮守府に戻るよう伝えてくれ……」

榛名「え? どういう……」

秋人「早くッ!!」

ドオオオオオン!!

俺たちの前に1発の砲撃が飛んできた。……遅かった……。

暁「えッ! 何ッ!?!」

吹雪「今のは……実弾ッ!?!」

龍田「敵襲よッ!」

榛名「敵は……ッ!? 何ですかあの数はッ!? あり得ません……それにあの人は……」

榛名は砲弾が飛んできた方を見た、そこには俺みたいに水の上を立っている白服の男と、ざっと数えたら15対以上の深海棲艦がいた。その深海棲艦も姫級や鬼級がほとんどだった。それに榛名、いや翔鶴以外は全員真ん中にいる男を見た途端、身体が震え出していた。つて事はあいつが……

翔鶴「あの人……?」

男「久しぶりだな兵器共ッ!!」

吹雪「……提督……様……」

矢倉「私がなぜここに居かなんて、もう分かっているだろう?……それでは始めようか……」

前任は不気味な笑みを浮かべてこう呟く……

矢倉「……復讐を」

side out 秋人

side 大淀

こんにちは、私は新鋭軽巡洋艦の大淀です。今私は、明石さんと一緒に指令室で模擬戦の状況を見ています。見ていると言っていますが実際は無線機で状況を聞いているだけです。

明石「大淀さん、みなさんの状況はどうですか？」

大淀「かなり盛り上がっているみたいです！先ほどまで提督は長門さん達に集中砲撃されてましたが…（呆れ）」

「……しかし、提督は時雨さんの砲撃以外は全て回避していたので別に心配しなくても大丈夫ですね。」

明石「え!?大丈夫何ですかそれッ!？」

大淀「大丈夫ですよ、全ての砲弾を回避していたので…時雨さんの砲撃以外は」

明石「ああ（察し）」

明石さんは何か納得したようなそんな声をあげた。――提督も提督でよくみなさんの砲撃を全て回避出来ますね：昨日の戦いといい、提督の身体能力は一体どうなっているんでしょうか：私、気になりますねえ。

明石「――？。――あの、大淀さん。今日って雨が降る予報でしたっけ？」

窓から外を見ていた明石さんが突然、私にそう質問を投げかけた。今日は確か――

大淀「今日は1日中晴れの予報ですがどうしましたか？」

明石「それが、提督やみんなが模擬戦をしている海のさらに向こうから黒い？雲が迫ってきているように見えるので……」

明石さんが不安そうにそう言ってきた。私は、明石さんが言っていたことを確かめるために、明石さんが見ていた窓の外を眺めた。

大淀「……確かにそうですね……ですが局地的大雨の可能性もありますよ、時期的には」

明石「そ、そうですね！私の考えすぎでし……『ブ……ブ……！』
『……通信ツ！』」

明石さんが最後まで言い終わる前に、指令室全体に通信音が流れた。何か嫌な予感がします…。

大淀「そう見たいですね……明石さんは少し静かにしてください。……こちら大淀です！」

秋人『大淀、俺だ……』

通信をかけた相手は提督だった。……提督は少し焦ってる感じで話してきた。

大淀「どうされましたか、提督？」

秋人『前任が異常な数の深海棲艦を連れて攻めてきた。だから一旦みんなを鎮守府に退避させるから、出来る範囲で準備を頼む。多分まだみんなも戦える状況じゃねーし』

大淀「そんなッ……！提督はどういるんですか!？」

秋人『足止めする……でことで頼んだ』

大淀「ちよっ……提督ッ!!」

提督は私に選択する時間を与えずに通信を切った。……どうしましょう……死にま
せんよね……提督……。

明石「どうしましたか大淀さん？」

大淀「明石さん……」

明石「……」

side out 大淀

side 秋人

矢倉「この私を追放させた事を後悔させてやる」

前任は不気味な笑みを未だに浮かべながら俺たちにそう言った。みんなもまだ身体

が震え続けている。早く逃がさねーと…そんな時——

金剛「hey 提督！さつき凄い音がしたけど、どうしたのデース？」

北上「実弾のような音がしたけど提督大丈夫？」

時雨「秋人、大丈夫かい？」

響「まさかやられていないだろうね？」

——さつきの砲撃音に反応したのか、それぞれの全艦隊がこつちに集まってきた。

矢倉「久しぶりだな兵器共……私が消えてから楽しく暮らしているようだが、この日
を待って終了だッ！」

天龍「ッ!?!……お前は……」

長門「前任か……」

響「前……任……!!!」

大井「まさか戻って来るなんてね……」

こつちに来たみんなは前任を見て、怯える奴もいれば、怒りを出す奴も少しだけどい

た。けど、身体は正直のようで実際は僅かに震えていた。

矢倉「ああ、戻ってきたよ……私の未練を晴らすために……。時雨……貴様に作られた未練をなああああ!!!」

時雨「ッ?!?ー!ー!ーいいよ……受けて立つよ……!」

前任は時雨に指をさして叫んだ。時雨も少し震えながら返答した。ー!ー!やっぱり、今のみんなに前任と戦わすのは危険だな……つーかアイツの中からなんかとんでもない力を感じるんだけど……絶対何か隠してゐるわ。そして、俺は時雨たちの前に立った、みんなを庇うように。

時雨「秋人……?」

秋人「すみませんが前任さん、自分が彼女たちと代わって相手をしましょう。元に分が今の彼女たちの提督なので」

艦娘達「ッ!?!」

矢倉「ほーう……この数を1人でか?」

天龍「お前ッ、何をッ!?!」

秋人「今のみんなは確実に前任は勿論、深海棲艦ともまともに戦えない。だから俺が戦うんだよ」

下手に戦うと確実に怪我だけじゃ済まない、それよりも一旦みんなを逃して、何も無い俺が戦う方が余程マシだ。

天龍「な…俺達がビビってるって言うのかよッ！」

秋人「あーそうだよ、お前ら全員前任にビビってる。この際はつきり言うけど、今のお前らは確実に足手まといだ、だからさっさと鎮守府に帰還しろ！それに、前にも言ったけど……」

俺は、みんなの方を向いて少し微笑みながら言った

秋人「……艦娘を守ることが、提督の一番の仕事だしな」

長門「提督……」

秋人「だから早く、アイツらは俺が押さえておくから。気持ちの整理がついたら戻ってこい、いいな？」

加賀「分かりました」

夕立「加賀さん!」

加賀「今の提督の判断が1番正しいです。それに私たちは実弾が無い、どうあがいてもあの人や深海棲艦を倒すことが出来ません」

金剛「そうデスね。hey みんな!ここは提督の指示に従って鎮守府に帰還するデース!行きますよー!!」

金剛がみんなを誘導して、みんなもそれに続いて帰還していった。やつと行ってくれたわくほんと心配性なんだから!ー!ー!ーって俺人間だから当たり前か。(・ω・)

秋人「お待たせ:いや、やつぱ良いやー!待たせたな、と言つてもアンタが一番戦いたかったのは時雨だったか?」

矢倉「いや、構わん:貴様を倒して、直ぐに兵器達のところへ行くまでのことだ!」

秋人「そうかよ。だった俺は全力でアンタらを止めるよ:」

矢倉「ほう:1人でこの数をか?ー!無理だな!」

秋人「無理かどうかはやってみないとわかねーだろ」

矢倉「では、やってみろ!」不気味な笑み

秋人「当たり前だ……」

27話 襲撃者 ②「共闘」

side 時雨

翔鶴「秋人さんは本当に大丈夫でしようか…」

僕たちは今、鎮守府へ帰還している。秋人が逃がしてくれたのだ、だけど僕を含めみんなは、秋人を心配していた。あの数の深海棲艦を1人で戦うからだ。絶対無事では済まされない…だけど…

時雨「大丈夫だよ、秋人はアイツにそう簡単にはやられない！僕たちも早く帰還して出撃の準備をしよう！」

「…僕は秋人を信じる、何があっても！」

長門「そうだな…全艦隊に告ぐ、速度を上げるぞ!!」

艦娘達「了解ッ!!」

待っていて秋人、絶対には助けに行くから!そんな時——

——シユツ:

——誰かが僕たちを横切っていった気がした。……人?——だけどここは海、人が通るなんて普通ありえない、秋人は別だけど……。一瞬だったからみんなは気づいてないみたいだ。————気のせいなのかな?

赤城「——今の……」

s i d e o u t 時雨

s i d e 秋人

秋人「……………」

俺は今、大勢の深海棲艦とドンパチかましていた。深海棲艦の数が多すぎて、なかなか前任のところにたどり着けない、早くアイツをぶん殴りてえのに……。つーかこいつら

避けすぎだろ…何で結構避けれないスピードで振ってるんだけどな…。

戦艦水鬼「ホウ、タダノ人間ノ割ニハ随分ト身軽ダナー」

秋人「……………」

深海棲艦のボス級の1人が俺に砲撃しながら言ってきた。俺は何も答えず、ただ無言で砲弾をかわしたり木刀で弾いたりした。

戦艦水鬼「ダガ貴様ガ持ツテイルソノ木刀ダケデハ、私達ヲ」

秋人「おいアンタ、1つ間違えてる…誰がいつこれを木刀だと言ったんだよ」

戦艦水鬼「ナンダト…？ー」

秋人「刃ならちゃんとあるぜ、ここになー」

俺は木刀の刃を思いっきり引つ張り、本物の刃を出した。

秋人「ほらな」

戦艦水鬼「刀…」

秋人「木刀と思った？残念、日本刀だよ。錯覚って怖いよな」

戦艦水鬼「ダガ、タカガ刀一本ダケデ：私達二太刀打ち出来マイツ!!」

秋人「日本刀を馬鹿にしてるみたいだけど、日本刀舐めんよ？これスゲー斬れ味良いんだからな！」

戦艦水鬼「フン、ドウデモ良イ事ダ」

こいつ：：まだ日本刀を馬鹿にしてる。良い度胸だな、おい：。

秋人「そうかよーーーだったら見せてやるよ：日本刀の力をツ!!」

俺は、一気に目の前にいる深海棲艦に詰め寄りーーー

戦艦水鬼「ナ、速ーーー」

秋人「いくぜーーー『雷斬』!!」

ーーーーー深海棲艦の艤装？の一部を潰した。

戦艦水鬼「クツ……」

秋人「言つたろ？日本刀舐めなつて」

戦艦水鬼「……ナルホド……確力ニ戦艦棲姫ガイッテイタ通りダナ……」

秋人「そんな余裕ぶつてんのも今のうちだ、次はアンタの息の根を止める！」

俺はもう一度目の前の深海棲艦に詰め寄つた。だが、深海棲艦は俺が距離を詰めて来ているのを分かっているにもかかわらず、避けようとせず、むしろ俺に向かつて不気味な笑顔を向けて来た。

秋人「行くぜ……『雷ぎr……』……」

戦艦水鬼「……ダガ結局ハコンナモノカ……」

秋人「は……?!……」

俺は目の前の深海棲艦に『雷斬』をしようとした瞬間、横から数発の砲弾が飛んで来た。俺は避けることができず、砲弾に直撃した。幸い身体が頑丈だったため、大した傷は無かつた。

戦艦水鬼「ホウ…ヤハリ今ノ砲撃デモ耐エルカ。流石ハ艦娘ノハーフト言ツタトコロ
ダナ」

秋人「そりやどーも…けど、こつちもいきなり数発の砲弾が飛んでくるなんて思っ
てもなかつたわ…」

戦艦水鬼「ソレハオ前ガ私達ヲ甘ク見テイタカラジャナイノカ？」

秋人「んな訳ねーだろ…こつちは一人で戦つてんだ！それなりの心構えぐらいして
るつてのツ！」

戦艦水鬼「フツ…ソウカー…」

矢倉「おい、戦艦水鬼！いつまで遊んでいるつもりだ…早くそいつを殺せ！」

ずっと無言で見えていた前任が深海棲艦を呼んで、俺を早く殺すように命令しに来た。
それよりも目の前にいる深海棲艦はどうやら戦艦水鬼というらしい。なんとなく予想
はしていたけど鬼級か…そう思ったら結構厳しくなりそうだな。戦艦水鬼以外に鬼級
や姫級があと数体はいるし…。あと何で前任は海の上に立つことができてんだ？俺
みたいに水の上でも立つことができる靴を履いている訳じゃないよな……。

戦艦水鬼「ソウ焦ルナ…スグニデモ殺ス…行クゾ、オマエタチツ!!!」

戦艦水鬼の大声と共に数十発もの砲弾が一斉に俺の元へ放たれた。

戦艦水鬼「コレナラ避けレナイダロウ…終ワリダ、人間」

秋人「勝手に決めつけんじゃねえよ……」

戦艦水鬼「何…?」

秋人「行くぜー」『櫻川家流 ハヤブサ』ツ!!!」

『櫻川家流 ハヤブサ』…音速並みのスピードで刀をふり続け、一瞬にして無数の物を斬る技術。肉眼で見ると、無数の刀の斬撃が見える。例えるならブリ○チの黒○ 一護が千○桜を全て叩き落とした感じだ。

一斉に放たれた砲弾を、俺は全て、叩き斬った。

秋人「こんなもんかよ…」

戦艦水鬼「ナツ!? 全テ叩キ斬ツタダドツ!? ソレニー」

秋人「剣尖が見えなかつただろ? 音速ぐらいのスピードでふつただからだから、仕方ねーよ」

そうやって俺は一步ずつ戦艦水鬼に近づいていく。

秋人「次はこつちから行こうか…」

戦艦水鬼「フ…」

俺がそう言ったあと、戦艦水鬼は、またもや不気味な微笑みをした。

秋人「何がおかしい」

戦艦水鬼「イヤ、タダ私が想像シタ以上ニヤルナト思ツテナ。ダガ、アノ程度ノ砲撃ヲ叩キ斬ツタグライデ、調子ニノルナツ!!」

戦艦水鬼は、いきなり俺に砲撃して来た。だが——

秋人「速ツ…」

——砲撃のスピードが上がっていた。成る程…とうとう本気を出して来やがったか

…。

戦艦水鬼「マダマダコレカラダツ!!オマエタチツ!!」

戦艦水鬼の声と共にさらに仲間の深海棲艦は、さつきよりも数倍の威力やスピードで砲撃して来た。特に駆逐艦達の砲撃が辛い…しかも、わざとタイミングをずらしながら撃っているようなので尚更タチが悪い。あと、今気づいたが、深海棲艦の数が、さつきよりの倍ぐらい増える。

秋人（クツソ、数が多すぎる……どんなけ仲間呼んでんだよ！流石に1人でこの数はきついつて……こうなったらー）

俺は数を減らすために、俺唯一の力、『アツ』を出すために敵の攻撃の隙を伺った…しかし避けることに専念しすぎて死角からの駆逐艦イ級の砲撃に気づかず、反応が遅れ、
またもや砲撃を食らってしまった。

秋人「クツソ…」

戦艦水鬼「終ワリダナ、人間！」

秋人「誰が…俺はまだやれるぜ」

戦艦水鬼「ソウカ、ナラ死ネツ!!」

戦艦水鬼は海に手をつけている状態の俺に向かって、砲撃して来た。——やっぱり使うしかないな…俺の切り札を……。そう思った瞬間、いきなり俺の前に黒い影が現れ、俺に向かつて飛んで来ていた砲弾は一瞬にして真つ2つになった。——この時、俺は誰が助けたのだろうかとは、考えなかった。

戦艦水鬼「ツ!?今度ハナンダ！」

——いや、考えるだけ無駄だと言ったほうがいいな、何故ならその影は——

頼長「この程度でやられているとは、お前もまだ修行が足りんな秋人」

——親父だったからだ。——って、親父ツ!?何で、それよりも普通に海の上に立ってるって…マジで人間なのかこの人ツ!?

秋人「親父!?!何でここに居るんだよッ!!」

頼長「尾形さんから近々前任が秋人の鎮守府に襲撃してくるって聞いてな。それで様子を見に行くと同時に一応報告しに来た。——が、まさかもう襲撃しに来てるとはな……」

秋人「マジかよ……てか親父、それどうやって海の上に立ってんの!?!」

頼長「俺の鬼道だが?」

秋人「マジかよ(2回目)、万能だな鬼道って……」

頼長「鬼道を甘く見るな、秋人」

ちなみに親父の言っている『鬼道』というのは、気を操って攻撃したり回復したりすることである。あと、使い方によっては親父みたいに水の上に立つこともできるし、空中で立つ事だって出来る。空中で立つ原理は、自分の気を固め足場になっているというのだ、水の上に立つということも空中で立つ原理と一緒に一緒だ。それに至るまで、十数年の修行が必要だけど……。

矢倉「——おい、いきなり入ってきて何だ貴様は」

頼長「そうだったな、失礼した——俺は櫻川 頼長、横にいるだらしない奴の父親だ」

秋人「だらし無いとは何だ、クソ親父!!」

頼長「事実だろう。お前をこんな相手に苦戦するような奴に、俺は育た覚えは無いぞ？」

——このクソ親父…さつきから黙って聞いてりや…好き勝手言いやがって。そもそもこの数を1人で相手していたこと自体褒めてくれても良いじゃねーか！（涙目）

秋人「勝手に言ってる…」

頼長「だが、この数相手によく戦えた。そこは評価してやろう、成長したな秋人…」

親父はそう言って小さく微笑んだ。——何だよ褒めるんだったら初めから言えよ…ホント——

秋人「ツンデレ——あぶねなツ!!!」

俺が最後まで言う前に親父は「櫻川家流 出迎え」をいつもの倍以上のスピードと威力でかましてきた。マジこの人は加減を知らなさすぎだろ……みんな、もしこの人に関わるなら注意した方が良くぞ!!

頼長「先に言っておくが秋人、俺はツンデレじゃない」

秋人「嘘つけ…(ボソツ)」

頼長「なんか言ったか？」眼力

あ、つい口にーーちよツ…親父眼力怖すぎるんだけど…やべ、俺のアツ以上だわ

…

秋人「いえ、なんでもございせんツ!!」

頼長「だつたら良いんだがな…」

矢倉「おい、つまらない茶番はそこまでにしろツ！貴様らは今の状況を分からないのか？」

見ると俺たちの周りには数十隻もの深海棲艦が俺たちを囲んでいた。

頼長「分からんな」

矢倉「だつたら教えてやろう……貴様らはここで死ぬということだ!!行けッお前ら、こいつらを跡形も無く消し去れ!!」

戦艦水鬼「ワカッテイル：行クゾオマエタチッ!!」

戦艦水鬼を含めた深海棲艦達は俺たちに砲口を向け集中砲火の準備をした。

頼長「秋人、数を減らすぞ。行けるか?」

秋人「行けるに決まってんだろ親父、何年一緒に修行したと思つてんだよ」

一緒に修行はしたけど、共闘は初めてだな、結構テンションが上がるわ。

頼長「フツ……それもそうだな行くぞ」

矢倉「さつきからコソコソと何を話している!!遺言なら考えなくても良いぞ、すぐに死ぬんだからな!!」

秋人「悪いけど、こつちもやられる訳には行かねーよ!」

頼長「同感だ」

矢倉「ほう、では抗ってみろ……やれお前ら」

戦艦水鬼「オワリダ！」

秋人「そう簡単には——」

頼長「——やらせん！」

秋人・頼長『アツ』（『印^{いん}』）!!!」

『印』頼長の唯一の力。

秋人の『アツ』にしているがそれよりも強力で、これを受けたものは、立ち上がるこ
とができなくなり気絶する、場合によっては心臓が止まる。範囲は『アツ』と一緒。

俺と親父の力によって数十隻もいた深海棲艦は一瞬にして10隻まで減った、その
残っている深海棲艦も堪えるのに必死になっている状態だ。

戦艦水鬼「——ツツツ!!!」

矢倉「馬鹿なツ!? ——この数を一瞬で……」

秋人「あんまり俺たちを舐めてると、足元をすくわれるぜ、前任」

頼長「次はお前だ、覚悟はできているだろうな？」

矢倉「フツフツ……」

前任は不気味に笑う。一体何が面白いのかが俺には分からない、多分親父も一緒のこ
とを思ってるだろう……

矢倉「……いいだろう……では見せてやろう、私の本気を!!」

28話 襲撃者 ③ 大規模改造と本当の力

矢倉「私の本気を見せてやろう…」

前任は不気味な笑顔とともにそう口にした。前任が本気って…一体何をするんだ？
見た感じ武器なんて持って無いのに……。

頼長「秋人、お前は前任の相手をしろ。俺は残った深海棲艦の相手をする」

親父は俺に前任と戦うのを譲ってくれた。——いや、普通は親父が前任の相手をするべきのような気がするけど…まあいいや。

秋人「OK…親父も無理すんなよ、怪我したら母さんが怒るからさ！」

頼長「そんなヘマはしない。あと、秋人——できるだけアレを使って戦うのはさける、いいな」

秋人「悪いけど、それは流石の親父でも聞ねーな、俺は俺のやり方で戦う！」

頼長「……………フツ…言つても無駄か…：…分かった、お前がやりたいように戦え、万が一の時は俺が止めてやるから」

秋人「ありがとう…：親父。……………じゃあ行つてくる…」

やつぱりこの人が俺の親父で良かった。多分この人じゃなかったら俺は一生、本当の力なんて使うことができなかったから…

矢倉「話し合いは終わりか？」

秋人「ああ！その前に名前聞いてなかったな前任…：…俺は新しくここの提督になった
櫻川 秋人だ、よろしく！」

矢倉「私は、ここの鎮守府の提督だった矢倉とでも言つておこうか…」

秋人「そうかよ…：じゃあ早速…：…行くぜ矢倉ッ！」

俺は矢倉に向かって全力で走り、そして全力で刀を振り落とした。その勢いで大きな水しぶきが上がった。……………感覚はある、けどなんでだ？刀が動かない…：…。動かなかった理由は、水しぶきが収まってからやつと分かった。矢倉が俺の刀を片手で握り止めていたからだ。それに、素手で受け止めているに一切手から血が出ていない…：なん

つー硬さだよ……。

秋人「……ツツ!?!」

矢倉「この程度か……弱いなあ、もっと腕のあるやつだと思ったが……」

秋人「……ツ!」

俺は握られてる手を振りほどき、一旦距離をとった。……この人ただの人間だろ……なのに何で……まさかこの人ツ!?!俺は矢倉についてある答えを導き出した。

秋人「まさかアンタ……艦娘の力を持つてるな……」

矢倉「ほーう、今の一戦で気づくなんて大したものだな……ああ、そうだ、櫻川秋人。貴様の言う通り私はその力を持っている。だが、私が持っているのは艦娘の力などではない! 『深海棲艦』の力だツ!!」

秋人「ツ!?!」

そつちの力かよ……じゃあアレか……自分が深海棲艦になって俺を潰すとかそう言う流れか!?!

矢倉「見るがいい櫻川秋人！これが私が手に入れた、深海棲艦の力だ!!」

ドオオオオオン!!!

いきなり矢倉の身体を光が包み込みその光は一直線に上へと伸びていた。やっぱりそう言う流れだったか…何かしらと予想が当たってしまふな…嫌ぐらいに…ああと、なんか矢倉の能力の解放がブリーチの愛○がホ○ウと超越する瞬間に似ているな……。…。…。…。徐々に光が小さくなっていき、矢倉が光から出てきた。矢倉を見ると全身白い肌に赤い目、深海棲艦の象徴？であるかのような角に…背後に大砲はないが巨大な蛇みたいなものが2匹いた。矢倉はマジの深海棲艦へと変身を遂げていた。

矢倉「コレガ私ノ真ノ姿ダ!!」

秋人「…マジかよ…」

矢倉「サア、続キヲ始メヨウカ！櫻川秋人ツツ!!!」

side out 秋人

side 時雨

今僕たちは出撃の準備を整えていた。そして僕はとても焦っていた、理由はただの間だから。たしかに秋人は凄い、1人で深海棲艦と戦ってきたから…今も秋人は深海棲艦相手に1人で戦っている、でも秋人も普通の人間、いつ死んでもおかしくない。だから僕は焦っていた。

時雨 「早くしないと秋人が……」

長門 「時雨心配する気持ちもわかるが、今は準備に専念しろ！大丈夫だ提督は絶対に死なない！前任ごときにやられるような奴ではないからな！」

時雨 「でも……」

もー…
なんだか嫌な予感がする…この予感が本当かどうかは分からないけど、それで

赤城 「長門さんの言う通りですよ時雨さん」

時雨 「赤城さん…？」

赤城「大丈夫です！秋人さんは絶対に死にません、あの人がいますから……」
時雨「あの人？」

誰だろう……あの人って……もしかして秋人のお父さんかな？

赤城「はい！私の愛する夫の頼長さんです！」

やっぱり秋人のお父さんだった……それよりも赤城さん、このことはみんなに内緒だったはずじゃ……

長門「えッ……赤城、今なんて言った……？」

赤城「え…………あ……しまった」

やっぱり……

赤城「いや、あの……」

長門「今のはどう言うことなんだ!?教えてくれ、赤城！」

長門さんは赤城さんに必死になって聞いた。

赤城「……………分かりました。……………ですが、皆さんの前で話しても良いですか？これは私達艦娘にとっても重大な事なので！」

長門「……………分かった、すぐにみんなを集めよう」

……………

それから赤城さんはみんなに、秋人ととの関係や父の存在を打ち明かした。

金剛「まさか提督が赤城さんの子供だったなんて、驚きゲー」

天龍「だからアイツはあの時……」

赤城「……………そして、ここから先の話はまだ誰にも言っていない話です。これを聞けば多分、皆さんは秋人さんの事を嫌いになるかもしれませんが……」

時雨「どう言う事だい、赤城さん？」

僕がそう聞くと、赤城さんから信じられない言葉が出てきた。

赤城「……秋人さんは、深海棲艦の力を持っているんです……」

艦娘「……ッ!?」

赤城「本当は、私もこんな事を話したくはありませんでした……ですが、どうしても皆さんにはこの事実だけでも、受け入れて欲しかったんです……今まで隠していてもみませんでした!」

そう言つて赤城さんは頭をめいっばい下げた。……そうだったんだ……秋人が深海棲艦の……でも、だからって!

時雨「だからって僕は嫌いになんかならないよ!」

赤城「時雨さん……?」

時雨「秋人は見知らぬ僕を助けてくれたし、いっぱい守ってくれた!今回の事だつて真つ先に僕たちの安全を第一に考えてくれていたんだよ!そんな秋人を深海棲艦の力を持つているだけで嫌いになんかなれないよ!」

夕立「時雨ちゃんの言う通りっばい!あと、私の予想だけど深海棲艦の姿をしている

提督さんも何も変わらない普通の提督さんっぽいと思うし〜」

北上「提督の言葉を借りるなら、たったそれだけの違いだしね〜」

長門「同感だ！」

金剛「たとえ深海棲艦の姿になった提督でも、提督は提督ネ！」

睦月「睦月もそう思います！」

響「深海棲艦の姿をした秋人もいじりがいがありそうだしね」

雷「私は、たとえお兄ちゃんが深海棲艦でも気持ちは変わらないわ！ね、電？」

電「はい！どんな姿でもお兄さんはお兄さんなのです！」

天龍「深海棲艦のアイツと戦って見たいしな」

赤城「皆さん……」

気がつけば、みんながみんな、秋人を受け入れていた。ついこの前までは、ほとんどが秋人を信じてはいなかったのに……今はみんなが秋人を信じてる。ほんとに秋人の存在は大きかったんだなって、僕は改めて思った。

赤城「……ありがとうございます！」

瑞鶴「そうと決まれば、早く提督の援護に行きましょう！」

明石「あ、ちょっと待ってください！」

時雨「明石さん？」

急に止めてどうしたのだろう……。

明石「向かう前に、大規模改造をしませんか？」

艦娘「!？」

吹雪「あのー明石さん……どうしてこのタイミングですか？」

明石「それは、今まで提督はまだ少ない時間でしたが、私達のためにすぐ頑張ってくれていたからです。そしていつも私達を守ってくれていました。だから、次は私達が提督を守る番だと思っんです、まあ本来はそれが当たり前なんですけどね……（苦笑い）」

明石さんは苦笑いしながら言う。確かに僕たちはいつも秋人に守ってもらっていた。だから、次は僕が秋人を守る番だよ。これで全ての恩返しになるわけじゃない、でも、ほんの少しでも返せたなら、僕はそれで満足だ。

陸奥「それが提督ですから仕方ないわ……。それよりも、そうと決まれば早くしましよ
う、明石さん！」

明石「そうですね。ですが、今は時間が無いので、できるのは1回だけですけが……」

明石さんは申し訳なさそうにそういった。つまり、大規模改造ができるのはこの中の
1人だけなんだね、誰になるんだろう……。あれ？ さつきからみんな、僕の方
を見てるけどどうしてかな？ ……

時雨「えつと……何でみんな僕の方を見ているんだい？」

夕立「そんなの時雨ちゃんが大規模改造をするからに決まってるっばい！」

時雨「え、僕が!? ……どうして……」

僕より長門さん達の方が断然いいのに……

長門「私達よりも時雨の方がいいと思ったからだ。鎮守府を変えようと最初に動いた
のは時雨だったし、私達をあんな地獄から救ってくれた。だからこれは私達の感謝の気持
ちだ！ 受け取ってくれるか？」

時雨「長門さん……」

天龍「それに時雨はあいつの、提督の事が好きみたいだしなく！」

ちよつ……天龍さん、いきなり何を言い出すんだい／＼／＼!?確かに僕は秋人の事が好きだけど……そう言う好きって言うわけじゃ……／＼／＼。

時雨「ち、違うよ! そう言う好きってわけじゃ……／＼／＼!!!」

龍田「天龍ちゃん。流石に言い過ぎよ。……／＼／＼あと時雨ちゃん、この事は強制はしないわ。貴方がしっかりと決めなさい！」微笑む

龍田さんは優しくそう言ってくれた。……／＼／＼、僕はもう決めたよ!

時雨「分かった! 少し不安だけど僕がやるよ明石さん!!」

明石「分かりました、では時雨さん工廠へ来てください!あと、すぐに終わりますから、皆さんは少しの間待機しててくださいい!」

side out 時雨

side 秋人

矢倉「私ガ少シ本気ヲ出シタダケデ、モウコレカ櫻川秋人」

秋人「……………」

俺は今、深海棲艦になった矢倉の攻撃を、刀で受け流していた。矢倉は、ほとんどが素手で攻撃をし、たまに後ろの巨大な2匹の蛇みたいな奴が攻撃してくる。……それにしても、攻撃のスピードが速い……体感的に親父の『櫻川家流 出迎え』並みだな。

矢倉「モウイイ……ソロソロ終ワリニスル」ニヤツ

秋人「……ッ!?!」

そう言つて矢倉は不気味な笑顔のまま一瞬で俺に詰め寄り、首を掴んで上にあげた。完全によくあるやられ方だ……けどまだ苦しくない。

矢倉「落胆シタヨ、櫻川秋人。モウ少シ、楽シマセテクレルカト思ツタガ、期待ハズレダ!」

何だよ期待はずれって……俺だって限界はあのに……。まあ抵抗するのもめんどくさいから、本気で殺しに来そうになったら刀で振りほどくか。

矢倉「兵器共モ兵器共ダ。タカダカ人間ノ姿ニナツタグライデ、人間トシテ接シロダノ、モット楽ニサセテ欲シイダノ……馬鹿カツ!!鉄ノ塊デ出来タ偽リノ人間風情ガ、兵器共ニスルモノハ一切ナイ!!!兵器ハ兵器ラシク提督ノ命令ダケ従ツテイレバイイ!!!」

……さつきから黙って聞いてりや、あいつらの事を好き勝手言いやがって……。俺は徐々に怒りメーターが上がっていった。

矢倉「マアアイ。貴様ヲ殺シテ、スグニ兵器共ノ所へ行ケバイイダケノコト。兵器共ノ絶望シタ顔ヲ楽シマセテモラオウ。特ニ時雨：アイツダケハ別デナダメテヤル……」

ブチッー

とうとう俺の怒りメーターが限界を超えた。もういいや……切り札を使わずこいつをぶっ潰そうと思ったけど、やつば無理だわ……。コイツだけは徹底的に潰さねーと気が済

まねー!!

矢倉「オット話スギタナ……ーデハ、終ワリダツ! 櫻川秋人ツ!!」

秋人「終わりだと……? ……こんなもんかよ……ッ!!」

俺は俺の首を締めて矢倉の手を刀で切った。

矢倉「ガアッ!!! 貴様ツ……!!」

秋人「もういい!!、アンタの話、黙って聞いてたけど、うんざりだ………ーあと、アンタ、「こんなもんか?」って言ってたよな? いいぜ、見せてやるよ俺の本気を……!」

矢倉（ナンダ、コイツカラ感ジル異常ナ程ノ威圧ハ!!）

俺は矢倉に剣尖を向けた。

秋人「これが俺の……本当の力だ………」

俺は内なる力、深海棲艦の力を解放した……

s i d e o u t 秋人
s i d e ?

秋人が力を解放した瞬間、矢倉が深海棲艦の力を解放した時のように、光が秋人を包み込みその光は一直線に上へと伸びていた。そして光が一瞬で消え、出てきたのは白い肌、赤黒い目、そして矢倉から見て右側なのでここから深海棲艦を表すかのような角が生えた秋人だった。

矢倉「ナツ!?!…ソノ姿…マサカ貴様モ……」

秋人「ああ、———始めようぜ矢倉…一瞬で、終らしてやる…」

29話 襲撃者 ④ それぞれの思い

side ??

秋人「始めようぜ矢倉……一瞬で……終わらせてやる」

秋人が深海棲艦の力を解放して、矢倉にそう言った。

矢倉「一瞬で終わラセルダド……不可能だ、私ハ再生スル事が出来ルカラナ！」

矢倉がそう言い終えた瞬間、切られた腕を再生させた。

矢倉「見口、貴様が斬ツタ私ノ腕モ直グニ元ノ状態ニ戻ル」

秋人（…腕が再生した…そこまでこいつは）

矢倉「櫻川 秋人、タカガ見タ目ダケノ深海棲艦ニナツタダケデ、私ヲ倒ス事ナド出
来ハシナイツ!!」

そして矢倉は、秋人の距離を詰め、素手での攻撃を放った。

秋人（…さつきよりも速い）

だが、秋人は無言で矢倉の攻撃を刀で受け止める。

矢倉「ホウ、良ク私ノ攻撃ヲ受け止メタナ。……ダガ、コンナモノデハ終ワラント
!!」

矢倉は凄いスピードで、秋人に素手で連続攻撃するが、秋人は未だに無言のまま、攻撃をかわしたり刀で受け止め続けた。……しばらくして秋人の刀と矢倉の腕が交わり、お互いの動きが止まった。

矢倉「コノ私ノ連続攻撃ヲカワシ続ケタノハ褒メテヤロウ。……ドウヤラ私モ貴様ノ
カヲ見限ツテイタヨウダ……フツ」

秋人「何がおかしい……」

矢倉「イヤナニ、ソレデモ私ノ力ノ前デハ及バナイトイウ事ガ、今ノ応酬デ分カッタ
ダケダツ!! 私ガ本気ヲ出セバ、貴様ノ刀モ破片ニナルノダカラナアツ!!」

矢倉は秋人に向かって今までにないほどの速いスピードと威力で攻撃を放つ。しかし、矢倉は次の秋人の行動によって驚愕する事になる、なぜなら秋人は、矢倉の素手での攻撃を刀ではなく、素手で受け止めたからだ。

矢倉「ナツ!? ー(馬鹿ナツ!? 今ノスピードヲ素手デ受け止メタ……ダトツ! 普通ナラ目デ追エナイハズ……ナノニコイツハツ……!!)」

秋人「どうした…矢倉。俺がアンタの攻撃を、素手で受け止めた事が、そんなに信じられないのかよ…」

矢倉「ナンダドツ!!」

秋人「そりやそうだよな…、自分でも思っても見ない事が、目の前で、実際に、目の当たりにしたんだから…」

矢倉「ツ!? ……フッフッフッフ…ヨカロウ、ソコマデ言ウナラ
見セテヤル、櫻川 秋人。私ノ、最大火力ノ砲撃ヲツ!!」

矢倉は秋人との距離を一旦離れ、矢倉の背後に付いているレ級の後ろにいるモンスターののような生物を秋人に向け、1発の砲弾を放った。その砲弾は、艦娘たちや普通の深海棲艦たちの砲弾と違い、誰も見た事がない色で光り、科学ではまず作るのが不可能な砲弾だった。砲弾は秋人に近づいていくと同時に威力が上がっていった。

矢倉「貴様ニハ理解スラ出来ナイ一撃ダ、止メレルモノナラ、止メテミロツ！櫻川秋人ツ!!!」

最終砲弾は、巨大な光となって秋人を襲った。だが——

秋人「こんなもんかよ……」

——秋人はまたもや素手で矢倉が放った砲弾をはじき返した。

矢倉「ツツ!!……」

秋人「気がついてないみたいだから教えてやるよ……矢倉。今のあんたの力よりも、俺の力の方が上だって事を……そして、この状態の力を——」

秋人はそう言いながら、ゆっくりと矢倉に近づいていく。

秋人「俺のこの力は、通常よりもスピード、力、動体視力、反応速度、e t c…全てが数倍以上に上がる…あとは、何故か少し性格が変わるー」

矢倉「……………」放心状態

秋人「ー…今度はこつちの番だ…行くぜ、矢倉…」

秋人は一瞬にして矢倉との距離を詰め、刀で矢倉の胴体をを斬り裂いた。斬られた矢倉は無意識のうちに秋人との距離を置いた。

矢倉「グッ……………」

秋人「妙だな…さっきまで強がってたアンタが、たった1回、俺に胴体を斬られただけで、かなり距離を取るなんて……………結局アンタはその程度だったんだな」

矢倉「ッ！……………黙ッテ聞イテイレバ好キ勝手ニツ……………タカガ私ノ攻撃ヲ受ケ止メタグライデ……………タカガ私ノ砲弾ヲハジキ返シタグライデ……………タカガ私ノ攻撃ヲ斬ツタグライデ……………調子ニノルナヨッ！！餓鬼ガアアアアアッッ！！！！」

矢倉「オマエヲ、ツブスツツツ！」

秋人「……………潰されんのはどっちだよ」

矢倉「ギャ……………アアアアアツツ!!!」

完全に秋人の不意をついた攻撃だったが、秋人の反射神経と反応速度が矢倉のスピードをわずかに上回り、秋人は矢倉の腕を斬った。しかし矢倉は、斬られた傷をすぐに再生させ、再び秋人に向かって攻撃し、秋人もそれに応戦した。—————気づけば2人の応酬は肉眼ではほぼ追えないほどのスピードになっていた。

矢倉「ア”ア”ア”アアアアツツ!!!」

秋人「……………『櫻川家流 雷斬り』」

矢倉「—————フツフツフ…」

秋人は向かって来た矢倉の横腹を斬り裂いた。しかし矢倉は、斬られても微動だにせず、秋人に不気味な笑みを浮かべた。そして傷口はすぐに塞がり元どおりになった。

秋人（……………まだ再生すんのか）

矢倉「…オワリニスル…イケガラクタドモ」

矢倉がそう言った瞬間、数十体もの深海棲艦が海から出て来た。そして出てきた瞬間、深海棲艦は秋人に向かって集中砲火をした。

秋人（……………コイツら、俺が『アツ』を出す前に）

秋人は深海棲艦の集中砲火を回避した、しかし――

矢倉「……………オワリダ、サクラガワ アキトツ!!!」

――避けた先には、既に矢倉が待ち構えており、秋人も矢倉がどこに攻撃するのかがわかっていたとしても、回避に間に合わない態勢だった。

秋人「……………フツ…いいぜ片腕ぐらい。――くれてやるよ矢倉…」

ドオオオオオン!!!!

秋人が腕を矢倉に向けて差し出した時、1発の巨大な砲弾が矢倉を襲った。

秋人（……今のは……砲撃。……一体誰が……？）

秋人が、砲弾が飛んできた方向を向くとそこには――

時雨「ギリギリだつてね……大丈夫かい、秋人？」

――改二になった時雨がいた。

side out ?

side 秋人

俺は砲弾が飛んできた方向を向くとそこに時雨に似ている艦娘が立っていた。

秋人「――お前、時雨なのか？」

時雨「じゃあ逆に聞くけど……それ以外に何かあるのさ……」呆れ

やっぱ時雨だった。けど、今までと容姿が違う、それにどこか大人っぽくなったような気がする。

秋人「いやだつて、容姿が……」

時雨「……ああ、そうだったね。……僕、大規模改造して改二になったんだよ。……つて、それを言ったら秋人もそうじゃないかッ！」

大規模改造……確か艦娘が強くなる事だったよな、てことは時雨も……。あと、今の俺の姿に対してツツコミを入れたよな。

秋人「俺は……もう分かってんだろ？」

時雨「うん、分かってるよ……赤城さん、いや、秋人のお母さんから聞いたから……」
秋人「……やっぱりな……じゃあ時雨、今聞くけど、この俺の姿を見てどう思う？」

正直答えなんて既に分かっている……俺は今、深海棲艦の姿をしている、言い換えると時雨達を裏切った事になるのだ。だから、裏切り者だと罵倒したり、突き放したり、否

定したりするのが妥当だろう。しかし、その質問に対しての時雨の答えによって俺は、驚愕する事となる。なぜなら――

時雨「別に僕は秋人が深海棲艦の姿をしていようとも、秋人は秋人だと思うよ」

――俺を否定しなかったからだ。……何でだよ時雨…俺はお前らを……

秋人「何でだよ時雨……俺はお前らを裏切つ……そんなことないツ!!」……時雨？」

時雨「秋人は死にそうになってた僕を助けてくれてたし、この鎮守府のみんなをたくさん救ってくれた、そんな人を深海棲艦の姿になったぐらいで嫌いになんかならないし、裏切つたって思わないよ。――それに、秋人の言葉を借りるなら “ たったそれだけの違い ” さー！」

時雨は微笑みながらそう言った……その瞬間俺の中にあつた黒い何かが一瞬で綺麗さっぱりと晴れたような、そんな感覚がした。そんな時、煙から暴走した矢倉が俺たちに向かつてきた

秋人「……時雨俺の後ろに隠れてろ」

時雨「何言ってるのさ秋人、今の僕はあの頃の僕じゃ無いよ。前任なんてもう怖く無いから、ここは僕に任せて！」

そう言つて時雨は矢倉へと向かつて行つた。……時雨も、改二になつてから雰囲気が変わつたな……。

矢倉「シグ……レ……シグレエエエエツツ
!!!!!!」

矢倉は時雨に向かつて大きく腕を振りかざして来た。

時雨「……悪いけど、そんな攻撃じゃ僕には届かないよ……はあああツ!!」

矢倉「ガアアアア
!!!!!!」

時雨は矢倉の攻撃を回避して矢倉に数発、砲撃した。そして矢倉は時雨の砲撃によつて大きく吹っ飛んだ。

時雨「どうだい、秋人？」

秋人「…強くなったな、時雨。それに、少し雰囲気も変わったな」

時雨「大人っぽくなったって言って欲しいね。雰囲気なら秋人も違うじや無いか…」

秋人「…俺はこの姿になると何故か性格が少し変わるだけだ…」

時雨「少しどころじゃ無いよ…それ」

秋人「…そうか？まあどうでも良いけど」

時雨「…でも、いつものテンションが高い秋人じゃなくて、こっちの静かでクールな感じの秋人の方が僕的には良いと思うよ」

秋人「…俺は逆に嫌だな…元の姿の方がいい」

時雨「まあ、人それぞれ思う事は違うからね〜！」

秋人「…それよりも時雨ほかの奴はどうしたんだよ」

長門「いるぞ提督!!」

いきなり後ろから声がしたので、俺はすぐに振り返った。そこには長門を先頭に鎮守府にいる全員の艦娘が来ていた。みんなは俺を見て、誰一人として怖がってる奴がいなかった。

長門「それよりも、先に行き過ぎだ時雨。もう少し私達のスピードに合わせてくれな
いか……?」

吹雪「時雨ちゃん速すぎだよ!」

響「絶対改二になって、気持ちが悪く上がってるよね……?」

時雨「あ、みんなごめんツ!!——秋人のことを考えてたら、ついスピードを上げて
しまったよ……」

——ついて早々、みんなはいきなり時雨に不満をぶつける構図となっていた。流石
の俺も呆れ顔でその状況を見ていた。

北上「ねえみんなく時雨ちゃんに対する不満があるのは分かるけど、何か忘れてない
く?」

北上の言葉でみんなは正気に戻り、そして一斉にみんなは俺の方に視線を向けた。

※ここからほぼ会話にします。

艦娘達「あ……(察し)」

秋人「……あ、じゃねーよ……」呆れ

長門「すまない提督、見苦しいところを見せた……」

秋人「……別に気にしてねーよ長門」

長門「そうか……しかし提督、本当に深海棲艦の姿をしているんだな……それにいつもの雰囲気とは違うな」

秋人「……悪いな、裏切るみたいな感じにして……あと、この姿になったら何故か性格も少し変わるんだよ……」

陸奥「何言ってるのよ提督、別にその姿をしたぐらいで私達は提督を裏切るような事はしないわよ！」

秋人「……分かってる。けど、お前らの仕事は深海棲艦を倒すことだろ？なのに俺は深海棲艦の姿をしてる、完全に敵として扱うのが妥当な筈だ」

睦月「確かに提督の言っていることは正しいです。私達の仕事は深海棲艦を倒すことです。けど、提督は違うって睦月は思います！」

如月「いつも私達を助けてくれたり、心配してくれたり、楽しませてくれたりしてくれたり、今までの鎮守府の雰囲気ガラツと変えてくれた。そんな人を深海棲艦になつたぐらいで嫌いにはならないわ！」

普段あまり表情を出さない加賀さんが俺に対して、微笑みながらそう言ってくれた。——これで俺は本当に救われた気がした。配属された鎮守府がここで良かったって俺は改めてそう思った。

秋人「……ありがとう、じゃあ遠慮なく頼らせてもらおうわ」

雷「そうそう、お兄ちゃん！もつと私を頼っても良いのよ、ね電？」

電「そうなのです！お兄さんはいつも一人で頑張りすぎなのです！」

時雨「秋人、僕たち艦娘の仕事って知ってるかい？」

秋人「……深海棲艦を倒すこととこの世界を守ること、じゃねーのか？」

時雨「そうだけど、1つ足りないね……良いかい秋人、僕たち艦娘の本当の仕事はこの世界を深海棲艦から守ることと、もう1つは——」

艦娘達「提督を守ること（だ・なのです・だよ）です!!!」

時雨に合わせてみんなが笑顔でそう言った。——そして、みんなが言い終わった瞬間、煙から矢倉が出てきた。

暁「来たわよ！みんな構えて!!」

金剛「全く…前任も随分とクレイジーな姿になったものデース！あの姿より、アツキーの姿の方が全然マシネ…ていうかいつもよりカツコいいデス！」

秋人「…カツコいいは余計だ、あといつから俺はアツキーってなったんだよ金剛…」
金剛「今日からデス、提督！」

秋人「…まあ良いか。——お前ら、ずっと頼るつても俺は嫌だから、上司と部下の共同作戦つてのはどうだ？」

夕立「なんかそれ面白いつぽい！」

時雨「それは良いね！僕も秋人と一緒に戦つて見たかったし」

長門「ふむ、良いだろう!!」

響「今の秋人とは上手くやれそうな気がするしね」

秋人「フツ…じゃ始めるか…共同作戦を——」

30話 襲撃者 ⑤ 「愛する人」と「1人じゃない！」

side 頼長

頼長「甘い……」深海棲艦を斬る

駆逐イ級1「ガア……ア……」轟沈

駆逐イ級2「……アア……」轟沈

俺は今、残っている深海棲艦等の相手をしている。……はずだった。何故こんな言い方になっているのか、残った深海棲艦等の相手をしていたら、別の深海棲艦の群れが出てたからだ。そのせいですぐに終わるはずが、かなり時間を費やしてる。……敵自体はそんなに強くは無い……だか、切つても切つても数が減らないため、時間が経つにつれて俺の体力が無くなつていく……まあまだ全然余裕なんだが……しかしこのままでは拉致があかない。……もう一度使うか……。俺は目を閉じ、力をためるために集中した……そして……

頼長「印ッ!!」

深海棲艦「…ッ!？」

俺はもう一度、秋月のアツに少し似ている技、印を使った。俺の半径20m範囲にいる深海棲艦は全員気絶した。俺の印は秋人のアツと違って強力で、これを半径20m範囲内で受ければほぼ100%気絶する。場合によっては心臓が止まるほどの威力だ。——ある程度数が減ったか…あとは残った奴を斬るだけだ…。

頼長「覚悟はいいかお前等…」

深海棲艦「ッ!？」

俺は一瞬で残りの深海棲艦を叩き斬っていく。——だが、さつきからなにかを忘れてる気がする…そう思った刹那、俺の前に砲弾が飛んでくる。しかし——

頼長「遅すぎる…」

——俺は余裕で砲弾を真つ2つに斬った。

戦艦水鬼「ナツ…!?今ノ砲撃ヲ余裕デ…斬ルダト…」

頼長「悪いが俺は秋人とは違うのでな、そんな攻撃は、俺にとつては不意打ちにはならん」

戦艦水鬼「チツ……!」

頼長「次は俺だ…覚悟はいいか？」

そう言つて俺は、目の前の深海棲艦に近づいていく。

戦艦水鬼「簡単ニヤラセルト思ウナツ!!!」

深海棲艦が叫んだ刹那、また深海棲艦の群れが大量に現れた。……どれほどの仲間を出してきているんだ、こいつ等は…そこを尽きないのか……?」

頼長「まだ仲間を呼ぶのか…」

戦艦水鬼「悪いガ、私達ノ仲間ハ、才前ガ思ツテイル以上ノ数ハイル」

目の前にいる深海棲艦は俺に向かって不気味な笑みを浮かべた。——俺を舐めて
るみたいだが、まあ良い……この数の差でも俺は十分に戦える……いや、叩き潰してくれろ。

頼長「ほう、ならば俺がまとめて叩き潰してやるからかかってこい」

戦艦水鬼「タダノ人間ゴトキガ：調子ニノルナツツ!!」

目の前の深海棲艦は俺に向かって砲撃してきたが、俺はその砲弾を真つ一二つに斬る。
その瞬間、深海棲艦の群れが俺に向かって一斉に攻撃を始めた。俺はその攻撃をかわし
ながら、深海棲艦を斬り裂くしていく。

駆逐口級「ガアアアア!!」

頼長「遅すぎるな……」斬る

駆逐口級「ガ……アア……」轟沈

頼長「お前等はまだまだツメが甘い」

こんなもんか……これだったら秋人と真剣勝負をしる方がましだな……。

戦艦水鬼 「フ…ソレハドウダロウナ…」

頼長 「どういう意味だ」

戦艦水鬼 「ソノママノ意味ダ」

目の前の深海棲艦は俺の方向に指をさした。それが振り返ると、深海棲艦の群れが秋人に向かって一齐に砲撃をしようとしていた。

「お前………ツッ!!」

俺はすぐに力を使おうとしたが、当然間に合うわけがない。だが俺は……その刹那………

ヒュウウウ………ドカアアアッ!!

戦艦水鬼 「ツ!？」

上空から爆弾のようなものが降りそそぎ、深海棲艦の群れを撃破していった。……なんだ……爆発した……? 一体何処からだ……。俺は周りを見た、そしてそこにいたのは……

秋人「あれ……？　そういえば母さんは……？」

時雨「ん？　赤城さんのことかい？　——赤城さんなら、君のお父さんの所に行ったよ

……！」

—————

??「ギリギリ間に合いましたね……」

戦艦水鬼「誰ダツ!!」

赤城「航空母艦　赤城です。あなた達を止めに来ました……！」

——俺の妻である　茜（赤城）だった。

頼長（茜……）

赤城「もうこれ以上、貴方達の好きにはさせません!! 覚悟はできていますか……？」

戦艦水鬼「チツ……」

茜は深海棲艦に向かって弓を構えながらそう言った。

赤城「第一次攻撃隊、発艦！」

戦艦水鬼「……グアッ！……」 中破

茜は矢を抜き、そこから無数の飛行機へと変化させ、深海棲艦の群れを攻撃していった。……変わったな、茜……あの頃よりも……。俺は茜の顔を見てそう思った。

赤城「会いたかったです……頼長さん……！」

頼長「俺もだ……しばらく見ないうちに随分と強くなつたんだな……」

赤城「ええ、私もいっぱい鍛錬したんです……もうあの頃の私とは違いますよ……！」 微笑む

笑む

頼長「茜……」

赤城「なので、私も一緒に戦います……！」

頼長「……」

赤城「本当に私が変わったかを、頼長さんと一緒に戦って証明したいんです！」

やはり茜は、あの頃よりも、だいぶとたくましくなったんだな…それに茜と一緒に戦う……か…

頼長「フツ…なら俺の動きにしっかりあわせろ、それで本当に強くなったのか、見極める！…行くぞッ茜！」ニヤ

赤城「はい！」

side out 頼長

side 秋人

矢倉「ガアアア！」

秋人「…遅い…時雨」避ける

時雨「分かってるよ」砲撃

矢倉「ガアッ…」

俺は時雨たちと一緒に矢倉と戦っていた。

秋人「加賀、瑞鶴……艦載機を出して敵の艦載機を撃ち落として欲しい……出来れば空母艦ごと」

加賀「……」頷く

瑞鶴「分かったわ！」

そして瑞鶴と加賀は、艦載機を出して大量に飛んでいた敵の艦載機を撃ち落としていった。そして爆弾で空母艦を轟沈させて行く。この時、2人の息はびったりだった。いつも喧嘩してんのに……本当はお互いをしっかり理解し合っているんだなって、つくづく思う。

秋人「上出来……」微笑む

瑞鶴「この程度なら、なんとも無いわ！」

加賀「瑞鶴、赤城さんの言葉を借りるなら “慢心しては駄目” よ」

瑞鶴「なッ……／／分かってるわよ!!……／／」

加賀「そう、ならいいのだけれど」

「……2人はまた言い合いになっている。この状況でよく言い合いができるな……俺は逆に感心してしまう。」

長門「提督、あの男は、私と陸奥で任せてはくらないだろうか？」

陸奥「今までの分をきつちり返したいから！」

いきなり長門と陸奥が、俺にそう頼んできた。……気持ちは分かる、でも……

秋人「……いや、駄目だ。確かに2人が一緒に戦ってくれたら、俺も正直安心して戦える。けど、お前ら2人が矢倉の相手をする、周りにいる深海棲艦を倒す戦力が一気にダウンする。だから2人は、出来るだけ矢倉が呼び出した深海棲艦の相手をしてほしい」

長門「提督……」

陸奥「……でも……」

秋人「頼む……」

長門「……分かった……だか提督、やるからには絶対に負けるなッ！」

陸奥「提督、信じているわ！」

秋人「ああ、任せろ……」

俺が言った後、2人は深海棲艦の群れのところに向かっていった。さてと……

矢倉「……………」

秋人「そろそろ決着をつけようか矢倉……」

矢倉「……………ツブス」

秋人「……………行くぜ」

時雨「待つてツ！」

俺が矢倉の元に一步踏み出そうとした瞬間、時雨に止められた。

秋人「……………何だよ、時雨」

時雨「秋人1人で、戦わせるわけにはいかないよ……」

夕立「そうそう、1人よりも2人の方がいいっほいしね！」

響「私もいるよ」ピース

気づけば夕立と響もそこにいた。

秋人「お前ら……」

時雨「秋人……僕たちもいるんだから、1人でしようとししないで……!」

夕立「ちゃんと私達も頼ってほしいっばい!」

響「秋人、誰のために私達がいるのか分かつてる?」

……そうだ、忘れていた。ここには信用できる仲間がいる、1人で背負ってしなくてもいいんだ……ホント……

秋人「……気づくの遅せーな……俺って……」

時雨「まあそう言う所は今に始まった事ではないね」

夕立「秋人らしくていいっばいしねえ〜!」

響「むしろ、頼る方が秋人らしくないね」

秋人「……言ってくれんじゃん。まあいいや……んじや時雨、夕立、響。お前らの力を借りて、あいつを……矢倉を倒すぞ!そんで……暁の水平線に勝利を刻もーぜ……」

31話 襲撃者 ⑥

決着

矢倉「アアアア!!!」

時雨「遅いよ………響ッ！」回避

響「分かってるよ」砲撃

今俺達は、矢倉と最後の決着をつけるために戦っている。そして状況的には、人数が多い事もあって俺達の方が攻撃回数が多い。が、矢倉は俺達の攻撃をいとも簡単に回避したり、透明な防御膜を張つたりする時があるため、あんまり押しているとは言えない。

矢倉「…アマイ………シネ、ハイキドモッ!!!」

矢倉は響の砲撃を回避して、時雨と響に向かって砲撃をした。矢倉の砲撃のスピードが速い為、時雨と響は回避に間に合わない状態だ。だから俺は、2人の前に立って刀で砲弾を防いだ。

秋人「大丈夫か……」

時雨「大丈夫さ……ありがとう秋人」

響「別に助けなくても良かったのにね……けどまあ、ありがとう」

秋人「ツンデレかよ……」

響の奴、いい加減素直になれよ……。けどまあ響らしくて俺は好きだけど……。そんなことより……戦いに集中しないとな。

秋人「夕立……！」

夕立「了解っぼい！」

そして夕立は矢倉に向かっていき、動き回りながら矢倉を砲撃していく。

秋人「……夕立のやつ、前よりも動きが良くなってる」

時雨「そりやいつも訓練をしているからね」

秋人「……けど、あいつ満足したらすぐに気が抜ける奴だから心配だな……あの攻防も多分夕立が先に破る……それで、安心した夕立は一瞬動きが遅くなって、矢倉はそこを突い

夕立「そう来ると思っただけだ！」

私は、その攻撃を読んでいたので前任の攻撃を回避した。そして――

夕立「あの時のお返しっばい！」

矢倉「ガアア……」

――私は隠し持っていた小型ナイフを矢倉の腹部に刺した。

夕立「もう私は、お前なんか怖くないっばい！」

矢倉「ハイ……キ……ガアア!!」

しかしその瞬間、前任は私のお腹を突き刺しに来た。だけど私は、お腹を刺したことへの安心感で気を抜いてしまい、反応に遅れてしまった。そのせいで、前任の攻撃をかわすことができず、真つ向から受けてしまった――

「……」だけども痛みを感じなかった。どうして……。私は反射的に閉じた目を開けた、するとそこには「……」

響「……ツツ……：夕立……大丈夫かい……？」

「……」前任の攻撃を受けている響ちゃんがいた。今の状況を理解するのに、そんな時間がかからなかった。なぜなら、響ちゃんは私を庇って攻撃を受けたのだから。

夕立「響ちゃんツツツ!!!」

響「全く夕立は……：戦場では……：気を抜いてはいけない……：っていつも言ってるだろう……：ツツ……」

前任の腕が響ちゃんのお腹にグツサリと刺さっていて、傷から血が滲み出ている。さらに響ちゃんの口からも血が出ていて、危険な状態だった。……：また私は……：大きなミス……：を……：しかも今回は自分じゃなくて、周りのみんなを巻き込んで……

夕立「ごめ……ん……なさい……」

気づけば私は崩れるように座り込んで泣いていたっぽい。言うなれば戦意消失だ。

矢倉「……フツツ……オワリ、アト……」

響「………何勝った気ているんだい……まだ私は終わってないよ……」

矢倉「……ツ!？」

そうやって響ちゃんは響ちゃんのお腹に刺さっている腕を抜かないように強く握りしめた。

響「………今だよ、2人とも……!!」

その瞬間、提督さんは響ちゃんに刺さっている腕を切り、時雨ちゃんは身体を砲撃した。

矢倉「ガアアアア………!!!」

秋人「……大丈夫か、響……」

響「君は鬼なのかい？……前任の攻撃を真つ向からお腹に受けて……大丈夫な訳ないよ……普通に……痛いよ、体験してみるかい？ここに腕あるから……ほら」

そう言つて響ちゃんはお腹に刺さつた、斬られた前任の腕を抜いた。――あれ？……なんか雰囲気がおかしいっぽい……ような……。

秋人「……はいはい、俺が悪かつたよ……」呆れ

時雨「アハハハ……まあそうだね、けど、いきなり響が囧になるつて言ったのは驚いたよ……」

ええええええ！ちよ……それは一体ツ！?

夕立「みんなどういう事っぽいッ!?私聞いてないっぽい!」

秋人「……それは夕立が矢倉に向かつてから、響がいきなり――」
――

少し前（会話だけ）

秋人「――何するんだよ」

響「私が夕立を助けた後、囿になるから、その隙に2人はアイツを攻撃してくれるかな?」

時雨「それって……大丈夫なのかい?」

響「大丈夫さ。それに、少し夕立にも学習してもらわないとね……」不気味な微笑み

秋人「……なんか嫌な予感するな……」

時雨「僕だよ、秋人!」

—————

秋人「……という事だ……」

それってつまり—————

夕立「わざと響ちゃんは、前任の攻撃を受けたっぽイツ!」

響「そうだよ……夕立に戦場で気を抜くとどうなるかを、直で学んで欲しかったからね

……」

そんな……その為だけに響ちゃんは……

夕立「響ちゃん……ごめんなさいっばい……」

響「……反省しているのなら良いよ。……そのかわり鎮守府に戻ったら……分かっているよね?……」

夕立「は、はいっばいッツ!!!」

響ちゃんは私に向かって不気味な微笑みを浮かべながらそう言ったため、私もびびつて返事をしてしまった。————な、何されるっばい!?こ、怖いっばいよおおお!!!

side out 夕立

side ??

矢倉「イツマデハナシテイル……」

俺たちが夕立を騙していた事について話していると、矢倉が俺たちに向かって声を掛けてきた。矢倉の腕を見ると再生していた。まだ再生すんのか……

秋人「……そうだった、忘れてた……終わりにしようか、矢倉。……夕立は響を見てろ、い

くぞ時雨」

時雨「分かったよ…」

夕立「分かったっばい！」

響「絶対にミンチ肉みたいにするんだよ」

響のやつ、お腹刺された事結構根に持ってるんな絶対…

秋人「…ああ、任せろ…」

s i d e o u t 秋人

s i d e ??

秋人と時雨は矢倉の前に立った。

秋人「…この一撃で…終わらせてやる」

矢倉「…ワタシモソウシヨウカ」

そして秋人は、目を閉じて全ての力を出し、それに続いて矢倉も深海棲艦の全ての力を放出させた。しかし――

時雨「待つて秋人」

――時雨がそれを止める。

秋人「…なんだよ時雨」

時雨「アイツとの決着は僕がつけたい…！」

秋人「時雨…」

時雨「本当は僕達の問題なんだ、だから僕達でけりをつけたいし…：…それに――アイツは僕を恨んでいるみたいだからね。僕が戦った方が、アイツにとつても都合になるし。お願いだ秋人、僕がアイツと決着をつけさせてくれないか？」

秋人「…：…ハァー、そこまで言うなら、時雨頼んだ」

時雨「ありがとう秋人。あと、任せて！」

そうやって時雨は矢倉の元へ向かっていった。何か強いオーラをまといながら。

「秋人「…ッ!?…時雨のやつ、まさか————」

—————

時雨「待たせたね、矢倉。…終わりにしようか…!」

矢倉「シグレ…シグレエエエ!!!」

矢倉はすごいスピードで時雨の元に近づいていった。

時雨「悪いけど、今の僕は、その状態の君にも負ける気はしないから————」

矢倉「ガアアアアアア!!!!」

矢倉は、時雨に向かいながら手を振りかざす。逆に時雨は目を閉じて力をためた。

矢倉「キエロツツツ!!!!」

時雨「行くよ—————!!」

矢倉「ツツツ!!?—————」

『アツ』ツ!!!!

そしてなんと時雨は、秋人の唯一の技、 “アツ” “ ” を出したのだ。矢倉も一瞬驚いたせいで、時雨のアツに捕まってしまい、完全に動きを封じられた。

時雨「大丈夫…すぐに楽にしてあげるから…」

矢倉「…ツツツ
!!!!」

そう言つて時雨は一気に矢倉の距離を詰めに行き——

時雨「これで…終わりだツ!!」

——そして短刀で矢倉の心臓がある方の胸を、距離を詰めた勢いのまま貫く。

矢倉「ア…ア…ア…ゴフツ…」

時雨「…おやすみ…」

矢倉「オワル…カアアアツツ
!!!!」

しかし、時雨がナイフを離して、矢倉から離れようとした瞬間、矢倉は残った力で時

雨を攻撃した。

時雨「……いや、君はもう終わりだよー」

時雨がそう言った瞬間、矢倉の前に秋人が現れー

矢倉「ー……ッツ!？」

秋人「……終わりだ……一刀………両断ッ!!!」

ー矢倉を肩から対角上に身体を叩き斬った。

矢倉「ガハッ………馬鹿………」

そして矢倉はそのまま倒れた。倒れた後、光が矢倉の身体を一瞬で包み、その光が消えると元の人間の姿になっていた。

side out ?

side 秋人

俺は倒れた矢倉を見た。矢倉は元の人間の姿に戻って、何故が俺と時雨がつけた傷もすっかり消えた状態で気絶していた。——これでやつと……。その瞬間、俺は安心したと同時に、さつきまでの疲れがどつと出てしまい、そのまま崩れるように海面に座り込んだ。

時雨「お疲れ様、秋人。……終わっただね……！」

秋人「……ああ、俺たちの勝ちだ」

時雨「これで……やつと…………」

その瞬間、時雨は涙が混ざった笑顔をした。そりやそうだ、やつと全てが解放されて自由になったんだから——。

side out 秋人

side 頼長

なるほど、秋人の方は終わったか……。……。俺は残っている深海棲艦と戦いながら秋人の方を見て、そう思った。ならこちらも、早く終わらせた方が良いな……

戦艦水鬼「サツキカラ、何ヨソ見ヲシテイルツ！」 砲撃
頼長「……。甘いな……」

俺は深海棲艦が撃った砲弾を斬った。

戦艦水鬼「クソツ……。ナラコレハ……。グアツ……」

茜は、深海棲艦が砲撃しようとした瞬間に戦闘機で攻撃して止めた。フっ……。茜のやつ、やはり分かっているな……。

赤城「させませんよ！」

戦艦水鬼「空母娘ガ……。!!」

頼長「深海棲艦、もう終わりにしないか？この戦いを」

戦艦水鬼「ツ?!……。ドウイウ意味ダ……」

俺はここで、ボスが負けた事を目の前の深海棲艦に伝えた。

戦艦水鬼「ooooooooソウカ。……ダカラドウシタ？」

頼長「このまま戦つても、無意味だと思うが？」

戦艦水鬼「フツ……ソレデモ私タチハ、キサマヲ倒スツ！」

頼長「そうか……なら俺も、お前の首を斬る事になるな」

俺は刀を深海棲艦の首に当てながら言った。

戦艦水鬼「ツ!? イ……イツノ間ニ……」

頼長「どうする……ここでやめるか、俺に首を斬られるか、どちらか選べ」

俺は深海棲艦に少し威圧をかけ、答えを急がした。

戦艦水鬼「……ワカツタ……今回ダケハ言ウトウリニシテヤル……ダガ、次ニ戦ウ

トキハ覚エテオケ、人間……!!」

夕立は俺を呼びながら、響を支えて向かってきた。そして響は、お腹に手を当てて血を止めていた。しかしそれでも、血は流れ出していた。

秋人「…おう、終わったぞ夕立、響」

夕立「提督さん、大丈夫だったっほい!？」

秋人「…ああ、大丈夫。それよりも響は？」

響「さつきも言ったよね、秋人…この傷を見て大丈夫だと…思うかい?…」

そう言って響は、お腹の血を止めるために、さらに強く手でお腹を抑えた。――
……なんか、そう言ってる割には元気だよな…。

時雨「早く鎮守府に戻って入渠しないとね…」

響「そう…だね。あ、そういうえば…倒した怪物は？」

秋人「矢倉か…アイツはソコに寝転んでるぞ」

俺は、1m先で倒れている矢倉に、指差して教えた。矢倉は元の姿に戻って、白目向

いている状態で倒れていた。

夕立「うわあ……気持ち悪いっぼい……！……っつてあれ？なんで提督さんと時雨ちゃんがつけた傷が一つもないっぼい？」

秋人「……それは俺が矢倉を斬った後、矢倉の身体が光って、その光が消えたら、つけた傷も無くなった元の人間の姿の矢倉に戻ったんだよ」

夕立「へえ、なるほどっぼい」

時雨「……あ、そういえば秋人、前任はどうやって深海棲艦の力を手に入れたんだい？深海棲艦の力を持っている秋人なら、知っているんだらう？」

秋人「ああ。こいつの中に多分深海棲艦の源になるコアみたいなものを体内に埋め込んだんだと思う。元に俺もあるからな……」

夕立「提督さん、それは本当っぼい!？」

秋人「ああ。病院でレントゲンを撮ったら、くつきり写ってたよ……石みたいな物体が心臓にべったり付いていたのを。あとその石から出てる管みたいなものが心臓に絡め付いていたのもの……」

時雨「……ッ?!……秋人は暴走とかはしないの?」

時雨は心配そうに俺を見つめながら聞いてきた。……やっぱりそう言う不安はあるよな。

秋人「…それは絶対ないから安心しろ。親父に嫌ほど修行させられたし、むしろこの力は俺の一部になってる。暴走なんて有り得ねーよ」

時雨「そっか、なら良かったよ！」

長門「提督ッ!!」

時雨が安心した表情でそう言葉をもらした瞬間、俺を呼ぶ声が聞こえた。声のする方向に顔を向けると、長門達がこっちに向かってくるまでいた。

長門「提督大丈夫か！」

陸奥「ケガは無い!？」

睦月「大丈夫ですか提督！」

吹雪「司令、前任は…！」

大井「もちろん倒しましたよねえ？」

天龍「逃したとか言うんじゃないやねえだろーな？」

矢倉が呼び出した深海棲艦と戦っていた長門達が、急ぎながら俺たちの方へ向かってきていた。

秋人「…ああ。矢倉は倒したし、深海棲艦も何故かいなくなってるし。とりあえず俺たちの完全勝利だ…」

長門「そうか、良かった…!」

瑞鶴「……つて事はこれで…」

加賀「ええ、終わった事になるわ」

加賀が涼しそうな表情のまま瑞鶴にそう言った。

艦娘「……や……や……やったああああ!!!」

みんなは喜びをあげたと同時に、その場で跳ね上がった。そして、涙するものもいた。……やっと終わったんだ…。みんなの姿を見て、俺は改めてそう実感した。

如月「そういえば提督さん、前任は……」

秋人「……あー、矢倉ならそこでぶっ倒れてるぞ……」

金剛「oh……思いつきり白目をむいてマスネ……」

榛名「う……見ると気持ち悪くなってきました……」

北上「あれ……でも、さっきまでは深海棲艦の姿になっていたのに、いつの間にか戻ってるよね……?」

秋人「……あー、それはだなー……」

く 秋人説明中く

秋人「……とー」と言う事なんだよ。まあ要するに、矢倉の体に埋め込まれたコアを俺が斬って潰したって事だ……これでもうこいつは姿を変えることはない、何故かまだ海に浮いてるのが謎だけ……」

霧島「成る程……」

秋人「……あとコイツ気絶してるから、悪戯し放題だぞ?」

響「そつか……ならお言葉に甘えて、愉快に遊ぶとするよ……お返しもしないといけないしね。やられたらやり返す、100倍返しだよ」

響は大怪我を負っているにもかかわらず、目を輝かせながらそう言った。……ちよつ

と待て、お前無敵だな……。俺は逆に怖くなる……。あと最後に言った言葉、どこかで聞いたことがあるような……。

暁「響、やめなさい！響がやると洒落にならなわ！」

雷「そうよ響！あと、怪我をしてるじゃない、安静にしないとイケないわ！」

電「そうなのです！」

響「大丈夫さ……不死鳥の名は伊達じゃないから」

3人「そう言う問題じゃない（のです）わ!!」

第六駆逐艦たちは揉めていた。——多分、いつもの俺だったらこう言う光景を見てから「可愛い、最高!!」と思うだろう、けど今は子供のじゃれ合いを見ているように思っ
て、つい微笑んでしまう。——そして4人は微笑んでいた俺に気づいて、一緒に笑っ
た。

時雨「秋人、戻ろうか……僕たちの帰る場所に！」

秋人「ああ、そうだな……あ、あとみんな……あ、ありがとな、一緒に戦ってくれて……

／
／

時雨「礼なんていらなないよ秋人。僕たちは当たり前のことをしたただけだからさ」
長門「うむ。我々の仕事は深海棲艦を倒す事と提督を守ることだからな！」

長門の言葉に合わせてみんなは頷いた。

赤城「秋人！」

突然後ろから俺を呼ぶ声が聞こえ、振り返るとそこには母さんとプラス親父がいた。

秋人「母さん……」

赤城「心配したんですよ！」

秋人「……悪い」

赤城「こら、「すみません」でしょ！その姿になっても礼儀はわきまえなさい」
秋人「……ッ……」

母さんは俺にげんこつをかまして説教した。流石正規空母だ、普通に痛い。この力使ってんの……普通の状態だったら確実に三途の川の手前まで行ってたな……危な

かった。

秋人「……すみません」

赤城「分かれば良いんです。それに、よく頑張りましたね……」

母さんは俺を抱きしめた。母さんの腕の中は暖かかった。

頼長「おい、秋田。そこ代われ」

その光景を見ていた親父は、俺の名前をわざと間違えるなり、嫉妬して切れた。まあ、喧嘩を売られている事は分かる。だから俺もその宣戦布告とやらを買うことにする。

秋人「……は？実の息子の名前を間違えた奴に、誰が代わるかよ。妻コン髭ジジイが」

艦娘「ツ!？」

赤城「秋人!？」

ブチツーー

頼長「ほう……この俺にさからうとは、死にたいようだな……秋人」ゴゴゴ

秋人「…別に…アンタが勝手に喧嘩ふっかけてきたんだろ…俺は良いぞ、○りあつても…」ゴゴゴ

頼長「ふっ……面白い、ならこつちも容赦なく○る…覚悟しろ」

秋人「…『狂鬼』か、上等だ」

※『狂鬼』（きょうき）とは、頼長の超本気モードで、彼がそれに入れば、この地球上にある全てのものを、一瞬で真つ二つ、もしくは粉々に斬り裂けるようになる。補足だが、この状態の頼長は加減が出来ない為、普通に戦うことはオススメ出来ない。と言うか死に行くようなもの。

時雨「秋人、ちよつと落ち着こうよ！（焦）」

比叡「喧嘩は良くないですよおお！」

響「面白くなってきたジャマイカ」

瑞鶴「ちよつ…アンタ何言つて…」

赤城「不味いですね…皆さん、今すぐここから離れてください!!」

艦娘達「ツツツ!?!」

頼長「………簡単に終わるなよ、馬鹿息子…」

親父は『狂鬼』を発動した。流石親父、『狂鬼』に入るとまるで違う、立ってるだけで

この重圧感……おもしれー…。

秋人「…はっ…何言ってるんだよ、この姿を見て分かんねーのか？簡単に終わるわけねーだろー…安心しろ…アンタを退屈に思わせるような事はしねーから…」

赤城「皆さん、早くツ!!!」

加賀「赤城さん…？」 退避

天龍「何が何だかわかねーけど、分かったああ!!!」 退避

翔鶴「……………あの2人の中だけ、すごく空気が重く感じます…」 退避

電「怖いのですううう!!!」 退避

龍田「あらあら…また戦いですか？……………」 退避

頼長「いぞ秋人ー」

秋人「ああ、300回目のー」

2人「殺し合いじゃああ!!」

俺と親父は同時に動いて刀を振った。そしてお互いの刀が交り合った瞬間、衝撃波ができ、大きな波が全体に広がった。俺と親父のガチ喧嘩が始まったのだ。これが始まれば、もう誰も止める事はできないー…あの人以外はー

長門「なんだ……あの2人の戦いは……いや、戦いではない、これは戦争だ……」

吹雪「あのお……2人は人間なのでしょうか……?」

陸奥「人間だと思うわ……多分」

赤城「……………はあ……悪い子には、お仕置きですわ……」ゴゴゴ

加賀「赤城さん……!?!」

—————

数十分後、2人の勝負に決着がついた。——いや、決着ではない。止められたのだ、1人の女性によって……。それは誰なのかは————言わないでおく。その人のイメージが一気に崩れてしまうかもしれないので。そして、その勝負が終わった2人は、ボロボロで半分逝った状態になっていた。さらに艦娘からは、「あの2人を止めるなんて……凄いい!」「カッコいい!」「あんな姿は初めて見た……」「もう2度と逆らつてはいけない」などと口を揃えて語つたらしい。そして援護で遅れて到着した尾形の艦娘の部隊から「見てはいけない物を見ってしまった」と語っていた。

※補足

たまたま2人の喧嘩と、その喧嘩を止めたところを見ていた、深海棲艦達は「ココハヤバイ……!」という事になり、2度とこの海域に近づかなくなつたという事はまた別の

話……

復讐編

〽完〽

第3章 過去編

32話 過去について

尾形『本当にありがとう、秋人。お前が今なかったら今頃あの子たちはどうなっていたか……』

あの戦いが終わって、かれこれ2、3日がたった。その間に何が起きたのか箇条書きで説明する。

← 矢倉を拘束後、地下にあった牢屋にぶち込む。(見張りは親父)

← その日の夜みんなでパーティーをする。

← 次の日、尾形さんとその秘書官の大和さんが、拘束した矢倉を引き取りに来る。

← その次の日、尾形さんから感謝状と、お礼として大量の資材を送られる(俺の好きなバンドグループのライブチケットも)

←
現在、大本營に戻った尾形さんと通話中。

秋人「礼なんていりませんよ尾形さん。俺は当たり前をしたただけですの
でー」

尾形『そうかー』

秋人「それよりも、もう2度とあんな失態をしないで欲しいですねぇ……」ゴゴゴ……

「なんな奴と戦うのはもうごめんだからな……それに、みんなを危険に合わせたくないし。つーか牢屋から脱獄させるつて、どんだけセキュリティが甘いんだよ！大本營のくせしてツ!!」

尾形『ぐ……分かった、改善するよ……じゃあまた会える時にな、秋人』

秋人「はい、じゃあまたー」

俺は尾形さんとの通話を切った。

秋人「……さしてと、これからどうすつかなく」

今はまだ昼頃だ、そしてみんなも出撃や遠征に向かっていたり、訓練をしたりしている。この鎮守府内には誰もいない………てことは現在進行形で俺一人だけ………やったぜ☆ 俺は今、自由だ！最高！F u u ㄥ!! (?? ?? ?)??

響「1度病院で診てもらった方が良いかもね」

……と、思ったが人生はそう甘く無いもので、俺が完全にテンションMAXになっていた状態を響に見られてしまった。ていうか………

秋人「……いつから居たんだよ」

響「秋人が独り言を言っていた辺りからだよ」

秋人「ほぼ最初からじゃないですかヤダー」

マジで気づかなかったわ……これからはしっかり周りを見ないと……。

響「それよりも、今から何をしようとしていたんだ？ 顔が滅茶苦茶気持ち悪かったよ」
響がゴミを見るような目で俺を見ながら聞いてきた。てか、そこまで引かなくても良いじゃねーか。

秋人「あつそ、悪かったな気持ち悪くて。ただ一人だったから気分が高揚したただだよ」

響「ふーん。キモイね」

ブチッブチッ

あ、切れたわ。もう無理だわ、コイツ絶対殴ってやる…。

秋人「俺に喧嘩売ってることだけは分かったわ…：良いぜ、買ってやるから響、今から表出ろ」

響「冗談だよ…」

秋人「ブチッブチッ冗談に聞こえね…：…」

響「それは良かったよ」

響は嬉しそうにそう言った。このクソ『ドS』め……。

秋人「良くねーし……それよりも、何しに来たんだよ響。お前訓練してたる？」

響「流石にずっと訓練するのも疲れるから、休憩しに来たんだ」

秋人「お前執務室の使い方間違ってるぞ……ここは休憩室じゃないし……。てか、休憩するなら自分の部屋に行って休憩しろよ……」

響「何故かここが落ち着くんだ。不思議だな……この前までは、ここは地獄の場所だと思ってたのに……」

秋人「そうか。……んじゃ、響が気がすむまで休憩してろ、俺はちよつとコンビニに行ってくるから」

俺は、執務室から出ようとした、あえて着替えずに、制服のまま。うーん、何買おつかなく……とりあえずお腹すいたしご飯を少々、それとお菓子だろ？あとは……

響「待つんだよ秋人」

……俺が買う物を考えながらドアノブを持った瞬間、響に止められた。とりあえず

俺は嫌々になりながら振り返る。

響「そんなに露骨に嫌な顔しなくてもいいじゃないか」

秋人「……何？」

とりあえず返事はする。響のことだ、どーせ「私も一緒に行く」と言うに決まってる。

響「私も一緒に行くよ」

はい、予想通りの回答ありがとうございます。

秋人「休憩は？」

響「もう大丈夫さ。それじゃあ行こうか」

秋人「……お前、絶対俺と一緒にいたいだけだろ……？」

響「さあね……」

そうやって響はそっぽ向く。完全に凶星じゃん、ほんとにコイツは……

秋人「素直じゃねーな……ほら行くぞ響」

響「……うん。……秋人だから、素直になれないんだよ……／＼（小声）」

秋人「……なんか言ったか？」

響「……別になんでもない」

—————

その後、響と一緒にコンビニに行った。そして、チキンやご飯、スナック菓子、アイヌなどいっぱい買って、現在は鎮守府に戻っている最中。

響「秋人、ふと思ったことがあるんだけどいいかい？」

秋人「ん、何？」

響「流星に買いすぎだよ、これ……」

秋人「ごめん、俺もそれ思った」

確かに、俺と響が持つてる袋はパンパンになっていた。

秋人「いや、つかこの中の半分以上が響が入れたものじゃん！」

響「記憶に無いね……」目をそらす

秋人「コイツ……!!」

響「……あと、真面目な質問があるんだけど」

秋人「はいはい……またロクでもない事だろ？」

もうそのノリには引つかからねーぞ……響の真面目は大体真面目じゃ無いからな。経
験上——

響「いや、ほんとに真面目な質問だよ。——秋人はいつから深海棲艦の力を持つ
たんだい？」

秋人「!？」

ほんとに真面目な質問だった為俺は少々戸惑った。そうだった、俺はまだみんなに俺
の事を話していなかったな。この際だしいいか、話しても。——親父もいるし……。

響「どうなんだい？」

秋人「そうだな、確かにみんなに話さないといけないな……俺の過去を……早速今日の

夜に食堂で話すから、そのつもりで」

響「わかったよ」

—————

夜になり、俺は食堂にみんなを集めた。

秋人「悪いなみんな、寝る前に食堂に呼びたしたりして」

時雨「別に大丈夫だけど、急に僕たちを集めてどうしたんだい、秋人？」

長門「何か重大な作戦会議でもするのか？」

秋人「いや違う、今からするのは俺の過去の話だ」

頼長「話すのか、秋人」

秋人「うん、俺の隠していた力も見られたんだし、もう隠す必要もないしさ」

頼長「そうか、茜は良いのか？」

翔鶴「茜？」

赤城「ちよ…頼長さん！今は赤城と呼んでください！……／＼／＼」

頼長「あくそうだったな、悪かった」

親父は反省する気もない感じで謝った。あ、これ絶対また茜って呼ぶわ……。

赤城「もう……私も良いですよ、私もそろそろだと感じていたので」

秋人「オツケー。んじや話すぞー」

そして俺は自分の昔の話をした。

33話 過去 ① 違和感

俺が昔住んでいたのは、東北地方のまさに海と山がすぐ近くにある場所だった。そして今から17年前、俺はそこで生まれた。艦娘からというイレギュラーな子として。当時の俺はそんな事なんてこれっぽっちも知らなかった。あの日が来るまでは――

――

――俺が生まれてから8年が経った頃、俺の身体のことと違和感を覚え始めるようになった。

茜「秋人、早く降りて来なさい！危ないx」

秋人「大丈夫だつて母ちゃんも心配症だな」

オレは、家の近くにある高さ6〜7m程ある大きな木に登って遊んでいた。母ちゃんからも降りるようにと注意されるが、オレはそれをあえて聞き入れなかった。そして、

オレはさらに上へ登ろうともう一つ高いところから伸びている枝に足を掛けた。その瞬間——

——バキツ!!

秋人「へ?——ぎやああ〜!!」

茜「秋人ツ!!」

枝が重さに耐えきれず折れてしまい、オレは盛大に背中から落下して、地面に強打した。うん、普通に痛い、石が刺さって。

秋人「いつてええツツ——!!!」

その痛みのせいでオレは叫ぶ。けど、それだけだった。何か特別痛いわけでもなく、ただただ普通に背中が痛いだけだった。

茜「秋人、大丈夫ですかッ!」

母ちゃんは急いでオレの元にきてそう言った。珍しく母ちゃんの顔はとても青ざめていた。

秋人「うん、普通に背中が痛い……」

茜「それだけですかッ!？」

秋人「うん」

茜「身体全体が痛いとか……」

秋人「ない……」

茜「息がしずらく……」

秋人「ない」

茜「頭がクラクラしたり……」

秋人「しないよッ!!もう、母ちゃん大げさすぎ!オレが大丈夫って言ってんだから大丈夫だよ!別に頭も打ってないし背中以外の痛みも全く無いしホント大丈夫だから!」

オレはしつこすぎる母ちゃんに怒った。だっていちいち煩いんだもん。

茜「秋人が木から落ちるからいけないのですッ!!そもそも、あの高さから落ちて良く

大丈夫と言えますね……普通ならばこれだけでは済みませんよ……」

秋人「あ、確かに……」

母ちゃんの言ってることも一理ある、この高さなら確実に骨折はしているだろう。場合によっては死んでしまう。なのにオレは、背中の軽い痛みだけで、その他の痛みがない。それに当たったところのアザすら無かったと、後になって母ちゃんが言っていた。――ってことはオレの身体って結構丈夫なのかな……？

茜「……ホントにどうして――！？――もしかして……」

母ちゃんは一人で何かぶつぶつ独り言を言いながら考えていた。そして最終的に一人で勝手に納得していた。その光景が一人漫才？を見ている感じだった。

秋人「母ちゃん……？大丈夫……？」

主に頭が……

茜「ツ!? ……わ、私は大丈夫ですよ! ……それよりも秋人、なにか私を馬鹿にしましたか…?」

秋人「ふあっ!?!」

なんで分かるの!?!もしかして母ちゃんエスパー!? エスパーなの!?! 怒った母ちゃんは誰にも手を付けられない…:こうなったら誤魔化すしかない…:!!!

秋人「いや、し…:してないし…! 決して頭が悪いとか思っていない…:あ…:…」

しかしオレのバカが出てしまい、母ちゃんに向かってあつさり思ったことを言ってしまった。オレのバカアアアア…:!!! (大事なので2回言いました)

茜「ふふ…:秋人、今から母さんと楽しいお話しでもしましうか♪」

母ちゃんは、笑顔でいつも以上に優しくオレにそう言った。けど目が笑っていない…。だかしかし! オレも素直に「はい」と言う子供じゃない! 危険察知能力ぐらいは付いてる、だからオレは何とかしてこの場から逃げてやる!

秋人「い…いや、大丈夫です…間に合ってますから!」

茜「大丈夫よくすぐに終わりますから♪」

秋人「ほら、オレ今日友達と遊ぶ予定が…」

茜「今日は遊ばないって言ったのは誰なのですか?」

秋人「宿題しないと…」

茜「もう終わりましたよね?」

秋人「父ちゃん…」

茜「頼長さんは仕事で夜まで帰って来ませんよ?」

秋人「ウゾダンドコドーン!!?」

終わった…。いや、まだだ!まだ終わらんよ!こうなったら奥の手を使うしかない
…オレの究極の戦法…

茜「では秋人くお母さんと一緒にいきますよ♪」

その戦法とは…

秋人「……………逃げるんだよぉ!!!」

そう、逃げる事だ。オレは母ちゃんが立つてる逆向きに逃げた。悪いけどオレは逃げ足が……………

……………シューッ…

……………足が止まった。理由はオレの真横を何かが追い越したからだ。それも結構耳に近い距離で…そしてオレは前を見た。そこには一本の矢が見事に木の幹に刺さってるじゃあないですか!!次に後ろを向くと、母ちゃんがどっからだったのか分からない弓を握って、矢を放ったポーズをとっていた。その瞬間、オレの全身からとめどないくらいの水が滝のように流れていた。

秋人「……………」

茜「逃がしませんよ、秋人…」

母ちゃんからは、この世とは思えないヤバイオーラが出てきていて、目はハイライトがOFFになっていた。あ、オレ死んだよ……………。

34話 過去 ② 忌子

あれから数年が経って、俺は中学生になった。そしてあの事件が起きた。

秋人「父さん、今日釣りしようぜ」

その日は日曜日で、母さんは勿論父さんも仕事が出来たから俺久しぶりに父さんと休みを過ごそうと思つて釣りを誘つてみた。

頼長「悪いな、今日はパスだ。休みといつてもやる事があるからな」

「……」が、人生そう甘くなく、見事にパスされた。ほんとに父さんは、仕事に熱心なんだから！ちよつとは息子にも目をむけるよ！

秋人「ちえ…何だよ。せつかくの休日なのに勿体ない！ていうか、少しは息子と過ごす時間とか作つてよ！」

頼長「また今度な……」

秋人「今度っていつ？明確な日時を指定してもらわないと困るよ」

頼長「来週の日曜日の午前9時～午後6時までの間」

俺は少し腹が立ち、ひねくれた事を言った。それに対して父さんもひねくれた。なんかムカつく……。

茜「ふふ、2人ともよく似ていますね」

それを見ていた母さんから、微笑みながらそう言った。それに対して俺と父さんは……

2人「似てない」

……と、母さんに向かって息ピッタリに言った。なんでこんな時に限って（タイムラグが）合うのかなあ……。

茜「ふふ、似た者同士ですよ。――では秋人、母さんと行きませんか？」

秋人「はああ!？」

頼長「……」

俺の想定外の事が起こったため、思考が止まってしまった。だって普段あんまり外に行かない母さんが釣りを誘ってきているんだから。ていうか、びつくりするところはそこじゃない――

秋人「母さん、釣りできるの!？」

――そう、釣りをする事だ。俺は一度も母さんが釣りをしているとところを見た事がない。いや、そもそも外すら出てるところを見ていない。(あ、家の庭は例外ね!)そんな母さんが珍しく外に出ようとするんだ、驚かない訳がない!

秋人「ていうか、外に出るんだ…初めて知った……」

茜「何をいうんですか秋人、母さんだって外には出ますよ。引きこもりみたいに言わないでください……!」

秋人「そ、そうなんだ……」

初耳なんだけど……。てか誰も引きこもりって言ってないと思うけどなあ……。まあいいや。

秋人「分かった！んじや行こつかゝ母さん〜！」

茜「行きましようか〜」

頼長「茜……ちよつといいか？」

茜「頼長さ〜……秋人、先に行つててください。私も後から行きますから」

母さんは父さんに呼ばれたらしく俺に先に行くようにと言つてきた。……なんだろう？まあ気にすることはないか〜。

秋人「は〜い」

そして俺は一人で近くの海辺まで行つた。

—————

歩くこと15分、釣りができるスポットまでたどり着いた。ここは田舎で海が凄く近い場所な為少し歩くとすぐに海辺へとつく。

秋人「んじや、早速やるか！」フンスツ

茜「いっぱい釣りますよ秋人……！」ゴゴゴ

気がつけば母さんも追いついていて、俺の気合の声と共に声を出した。それよりも……

秋人「ツ!?いつからいたのツ!？」

茜「さつきからいましたよ?」

俺は母さんがいきなり出て来たことにびっくりした。いつもの悪い癖だ。気がつけば一緒に居たり、消えたりする。ほんとにやめてほしい、中学生が言うのはアレだけど心臓に悪い……。

秋人「じゃあ始めよつか!」

茜「そうですね〜……少し本気を出しますか…!!」

こうして俺と母さん、2人の釣りが始まった。あえて母さんの雰囲気急に変わったところを触れないでおくようにする。

—————

釣りを始めて1〜2時間ほど経った頃、俺と母さんのバケツは半分ぐらい魚が埋まるほど釣っていた。なんか今日の釣りはすごく魚の当たりがいい。

秋人「うわあー……今日すげー釣れるな!」

茜「上々ね、けど慢心はダメ。まだまだこれからよ……!」

秋人「はーい。それよりやっぱ釣りはいいね母さん!」

茜「そうですね、秋人!」

秋人「んじゃ母さん、俺もつと奥の海岸に行つて釣りしてくるよ〜」

茜「いけません秋人、これ以上行くと危ないです!」

秋人「大丈夫、大丈夫!俺落ちないから!!」

茜「秋人……危なくなったら逃げてくださいよ！」

秋人「……？分かったよ母さん」ノシ

そして俺は海辺の奥にある海岸に行つて釣りをした。ここで俺は気付くべきだったのだ、海岸へ行く道にいろんな鉄の塊が落ちていたことに……

秋人「ここでいいか……よし、始めるぞッ!!」

そして俺が竿を振つて釣針を海へと飛ばした瞬間……
バシャー……ンツツ!!

……水面から何かが出てきた。そして一瞬で視界が暗くなった。何が起きたかわからない、ただ一つだけわかるかとは、俺は水面から出てきた何かに襲われたと言うことだ。それから俺の意識は無になった……

……

気がついた俺は真つ暗な空間の中にいた。

ここは……? そうだッ! 俺は変な奴に襲われて……!
そして俺は体を動かそうとするがなぜか動かない。

?? 「気ガツイタ……?」

ツツ!?! 誰だ!

いきなり何処からか分からないが声があった。その声はとても幼く、悲しさを混じったような声だった。

?? 「君ニヤツテホシイ事ガアル……」

やってほしい事……?

?? 「簡単……ソレハ……」

その瞬間俺の心臓部に激しい痛みがはしった。

秋人「あゝあゝあゝあゝ ツツ!!!
 いゝたゝいゝいゝいゝ ツツツ!!!」

地獄だった。それからみるみる俺の体は俺じゃなく、別の誰かのような感覚へと変わっていった。そして意識も遠くなっていく。

たす……ケテ………母サン……。オレハ——

それと同時に負の感情が流れ込んできた。人間を恨む感情、故郷へ帰りたい感情、怒り、嫉妬、悲しみ、いろんな負の感情が一気に流れてきていつのまにか俺はそういった感情へと変わっていった。

世界ノ絶望ダヨ

その瞬間俺の意識はまた闇の中へと落ちていった——

——

——目を覚ますと知らない天井だった。

秋人「ここは……………」

更に気がつけば俺は全身に包帯がぐるぐる巻きにされていた。何で……………」

頼長「気がついたか秋人……………」

秋人「父さん……………？俺……………？」

頼長「……………まあお前が言いたい事は分かる……………だから手短に言う……………お前は深海棲艦に襲われたんだ……………」

……………なるほど、やっとその理由がわかった。つまり俺は間一髪で助かったのか……………。けどあの夢は一体……………それに母さんは……………？

秋人「そうだったんだ……………それで母さんは……………」

何気ない質問を父さんにしたつもりだったが俺は後悔した。この後の父さんの答えを聞いてから……………」

頼長「死んだ……………」

秋人「……へ？」

わずか数秒。いや、ほんのコンマ何秒間の沈黙が流れた。けど俺にとってその沈黙の時間は数時間のようんを感じた。多分頭の整理が追いつかなかったからだろう。そのせいで俺は父さんにもう一度聞き直した。

頼長「茜は死んだ……………」

秋人「……ツツ!？」

父さんに2度同じことを言われて俺はやつと意味がわかった。しかし、意味がわかっただけであつて、現実を受け止められなかった。

は…………？死んだ…………？何言つてんだよ父さん…………

秋人「父…………さん…………冗談きついよ…………いくらなんでも……………」

頼長「茜はお前を助ける為に死んだ…………!」

頼長「いい加減にしろツツ!! 秋人ツツツ!!!」

秋人「ツ!?……………」

頼長「茜が何故命を落としてまでお前を助けたか分かるかツ? お前が大切だったからだッ…………! 俺と茜の唯一の子だからだッ…………! お前の代わりはいない、だから茜は助けたんだ。」

秋人「そんなの…………母さんにも言えることじゃないかツツ!!」

頼長「確かにそうかもな…………。茜の代わりはない」

秋人「だったら……………」

頼長「だがな…茜はそれを望んでいない。茜は死ぬ間際、言っていた…………『私の代わりにはいっばい生きて』……………」

言葉が止まった。母さんが……………」

頼長「だから秋人は茜の分まで長く生きなきゃならん。それをお前は、茜の…………母さんの想いを踏みにじろうとしていた」

父さんにそう言われて俺はやっと理解した。そっか…………母さんがそんな事を…………な

のに俺は……。そう思うと自然に涙がまた流れ出していた。しかしこの涙は初めに流した涙と違って温かく感じた。

秋人「ごめん……。父さん……。俺、母さんの分まで生きるよ……。母さんの死を絶対に無駄にしない……。!!」

俺は強くそう誓った。

—————

それからしばらくして俺は退院し、さらに数週間ごには晴れて学校まで行けるようになり、まで回復した。しかしそこから第2の最大の事件が俺を襲う。

友達「おい、秋人。あれいじめじゃね？」

当時中学でとても仲が良かった友達と楽しく会話しながら廊下を歩いていると、その友達がいじめている所を目撃して俺に伝えた。

秋人「確かに……酷いな……」

見ると1人の生徒が複数人の生徒に殴る蹴るなどの暴行を受けていた。かなり目に良くない光景だった。なんなんだあいつら……1人相手に複数人で……ツツ！俺は少し腹が立って助けに行こうとしたその時——

ドクンツ——

急に胸の心拍音が大きく頭の中で響いた。なんだ……これ……。その瞬間俺の頭の中に次々と雑音や負の感情が流れ出てきた。さらに人間に対する恨み、イライラが無性に湧き出て感情のコントロールができなくなってきた。——やばい……早く抑えな——いと……このままじゃ……。俺はなんとか抑えようとしたけど——

“ 気二喰ワナイナラ潰シチャエバ？ ”

誰か知らない少女の声によつて、俺という自我は完全に消え去った。——————————気付いた時には目の前にはいじめていた人たちが血だらけの状態になって倒れており、虐められていた子は化け物を見るような目で俺を見つめ、友

達は放心状態だった。駆けつけた先生は俺を見てこう言った、『蒼白の鬼』と——
——それ以降俺はあの事件が広がったせいaka忌子として扱われ幾度となく酷い目に遭わされた。」

「鬼だ……鬼がきたぞおおお!!」「消えろツ!!鬼めツ!!」「あんたのせいうちの息子がツ!!」「死ねツツ!!」「お前はもう友達じゃない……」

住民や友達だった奴にも嫌われるようになった。更には元犯罪者の奴に俺のせいで逮捕されたと理不尽な因縁をつけてナイフで刺したり首を絞められたりされた。この場所に住んでいるほとんどの住民が俺を怪物だと見て恐れていたようだった。そして今日も……俺は罵声を浴びせられ、暴力を受ける……。

「この怪物がツ!!」

ツ……知らない奴に蹴られる……

「早く消えろツ!!」

また蹴られる……。いい加減鬱陶しい……

「疫病神がツツ!!」

ああ、もういいや……。人間なんて “居ナクナレバイイノニ” ……

秋人「ウルセエ……。ウルセエエエツツツ!!」

俺はまた謎の負の感情が溢れ出て理性を失った。そして俺を罵倒や暴行をしていた奴らは全員死んだ。俺が殺したのだ。……。ハア……。何モカモ疲レタ……。俺ニハモウ、味方ナンテイナイ……。

秋人「誰モ……。秋人ツツ!!」ーッ!?」

振り返ルトソコニハ父サンガイタ。ケドモウ俺ニハドウデモイイ……

頼長「……これはお前がやったのか……？それにその姿……」

ヤツパリ父サンハコノ状況ト俺ノ姿ヲミテ驚イタ。マアソウナルト思ツテイタケド……ソシテ父サンハ俺ヲ……

秋人「アアソウダヨ。コノ人……イヤ、コノ汚物ハ皆俺ガヤツタヨ……ソレデドウスルノ？俺ヲ殺ス？イイヨ別ニ殺シテクレテモ、俺モモウ疲レタシ早く殺シテヨ……俺ハ怪物デ疫病神ダカラ……」

最後マデ言ウ前ニ言葉ガ途切レテシマツタ。理由ハ簡単ダ、父サンガ俺ヲ抱キシメタカラダ。

秋人「何……イキナリ……」

頼長「悪かった……秋人……」

信ジラレナイ言葉ガ父サンカラ出テキタ。ドウシテ父サンガ謝ルノ……？

35話 お休みの時間

秋人「ーとまあ、その次の日に早速引越してそれから2、3年ほど山で地獄の修行をしてこの力をコントロールできたんだよ」

艦娘達「……………」

俺の話が終わって、改めてみんなを見ると泣いている子や、真剣な顔をしている子や、固まっている子など、いろんな顔をして、なんだか空気が重くなっていた。……やっぱりそうなるよな（苦笑）。

秋人「それで高校に入学して部活で全国制覇をしたわけだ！」

艦娘達「ええッ!？」

この空気を変えるために、場違いな過去を話したせいでみんなは「待った!」をかけるかのように声を上げた。タイミングもバッチリ! いや、そんなことはどうでもいいか……。

秋人「どした？何か問題でも？」

大井「大ありです！貴方はふざけてるんですかッ!？」

北上「話が逸れすぎじゃない？」

秋人「別にふざけてねーぞ？」

だつてみんな暗い雰囲気し！てか俺こういう暗い雰囲気嫌いだし……。

秋人「事実を話しただけだし」ドヤァ

天龍「それでも、何でこのタイミング何だよ！」

秋人「何でつて……みんなの空気が沈んでたからー」

天龍「いやそこは空気読めよッ!!」

大淀「完全に雰囲気のおち壊しです」

雷「お兄ちゃん雰囲気ブレイカーなの？」

響「モラルが無いよね」

秋人「お前だけには言われたくねーよ響！」

そんな感じで気がつけば、暗かった雰囲気は一気にいつもの状態へと戻っていた。やっぱりいつもの雰囲気が好きだ。

秋人「……まあそんなことは置いて、とりあえず、これが俺の覚えてる全ての過去だ。正直嘘みたいな話だろ？」

艦娘達「……」

俺がそう言うともみんなは何も答えずに黙ってしまった。

長門「秋人、質問いいか？」

秋人「何？」

長門「同じ人間に酷いことをされて、提督は人間を恨まなかったのか？……怯えたりしなかったのか？」

秋人「確かに初めはそう思ってた。けど『それはこの力のせいだ』って自分で納得しただけからそんな感情もなくなってきたな。だってこの力さえなければあんな事にはならなかつから。だから俺は制御できてからはここにくるまでの間は一度も使っていない。またあの時みたい忌子として、疫病神として見られちゃうしな」

長門「そうか……」

秋人「でも俺は、この力が嫌だなんて思わない。この力で誰かを守れるって証明できたからさ。それにこの力があつたからこそ今の俺がいるから」

長門「……提督」

秋人「けどまあ、あれを使うのはもう無いけどな」

だつて性格が変わるし、肌の色も真つ青なくらい白くなるし、ツノも生えるし、目も赤くなるしなんかもう異世界みたいなキャラクターになるからなあ。あ、もう深海棲艦がいる時点で異世界っぽいかな？ 此処では普通だけど……。

睦月「ええ〜！ 秋人さんもう使わないんですか〜！」

秋人「当たり前じゃん！ 性格変わるし、真つ青になるしなんかもうあの状態だと色々と疲れるんだよ!？」

睦月「でも睦月はあの秋人さんの姿は好きですよ……？」

如月「私も睦月ちゃんと一緒よ。あつちの方がカッコいいわ」

金剛「私もデース！」

あれえく？おかピーポー？何故かみんなが皆、俺のあの姿を絶賛していた。いや嬉しいけど……。

秋人「そう言つて貰えるのは嬉しいけど何で？」

艦娘「かつこいいいから（です）!!」

俺の問いに対して何故か全員が即答で満場一致な回答を言う。いやおかしい……。

秋人「絶対お前らおかしいって……」

時雨「みんな秋人の性格が好きなんだと思うよ？」

秋人「ああくなるほど……」

夕立「だから秋人もたまにはあつちの格好になつて欲しいっばい！」

秋人「はあ……しよーがねーなあ……」

俺が諦めてそういうとみんなは歓声を上げる。ちよ……夜だから静かにしろよ……。

まあこれが俗に言う深夜テンションなのかもしれない。まだ日付変わってないけど

……。

秋人「それはそうとこれで俺の過去の話は終わりだからみんなは早く寝ろ」
艦娘「えええく!!」

何故かみんなは珍しくわがままな態度をとった。

秋人「お前ら明日それぞれ出撃やら訓練があるだろ……」

北上「それなら提督も言えることじゃん」

秋人「そうだよ？だから俺も寝るじゃん」

北上「ですよ〜」

秋人「兎に角、今日はもう終わりッ！かいさーん！」

吹雪「分かりました！では秋人さん、おやすみなさい！」

睦月「おやすみにやしい〜！」

如月「ふふ、おやすみなさい！」

暁「秋兄おやすみなさい！」

響「夢の中で遊んであげるよ」ノシ

雷「こら、また響は！……お兄ちゃんおやすみ〜！」

電「おやすみなのです、お兄さん！」ペコ

霧島「では提督、私も行きます！おやすみなさい」

榛名「秋人さん、おやすみなさい！」

比叡「おやすみです！提督！」

金剛「see you アッキー！明日の出撃頑張るデース！」

大井「北上さん、一緒に寝ましょうー！」

北上「ちよ、待つてよ大井っち。ー提督おやすみ」ノシ

天龍「おやすみ」

龍田「おやすみなさい」

時雨「秋人おやすみ」

夕立「また明日っばい！」

加賀「提督、おやすみなさい」

瑞鶴「おやすみ、提督！」

翔鶴「失礼します、提督！」

赤城「秋人、おやすみなさい。2人揃って夜更かしはいけませんよ？」

大淀「提督、おつかれさまです」

間宮「では私も！おやすみなさい」

長門「私も戻る、おやすみ提督」

陸奥「おやすみなさいね」

そう言ってみんなは部屋ごとに順に出て行った。

秋人「おう！おやすみ〜！」

そして最終食堂に残ったのは俺と親父の2人だけになった。

秋人「これでやつと親父と一対一で話せる……親父〜」

頼長「言いたい事は分かってる。何故茜が死んだと嘘をついたか、だろ？」

秋人「ああ……！」

頼長「分かった話してやる。俺も秋人と2人で話したかったからな……それとこの際だ、俺と茜が出会った日のことも話そう」

そう言って親父は淡々と昔話を話し始めた――

36話 過去 頼長編 前編

秋人が生まれる前、俺は特殊部隊に所属していた。そして上陸してくる深海棲艦を阻止するという任務をこなしていた。しかしその任務は無謀と言わざるを得なかった。何故なら人の力では敵わなず、無意味に等しい存在だったからだ。それでも政府はその作戦を止めなかった。軍人が1人戦死してはまた1人入れる、言わば『足りなくなったら足すだけ』という考え方で指揮していたのだ。

俺はそんな政府の考え方が理解できなかった。人の命をなんとも思わない政府の考えが。だが俺はこの特殊部隊から離れることができなかった。理由は部下が大切だったから。俺は隊長として作戦に出、指揮をとり、部下を守ってきた。もし俺がこの部隊から離れるたら、後の部下が全員深海棲艦の被害にあう。だから俺は、これをさせる為ここに離れなかった。いや、隊長でなくても結局気持ちは変わらなかつただろうな……。

そんなある日、とうとう政府が戦艦の記憶を持ち、艦装という独自の武器を使って戦う少女、いわゆる艦娘を発見した。いや、作つたと言つた方がいいか。その艦娘という存在が現れたおかげで、政府によつて脅威だった深海棲艦を簡単に殲滅することができ

るようになり、上陸の心配もなくなった。だがそれは上辺だけのこと。現実はまだ俺たち特殊部隊が動いていた。そして言うまでもなく犠牲者は出る…。

茜と出会う日も俺は政府からの指令で任務に出ていた。十数人の部下とともに――

頼長 「とりあえず目的地には着いた。反応はどうだ？」

部下 「いえ、まだありません」

頼長 「そうか…――ん？あれは――」

俺はそのままあたりを見渡していた。その時砂浜に謎の影？があった。

部活 「隊長、どうしましたか？」

部活 「向こうの砂浜に何かある。――少し見てくるがお前らは俺が合図を出すまでここで待機している…」

部下 「了解です」

俺は部下を置いて砂浜に向かい、その影が何なのかを確かめた。それは近づくとつい

てはつきりしていき、その正体は人だった、それもかなりの傷だらけで、衰弱している状態だ。それになんだ？みたことがない武器や鉄の靴？などを付けている。——まさか、これが噂の艦娘というやつか。この時、俺は2つの意味で珍しく動揺した。

頼長 「おい、大丈夫か！」

女性 「————…ここ…は…」

まだかろうじて意識があるところか、とりあえず一応ここは危険だ。あいつらがいるところに運ぶか——。

頼長 「ここは西の海域付近の砂浜だ。悪いが場所を変えるぞ…ここは危ないからな」

女性 「————…早く…逃げ…」

頼長 「————は？」

彼女は何を言ってるんだ？かなりの重傷を負っているのに他人の心配とは、呆れた奴だ。だが一体何から逃げろ？見た感じは何も無い—————

俺は傷ついている彼女を背負い、部下のいる場所へ向かった。

部下「隊長ツ!!今のはツツ!?……………」それにこの人…………!!」

頼長「ああ、彼女はおそらく奴にやられた。それに奴が出てきた」

部下「どうしますか?このまま一斉に……………」

頼長「無理だ。さつき奴を見たが、明らかに俺たちが相手をしていた奴とは異質な存在だった。ここは一旦様子を見るぞ。彼女のこともあるしな」

部下「わかりました」

頼長「その前に先ずは手当だ、俺が大体の傷口を塞ぐ。その後に残った傷の手当てをしろ」

部下「了解!」

……………始めるか。俺は軌道の一種、治癒術を始めた……………

……………

頼長「……………これぐらいで大丈夫だろう」

俺は彼女をかすり傷や打撲などの軽傷のところまで治療術を止めた。

部下「やはり流石ですね、隊長」

頼長「後の手当てはお前達に任せる。その間に俺は奴の様子を見てくる」

部下「わかりました。お気をつけて！」

そして俺は部下から少し離れた場所に行き、奴を…異質な深海棲艦の様子を見た。……しかし人間の形をした深海棲艦なんて初めてだ。まさかとは思うが、アレは人が深海棲艦へと変わり果てた姿か？……いや、ここは一度無能集団政に聞く方が早いな。したくないが……。

……あれから約10分近く奴らの様子を見ているが進展はない。ただあるとするなら、奴らは首を振って何かを探しているようだった。だが陸に近い場所にはいるが、接近する気配が全く感じられない。このまま去ってくれたら良いのだが……。……そんな俺の想いが奴らに届いたかの、少ししてから奴らは海の水平線の向こうへと姿を消した。とりあえずは大丈夫か……。

頼長「……………戻るか…」

俺は部下がいるところへ戻った。

—————
※多分ほぼ会話

部下「お疲れ様です隊長。……………どうでしたか？」

頼長「奴は姿を消した、とりあえずは大丈夫と言ったところだ」

部下「彼女は…どうします？見た感じでは普通の女性ようですが、彼女がつけているものは初めて見る得体の知れないモノです」

頼長「とりあえずこの事は政府に報告する。……………あと、おそらくだが彼女は「艦娘」だろう」

部下「艦娘って、深海棲艦と互角以上に戦う事ができると言われてる救世主の事ですかッ!？」

頼長「ああ、俺も聞いた程度でしか知らんが、艦船の記憶を持っている娘らしい。そして艦船と同じ力を出せる艦装を使って戦う。この見たことないモノが艦装なんだ

ろう」

部下「なるほど……しかし、なぜこんなに傷だらけに——」

頼長「そんな事、俺が知ってるわけないだろ……とりあえず戻るぞ」

部下「はい！」

俺は彼女を背負い、基地へと戻った。その後、俺は政府にこの事を報告した。そして彼女の事はどうやら大本営で報告しないとイケないらしい……面倒だ。まあまた後日行くとしよう——

艦娘「————ん……ここは……？」

俺が色々考えている最中、艦娘の意識は戻った。

頼長「やつと起きたか、ここは関東の軍事基地だ。で、どうだ気分は？」

艦娘「気分は大丈夫です……。軍事基地——なぜ私はここに……？」

頼長「お前は砂浜で傷だらけになって倒れていた。だから俺が手当てしてここまで連れて帰った」

艦娘「傷だらけ………そうでしたね…その時私以外に誰かいませんでしたか？」

頼長「いや、そこに居たのはお前一人だけだった」

艦娘「そうですか……あと、あなたの名前を伺っても良いですか？」

頼長「別に言わなくても良いだろ、明日にはお前と別れるからな」

赤城「では私の名前だけでも覚えていてください。私は 航空母艦 赤城 です」

頼長「やはり艦娘か…」

赤城「私達の事をご存知なんですね」

頼長「ある程度はな…まあ小耳に挟んだぐらいだが。……話を变えるが何故赤城は

傷だらけになっていたんだ？」

赤城「それは……」

—————

赤城「………という事です」

赤城は俺に淡々と傷だらけになった理由を説明した。短くいうと赤城は戦いの指揮

をする奴に囮になるように命令され、それを実行したようだ。結果、ぼろぼろになってしまった。

頼長「なるほどな…」

だが、何故か納得がいかない。無論俺は海軍でもないのでそっち側の戦い方や戦況についてはわからない。空母艦だったか？確か空は大戦力になる船と聞く。何故それを囮にする必要がある？それ以前に囮をする事自体間違ってるのでは？それに女性を簡単に……ふと俺はそんな考えが脳裏によぎる。

頼長「なあ赤城、お前の指揮する奴は簡単に艦娘を捨てる奴なのか？」

赤城「……」

頼長「もしそうなら艦娘を辞退する事をすすめる」

赤城「……何故です？」

頼長「俺達からすると、囮は仲間を見捨てるのと同じだ。そんな策略を、ましてや女性に命令するのはおかしい話だろ？」

赤城「……別におかしくはありません。私達艦娘は深海棲艦を倒す兵器として作られ

ましたから。それに、陸軍の貴方には関係のない事です」

ブチー

俺の中で何かがキレたような気がした。どうやら赤城は陸軍 特殊部隊に喧嘩を売ったようだ。だが抑えろ、これぐらいの挑発で切れてしまえば隊長の示しがつかん。

頼長「そうか、なら勝手にしろ。こちらも手当てすること自体間違っていたらしい」
赤城「分かって頂きありがとうございます。ですが、手当てして頂いたことは感謝しています。もう一度提督のお役に立てますから」

頼長「ブチーそうか」

赤城はそう言っているが目の光が無い。俺は彼女がロボットのようには思えた。これは確実に洗脳されてるな……ここまでできたらある意味宗教だ。

頼長「とりあえず今日は寝ろ。無理に動かれると俺が困る」

赤城「それはどういう意味ですか？」

頼長「訓練の邪魔になるだけだ。だからここで寝ている、分かったな？」

俺はそれだけ言い残して部屋を出た。

赤城「…………おかしな人ですね……」

「…………艦娘という奴は皆ああいう奴なのか？」

もしそうだったら呆れてしまう。何故彼女、いや赤城は自ら自分を兵器と言うのだから………いや、考えるだけ無駄だ。どうせ明日になったら無になることだからな。

部下「頼長隊長」

俺が一人迷想していると誰かが俺を呼んだようだ。見るとそこには副隊長の四季しきだった。四季は軍人の中ではかなりの実力者だ。それに俺よりも部下に指示を的確に出せることができ、頭の回転が速い。体格も俺以上に大きいな。ただ、体に害が及ぶ

バコと酒が好みなのが四季の悪いところだ。あと極度の女好きも……。

頼長「どうした四季？」

四季「今日の報告を……」

そして一枚の紙を渡される。いわゆる報告書だ。

頼長「そうか……！？」

俺はその報告書の内容を見て絶句する。内容の中には『少女の負傷者（おそらく艦娘）を発見。直ちに基地に戻り、応急処置をした。』と、しっかり書かれていた。

頼長「なるほど、お前の部隊も艦娘を見つけたか……」

四季「はい。あと「自分の名前は吹雪だ」「早く提督のところに戻して！」と泣きながら言つて、理由を聞いてもそれ以上は何も喋りません」

頼長「なるほど……何か裏があるかもな……」。なら俺は明日、大本営に行くついでに様子を見るか」

四季「では俺はこれで失礼します」

頼長「ああ、ありがとう……修行するか……」

それから俺は修行言う名の独自の訓練を始めた。訓練が終わってからは、ご飯を食べ、赤城にご飯を持って行き、風呂に入って寝た。だが自分の事を兵器と言っておきながら、俺が持ってきたご飯を食べてかなりの幸せそうな顔をしているとは……ふー笑える事は出来るんだな……。俺は少しだけ赤城に対しての見方が変わった。

37話 過去 頼長編 後編

次の日になり俺は赤城と一緒に大本営へ向かう————はずだったが俺は行けなくなった。

男「早く行くぞ。乗れ」

赤城「ーはい」

吹雪「分かりました…」

説明すると既に基地の入り口の前に、大本営からの迎いの車が来ていたからだ。その結果、俺は付いて行けなくなった。……あくまで海軍はこの事を内密にするみたいだな。

男「ご苦労だったよ。後はこちらに任せて貰えばそれで良い。君たちは早く特訓して身体強化にはげんでくれ」

頼長「おい。行く前に質問いいか？」

男「どうぞ。私が答えられる範囲なら」

頼長「艦娘は一体どんな訓練を受けているんだ？」

男「……訓練はしていない。代わりに指令官は神様だと教育をしている。あれは兵器、すなわち物だからな、不要になればすぐにゴミ行きだ。兵器の代わりはいくらでも作ることが出来るからな。君たち陸軍が使っている銃のようにね」

「……は？……コイツは今何を言ったんだ？艦娘を兵器だと言ったか。……ならあの赤城のことも。……おかしい。彼女、艦娘が兵器だなんてありえない。確かに赤城は己を兵器と認めていた。だが、ご飯を食べていた時の顔は兵器でも何でもなかった。ただの女性だった。なのに……」

頼長「ふざけるな。なぜ彼女を艦娘を兵器としてみる必要がある？艦娘は俺たち人間にとつて脅威の存在である深海棲艦を倒すためにできた存在だろ？そのおかげで今の日本が平和でいられるんじゃないのか？」

男「そんなのは知らないことだな。あと兵器を導入した理由は、君たち特殊部隊が役に立たずすぎるからだよ。恨むなら君たち特殊部隊の実力不足を恨むことだな」

頼長「あ、あ、？」

コイツは……ただの逆ギレか？……しかし、まさか俺がこんな名も知らない奴の挑発に乗ってしまったとは、俺もまだまだ子供か……。

男「まあこの話も元々は陸軍には関係の無い事だ。海軍は海軍のやり方がある。だから君たち陸軍は首を突っ込まないで欲しい。失礼する」

男はそう言葉を吐いた後、すぐに車に乗り込んで逃げるように行ってしまった。……海軍はこんなに呆れた奴らだったか？これも艦娘を発見して、導入させた末路か……。

頼長「やはり様子を見に行くべきだな……」

だがどうやって行くべきか……。そのまま行っても追いつかれないのがオチだ。ならどうする……。

頼長「……気絶させてればいいか」

そして俺は部下に「少し席を外す」と言って大本営とやらに向かった。

――

交通機関を使って向かった結果。だいたい2、3時間かかった。

頼長「まさか海の近くとはいえ、こんな都会よりの場所にあるとはな……」

建物自体も流石と言えるほどの大きさだった。……これで海軍の実態がわかるな。だが、どう入るか……。入り口を見ると、兵士か？そいつが入り口の前に立ってなかなか入りづらい。

頼長「――まあいいか……」

気絶させればいいだけのこと――

俺は見張りの兵士？を一瞬で気絶させて中へと入った。

頼長「ほう、中は思ったより綺麗だな」

まあ大本営のトップがいるのだから当然か。――――とりあえず歩くか。俺はあても無く、ただ廊下を歩いた。

――――

頼長「やはり直ぐには見つからないか…」

歩き出してから、約20分ほどがたっただろうか。特にこれと言った収穫は無かった。

頼長「戻るか…」

俺がもと来た廊下へ振り返ろうとした時――

? 「……!!」

頼長 「……!?!」

何か女性の叫び声? が聞こえてきた。今の声は……。大きき的には近い所からだ。が……。少し集中するか。俺は目を閉じて音の変化に全神経を注いだ。

女性 「……!!」

頼長 「……そこか……」

俺は再び聞こえた叫び声で、女性が何処にいるのかを特定した。特定してからは、何故叫んでいるのかをバレないように扉の中を覗いた。だが俺は後悔する。中の様子を見るんじや無かったと……。――

男 「貴様らッ! 艦娘の分際でそんなこともできんのかッ!!」

艦娘 「……ッ! すみませんッ!」

見た目が中学生ぐらいの少女、おそらく艦娘が、海軍の男に拳を受けていたのだ。な

んだこれは……コレがああ男が言っていた海軍のやり方なのか？……ふざけているにも程がるだろ、流石の俺でも女・子供相手に手を出す事はしない。

男「たるんでいるな、お仕置きだ!!」

そう言つて男はまた少女を殴つた。

艦娘「……ありがとうございます……」

男「次はお前だ。傷だらけになつて戻つてくるとは、恥だとは思わんのかツ!!」

頼長「ツ!?アイツは……」

男がもう1人の女性を怒鳴つてたが、よく見ると俺が昨日助けた赤城だった。

男「それに陸軍に助けられるとはどういう事だツ!!」

赤城「……ツ……申し訳ございません……!」

……見るだけで虫唾が走る。やはり助けるべきか、だが……

「貴方には関係の無い事ですから」
ふと俺の中に赤城が言った言葉が蘇る。確かに関係の無い事だ。俺は陸軍、そして向こうは海軍だ。完全に無関係である以上、俺がどうこう言っても聞く耳を持つてはくれないだろう。

頼長「……………帰るしか無いか」

？「誰だ！」

頼長「……ツツ！」

声をする方へ向くと40後半ぐらいの男が立っていたくそ……バレたか。まあいざれそうなっていた事は分かっていたがまさかこんな直ぐばれるとはな……。抵抗するか、大人しく捕まるか……どうする……。

頼長「ふ……決まってるだろう……（小声）」

……前者を選ぶ。俺は一気に男の距離を詰めて腹を殴ろうとした。

男「ちよ……待ってくれッ……話をしよう……!!」

頼長「問答無用」

男「あの子達のことだろう……」

そこに言葉を聞いた瞬間、身体は固まった。

頼長「名前は何？」

尾形「私は海軍の提督をしている尾形 正義だ」

頼長「俺は陸軍 特殊部隊の櫻川 頼長だ。単刀直入に言うが、彼女らはいつもあんな感じに過ごしているのか？」

尾形「ああ、彼女達は深海棲艦を倒すための兵器だからな。そのように教育をしないと役に立たなくなる」

頼長「貴様ッ……」

俺はその言葉に苛立ちを覚え、尾形という男を殴りに行こうとした。

尾形「お、落ち着け、まだ話は終わってないッ！……私もその考えに不満を持つ

ていた。だから今日私は元帥に抗議をする予定だったんだ」

頼長「その道中に俺を見つけたと」

尾形「そういうわけだ。だから私は実質君の、頼長君の味方だ」

頼長「―――簡単に信じられると思ってるのか？」

尾形「まあ、確かにそうすぐに信じろとは言わん。だから私が元帥になったらちゃんと信じてくれ」

頼長「どういう事だ？」

尾形「元帥というのは海軍の中でトップに立つ称号で、元帥が言ったことは必ず従わなければならない。もし私が元帥になったら、彼女達に人間と同じ生活、いやそれ以上にすることを約束しよう。いつになるかはわからない、だが必ずなってみせる……！」

尾形の顔は真剣だった。そこで俺は思う、コイツは嘘偽りが無いと。

頼長「そうか、なら信じてやる。必ずここのトップになれ」

尾形「ああ」

頼長「話は解決した。―――尾形、俺に協力しろ」

尾形「―――あの子達を助けるのか？」

頼長「ああ。それと、赤城という奴を連れて行きたい」

尾形「正気かつ?!」一応提督の立場として言わせてもらおう。今の法律では艦娘を外に連れて行くのは禁止されている。見つければ禁固は確定だ。それでもやるのか?」

頼長「その覚悟の上だ。それにそれをわからないようにするのが尾形の仕事だろ?」

尾形「……」全く、無茶を言ってくるな君は。分かったやつてみよう。作戦はあるのか?」

頼長「まず俺が先に入つて暴れて全員の身動きを取れなくする。次に尾形が入つてきて彼女を避難させる。その後には俺は殴つていた奴をボコボコにする。記憶が無くなるまでな。それから赤城を連れて彼女の場から離れる」

尾形「……」分かった……最善を尽くす。だがもし失敗したらどうするつもりだ?」

頼長「そんなことは後になつてからでもいくらでも考えられるだろ」

尾形「ふ……成る程な。……なんだか君とは今後とも仲良くやれそうな気がするよ」

頼長「奇遇だな、俺もだ」

そして俺たちは作戦を実行した。

俺たちの作戦は驚くように成功した。

尾形「今だ。頼長ッ！」

頼長「ああ、感謝する……！」

尾形「私が元帥になるまで死ぬんじや無いぞ」

頼長「それはお互い様だろ、ありがと……」

俺は避難させた赤城の手を掴み建物の外へと走った。そして建物から出てすぐにタクシーを捕まえ、俺の家まで向かった。

赤城「……あの、これはどういう事か説明して頂けるのでしょうか？」

家についてとりあえず赤城をあげたが、確かに何も考えてなかった。——さて、どうするか——。

頼長「お前が男に散々体罰を受けているのが見苦しかったから助けたそれだけだ」

赤城「そういうことではありません。何故あの時勝手にしろと言った人様が私を助けているのかと聞いているんです」

赤城の言っていることは正しい、実際俺はあの時苛立ちの勢いもあつたが確かに「勝手にしろ」と言った。だが俺は赤城を助けている、明らかに言っていることが矛盾しているだろう。それでも俺は————

頼長「確かに俺はあの時お前にそう言った。だが俺が用意したご飯を食べている時の顔を見て、考えを変えた。艦娘には人間のようになちゃんとした感情は持っているってな。そして今日お前が殴られている光景を見て確信した。本当はこんな生活が嫌、てな」

赤城「嫌ではありませんよ……私たちは兵器ですから……こんな生活が間違ってるなんて————」

頼長「じゃあなんで今泣いているんだ」

赤城「!?!」

頼長「嫌なんだろ、あんな生活は。痛いんだろ、叩かれるのは。怖いんだろ、体罰が。」

誰もが笑って、楽しい生活に「……………」

赤城「したいに決まってるじゃ無いですかッッ！！！！

俺が最後まで言う前に赤城が叫んで、俺の声をかき消した。

赤城「……………」あなたの言う通り嫌なんですッ！！！！あんな生活はッッ！いやなんですッッ！叩かれるのはッッ！いやなんですッッ！提督のせいで仲間が傷つくのがッッ！私だって…………私だって、一般の人様達のように笑って楽しい生活がしたいんですッ！！誰も傷つかない世界で生きたいんですッッ！でももう無理なんですよ！何もかもがッッ…………。私達は深海棲艦を倒すためだけに作られた存在…………そのため提督からはそれ以外の事なんて私達艦娘には必要ないといわれて、最低限の生活ができるぐらいのモノしか与えてもらえませんでした…………私もそれがそれが普通なんだと…当たり前なんだと…思い込んで、自分の心を閉ざしたんです…………だから……………」

赤城はそのまま崩れ落ちて泣いた。そんな赤城を見て俺は実感する。やはり艦娘は兵器ではない、ただの1人の女性だ。と……………」
そして俺はそつと赤城を抱きしめた。

赤城「!?」

頼長「大丈夫だ、お前はよく頑張った。もう心を閉ざさなくてもいい。もう怯えなくともいい。俺がいる」

赤城「頼長…さん…?」

それから俺は赤城と面と向かって話す

頼長「あと、女性に涙は似合わない。綺麗な顔がもつたいない、だから笑え。女性は笑顔が一番美しいからな」

赤城「……ツ／／／」

そのまま俺は後ろを向いて立ち上がる。

頼長「それと、これから赤城の知らない世界を俺が山ほど見せてやる—————」

そして赤城へと振り返って俺は言う—————

38話 疑問点と忍び寄る影なのか？

頼長「……………」それから俺は赤城を櫻川 茜と名前を変えて一緒に住むことになって、その次の年にお前が生まれた。そしてお前が生まれてからは、茜の正体を明かすか2人で相談したが隠した方が、秋人は何も考えずに済むと思ひ秘密にすることにした」

秋人「……………」

親父は淡々と過去の話をしていたが、俺はその話を聞いて思う……………」

” コイツ何言ってるんだろ…”

……………」と。いや大体話の内容は分かるよ！分かるけど、何故そうなるのか分からなかった点が3つあった。1つは親父が母さんをお持ち帰りしようとした点。2つは軍人を辞めた点だ。そして最期の3つ目が何故母さんは俺たちの前から離れ、その事を隠したという点。まあ多分3つ目はこれから言うのだろうけど……………。親父の話を聞いてさらに謎が深まった。

頼長「そしてお前が深海棲艦に吞まれて暴走した時、茜は自身の艤装を使ってお前を止めようとした。だが、お前の力が大きすぎて1人では止めれなかった」

秋人「それで親父も駆けつけて2人で俺を止めて俺はなんとか助かったって事か…。
てかよく間に合ったよな親父」

頼長「俺のスピードをナメるな。————話を戻すが、そのあと直ぐに海軍と繋がっている総合病院に行き、お前を見てもらった。そしてレントゲン写真ではお前の心臓に深海棲艦のものであるコアが巻き付いていた。お前も1度見た事あるはずだ。————さらにあの事件がきっかけで茜の存在もおおやけになった、それで俺に決められた選択は秋人を処分するか、茜を解体するかの2つだ」

————ツ!?マジかよ…俺のたった1つの失敗のせいで。親父や母さんがそんな状況に…。俺が眠っていた時の真実を知って俺はまた罪悪感をおぼえた。

頼長「だがその時に、1人の人物によって救われた。それはお前の知っている尾形さんだ。尾形さんは元帥になっていて、この話を聞いてここに駆けつけてくれた。そして尾形さんは、茜を艦娘に戻ってまた鎮守府で生活するという条件で秋人や茜を救った。そして無断で鎮守府外に出て、無断で外で暮らした罪として解体した、と政府に伝えて

一応茜を処分扱いにした。そうしないと目を付けられかねないからな」

なるほどそういう事か……。

秋人「だから俺に母さんは死んだって嘘をついたんだな……」

頼長「ああ」

秋人「じゃあ質問するけどなんで俺が提督になるって時に本当の事を明かしたんだよ」

頼長「お前に嘘を言った俺なりの償いだ。それに可能性があると信じたからな」

秋人「あつそ…んじゃ、次の質問。親父なんで陸軍から身を引いたんだよ」

頼長「軍人の状態で茜と一緒に暮らすと確実に特定されかねない、その護身として身を引いた。だがもう戻る気は無いな…陸軍のことは四季が上手くまとめてくれてるだろうし」

秋人「……じゃあこれが最後、なんで親父は母さんをお持ち帰りしようと思ったんだよ……」呆れ

頼長「単純に茜の顔と性格に惚れただけだ」キリッ

秋人「でしょうねツツ！！！！」

まあ、なんとなくそうだと思ったわ……つかその頃から親父は親父なんだったんだな……ある意味怖……。

秋人「……それよりありがと、親父の過去を話してくれて。すげースッキリした」

頼長「そうか。俺もようやく秋人に話す事が出来て肩の荷が下りた気分だ」

秋人「とりあえず今日はもう寝るわ、親父はどうする？」

頼長「俺も寝るとしようか。その前に……」

親父はなにかを思い出したかのように俺にゆっくりと近づいてきた。

秋人「親父？なんだよ、急に近づいて……」

俺が最後まで言う前に、親父は持っていた木刀を俺に振りかざしてきた。そう、懐かしい「櫻川家流 出迎え」と言う奴だ。だが俺はそのスピードは普通に見えていて、避けずにギリギリのところまで木刀をつかんだ。……ただ木刀からくる衝撃が伝わって痛い……普通に 避ければよかったかも……。俺は木刀を掴んだことに後悔した。

頼長「ほう、まさか掴むとはな」

秋人「俺を舐めんなよ親父。けど普通に痛かった……」

頼長「まあ、鈍つてないみたいだから安心した。俺も寝る、じゃあな秋人」

秋人「ああ、おやすみ親父。……」てか思ったけど何処で寝るんだよ」

頼長「茜がいる部屋に決まっているだろ」キリッ

秋人「んじや加賀さんに射められてこい」

頼長「上等だ。ガキー人相手など余裕だ」ノシ

そう言つて親父は食堂を後にした。ただ俺は思う……

秋人「大丈夫か……？……」

……と。まあ親父に限つてそんな突撃的なことはしないだろう。

秋人「んじや、俺も寝るかな。日課もしたいし」

俺も親父に続いて食堂を後にして自部屋（執務室）に向かった。

「……………」翌日、親父が加賀さんに縄で吊るし上げられていたのは言うまでもなかった。

秋人 side out

side ?

秋人が寝た後、とあるグループ通話にて

拓海 「おい、ホントに行くのかよ良……」

良 「当たり前じゃねーか拓海ツツ!!! 行つて秋人をびつくりさせんだよ! そんなで艦娘様
といっぱい触れ合うんだあゝ♡!」 (*、∩、*)

拓海 「で、本音は後者ね……時音もなんか言ってくれ……」 (——;))

時音 「いいんじゃないかな? ボクも久し振りに秋人に会いたいし!」 (……?)

拓海 「まさかの時音も賛成ツ!」? (∩。∩。)

??????
(……)

拓海・時音「10分前行動、5分前集合(!!)」

良「オツケー、上出来!!!んじやまた明日の朝一な!おやす〜」

拓海「おうおやすみー」

時音「おやすみ!」

良@俊足　さんが通話を切りました。

拓海「……アイツ、ホントに大丈夫か?」

時音「大丈夫だと思うよ……多分」

拓海「まあ急に良が「秋人がいる鎮守府に行こうぜ!」って言い出したのはびつくりしたけど」

時音「秋人には夏休みにフットサルをするって言ってあるしね〜、ドツキリみたいで良いと思うよ!」

拓海「て言うか明日日帰りなのが辛いんだよな、学校があるから……」

時音「そのことなんだけど、明後日も休みにおいたよ?」

拓海「ふあッ!?え、ちょ……マジどうやってッ!?」?。(。皿。)

時音「普通にボクが理事長に承諾しに言ったんだ!高級なお菓子を渡したら簡単です

承してくれたよ！」

拓海「お前行動力アリスギイー……」（———；）

時音「それがボクだよ！」d（？　？）

拓海「つまり早急に泊まりの用意をしなくちゃいけない奴じゃん……!!」

時音「頑張つてね♪ボクはもう済ましてあるから！」（*???*）

拓海「コイツ……」（。　ん　ん）

時音「それじゃボクも寝るね！おやすみ〜！」

拓海「おう、おやすみ〜！」

時音　さんが通話を切りました。

T a k u m i / 7　さんが通話を切りました。

第4章 鎮守府生活編 2

39話 新たな改二

6:00

いつものようにアラームが鳴り俺は目覚めた。感覚的によく寝た方だった。

秋人「んじゃ、いつもの日課始めますか〜」

早速動ける服装に着替えて俺は部屋を出た。

—————

時雨「あ、秋人おはよう！」

吹雪「秋人さん、おはようございます！」

睦月「おはようございます〜！」

金剛「hey アッキー！」

何人が既に俺を待っていた。そしてそこには何故か金剛がいた。てかアツキーつて：なんか『ヒ○キー』や『ミ○キー』に似てるから嫌なんだけど：まあ吹雪の事も『ぶつきー』って呼んでるみたいだし大丈夫か…。

秋人「おはよう。金剛もいるんだ、初めてだったよな？」

金剛「そうデスネ！ぶつきーに聞いて面白そうだったので私も参加してみマシタ！私は運動が結構大好きデス!!」

秋人「なるほどな」

確かにそんな感じはする。金剛＝活発な女の子 みたいなイメージがあるし。それよりー

秋人「睦月組と暁組と夕立は？」

吹雪「如月ちゃん達はもうすぐ来ると思いますよ！」

時雨「夕立ももうそろそろ来るんじゃないかな？」

？「秋人くお待たせ〜！」

時雨「ほら、噂をす r (r y)」

時雨が夕立の声を聞いて後ろを向いた時、急に言葉が途切れた。何かかと思い俺も時雨が向いた先を見た。そこには、目が紅く、うすだいたい色で、毛先がピンク色になっていて、両サイドに犬の耳のような跳ね毛がある長い髪をした少女が走ってきた。そして胸も若干大きい！——いやそもそも誰？声は夕立に似てるけど……

？「秋人？それにみんな固まった顔してどうしたの？」

4人「誰えええツツツ！！？」

俺たち4人は全く同じタイミングで全く一緒な言葉をその少女に向かって叫んだ。

？「えええええツツツ！！!???? みんな揃ってどうしたのっぽいッ!?」

アレ？その言い方何処かで……。

金剛「アナタ、もしかして！」

吹雪「夕立のお姉さん？」

時雨「違うよ吹雪、僕の姉妹艦にこんな人はいないさ。おそらく彼女は夕立だよ」

夕立「そうだよ……！夕立は夕立つぽい……！！」

秋人「やつぱりな……」

吹雪「ええええええ！！」

吹雪は驚いたような声を上げる。そりやそうだ、だつてめつちや変わつてんだもん……特に胸のサイズと目の色が……あと身長も若干伸びた？もうまるで別人だね！

秋人「夕立、お前変わりすぎだろ……何があつたんだよ……」

夕立「知らないっぽい。なんか朝起きたらこうなつてたっぽい」

時雨「もしかして改二じゃないかな？僕も改二になつて容姿も変わったし」

金剛・秋人・吹雪「ああ」

確かに時雨の考えが妥当だな。そうじゃなかつたら辻褄が合わないし。てことは明石か……。え、明石つてそんな夜にこつそりするような人だったか!?なんか明石の性格が分かんなくなつてきた……。

夕立「そんな事より他のみんなはまだなの？」

秋人「もうそろそろじゃね？」

夕立「寝坊はダメね！私がつかり起こしてあげないと！」

性格もお姉さんになって……何？改二つてみんなこんな感じで性格も大人になんの

？

響「すまない、待たせたみたいー」

暁「秋兄ごめん、遅れちゃっー」

雷「2人とも急に黙ってどうしー」

電「いかづちちやー」

睦月「寝坊したにやしー!!しー!!」

如月「睦月ちゃん?しーしーあら？」

夕立「こら、寝坊はダメでしょー!しつかりするっばい！」

秋人（ブーメラン…）

艦娘達「はーい」

そうして俺たちはいつもの日課を始めた。

—————

日課が終わってから、俺達は汗を流すためにシャワーを浴びた。ちようどシャワー室が出来ていたためそこを使った。もちろん男女別になっている。だが——

秋人「なんでいんだよ…時雨」

時雨「数が少し足りなかったから仕方なく来たんだ。悪かったかな？」

秋人「え、マジ!? まあ別に悪くないけど…」

時雨「なら大丈夫だね」

その瞬間時雨は、いきなり服を脱ぎ出して裸になろうとしていた。俺がみているのもかかわらず。

秋人「ちよ…時雨、俺の前で脱ぐな…! / /」

時雨「別に良いじゃないか、恥ずかしいのかい？」

秋人「当たり前だろ…! / / ……なんか時雨、改二になってからだいぶと落ち着いたよな…」

時雨「確かにそうかもね、それじゃあ僕はお先に失礼するね!」

秋人「お、おう…」

時雨の奴結局俺の前で服を脱いでシャワー室に入りやがったよ……まあ途中で目を逸らしてたから実質見てないからセーフだけど…。なんか、まあ……大人になったな時雨…。

side out 秋人

side 時雨

恥ずかしかつた… / / / / 秋人と一緒にいかつたから嘘や芝居をしたけど、するんじやなかつたよ……心臓がもたない… / / 僕は自分がとつた行動に後悔した。

時雨「流石にやりすぎたね……／＼／＼／＼」

その間僕はずっとドキドキしていた。それから僕は浴び終わったのでシャワーしから出た。秋人はまだ浴びていたので僕はその隙に体を拭いて服を着替えた。この犬の耳みたいなのは毛はどういう仕組みなんだろう。自分のことなのに分からないというのはなんだか複雑感だね……。まあいいさ、そんな事よりも早く朝ごはんを食べに行かないと。そして僕はシャワーをあとにして食堂へ向かった。

時雨「おはよう間宮さん！」

間宮「おはようございます！あら、貴方は時雨さんですか？」

時雨「そうだよ、改二になったんだ」

間宮「なるほど、改二ですかー！昨日はあんまり見れる余裕がなかったので気がつきませんでした……。なんだか大人な雰囲気になりましたね！」

時雨「そうだね、自分でもなんでこんなに性格が変わったのか不思議なくらいだよ」

間宮「私は良いと思いますよ？はい、今日の朝ごはんです！」

間宮さんはそう言って朝ごはんを出してくれた。今日のメニューは白ごはんに焼き

魚、味噌汁にサラダ日本の朝ごはんらしいメニューだった。うん、やっぱり朝はこのメニューだね！

時雨「ありがとう、間宮さん！」

僕は間宮さんにそう言ってご飯を持って行って、空いている席に座った。

時雨「さて、いただきー」

夕立「あー時雨ちゃん待つつぽいっ!!」

僕が食べようとした時、夕立に止められた。夕立を見ると何処か焦ったように僕の方を見ていた。どうしたんだろう？

時雨「どうしたのさ、夕立？」

夕立「時雨ちゃんが一人で食べようとするから急いで止めたの！食べるときは一緒だつて前にもいったぽいっ！」

時雨「あ、そうだったね……ごめん夕立、忘れてたよ……」

夕立「覚えてくれてたのなら許すっばい！じゃあ食べましょ！」

時雨「そうだね！いただきます」

夕立「いただきます！」

僕と夕立は楽しくお話しをしながら朝ごはんを食べた。今日の予定の話とか、昨日の話とか、何故シャワー室に僕がいなかったのか？とか……まあ色々……。ちなみに最後の夕立の質問に対しては、ご飯を食べてからシャワーを浴びると言う設定にしておいた。だけど夕立は「じゃあ私ももう一回入るっばい！時雨ちゃんと一緒に！」って言ってたので僕は驚いたと同時に顔が熱くなった。そして僕の勝手な意見だけど、夕立が改二になつてからかなり積極的になつている気がする。

40話 とある3人

6月のとある日曜日の午前5時20分頃
とある駅にて

どうもみなさん島崎 拓海です。名前は知っているとありますが、ちゃんとしてここで自己紹介するのは初めてだと思います。俺は現在高校2年生の16歳で、サッカー部に所属していてポジションはディフェンス。今年のインターハイではベスト4で敗退してしまい、今は疲労回復のために1週間の自主練と、日曜日はオフと言う形になっている。そのせいで良の奴が「これを機に今週の日曜日に秋人のいる鎮守府に行くぞ!」とか言って大事な休暇を遠出に使われたのだ。まあ家にいてもする事がなかったからまだ良かったけど……。今は考案者の良と俺と一緒に巻き込まれた時音を待っている。

拓海「……早く来すぎたなあ」

本来の集合時間は40分で、今はまだ20分過ぎ。言えば俺は集合時間の20分前に

来たことになる。———暇だ……。良いや。何もしないのもめんどくさいし、音楽聴いてパ○ドラでもしょ。俺はイヤホンをつけて1人でアプリゲームに没頭した。

—————

やば…敵完全にノーコンクリアさせる気ねえじゃん…。難しいダンジョンに行けば敵に色々制限を掛けられるためリーダースキルの意味が無くなったり、回復できなくなったり、なんか色々とお手上げになる。今の回復をロツクされ残りの体力が2、3000のように。俺はかろうじてコンボを繋げるが火力がない為押し切れずに、音楽とともにゲームオーバーのテロップが出てくる。

拓海「ああああ…クツソ…」

時音「あー惜しかったね…」アハハ

拓海「うおツツ!?!」

俺がゲームオーバーで悔しさに浸れている時に横からいきなり声が出たので、俺はびつくりして飛びはねかけた。どうやら声の主は時音だったようだ。

時音「おはよう拓海！」ビシッ！

時音は敬礼のポーズをしフンスツ！とした顔で俺に挨拶してきた。いや、可愛いけどそれで無かったことにはできねーよ、時音君？……。

拓海「時音おはようー！ーじゃなくていきなり横から声を掛けてくんなよ!?めっちゃびびくりしただろー!!」

時音「だって拓海が真剣な顔してゲームしてたから……そこで声を掛けたら申し訳ないなと思っちゃって……」

拓海「あぁー…悪い」

時音「いや大丈夫だよ！ボクの方こそごめんね！」

時音がそう言ったあと、俺たちはお互いを笑いあった。ー！ー！ん、時音が来たってことはもうすぐ時間か？俺は付けてる腕時計で時間を見た。

拓海「ー！ー！ー30分…あと10分ね」

時音「残りは良だね」

拓海「アイツはどうせ寝坊だろ……今まで時間通りに来た事無かつたし……まあホントの集合時間には間に合ってるから何も言えないけど……」苦笑

時音「確かにそうだね……」苦笑

良「おいお前ら！何勝手に人を寝坊魔のように話してんだよ！」

お、噂をすれば。俺と時音が良のダメなところを話していると良が呆れながら来た。

拓海「だつて事実じゃん」

時音「うんうん」

良「でも今回はちゃんと時間通りに来たぞ」ドヤァ

拓海「うん。そこは褒めてやるよ、よくやった」

俺は良の肩をポンポンと叩いた。

時音「成長したね！」

良「上から目線ッ!？」

拓海「んで、40分になったけど始発は何時？」

良「それはですね。俺たちが乗る電車は56分です！」

拓海「は？」

思わず良に聞き返す。いやだつて予想してた時間とかなり違ったから…。

良「いや、だから56分の電車だよ、俺たちが乗るのは」

拓海「何でだよ!! 40分に集合なんだから普通は46、7分ぐらいの電車だろ! 何で

15分も待たなきゃいけないんだよ!」

良「だつて始発がこの時間だから」

拓海「じゃあせめて50分にしろよ!」

良「50分集合だと余裕がないだろ! だから40分なの! あとコンビニも行きたくない、朝ごはん買うために」

「……なるほど、つまりこいつは家で朝ごはんを食べる気なんて毛頭無かったと……。まあいいや、コンビニ二行くなら俺もついでにジュースでも買おう。」

拓海「あつそ。んじや俺もコンビニ二行くな」

時音「じやあボクも行こうかな」

良「その前にさ。何でお前らそんな荷物多いの？日帰りだろ？」

「……あ、そう言えば良には言つてなかった気がする。昨日は良が通話を切つてたから泊りがけつて決まったし……。」

拓海「それがね……」

時音「ボクが理事長に明日は学校を休みにするように交渉したんだ！」フンスツ！

拓海「つて事なんスわ……」

良「はああああツツツツ?!?!」

良が今日一番つてぐらいに声を上げてびっくりした。まあ知らなかったのは無理もないか……だつて伝え忘れてた訳だし。何というかご愁傷様。

拓海「悪いな良。昨日良が通話を切つてたから急遽泊まることになったからさ、伝え損ねた」

良「————マジカヨ……ボク オカネ ナイ……」

時音「そうだろうと思つて、ボクが余分に2、30万ほど持つてきたから安心して！」
 純粹

oh：時音君ゝ器が大きいですね……。流石雨見財閥……俺ホント時音と友達で良かったわ……。それに全く表裏のない超純粹だし。それとちよつとそのお金盗まれないかが僕心配だわ……。

良「————————俺ホント数少ない友達に時音がいて良かった……」

拓海「それな」

——————

コンビニに行ったあと俺たち3人は駅のホームに入った。そして誰から言い出した

のか分からないが、突然今日きてきた服の話になった。

拓海「お前の私服ってホント the 体育会系 って感じだよな」

良「ええ!?!何処が!?!」

時音「だつて筋肉の形が見えるようにわざとピチピチの半袖Tシャツを着ていて、ズボンも先に行くにつれて細くなつていくズボンだし」

拓海「別にこれといつてムキムキでもないのにな」

良「別にいいじゃねーか！着たって〜！拓海こそそんな〜」

良は俺に何かを言おうとしたところで急に言葉を詰まらせた。一体どうしたのだろうか……。ちなみに俺の服は首元にチャックがついている白のTシャツに、黒のチャック付きのパーカーを羽織つていて、袖をまくっている感じで、ズボンは薄グリーンのカーゴパンツだ。

拓海「ん？どうした、良？」

良「……………お前はシネばいい…」

拓海「あ、？」

時音「良の言葉を要約すると多分『拓海はどんな服でも着こなすからせい!!』じゃないかな?」

拓海「いや普通にシンプルな服を着てるだけだろ?」

良「そのシンプルな服を着こなしてるお前が腹たつんだよ!」

拓海「なんだよそれ……えーと、この流れだと最後は時n……」

俺は時音の方を向いた時言葉が止まった。それに合わせて良も動きをとめて固まった。理由は時音の私服にある。時音は男のはずなのに何故か女の子がはくようなショートパンツを履いていて、どこか女の子っぽい大きめの長袖のパーカーを着ており、俗に言うラフな格好だった。さらに袖の部分はもちろん萌え袖仕様……可愛いな! 女子かよ、おい!

時音「どうしたの2人共?」

良「あのさ、一応聞くけど時音って男だよな……?」

時音「そうだよ?」

拓海「何で男が女の子がよく履いてるショートパンツを履いてるんだよ……それに何でぶかぶかのパーカーなんだ?」

時音「だって動きやすいし、ラフだし！ダメだった…？」

拓海「別に悪くないけど女の子に見えるぞ？」

良「まあスカートじゃないだけマシだよな」

確かにそれは言えてる…もし時音がスカートを履いていたらそれこそもう女装が趣味な男っていう肩書きがつくし。まあまだセーフラインだ、グレーゾーンではあるけど。

時音「な…／／スカートは流石に履かないよ…!!／／／／ボク男だよ…!／／」

良・拓海「……デスヨネー」

時音「ほらもうすぐ電車が来るよ!!」アセアセ

良「…ああ拓海：時音のあの服を見ると完全に女の子だよな…（小声）」

拓海「確かに…（小声）」

良「もしかしてホントに女の子なんじゃねーの…？（小声）」

拓海「あり得ないだろ、だって部活の時とか普通に俺たちと一緒に着替えてるぞ…！それに俺たちが上半身裸になっても全然動じてなかったし…！（小声）」

良「言われてみれば…（小声）」

拓海「時音が着替えてるところだつて俺たちは見てるんだ…あいつが上半身裸のところ………は無かった……時音ずっと下にインナー着てた…時音の上
半身見てね…」（小声）

良「じゃあ可能性が……！！！！」（小声）

拓海「けど俺は信じてるわ。女の子じゃないことを…」（小声）

良「マジかよ…」（小声）

そんな時音には聞こえない程の小声で話しているといつの間にか電車が来た。

時音「2人共、早く乗ろう!!」

拓海「とりあえず今の話はお互いなかった事にしよう…」（小声）

良「わかった…」（小声）

それから俺たちは時音に続いて来た電車に足を踏み入れた。

41話 それぞれの休暇の使い方

朝食が済んでから、俺は一旦みんなを食堂にとどめた。

秋人「えー、みんなは日頃の疲れやストレスが溜まってると思うので、今日1日は休暇にします。と言うか日曜日は基本休暇にするのでそのつもりで！だから自由に過ごしてくれ！あと休暇だから一切訓練禁止な！」

榛名「良いんですか：？秋人さん」

秋人「何が？」

榛名「運営がまわせるかが心配で…」

秋人「あー、別にそれは大丈夫。元帥からも俺の好きなように運営しても良いって許可を得てるし、あと最近妖精さんがまた隠されてた資材を見つけてくれたから結構、いやかなり潤ってるし。今回は地下から見つかっただけ、ちゃんと妖精さんにありがとうって言うておくように」

妖精さんが見つけてくれたおかげで資材が—————

燃料 : 1 4 9 4 3 0

弾薬 : 1 4 8 6 0 0

鋼材 : 1 4 9 7 3 0

ボーキ : 1 4 8 9 2 0

——と、それぞれ各 1 0 0 0 0 0 程また増えた。ありがてえ…。

秋人「と言うわけで各自で楽しんでくれ、以上解散！」

s i d e o u t 秋人

s i d e 時雨

秋人からの報告が済んだ後、僕はすぐに休暇をどう過ごそうかと考えた。——うしろかな：お買い物に行くのも悪くないけど、何を買おうか…。それとも入渠ドックじゃなくて温泉に行こうかな。——うーん…なかなか決められないね…。

夕立「時雨ちゃん！」

僕が今日の過ごし方について迷っていると、夕立が声をかけてきた。

時雨「どうしたんだい、夕立？」

夕立「時雨ちゃん今日の予定をまだ決めてないっぼい？」

早速夕立が僕の今の状況を当ててきた。————流石だね夕立…。

時雨「うん、ちようど何をしようか考えていた所だよ」

夕立「なら響達と一緒に買い物に行きましょう！」

なるほど買い物か…みんなで行くなら良いね！

時雨「良いよ！行こうか夕立。因みに響達って、他に誰が来るんだい？」

夕立「えーと、暁ちゃんと、電ちゃんと、雷ちゃんぽい！」

時雨「なるほど。でも響はともかく、暁、電、雷はちよつと怪しい人に絡まれないか心配だね…」

夕立「その時は私や響が守るから大丈夫っばい！みんなに手を出したら血祭りにしてあげるっばい！」

ちよつ……夕立!?今ちよつと怖い事を言わなかったかい!?

時雨「夕立、少しだけ響みたいになってきてるよ…」

夕立「……っばい？」

もしかして無意識かな？そうだったら少し危ない可能性が……。僕は少しだけ嫌な予感を感じた。

—————

夕立「それじゃ、みんな行きましょ！」

そう言つて一番に夕立は歩き出した。

雷「待つてよ夕立ー！もう、一番しやいでるんだから…」

それに続いて僕たちも歩き出した。ーーーちなみにだけど、今僕たちは私服だ。いつもの格好でも良いんだけど、それを着ると一般の人からすぐに僕たちが艦娘だとわかってしまう。だから鎮守府から出る時は、基本は私服である。……？僕の私服が知りたいのかい？良いよ、教えてあげる。僕はショートパンツにぶかぶかのパーカーを着ていてちよつとラフな格好かな？大人っぽい服でもよかつたけど今日は何だかんだラフな格好が良かったんだ。

夕立「だつて早く行かないと時間無くなっちゃうっぽいー！」

時雨「確かにそうだけど、みんなのスピードに合わさないと夕立」

夕立「分かったっぽい。それじゃあゆつくり行きましょー！」

響「夕立は改二になってから、犬みたいにはしやぐようになつたね。まあ性格は大人のようにだけど」

雷「あー確かに！」

夕立「そうっぽい？」

電「なのです！」

暁「まだまだ一人前のれでいまでは甘いわね！」

夕立「ふーん」

響「ハラショー」

こうして僕たちは楽しく会話しながらショッピングモールに向かった。

side out 時雨

side 拓海

良「ホントに時音ありがとう……」

時音「大丈夫だよ！それに、これはボクのせいでもあるしね！」

俺たちは良の明日の替えの下着や服などを買う為に、とりあえず駅の近くのイオンモールに行った。結果的に言うと、服などは全部時音が出してくれるらしい。流石雨見財閥…。

拓海「上等だ。一回表出る良……」

良「……………へ？」

時音「はあく……良やつちやつたね……流石のボクでも助けられないよ……」

良「あ、ちよ……ごめ、いやすいませんでしたツツ……拓海さんツツ……」

拓海「すいません？何それ美味しいの？」

良（……………あ、死んだこれ……）

拓海「今楽にしてやる……（イケボオ）」

良「……………ツツツツツツ……」（奇声）」

時音「……愁傷様……」アハハ

!!!!!!

この日俺は、今日一番と言っていていいほど良に対してマジでキレた。

4 2話 人違いから始まる物語

拓海「あースッキリした。これからは気をつけるよ、良」
良「あゝいゝ。ずびばぜんでぢだ……」

良を少し説教したあと、俺たちは出口に向かっていた。ここまで約2時間掛かっていて現在時間は10時ぐらいだ。

時音「結構やられたね良……」アハハ

良「もう2度と拓海にさかわらねえ……」

拓海「そうそう。そうした方が身のためだ」

良「ぐ……こいつ……」

時音「まあまあ！それよりも早く秋人の所に行こー！」

拓海「そうだなー」

良「ごめん、その前に俺トイレ」

拓海「はあ!？」

良 「ちよつくらここで待っててくれ！」

良はそう言つて一人でささつとトイレへ向かった。――良のヤツこう言う時だけは早いんだから…しようがねーな…

拓海 「マジかよ…」

時音 「じゃあボクもついでに飲み物でも買いに行つてくるね！」

拓海 「え!?!ちよつ…おい!?!」

時音も一人でスタスタと自動販売機に向かっていった。俺はそのまま一人取り残される感じになった。

拓海 「……………結局こうなのかよ…………」

side out 拓海

side 時雨

夕立「すごい！すごい！すごく広いっぼい!!」目輝き

僕たちはお買い物をするため、大きなシヨツピングモールに来ていた。

時雨「確かに大きいね…」関心

雷「凄いわ！私こんな所に来たの始めて！」目輝き

電「私もなのです〜！」目輝き

響「じゃあまずは何処から見に行こうか？」

暁「やっぱり一番最初は服からでしょ？れでいは服が一番大事なのよ？」

確かに暁が言っていることも一理あるね。それに僕も新しい服を買いたいと思つていた所だし。

時雨「僕も暁に賛成だよ。ちようど服も買いたいと思つていたところだったしね」

夕立「私は水着を見に行きたいっぼい！」

雷「あ、それ私も！」

電「私は本屋さんに行きたいのです！」

響「この流れだと私は電についていけないといけないな」

ちよūdō 2人に別れたし、これなら大丈夫だね。

夕立「じゃあまたお昼にこの場所にみんな集合にしましょ！」

時雨「そうだね、じゃあ僕は暁と服を見に行くよ。暁行こうか」

暁「ええ！このれでいの私が時雨の服を選んであげるわ！」

え……暁が僕の服を……何故か嫌な予感が…。

夕立「それじゃ私達も行きましょ！雷ちゃん！」

雷「そうね！お兄ちゃんがびつくりする水着を選ばなきや」

響「電、私達も行こうか」

電「はいなのです！それよりも響ちゃん、絶対に此処では暴れたらダメなのですよ？」

響「それは電次第さ…」

電「はわわっ!?ま、任せるのです…」

こうして僕たちは2人1組に分かれてそれぞれの見たいところへ向かった。

side out 時雨
side ?

雷「うーん…水着コーナーって何処かしら？」

夕立「確か3階っぽい」

雷「あ、ちょうどこの上ね！」

2人は少し迷いながら水着コーナーへ向かっていた。

夕立「わああ〜！思った以上にいっぱいあるわね!!」

雷「確かに！これならすぐに好みの水着が見つかりそうね！早速選びにーーーーー」

雷がそう言つて一歩歩いた時ーーーーー

? 「どけえええツツ
!!!!!!」

雷「ooooooooえ……？」

高そうな鞆を抱え、黒い服を着た男が凄い勢いで雷の元へ走ってきた。そのスピードは止まることもなく。

雷「きゃッ……！」

夕立「雷ちゃんッ！」

男「邪魔なんだよクソガキッツ!!」

警備員「待てえええッツ!!」

男は万引きをしていたらしく、警備員から逃げていた。万引き犯は雷を突き飛ばし、雷はその反動で雷は勢いよく尻餅をついた。そしてそのまま万引き犯は逃走していく。

雷「イタタ……大丈夫、私は平気だから！それよりもoooooooo！」

夕立「そうね……!!」

夕立はそう言って勢いよく走り出した。その時、夕立のポケットから何かが出たこと

は誰も気づかなかった。

男「クソツッ！あのガキのせいで—————」

夕立「逃がさないわよ—————おにーさん……」

男「なツ!!?—————ぐはツツ!!」

夕立は一瞬にして万引き犯に追いつき、そのまま肩を掴かんで、足をかけてこかした。

夕立「捕まえたつばい……それとよくも私の大事な友達を突き飛ばしたわね、覚悟はできてるの?……」

男「ひッ………」

雷「夕立ストオオオオツプ!!! 落ち着いて!私は大丈夫だから!あとは警備員さんに任せておけばいいからッ!」

夕立「—————雷ちゃんと言うなら……。おにーさん!すっかりと反省するつばい!」

男「は、はいいいいツツツ!!!!」

良「〜♪」

お手洗いに行っていた良はスッキリしたのか口笛を吹きながらお手洗いの出入り口から出てきた。

良「スッキリしたし早くあいつらの所に戻らね〜と……〜ん？」

良が拓海達の元へ急いで戻ろうとした時何かに気づいた。見るとそれは女の子が持っていたような長財布を半分にしたサイズの財布だった。

良「なんでこんな所に……子供が落としたのか？」

中身を確認したところお金はちゃんと入っていた。だが――

良「マジだよ……なんでこんな多く入れてんだ……？」

その財布の金額は、ざっと見ると10万ほど入っていた。そこで良は、盗まれずにずつとそこに放置していられたな と思った。

良「ここまま交番に届けてもいいけど……先に拓海達に合流した方がいいな」
良は拾った財布と共に拓海達の所に戻った。

side out ?

side 拓海

拓海「あいつら遅くね？」

2人が別行動してからかれこれ15分は立っていた。良はトイレだからまだ分かる。けど時音に関しては飲み物を買って行っただけだ。いくらなんでも遅すぎじゃね？

拓海「……もしかしなくても迷ったとか?……」

ちよツ：もしそうだったら俺時音の親に社会的に殺されるってツツツ?!?!? そう思い出したら、みるみると焦りとともにやばい汗が溢れ出てきた。やべえやべえやべえやべえやべえツツ!!—————

拓海「とりあえず時音に電話—————」

ふと俺は顔を上げた時、時音? が歩いて行ったのが見えたので、絶対俺たちを探してると思い時音を追いかけた。

side out 拓海

side 時雨

暁「もー! 全然私に合う服が無いじゃない〜!」 プンスカ

夕立達と一度別れてから僕と暁は服を見ていた。ちなみに僕は直ぐに服が見つかったけど、暁は背が低いせいか大人な感じの服が全く見つからず、ほとんど子供用の服し

どうしようか……このまま待つのもアレだし座れるところを探そう。僕は周りを見渡しながら椅子を探した。その時————

拓海「時音ツ!!」

————誰かに肩を掴まれて強引に振り向かされた。そして僕を振り向かせた人は高校生くらいの男の人で、なんだか秋人に雰囲気似ていた。肩を掴まれた時は何事かと思ったけど、その人を見た瞬間すぐに人違いだと分かった。

時雨「……え？」

拓海「あ————す、すみません!人違いです……」

男の人は直ぐに人違いだと分かり謝ってくれた。悪気はなさそうだね。それに僕に見間違える人も気になる。

時雨「大丈夫さ。人違いって事はそんなに僕に似ている人なのかい？」

拓海「あー…確かにすげー似てますね…髪が短かったら完全にうちの友達ですもん
…」

やっぱりすごく僕に似ている友達なんだね……。

時雨「なるほど、なら一度僕もあってみたいね〜」

拓海「アハハ…ー…あ、てかマジですいません!!」

時雨「大丈夫だよ、気にしてないから!それに君は悪気はなさそうだし訴えるつもり
もないさ」

拓海「ありがとうございますツ!!!」

時雨「それじゃあ僕はこれで、仲間を待っているから。君も早く友達が見つかるよと良
いね」

拓海「いや『見つかる』と言うより『待っている』って言った方が良いですかね…(苦
笑)」

時雨「そうなのかい?」

拓海「あいつら俺置いてスタスタとトイレ行ったり自販機行ったりしてるんで…」

なるほど、つまりこの人は勝手に何処かへ行った友達に呆れてながら待つているんだね……彼なりに苦勞しているんだ……。

時雨「なるほどそう言うことか、なら僕もここで一緒に君の友達を待つよ」

拓海「……………は？」

時雨「一人で虚しく友達を待つよりこうやって話して待つ方がましだからね」

拓海「いやいやいや、今会ったばつかの人と一緒に友達を待つ自体おかしいと思おうよ君」

時雨「そういうのはなるようになるさ」

拓海「マジかよ……」

こうして僕は知らない男の人と一緒に男の人の友達と暁を待った。

—————

……………それから僕たちは色々と話をした。どうやら僕と話している男の人は拓海と言うらしい。僕は名前を聞いて直ぐにらしい名前だと思った。そして拓海に

ついて分かった事は、僕たちが艦娘だということ知らないという事。そして拓海の友達に会いにここに来たという事。

時雨「————それでわざわざここまで来たんだね」

拓海「まあ俺と時音は巻き込まれただけだな…」アハハ

ちなみに拓海が敬語じゃないのは僕がやめてほしいと言ったからだ。

時雨「ご愁傷様だね…」

拓海「別に良いけどな、お陰で家で暇してる時間が無くなったから」

時雨「フフ：君の友達は面白いね」

拓海「ただの大バカ野郎なだけけどな…」

良「拓海、時音悪い。おまたせ」

拓海が友達の話をしている時、声が聞こえてきた。その方向を見ると拓海より背が高い男の人がいた。多分拓海の友達だと思う。それにその人もやっぱり僕をもう一人の友達だと思い込んでいた。

良「だから安心しろ！俺はお前の味方だ！むしろよろこそ、ウエルカムトウーだ！」
時雨「盛り上がっているところ悪いけど、拓海さんを話し相手に誘ったのは僕だよ」
良「……………ふぁえ？」

時雨「説明するとね……………」

僕は今来た拓海のお友達にさっきまでの事をしつかりと説明した。そして彼もまた僕が艦娘だつて事を知らないみたいだ。

時雨「……………」

良「なんだそういうことかよ……………つか時雨さんだっけ？確かにすげー時音に似てる……
後ろ髪を切つたらまんま時音だよ……」

時音「やつぱりそうなんだね、本当にその時音さんという人に会つてみたいよ」

拓海「それは……………ねえ？……………」

良「……………うん」

？
僕の言葉に2人は急に顔を逸らした。……………何かまずいことでも言ったのかな

時雨「どうしたいんだい、2人とも？」

拓海「いや別に……な？……」

良「……」

時雨「なら良いけど……」

拓海「そういえば時雨さんの友達？は？」

時雨「ああーそれなら多分そろそろ……」

暁「時雨ツ……!!」

僕が最後まで言おうとした時、暁が顔を強張せながら叫んだ。それもそのはず、暁からしてみれば僕は2人の知らない男と一緒にいるんだ、叫ばないほうがおかしい。……どうしよう……これはちよつとややこしくなりそうだね……。

暁「貴方達ツ!!時雨に何をするつもりツ!?!」

そう言つて暁は2人に詰め寄つた。

良「へ?! い、いやあ…俺達はただ時雨さんと話してただけで、別に何もするつもりは……」

暁「そんなの誰が信じるのよツツ!!」

良「デ、デスヨネ…」

時雨「暁、落ち着いて! この2人は何も悪くないから!」

もしかしたら暁が2人を傷つけかねない……僕がなんとかしないと…。

暁「……………え、時雨が!？」

時雨「そうなんだ! 僕が2人を話相手に誘ったんだ!」

暁「……………時雨が……男の人2人を……ふええええツツ!?!? / / / / /」

暁がいきなり顔が赤くなる。あれ…なんかややこしくなってきたような……。

暁「ま、まさか時雨が…そんな男の人を誘う人だったなんてえええ……!!! / / / / /」

時雨「え……………あ………違うよ暁!! / / / / / / / / / / /」アセ

アセ

暁「まさか私よりれでいになってるなんて……………」拗ね

時雨「だから違うんだ暁…………!! /」アセアセ

暁「…………でも私は認めないわ! ……絶対に時雨よりも一人前のれでいになるんだからね!」涙目

時雨「話を聞いてよッ!!! / / / /」

この後僕は暁に誤解を解くまで約20分かかった。

拓海「何このデジャブ感……………」

良「なんか……………ご愁傷様だな……………」

43話 勘違いによる時音のピンチ!!

時音「さ、ジュースも買ったし拓海達のところに行こっ♪」

みなさんはじめまして、雨見 時音だよっ！やつとボクの出番だね。本当に長かったよ…本編で出るのをどれぐらい待っていたことか…（メタ発言）「……………」それは置いといて、ボクは自動販売機でジュースを買い終え、拓海達のところに戻っている。

時音「ここのショッピングモールもすごく広いな」

ボクの近くのショッピングセンターぐらいある。うっかり迷いそうだね…。そんな事を考えながら歩いているとそれは起きた……………

電「あ、時雨ちゃんなのです！」

時音「……………」え？」

ボクは誰かに呼ばれた気がして振り返った。すると小学生の高学年〜中学1年生ぐ
らしいの女の子の2人組がボクのところに来ってきた。1人は茶髪で後ろ髪を上を持ち
上げて括っている少し気の弱そうな女の子で、もう1人は白くて長い髪をした少し気だ
るような表情をしている女の子だった。————まさかボクのことじゃないよね
……? いやでも、もしかしたらボクの派閥関係の人の子供の可能性も……。どうかそ
の髪の色って校則的に大丈夫なのかな…?

電「時雨ちゃん、暁ちゃんと一緒にじゃなかったのです?」

うん、知らないね! 完全に人違いだね! ……まさかボクが人違いに会うなんて思っ
てもみなかったよ……しかも『しぐれ』って多分『時雨』書くのかな? 名前までボクに似
ているみたいだし……どうしよう、このまま合わせた方が良いかな……? いや、ここは正直
に————

時音「あの、ボクは————」

響「時雨、暁はどこに行ったんだ?」

時音「え!? ええ!? あ、暁ッ!」

誰なのその人ツ!? ボク知らないよッ!! どうしよう…あーもうなるようになれだ!!!!!!

時音「え、えーと…気づいたら居なくなつたから…き、探していたんだ」

こんな感じで良いのかな? そもそも時雨さんってどんな人か知らないし分かんないよ…:…まあ多分女の子だということはなんとなく分かつてきたよ…:…ボク男だけどね…:…。

響「なるほど、なら私達も一緒に暁を探そうか」

電「賛成なのです!」

時音「へ?…あ、大丈夫だよ! 1人で探せるし、2人は買い物に行ったら良いよ!」

これで2人から離れば良いけど…:…だけど…

響「大丈夫さ、こういうのは人数が多い方が見つかりやすいしね」ピース

ど、時雨さんがいう仲間は友達とかそういう関係じゃないらしい。もっと大きなモノつて言っていた。俺的には一緒だと思っただけどなまあいいか……。ーーーーーとか時音がクツソ遅いんだけど……!!!

拓海「時音遅すぎるんだけど……」

良「それ俺も思った……」

まさか迷ったとかじゃ無いだろうな？時音に限ってそんな……。なんか俺の額から徐々に冷や汗が流れ出してきた。

暁「迷っているんじゃないのかしら？」

時雨「うーん……それとも誰かに襲われた、とか？」

ーーーーーバサツ!!

暁「ひゃッ!?!ーーーーー急に立ち上がらないでよ……!」

時雨さんの言葉を聞いた瞬間、俺と良はほぼ同時に立ち上がった。理由はまあ、何となくわかるだろう。

時雨「2人ともどうしたんだい？」

拓海「時音を探しに行く……」

良「右に同じ……」

もし襲われてたら俺たちの命もヤバアイ……。即行動だツツ!!

時雨「なら僕も手伝うよ、暁も良いかい？」

暁「ええッ!?はあー…仕方ないわね…」

拓海「ありがとな。時音が見つかったら暁さんの服を良と一緒に探すつて。」

良「はあッ!?なんで俺ッ!？」

拓海「こいつこういう服だけど、人の服を選ぶセンスだけは良いから」

暁「そうなの？」

良「ちよ、勝手にーーー」

暁「じゃあお願いするわね、良さん！」笑顔

良「任せてください、レディー！」キリッ

そして俺たちは時音を探し始めた。

side out 拓海

side 時音

響「見つからないね」

電「なのです」

ボクはいつまで影武者を続けるつもりなのかな?……。拓海、助けてええええええ!!

時音「あ、あの…ボクお手洗いに行ってきたても良いかな?」

響「—————:……分かった、私達はここで待つておくよ。絶対に戻つて来るんだ

よ、時雨」

時音「う、うん……」

何…この白い髪の女の子は…すごい圧力を…。ダメだ何故か逃げる気がしない…。とにかく1度はなれて拓海にLONEを送ろう！ボクは一旦2人から離れて拓海にメッセージを送った。これでひとまずは安心だ、あとは拓海がいつ気づくのかだね。

時音「……………これからどうしよう…」

「……………」よし、やっぱり逃げよう…！ボクがあこの2人がいる方向の逆に一歩歩き出そうとした瞬間……………」

雷「あ、時雨よ夕立！」

夕立「……………ほんとだっばい…」(っ・ω・、)

「……………」誰かがまたボクを時雨さんだと勘違いをしていた。多分あの2人の友達だろう。だって呼ばれた名前が一緒だし。僕は呼ばれた方向に振り向いた。そこにはボクぐらいの背の高さで、金髪の長い髪に毛先がミンク色になって目が真っ赤な女の子と、さっきの子の姉妹らしい女の子が小走りで向かってきた。何故か目が赤い女の子は

気が落ちてるみたいだけど…。

時音「や、やあ…」

雷「時雨、暁はどうしたの？」

時音「えーと…」

ボクは名も知らない女の子にこれまでの事を話した。話したと行っても暁さんを探している最中にトイレに行った。というところまでだけ…。

雷「なるほど、なら私達も手伝うわ！夕立もいいでしょ？」

夕立「…私はそんな気分じゃないっぽい…」

時音「何かあったの？」

夕立「私の財布を何処かで落としたっぽい…」

時音「財布…？それは大変だね。どこまで持っていたか思ってる？」

雷「夕立が泥棒を追いかけてる時まではあったはずだから、多分そこで落ちたんだと思ってる…」

時音「ならそこにいけば…」

雷「だけどそこに行っても財布が無かったから、誰かにとられた可能性が高いの」
時音「そうなんだ……それは困ったね……」

夕立「ほいいい……」

なんだかややこしい展開になってきたね……。これじゃあ逃げるタイミングがより
掴めなくなってきたよ……。

電「あ、見つけたのです！……って夕立ちちゃんと雷ちゃんもいるのです！」

響「これはまたナイスタイミングだよ、2人とも」グツト

あ、終わった……もう逃げれない……。

雷「あら、電と響じゃない！どうしたのよ？」

電「時雨ちゃんのお手洗いが遅かったので様子を見にきたのです！……そんな事よ
り、どうして夕立ちちゃんはそんなに気を落としてるのです？」

雷「それは……」

雷さんは夕立さんと何があったのか、響さんと電さんに経緯を説明した。

雷「oooooooooという事なの…」

響「なるほど、それは大変だね。でも大丈夫だよ、我らの時雨が見つけてくれるからね」キラーン

時音「ええッ!?う、うん!そうだねッ!!」

何言ってるのこの人ッ!?マズイよ!このままじゃホントに連れていかれるよ!!助けて拓海ツツツ!!!良ツツツ!!!

side out 時音

side 拓海

良「oooooooo全然見つかんねー…つか広すぎだろここッツ!!」

俺たちは居なくなつた時音を良とさつき出会つた時雨さんと暁さんとで探していた。

進展は全く0、とにかく広いモール内をただ我武者羅に探している。

時雨「中々見つからないね…」

暁「私もう疲れたー!」

拓海「んじゃ、少しここで休憩すー」

ピロンー

p その時俺の携帯に一件の通知音が流れた。この音はLONEだな…時音からか？俺は端末を開いて内容を確認した。するとー

” 拓海、なんかなんか女の子達に友達と間違えられちゃってるツ!! なんだか誤解を解くタイミングがなくなっちゃったからずっとなりすましをしてやり過ぎしているんだ! GPSを使ってボクの位置を調べて来て!! ”

ー という内容が送られてきた。…すぐに行くか。幸い俺の携帯に時音の位置情報がわかるように改造? していたのでどこに時音がいるのかすぐにわかる。何故改造(?) してるかって? 時音が勝手にしてきたからだよ。多分良の携帯にもこの機能は付いていると思う。流石雨見財閥……。

良「拓海どうしたーーーーー……なるほどな……」

拓海「ーーーーー早く行くぞ」

良「ういっす」

時雨「あの、僕たちも一緒に行ってもいいかい？」

拓海「いや、俺たち2人で大丈夫だ。ありがとな一緒に探してくれて、時雨さんと暁さん」

良「また何処かで会える事を楽しみにしておくぜ！今度会った時はデートしてくれよ」

拓海「またお前は……とりあえずありがと！」

俺たちは走って時音のところに向かった。

時雨「……」

暁「時雨、このままでいいの？」

時雨「そうだね！」

良「拓海、時音がどこにいるか知ってるのか？」

拓海「それに関しては大丈夫、GPSで位置は特定してるから」

良「おいまじかよ、早いな!？」

時雨「じゃあすぐに着くって事だね」

拓海「そうなるな————って、は？」

時雨「やあ」

何故か別れたはずの2人が付いてきていた。

良「わーお、こりやく驚いたね」

拓海「————いや、なんで付いてきてんの？」

時雨「ここまで一緒に探したんだ。最後まで付き合わせてよ」

暁「時雨の言う通りよ！それにまだ何もして貰ってないし！」

拓海「あー…それもそっか」

良「こりやもう、行くしかねーよなー！」

雷さん、そんなことを言ってもう20〜30分は経つよ…。時間もだいたい11時を回っている。

響「こうなったらお店の人に言うしかないね。どこに行けば良いのだろうか？」

まだ探すんだ…早く助けてえ…！そんな時——

拓海「時音ツ!!」

拓海のような声でボクを叫んだのが聞こえた。その声にボクは振り返り、声の主を確認する。やっぱりたくもだった、そして良も一緒に走ってきていた。あと知らない女の子2人ツ!?

時音「拓海ツ!!良ツ!!」

拓海「————つたく何やってんだ時音…」

良「うわあく可愛い子たちがいっぱい〜」

時雨「なんだ、人違いをした人達というのは響達の事だったんだね」

暁「何よそれ…」

雷「暁、時雨と一緒にいたの!? ……ってし、時雨が2人いるツ!?」

良「そのくその子は俺たちの連れで、時雨さんじゃなくて時音っていうんすよ」

電「そうだったんですね…あまりにも似ていたので間違えてしまったのです…すいません…」

電さんはボクに丁寧に頭を下げて謝ってくれた。

時音「だ、大丈夫だよ!!ボクは気にしてないから!間違えるぐらい誰にだってあるんだから!」

響「そうだよ、間違いくらい一つや二つはあるさ」

雷「ちよ、響ツ!なんで一番その人に寄り添っていた貴女が開き直ってるのよ!」

響「何を勘違いしているんだい?私は最初から彼が時雨じゃない事くらい知っていたさ。髪の毛を見たらわかる事だしね。ただみんながずっと時雨だと思っていたから、それに私は合わせていただけだよ」ピース

やっぱりそんな気がしたよ…。今までの接し方で一番この子がボクによつて話に来

ていたからね……。

雷「な!? 響、なんで言ってくれなかったのよ!」

響「言ったら面白くないじゃないか」ピース

雷「ぐぬぬ…／＼」

電「雷ちゃん、落ち着くのです…!」

時雨「まあこの件は一件落着だね」

拓海「まあそうですね」

暁「まさか私達の仲間だったとは思わなかったけど…」

夕立「まだ終わってないっばい…私の財布っばいッ
!!!!!!」

あ、そうだった夕立さんの財布がまだ……

拓海「財布?もしかして落としたって事ですか?」

夕立「ばい…」

拓海「どこらへんで無くなったとか分かります?」

夕立「知らないっばい…気づいたら無くなってたっばい…」

拓海「これは…少し難しいな…時音の力じや無理か？」

時音「うーん…どんな財布なのかを見たらすぐに調べる事ができるんだけど…見ない状態で見つけるにはきついかな…」

特徴とか言ってくれたらなんとかなるかもしれないけど…。そのときー

良「あ、そういえば俺トイレから出た時財布拾ったんだけどこれ違う？」

良はそう言って、女の子が持っていそうな長財布の半分の大きさの財布をポケットから出した。

夕立「私の財布っぽいッッッ
!!!!!! どうして…:~:~:~ハッ!まさかあの時~」

夕立は自分の財布が見つかったことへの喜びと共に、一人でブツブツとつぶやいていた。とにかく見つかって良かったよ…。

良「君のサイフだったかー。大丈夫ですよ中の物は『一切ッ!!』取ってないので」

拓海「こいつ絶対取ってるぞ」

良「おい拓海ツ!!いくら俺が変な奴でもそんなモラルの無い事はしねーぞ!!」

拓海「変な奴っていうのは自覚あるんだな…」

夕立「おにーさん、ありがとうっばい!!」

良「お、おう…／＼と、とりあえず早く秋人のところに行くぞ!!」

艦娘「……………え?」

拓海「そうだな、んじゃ生きますか。時音、行くぞ」

時音「うん!」

そうしてボク達は出口に向かって歩き出した。

良「あ、忘れてた! 暁さんだっけ? 暁さんの似合う服はこの上の階にある女性物の服

屋さんにあるから」ノシ

暁「え…あ、ありがとう」

響「……………時雨、さっき彼が言っていた言葉覚えてるか?」

時雨「うん。『秋人のところに行く』だよね…一度付いて行った方が良いかもしれないね」

夕立「おにーさんには申し訳ないっぼい…」

side out 時音

side ? 会話だけ

拓海「ーーーつたくなんでこんな事になるんだよ…大幅に時間のロスじゃねーか…」

時音「そういう時もあるさ!」

拓海「ねえよ…」

良「そーいや時雨って子すげー時音に似てたよなー髪を切ったらまんま時雨だったじゃん」

拓海「確かにそれは思った…下手したら双子の妹とか…」

時音「そんなわけないよ!ボクの兄弟は弟だけだよ!」

拓海「だよな…」

良「それよりも早く行こうぜ!」

拓海「だなく」

時音「……確かに早く行った方が良いかもね……」

拓海「……どういことだ時音……?」

時音「誰かにつけられて……」

良「マジか……こりや早く行かないといけねーなッ!!時音ついて来れんのか?」

時音「余裕だよ!」

拓海「まずはあの角を曲がったら速攻ダツシユな」

良「へ、サツカー部舐めんな!」

拓海「ゴツ!!!」

—————

電「ツ!?見失ったのです!」

響「大丈夫さ、彼らの行くところはおそらく鎮守府だよ。私達が彼らより早く鎮守府につけば良いんだよ」

時雨「そうだね、早く行こうか!」

夕立「逃さないっほい……!」

雷「面白くなってきたわね!」

暁「もう…服が汚れちゃうわよ…」

44話 何かが始まる予感

秋人「あー…暇だなー…」

今日は休暇の日だが、何もすることがなく、俺は椅子にもたれかけて座っていた。何にもすることがないな…時雨達も買い物に行ってるし……。

秋人「……まあいいや、とりあえず鎮守府内を散歩するかー」

俺は制服から私服に着替えて執務室^{自室}をでた。さて、まずは何処を通ろうかな…うん、まずは母さんがいる部屋に行くか。

—————

秋人「……確かここだったよな？」

俺はとある扉の前に立っていた。扉の横にかけてある板には赤城、加賀と書かれていた。

秋人「おい、母さん、加賀さん」

俺は2人の名前を呼びながら扉を叩いた。

シーーン……

シーーン……うん。反応が無い、ただの屍のようだ。

秋人「マジかよ……次はどうしょ……」

時雨たちはどっか出かけてるし……とりあえず何処か鎮守府内を回るか……。俺は当てもなくとりあえず歩き出した。

秋人「あんまりちゃんと鎮守府内を回ってなかったせいもあるけど、ここの鎮守府つ

て意外と広いんだな」

鎮守府内をちゃんと回ったのは初めて長門に追いかけられた時ぐらいだ。その時も必死で逃げていたのであまり中の構造は見えていなかった。――回って思ったけど、この鎮守府どんだけあき部屋があるんだよ……すげー勿体無いじゃん……。ざっと二階だけで5・6ぐらいの空き部屋がる。いったいこの部屋は何に使うんだろうか気になるところだ。

――

何も考えずにただ歩いていたらいつのまにか道場の近くに来ていた。ちなみになぜ道場があるかというと、俺が自主稽古に使う為に作ったのだ。まあ、作ったは良いが自主稽古する時間がないため中々使えないのが現状だけど……。基本俺が1人でしている。たまに母さんが一緒に俺の自主稽古に参加している。――道場の前にきたが、なぜかやけに中が騒がしかった。

秋人「あれ、中に誰かいるのか？」

俺はすぐに扉を開けた。するとそこには――

頼長「甘いぞ、もっと本気でかかってこい。俺を倒せないようじゃ剣で深海棲艦は倒せんぞ」

天龍「うるせーな！分かってるよッ!!」

――天龍と親父が木刀で勝負していた。いや、どうしてこうなった…親父とはそんな関わりがなかったのに。いったいどういう経緯で天龍は親父と交えるようになったのだろうか。

天龍「クソツ…もう一回…!!」

頼長「フツ…そうだろうな」

秋人「――なにコレ…」

龍田「天龍ちゃん自身が、秋人さんのお父さんに手合わせするようにお願いしたのよ」

秋人「うおッ!? 龍田、急にびっくりするだろッ!」

横から気配もなく『すう〜』つと出て来て声をかけて来たので、霊が出たと思いい心臓が飛び出しそうになった。

龍田「あら、それはごめんさいね〜」

龍田は笑いながら俺をからかうように謝って来た。話が変わるが龍田をよく見ると何故か薙刀というえらく物騒なモノを持っていた。え…ちよつ、怖いんだけど…雰囲気もなんか完全に○る側の方だよ…!?

秋人「なあ龍田、一応聞くけどなんで薙刀持ってるの？」

龍田「あーコレはそうねー、秋人さんのお父さんをやるためかしら？」

「……………は？今なんか物騒なこと言わなかったツ!？」

秋人「あのー龍田さん…？もう一回聞いても大丈夫ですか…？」

龍田「あなたのお父さんをやるためよ〜」

秋人「おいちよつと待てよッおいッ！ちよつと待てよッ!？」

俺の親父をやるつてどういう事だ!?! どうしてこうなった。

龍田「秋人さんのお父さん、かなり強いみたいだから本気で行つても大丈夫そうだからね。それじゃあ龍田、抜錨しまーす♪」

秋人「おいちよ待てよッ！（イケボオ）」

こうして道場内はいつしか龍田 vs 親父のマジ勝負になった。ーーーうん、怖えええ……。

s i d e o u t 秋人

s i d e 拓海

どうも拓海です。俺は今、時音と良の3人で無我夢中に走っています。理由は前回の話をみてください、尺的に省きます。

良「おい拓海！もう追ってきてねーぞ！」

時音「確かに、ボク達が走った時からもう追いかけてきてなかったね……！」

拓海「そうだな……！……はあ……まさかここで本気で走るとは……！」

良「つーか、ここ何処だよ！」

周りを見ても少しの水田と多少の家々やコンビニ、目の前に神社に行くような一本道があるぐらいだった。海？一応見える、奥々に……けど鎮守府とみられる建物が一切見当たらない。なんて日だ！

時音「ちよつとまってね、今調べるから！」

時音はそういいながら携帯を出して、サクサクと調べ出した。

時音「運が良かったよ！この場所は秋人が居る鎮守府にかなり近いよ!!」

良「おいマジかよツ!!」

時音「ここ先まっすぐ行ったら着くみたいだね」

拓海「え…この一本道？」

まさかの神社に行くような道がそれだった…嘘だろ…。

良「ほう、この先に秋人と艦娘があゝぐへへッ／＼」

時音「あ、もしも警察ですか？」

良「ちよ…ごめん冗談だからッ!!」

拓海「何やってんだよ2人とも…とにかく行くぞ」

時音「そうだね！」

良「おいちよ待てよ！（イケボオ）」

拓海「無駄にクオリティの高いキム〇クの真似しなくてもいいから…」

俺たちは楽しく話しゆっくりと一本道を歩いた。だが、俺たちはしるよしも無かった。この先でマジで殺されかけるといふことに――。

side out

拓海

side 秋人

頼長「ほうう……まさかまだ立っているとは、龍田だったか？中々やるな」

龍田「あらあらそれは嬉しいことですね」

頼長「次は本気でいく、ついてこいよ？」

龍田「もちろんですよ……」

「……なんだこれ……これこれ10分ぐらい勝負を見てるけど2人はほぼ互角の勝負だった。いやまあ親父が手を抜いて勝負してる事を俺は知ってるけど……結構良い勝負してるよ……。龍田ってあんな強かったっけ？けど親父は「次は本気でいく」と言っている。そろそろ龍田もやばいんじゃないか？そう思った矢先、親父は一瞬にして龍田に距離を縮めて剣尖を龍田の首に寸止めした。」

龍田「……ッ!？」

頼長「まだ甘いな。これでは肉弾戦時に、深海棲艦を倒すのは難しいだろうな」

龍田「さすがですね……参りました」

頼長「ほう、潔く負けを認めるか。嫌いじゃないぞ」

龍田「ふふ、ありがとうございます」

頼長「気に入ったぞ龍田、お前には俺直伝に稽古をしてやる。あと天龍お前も一緒に稽古をするぞ、その刀をより活かすためにな」

うわあ…なんか凄いことになってきた……。親父直伝の稽古とか…こりや2人には初めは地獄だろうな…けど、どんなに強くなるか正直楽しみだ。そんな2人に期待しているところ、急に横かあらー！

時雨「秋人ツ！！！！」

ー！ー！ー！買い物にいたはずの時雨達が慌てながら俺のところに来ていた。

秋人「どうしたんだよ時雨、そんなに慌てて？」

時雨「秋人ぐらいの人達がこつちに来てなかつたかい!？」

秋人「いや、来てないけどそれが？」

響「秋人を知っている秋人ぐらいの人達がこつちに向かってきているんだ。それに『見つけたら殴る』とも言っていたね」

秋人「俺を知ってる人で俺ぐらいの人達……？」

「……なんか嫌な予感が……」。

時雨「とりあえず今いる皆んなで一応警戒するように僕たちで行っておくよから」

秋人「ああ……う、うん……」

「……俺が曖昧な返事をした後、時雨達は急いで鎮守府内に走っていった。

秋人「……様子を見させた方が良かったかな……？」

side out 秋人

side 拓海

良「なげーよッ！！！！」

俺達は、1 kmぐらいまである鎮守府までの一本道を歩いてきた。3人で。そして自分達の荷物を持ちながら。

拓海「駄々こねてないで歩け良。着いたら艦娘が出迎えてくれるだろ」

良「うん、頑張りゆ〜♡ぐへハッ／＼」

時音「これだから変態は…あ、もうそろそろ門に着きそうだよ!」

拓海「やつとか…」

そろそろ鎮守府の門へと差しかかろうとして、俺たちが胸を撫で下ろそうとした時————

時音「危ないッ!」

良「ふあッ!」

拓海「——は、何」

何処からか分からないが何かが飛んできた。俺達は時音に庇って貰ったおかげで一髪でその何かをかわすこよに成功した。その何かは砲弾だった。その事実を知った

俺たちは一瞬にして固まった。そして俺たちが突然の襲撃と命の危機の2つの事実で思考が追いつかず呆然としてしていると、木の陰から「ほーう…」と言う女性の声が聞こえた。

時音「誰ッ?!」

時音がそう叫んだ後、背が高く男をいや、良を刺激させるような少し露出がある服を着ている長い綺麗な黒髪の女性が出てきた。それにつられて髪は短く茶髪ではじめの女性とおなじぐらいの露出をしているこれもまた綺麗な女性が出てきた。いやまず俺たち私服だしどう見てもああいう軍事関係の人じゃないよね? ほぼ無抵抗だよね? なんでキルしてくるんですか? この時俺は、危険な時ほど冷静になるのは本当だったんだと俺は実感した。

時音「これは一体どういう事ですかッ!? ボク達明らかにそう言った関係者でも無ければ争う気も見当たらないよね!」

長門「時雨ッ?! …いや、違うか… (小声)。—————安心したまえ、さっきの砲撃は君達を殺すような弾ではない。あれは麻酔弾だ、当たった瞬間に弾が破裂して中

から催眠ガスが出る仕組みになっている。それと君の言っている事はよく分かる、だが争う気もない人が理由もなくわざわざここに来るのもおかしいと思わないか？」

時音「それは……」

拓海「理由ならありますよお姉さん。ここに桜川 秋人よ言う人が居ますよね？俺たちはその秋人という人に会いにここに来たんです」

長門「なるほどな……大体分かった。だがダメだ。生憎だが鎮守府は関係者以外立ち入りは禁止とされている」

良「おい、なんでだよッ!!」

お姉さんの断りを聞いて良は怒り、長髪のお姉さんに向かってつめよった。

拓海「やめろ良ッ！」

長門「ここは戦いの場だッ！観光地のような人が来て簡単に中に入る所ではないんだ。お引き取り願おうか。もしまだ聞かないと言うなら、今度こそ打撃ッ」

良「……ッ!?!」

お姉さんからは異常なまでの殺気を放って、それに気づいた良は後ずさりして尻餅を

ついた。だけど俺には分かった、お姉さんは本当は撃つ気はないと言うことを。それは目で見て分かることだ。確かにお姉さんは殺気を放っている、けど目は何処かしら辛いような目をしてた。

陸奥「少しやりすぎじゃない?…」（小声）

長門「——これぐらいやらないとこの子達は引いてくれないと思ったからだ: (小声)」

陸奥「フフツ、やっぱり優しいのね:…」（小声）

途中小声で髪の毛の長いお姉さんと短いお姉さんが話していたが、何を話しているのかわからなかった。

長門「貴様らも分かったな?」

時音「拓海:…ちよつと良いかな? (小声)」

拓海「何、時音:… (小声)」

時音「あのお姉さん、ほんとにはボク達を撃つ気なんて全く無いよ:… (小声)」

拓海「時音も気づいた?:… (小声)」

時音「うん、だからこのまま走り抜けるのも良いんじゃないかな？（小声）」

拓海「……それも有りだな…（小声）」

長門「どうした、こそこそと話して」

拓海「すみませんがお姉さん、俺たちそう簡単に『はいそうですか』って言わない主義でねッ!!おいい良!立て、走るぞッ!」

良「ふあ…?ちよつ、おいッ!」

俺達はそう言つて鎮守府の中へと走つた。悪いけどお姉さん、現サッカー部舐めんなよ?

長門「なッ!?待てお前たち!!」

拓海「待つわけ無いでしょ普通!!」

長門「く…陸奥追いかけるぞ!」

陸奥「ええ、分かつてるわ♪」

こうして俺達は、艦娘? v s 俺達 という謎の鬼ごっこが始まつた。

45話 侵入者の搜索と絆の証明

どうも拓海です。またもや前回に引き続き逃げています。次は誰とかつて？多分艦娘さん……。いや逃げないとやばいでしょ!!これ捕まったら確実お縄行きだよ!?

良「なんでこんな事になってんだ!?俺の想像してた鎮守府と違うんだけどツ!!」

時音「そりやそうだよ……!あくまでここは軍事施設で戦いの拠点なんだから……!」

拓海「だから言っただろ……秋人が提督に以上、俺たちはもう簡単に秋人に会えないんだよ……鎮守府を甘くみんなツ、バカ……!とにかく何処かの壁に隠れて身を潜むぞ……!」

——こうして俺達は建物の壁に寄り添って身を潜めた。

side out 拓海

side 秋人

時雨達がみんなに侵入者の警戒を伝えるに言ってから約10分後、侵入者の警報がなった。放送では大淀が「学生とみられる3人の男女が鎮守府内を逃げ回っています。見つけ次第確保してください！なお、非人道的なやり方はしないように！」と言って流した。なんか嫌な予感がするのは俺だけだろうか……？

秋人「ちよつと大淀のところに行くか……！」

俺は急ぎ気味で執務室に向かった。

—————

秋人「大淀……！」

大淀「提督ッ！」

秋人「んで、さっきの侵入者の事なんだけど——」

大淀「大丈夫です、大体の場所は把握していますから。今時雨さん達に向かわせています」

秋人「じゃあ俺も行く！その侵入者の情報を随時伝えてくれ！」

大淀「分かりました！」

俺は指示を大淀に託して執務室を出た。

金剛「h e yあつきー！これはなんの騒ぎデスカ!?」

部屋を出た瞬間、お出かけから帰ってきたであろう金剛姉妹がいた。

秋人「あ、金剛か…それがなんか学生らしい奴がここに侵入したらしい…」

金剛「o h!?それは本当デスカッ!?!」

秋人「……らしい…」

なんか俺の知ってる人達の予感がすげーするんだよな……。あー怖い…。頼むから俺の勘違いであってほしい…。けどその3人俺の事知ってるらしいんだよな……。考えれば考えるほど不安はつのってくる。

比叡「珍しいですね、普通の人がここに入るなんて、ましてや学生さんが」

榛名「榛名達も探しましょうか？」

秋人「大丈夫大丈夫！時雨達に任せてるから！」

榛名「分かりました！」

霧島「ではこの館内に入られないように警戒しておくのはどうですか金剛お姉様？」

金剛「oh 霧島！それは良い案デース!!じゃああつきー、早速警戒して来るネ！」

秋人「オツケー了解！」

そうして金剛との会話を済ましたあと、俺は急いで外へと向かった。

s i d e o u t 秋人

s i d e 時雨

響「一体どこに隠れているんだろうね、あの人たち」

夕立「あまり捕まえたく無いっぼいけど…」

今僕たちは必死に拓海達を探している。理由は、秋人を知っていたかつ、この鎮守府

に入ったからだ。本来鎮守府は一般の人が簡単に入って良い場所では無い。あくまでここは軍事施設なのだから。

時雨「まあ仕方ないよ、長門さんの警告を押しつけて鎮守府に入ったんだから。それに秋人を知っているんだ、捕まえないわけにはいかないよ」

夕立「そうよね……」

響「……ん、なんだい？……分かった、すぐに向かうよ……さつき大淀からあの建物の裏にあの3人がいるって情報が入ったよ」

時雨「分かった、早く行こうか！」

side out 時雨

side ? ほぼ会話

時音「これからどうしようか……」

拓海「秋人にパッと会って潔くパッと帰る」

良「ええ!？」

拓海「秋人に会うのが目的だろ？それに俺たち一般人はここに居ちゃいけないわけだし」

良「うーん……」

時音「まあ、そうだよね……」

拓海「そういうことで、早く行くぞ。良、お前が先頭で」

良「はあ!?なんで俺!？」

拓海「この計画の発案者だろ。発案者は堂々と前に立って歩くのが当たり前だろ？」

時音「た、確かに!」

良「はいはい、わーっただよ……んじやさつさと行くぞー……え……おわあぁッ……!!」

拓海・時音「ッ!？」

拓海「良、どうしー……」

良の異変を確認する為に拓海が建物の側面を除くと、良が夕立に取り押さえられている状態だった。

良「イデデデデッ……」

夕立「やつと捕まえたっばい!」

拓海「ツ……君は今朝の……でことは……」

時雨「君の考えている事は合っているよ、拓海」

響「やあ、さつきぶり」

拓海「やっぱり……（苦笑）」

時音「これは凄い歓迎の仕方だね……（苦笑）」

時雨「僕たちもこんな事はしたくなかったよ。けど拓海達は長門さんの忠告を無視してここに入ってきたし、それに秋人のことも知ってるみたいだし。あと、僕たちを見ても拓海達はすぐに逃げるだろう？」

拓海「うん、まず間違いなく逃げるな。……でも俺たちは秋人の友達って言うてもダメなのか？」

時雨「……それでもダメなんだ……。普通の市民がここに来ちゃ」

響「ここは海軍の基地みたいなどころだよ、今日はたまたま活動してなかった良いけど、本来は私たちは訓練や出撃に行っているんだ。そんなところに君たちみたいな誰かに会う目的で来られたら訓練の邪魔になるし、秋人にも迷惑だよ」

拓海「そっか、ゴメン……なにも知らず来ちゃって……」

響「分かったならさっさと……」

拓海「申し訳ないけど、それでも俺たちは秋人のところに行く。意地でもな！（ニヤ）」

響「ooooooooooooは？なに言ってるんだい？さっきの話…」

拓海「聞いた上で行く」

響「そんな事、できると思っかい…？」

拓海「できるな」

時雨「何をするつもりだい？」

拓海「逃げるに決まってるだろ、時音行くぞ〜♪じゃあ良、ちようど良いからお前は頼んど〜♪」逃走

時音「良、ゴメンね!!」逃走

良「はあああ!?!ちよつ…お前ら俺を見捨てんのかあつあああツツ!!!??
おとおおooooooooooooいツツ!!」

響「ooooooooooooツツ!?!」

時雨「あ…ちよつと待っ…!!」

拓海たちは時雨達の前をダツシュで通り抜けて逃げ去った。

時雨「……行っちゃった…さすが拓海達だよ…懐かしい感じだね」

良「マジかよアイツら……（涙目）」

響「君もご愁傷様だね」

夕立「響ちゃん、おにーさんどうするっばい？」

響「とりあえず縄で縛って鎮守府内に持って行こうか」

時雨（あ……響絶対怒ってるね……）

—————

拓海「とりあえず逃走成功。良には申し訳ない事したな……」

時音「まあ良いじゃないか……良だし！……で、これからどうするの？」

拓海「正直秋人に電話したらいいと思うんだけど、どう思う？」

時音「賛成だね、探すより手間が省けるし。けどどうして最初からそうしなかったの

さ……」

拓海「それは俺も思った……」

頼長「……侵入者が誰かと思ったら秋人の友人だったか」

拓海「は……え……頼長さんツツ！」

時音「どうして秋人のお父さんがここに？」

頼長「俺も訳あってな……それで、内の秋人に何の用だ？」

拓海「ちよつと久しぶりに秋人の顔が見たいなと思ひまして……。ー。ー。ーあのく。つ。つかぬ事をお聞きしますが、頼長さんは俺たちを止めに来たんですか？それとも秋人のところに案内しにー。ー。ー」

頼長「悪いが止めに来た」

拓海「よし、帰るぞ時音」

時音「ええええッ!?!」

拓海「当たり前だろ!!頼長さんはクソ強いんだぞ!?!あの身体能力バケモンの秋人がボコボコされるぐらいだし、無理に決まってるだろ!」

頼長「そうだな、その方がいい。申し訳ない無いが秋人も今は君たちにかまってる暇なんてないからな」

時音「お父さん、それはどういう意味ですか?」

頼長「もう君たちと関わることは無いということだ。もう秋人は海軍の1人だ、お前たちの仲良しこよしの中では無い」

時音「それは違うよッ!秋人は提督になってもずっとボクたちの友達でチームメイトだよ!!」

頼長「はたして秋人は本当にそう思ってるのか?」

時音「ー。ー。ーえ?」

頼長「君たちは秋人の過去を知っているのか？本当の秋人を知っているのか？」

時音「……………」それは…………」

頼長「何も知らない奴が秋人の事を語るなツツ!!」

時音「ツツ…………」

拓海「おい…………黙って聞いてるとちよつといいすぎじゃないんですかね、頼長さん……」

頼長「言い過ぎも何も事実を述べただけだと思うが？」

拓海「俺たちと秋人が本当の友情じゃないって誰が決めたんだよ…………秋人が直接言つたわけでもねーのに勝手に言ってるじゃねえーよ…………このクソ髭ジジイが」

頼長「…………聞き間違いか？今俺の事を髭ジジイと言つたな？」

拓海「ああ、言つたよ。あんたがクソ最低な髭ジジイってなツツ!!」

頼長「…………俺をここまで怒らせたのは秋人以来だ…分かった、なら2度とそんな口を聞けないように俺が矯正してやる…………あとお前は何となく秋人に似ていて腹が立つ…………」

拓海「そりやどーも…………なら俺は俺たちと秋人の友情が本物か教えてやるよ…………。…………もし俺が勝つたらさっきの話は取り消せ、あと謝罪しろ。それで俺が負けたらもう2度と秋人に近づかねーし、秋人と縁を切る」

頼長「良いだろう。…………ほら拾え、木刀だ。俺に一太刀でも当たったら俺の負け

だ。だがその前にお前が倒れたらお前の負けだ」

拓海「上等……!!」

時音「拓海無茶だよ!!やめようよこんな事ッ!」

拓海「悪い時音、散々あんな事言われたんだ……あの人に一発ギャフンと言わさないと正直気がおさまらない……」

時音「拓海……」

拓海「さつさと始めようぜ頼長さん」

頼長「後悔するなよ、小僧……!!」

こうして2人の闘いが始まった。

—————

秋人「確かここら辺だったよな……」

時雨「あ、秋人!」

秋人「時雨! って何だこりゃッ!?!」

秋人が目にしたのは袋の中に入れられていた良だった。良は声を上げながら袋の中で動いて抗っていた。

響「侵入者だよ。1人捕まえたから縛っておいたのさ。夕立が」

秋人「いややりすぎだろ流石に……」

夕立「響ちゃんに言われたからしたっほいー!」

秋人「早く解いてやれよ……」

響「……しょうがないね」

響は納得いかない顔で良を袋から出した。

良「ぶはあああ……!!死ぬかと思った……おい流石に一般人相手にやりすぎだろ!!」

響「黙るんだよ」

秋人「はあー!?良ツツ!?何でお前が居るんだよ!!」

良「おう秋人久しぶりツツ!!そりやお前に会いに来たからに決まってんだろ!!」

秋人「いや、会いに来たようには見えねーぞ……?何やったんだよお前……まさか時雨

たちを盗撮——」

良「してねーよツツ!! 綺麗なお姉さんの忠告無視してここに入ったから捕まったんだよ!!」

秋人「そりやお前が悪い……来るなら来るって俺に言えよ……こつちも準備できたのに……」

響「——なるほど、やっぱり友達というのは本当だったようだね」

良「さつきからそう言ってるでしょ!」

秋人「——なんで? 来てるのは良だけか?」

時雨「その事なんだけど、あと2人いたんだけどこの人を囚にして逃げられたんだ……拓海と時音さんだったかな?」

秋人「——やっぱり拓海たちも来てたのか……てか何で時雨拓海たちのこと知ってるの?」

時雨「それは今朝シヨツピングモールであって意気投合したからだよ」

秋人「それなのにコレ?」

時雨「あ……し、仕方なかったんだ……! / / 秋人の事を知っていたし……艦娘の立場だと…… / /」

秋人「なるほどな、まあ時雨の気持ちは分かるから仕方ないな。——で、拓海た

ちはどこ言ったんだよ」

夕立「多分鎮守府に向かったかい」

秋人「アイツら……ありがとな夕立！あと良はそのまま縛った状態で執務室に持って行つといてくれ」

響「了解だよ。さあ行くんだよ不審者の良」

良「俺は不審者じゃねー！女性が好きなただの一般peopleだ！！！！」

響「……（ゴミを見るような目）」

—————

秋人「—————たくアイツらどこに」

赤城「あら秋人どうしたんですか？」

そこに居たのはお出かけから帰ってきた一航戦と五航戦だった。

秋人「いやちよつと人探しを……。母さん達は、今帰り？」

赤城「ええ、とても楽しかったですよ！ね、加賀さん」

加賀「そうですね。まあ貴女がいたせいで楽しさは半減されたのだけれど」瑞鶴を見
て

瑞鶴「なッ!? 何よそれ、私達が邪魔って言いたいわけ?」

加賀「冗談よ、むしろ来てくれて良かったわ（微笑む）」

瑞鶴「……ッ／／／ホントそういうところがずるいのよ……／／」

翔鶴「あはは……」

赤城「……それより秋人、なんだか騒がしい気がします……」

秋人「あー今俺の友達が鎮守府に侵入して逃げてるんだよ……」

赤城「秋人のお友達ッ!? 私が居ない間に秋人にお友達が出来たなんて……! 母さん感動
しました! 私もぜひ会ってみたいです!」

秋人「良いけど……探さないといけないぞ母さん?」

赤城「全然大丈夫ですよ秋人、今すぐ行きましよう!!」

秋人「は、は……悪い加賀さん、翔鶴、瑞鶴。ちよっと母さん借りるな!」

加賀「私は問題ないわ提督」

瑞鶴「私もよ!」

翔鶴「私もです!」

こうして秋人と赤城は2人で拓海たちを探しに向かった。

side out ??

side 拓海

拓海「はあ……はあ……」

頼長「どうした？さっきの威勢は何処に行つたんだ？」

現在俺は頼長さんと勝負している。頼長さんに俺たちと秋人との絆を侮辱されたからだ。俺はそれが許せなかった、確かに俺たちと秋人の時間なんて1年ちよつとしかなかった、それでもその少ない時間でも俺たちとの絆は確かにあつたんだ！それを証明するために慣れもしない剣道で勝負している。……剣道なんて中学の体育以来だぞ……！そのせい、いや……もともと力の差がありすぎたせい、俺は頼長さんにかなり滅多打ちにされている。

拓海「うるせーなッ!!」

俺は何も考えず無我夢中で頼長さんに斬りかかった。けど所詮はただ前に突っ込んでいっただけの攻撃、そんなものは当たるはずもなく――

頼長「振りが遅いし攻撃が単一的だな。こんなもの、剣道経験者の小学生でも避けられる。お前は俺を舐めすぎだ」

拓海「ツツ……!!」

時音「拓海ッ！」

――俺の攻撃をすぐに交わされ、追い討ちで俺の背中に木刀を振り落とす。……やばい……クソ痛い……あーあ、なんで俺こんな事やってんだろ……？ 確か事の発端は良からだよな……良が秋人に会いに行こうなんて言わなきや頼長さんに侮辱されることもなかったし、こうして痛い思いして絆を証明することもなかったのに……マジで何やってんだよ俺……。俺はそんな事を考えながら無意識に立ち上がった。いた。

拓海「……………」

頼長「もう立っているのがやつとか……コレで終わらせてやろう！」

頼長さんは一気に俺に向かって斬りかかってきた。——やべ…頭が回らない…ぼ—っとする……もう何も考えられない——

頼長「終わりだ」

時音「拓海ツツツ
!!!!」

———だけで、これだけは分かる…この人に、頼長さんに……一度ギャフンと言わせない…! そう思った時、また無意識に体が動いて、部活の練習でやるステップで頼長さんの攻撃を自然とかわすことができた。

頼長「なツ!？」

その勢いでくるつと身体を回転して頼長さんの背後に回り———

拓海「———試合終了… (小声)」

「……頼長さんの背中に向かって思いっきり振り落とす。何故かこの一発だけ力が入らないのに妙に振りが徐々に重くなっていくのを感じる。これが火事場の馬鹿力という奴なのだろうか。まあとりあえず……」

拓海（くたばれクソじじい……）

秋人「そこまでツツ
!!!!」

頼長さんに当たる直前で、だこか懐かしい声と共に木刀が止まった。いや、止められたのだ誰かに……それが誰か分からない、俺は今満身創痍で、ろくに顔を上げることができないから。ただどこかで止められたら、いつここで頼長さんを打つんだよ……！俺は止められた木刀を必死に抵抗して剥がそうとした。だけど次の声で俺はその気力も無くなる。

秋人「……拓海、何があったか知ら無いけどもうやめろ！もうこれ以上親父と戦うな……！」

そう、その声は俺たちとずっと一緒にバカやっていた秋人だったから。

拓海「……秋人……？」

時音「秋人ツツ!!」

秋人「おう、時音久しぶり！」

頼長「なんだ秋人か、今良いところだったんだ。邪魔するな」

秋人「邪魔すんなって……友達がこんなことしてんだから普通止めるだろ！バカじゃ

ねーの？大体なんでこんなことしてんの？拓海傷だらけじゃねーか！」

時音「秋人のお父さんがボクたちと秋人との絆を本物じゃないって侮辱したから、それに怒った拓海が勝負を仕掛けたんだ！」

秋人「ほーう、親父……誰が拓海たちは本当の友達じゃないって言ったよ……！」

頼長「見極めるためにやっただけだ。何か問題でもあるのか？」

なーんか秋人と頼長さんが言い合いをしてるみたいだ。とりあえず、地獄から解放されたみたいだし、休憩しよう……。痛覚の限界を超えて逆に麻痺してるせいで何も感じない。よく俺全く感覚がない状態で立ってられていたな……。

秋人「問題だらけだったのツツツ!!!」
「……まあけど、コレを見た母さんは親父をどう思うかな」

頼長「は？それはどういうー……」

赤城「頼長さくくく……？これは一体どういうことですか？」

頼長さんが最後まで言う前に、頼長さんの後ろから黒長な髪の綺麗な女性が何やら黒いオーラ？をまといながら怖い笑顔で歩いてきていた。

頼長「あ、茜……!?いや……これはだな……!!」

赤城「あなた、裏へ来い」

頼長「御意……」

そうして頼長さんは綺麗な女性とともに建物裏へ行き、2人が見えなくなるところで大きな音とともに、女性が満面の笑みを浮かべて1人で出てきた。多分女性が頼長さんに何かしたのでろうけどこの場にいた俺含め全員が何をしたのかは聞かなかった。とにかく、この女性には絶対に逆らってはいけないと俺の危険信号がそう直感した。

46話

BOND OF PIECE

絆のかけら

秋人「今回の件、本当にごめんツ!!」

あの後、俺は拓海を入渠させて、それから俺の部屋執務室に行つて、拓海達に謝罪した。何がどうであれ拓海達を危険な目に合わせてしまったからだ。そして復活した親父にも母さんの力で謝罪させた。さすが母さん…。

時音「だ、大丈夫だよ秋人! 第1何も言わずにここに来たボク達にも非があるし…」
拓海「そうそう、秋人は悪くない。主に良が元々の元凶だったし。ーーそれにしてもここのお風呂どうなつてんの? 傷や痛みがが跡形もなく消えて治つただけ…」
秋人「あーそれは入渠ドックつて言つて主に傷ついた艦娘の傷を治すための特別な場所なんだよ。今ではもう完全にお風呂化してるけど」

拓海「嘘だろ!? すごいな鎮守府…」

良「話してる中悪いんだけどさ……早く俺の縄解いてくんねーかな!? 全く動けねーん

「だけど!!」

あ、そういや良縛ったままだった、忘れてた……。

秋人「悪い悪い、完全に忘れてたわ」

俺はそう言つて良の縄を解いた。良は縄から解放された瞬間「ふい〜!」と言つてた両手を上げて体をのびした。

秋人「そういやお前ら久しぶりだよな! 元気にしてた?」

良「当たり前じゃねーか!! けど秋人、お前がいなくて少し寂しくなつたけどな」

拓海「それにサッカー部も秋人がいなくなつてから少し落ちたし…今年のインターハイもベスト8止まり」

時音「それでも楽しくやっているよ! とところで秋人、さつきから向こうの扉からいろんな人が覗いてるみたいけど……」

時音の言葉で俺たち4人んは一斉にドアの方へと向いた。そこには母さん達が興味

本位で拓海達を覗いていた。ざっと見ると10人くらいは見てる。いや、どんだけ拓海達がきになるんだよ!?

艦娘達「……あ」

秋人「気になるなら、普通に入ってきたら良いじゃん……」

俺の一言で、覗いていたみんなが一斉に入ってきた。ちなみに誰が覗いていたかというと、金剛、赤城、母さん加賀、瑞鶴、北上、大井、天龍、龍田、響、睦月、如月、吹雪だった。いや多すぎ……。

拓海「うわ……めっちゃいる!？」

金剛「あつきー、この人達があつきーの友達デスカ？」

秋人「そうそう、右から拓海、良、時音だ!」

拓海「拓海です。よろしくお願いします」ペコリ

良「良だ!よろしく!」

時音「時音だよ、よろしくね!」

拓海達はそれぞれみんなに挨拶した。

吹雪「私は吹雪です、よろしくお願いします!」

睦月「私は睦月です!」

吹雪「……?時音さん、なんだか時雨ちゃんに似てるような……あと名前も」

言われてみれば、確かに似てるな。いや、てか似過ぎだろ!?普通に「僕たちは双子です!」って言っても十分通用するレベルだぞこれ!?

睦月「あ、確かに!!」

時音「やっぱりボクと時雨は似てるんだね——えーと、隣の人は?」

如月「あ、そうだったわね、私は如月よ、よろしくね。——確かに時雨ちゃんが髪を切ったら瓜二つになるわね」

時音「けどボクは男だよ?」

天龍「嘘だろ!?!お前男なのか!?!」

龍田「天龍ちゃんも時音さんには言えないわよ、天龍ちゃんの性格も完全に男の人だもの。——あ、ちなみに私は龍田よ、よろしくね」

天龍「そ、それは……／＼／＼」

響「やあ良、さつきぶりだね」

良「げ……銀髪……」

響「酷いね、私にはちゃんと響という名前があるのに」

良「うっせ、俺を縄でぐるぐる巻きにしたやつがよく言うぜ。お前とだけはなぜか仲

良くなれなそうだ」(?+?)

響「奇遇だね、私もなんだよ」

良「おーそりや良かったーねー(棒)」

いつのまにか良と響は軽い言い合いになっていた。良のやついつ響とこんなに話せるように且つ仲悪く?なってるんだ?

北上「まあまあ喧嘩もほどほどにね。ーーあ、ちなみに私は北上だよよろしくね」

大井「私は大井と言います。いくら秋人さんの友達といっても北上様に手を出すなら私が許しませんから」

赤城「学校での秋人はどんな感じでしたか？」

良・拓海「ただの身体能力おぼけ」

秋人「お、い、!!」

良「そんで見えないところでモテてたし！」

拓海「サッカー部の次期キャプテン候補だったな」

時音「けどやっぱりーりー」

拓海・良・時音「身体能力おぼけ（だね）だな…」

秋人「もう良いって!!何回言うんだよ…!」

赤城「なるほど!ー!ー!ふふ、秋人にもちやんと信用できる友達ができて良かったです」

母さんはそう言って俺の頭を撫でた。てか拓海達がいる前でそう言うのやめてほしいだけど…めつちや恥ずかしい…／＼

秋人「ちよつ…母さん今撫でるのやめろ…恥ずかしいから…／＼」

赤城「ふふ、良いじゃないですか」

良「お、秋人が照れてやんのく、こりや滅多にみないから一枚ー!ー!」

秋人「良あとで表に出ろ……」

良「じよ、冗談だつて……」(ωω;)

そのあと皆んなに改めて食堂で拓海達を紹介してご飯パーティーにした。その間拓海達は皆んなからかなりの質問責めにあつていた。等の女好きの良は可愛い女の子、特に第六駆逐艦たちに囲まれてかなり幸せだったらしく、顔がすごく緩んでいた。今にも襲いそうで怖いな……その時は全力で締め上げるけど。拓海については相変わらず人気だった。時音に関しては違和感なく皆んなに馴染んでいた。見た目が時雨に似てるからもある。パーティーはかなり盛り上がった。

拓海「すいません、ちよつと席外しても良いですか？」

陸奥「どうしたの？」

拓海「ちよつと外の空気を吸ってきます」

陸奥「ええ、分かったわ」

side out 秋人

side 拓海

パーティーから少し抜け出して俺は外に出て暗い海を眺めていた。理由は考え事だ。俺はいつも考え事をするときは、必ず誰もいないところで一人になって考え事をする。そっちの方が気が散らなくていいから。今は秋人の高校復帰について考えている。

秋人はこつちに戻ってくる事はあるのか？ 大体俺はまだ、いきなり友達を提督にされた事にまだ完全に納得していない。確かに今、提督不足なのも十分理解している。けど一般人から、ましてや高校生が提督するというのは話は別だし、俺たちは友達を無理矢理奪われた側だ。文句の1つぐらいはあるだろう？ 秋人が高校を辞めてすぐぐらいは俺も流石にキレて海軍のトップがいる所に乗り込んで抗議しに行こうと思っただけな。良や時音に全力で止められたけど……笑。……どうすつかなく……ホント。

……考えても仕方ないか……。

それに秋人の鎮守府の雰囲気のみで分かった。あの場所には秋人は必要だし、今更決まった事にこれ以上言えないし。何より今のあの空間を俺たちが潰したらいけない。

拓海「……って……これじゃあどつちが被害者か分かんねーじゃん……笑」

秋人「何一人で暗い海を見てんだよ拓海」

拓海「秋人…!？」

まさかのご本人登場とか…どんなけタイミングが良いんだよ。これはアレか？物語でよくあるテンプレ展開ってやつか?!別にそんな仕様はいらなかったんだけど…普通に1人で考え事して1人で自己解決させてくださいよ神様…。

拓海「別に、ただ海を見てただけだよ」

秋人「ダウト、またあの時みたいに考え事だろ?」

拓海「…分かってんじゃねーか(苦笑)」

秋人「で、何を悩んでたんだ?話ぐらいは聞くぞ親友」

マジでなんでもお見通しかよ、さすが親友。まあこの際秋人に良や時音の本音を代弁していうか。

拓海「じゃあ単刀直入に。秋人、また学校に戻る気はないか?」

秋人「は?」

拓海「無理なのも承知の上だ。だけどこればかりは直接秋人に言いたかった。俺も

そうだけど良や時音もちろん、サッカー部のみんなだってお前の帰りを信じて待ってる。それに秋人の帰りを一番に待ってるのは時音なんだ。だから頼む、来年でも卒業前でもいい、帰ってきてくれッ!!お前がいたおかげでサッカー部も全国制覇を成し遂げられたし、また1年のときみたいに4人でバカやりたいッ!!」

俺は秋人にこれ以上の無いぐらい全力で頭を下げてください。

秋人「—————確かにそうだよな……」

拓海「て事は—————」

秋人「けど悪い、多分そっちにはもう戻らないと思う。確かに拓海達、いや大切なチムメイトが信じて待ってくれてるのは嬉しい。けど今の艦娘たちをほっとくわけにはいか無いんだよ。まだ俺が艦娘達を守らないといかねーし!それにやると決めた以上は俺が納得するまで止めることが出来ない。これは俺の覚悟だ!」

秋人は真剣に俺を見つめてそう言った。—————はあ……やっぱ秋人は秋人だ。正直秋人がこの仕事を中途半端な気持ちでやってたら俺は意地でも連れて帰ってた。

拓海「ー！ー！やつぱり、お願いしても無駄かあ。けど良かったよ、お前がそうやって本気でやってて！正直中途半端に提督やってたら、俺は問答無用で引きずってでも一緒に帰ってたから」

秋人「はあ!?マジかよ…」

拓海「俺もその覚悟で来たし。まあその覚悟も消えたし俺の気持ちもスッキリしたわ」

俺は背伸びしながら秋人に告げる。

秋人「そっか…!」

拓海「秋人もー!ー!」

良「おい、何俺たちを無視してイケメン2人で話してんだよ!俺たちも混ぜろ、寂しいじゃねーか!!」

時音「や、ヤッホ!」

俺が「頑張れよ」と言う前に良が思いっきり声を上げてこつちに歩いてきた。その横には時音もいた。

秋人「イケメンは余計だろ：で、どうしたんだよ？」

良「お前ら2人が話してから俺たちも来たんだよ！つたく。ー！ー！秋人、俺は10年先になるうが20年先になるうが待つてるからな！絶対俺たちの場所に戻ってこいよ！」

時音「ボクも、秋人選んだ道ならもう何も言わないよ！それが一番大切だからね！だから約束して、次戻ってきたらもう勝手に離れないって！」

秋人「分かった、約束だ時音！」

秋人はそう言つて時音の頭をワシヤワシヤと撫でた。

拓海「て事で秋人、俺たち親友からの約束だ。絶対に提督業を最後までやり通せ！そんでお前が納得したらこっちに戻ってこい！！その時まで俺たちはずっと待つてるから馬鹿野郎が！！」

秋人「はッ！当たり前じゃねーか馬鹿野郎が！」

良「んじゃ戻つて早く風呂にはいろくぜ〜！」

拓海「だな」

こうして俺たちは納得して話は終わった

「……………」と思ったが。

秋人「……………」あのさ、お前らに隠してたことがあるんだけど」

3人「……………」

突然の秋人の言葉によつてまた話は始まるのだった。

side out 拓海

side 秋人

納得して話は終わったけど、俺は拓海達を呼び止めた。理由は俺の本当の姿を見せるためだ。別に隠し続けるのもいいと思った。けど、拓海達にはどうしても見せなきやいけないと、そう感じた。

良「いきなり何だよ…隠し事って？」

秋人「俺の本当の姿をみんなに見せたいんだ。拓海達には本当の俺を見てほしいから」

拓海「どういう事だ？」

秋人「それはすぐに分かる……」

俺は力を解放し、矢倉と戦った時の深海棲艦の姿に変えた。そのせいで性格も変わる。

3人「ツツ……!!」

秋人「これが俺の本当の姿だ……今までの姿は俺が力を抑えていた状態だった」

良「……………つ、つまりどういうこっちゃ……………?」

秋人「俺は艦娘と人間のハーフで且つ人類が恐怖してる、深海棲艦の力も持つてるって事だ」

3人「ツツ……………!!」

拓海達は固まった。そりやそうだ、艦娘と人間のハーフと言い、深海棲艦の力も持つてるといえば誰だつて固まるに決まつてる。それに怖がられる事だつて容易にある。

秋人「今まで黙つてて悪い…」

3人「……」

3人は相変わらず固まる続けてる。まあ怖がられて、嫌われるのは覚悟の上だから別にいい。

秋人「これを見て俺を嫌いに……」

拓海「何だよ隠し事つてそんなことか」(・|・)

時音「もつと凄いかと思つたよね」(。|△)

良「すつげええええええええええ!!!!何だよ秋人その恰好!!クソかつこいいじゃん!!」(○

(*。▽。*。○))

秋人「……は？」

予想もしない反応だったので俺は思わず声を出した。

良「だから普通にかっこいいぞ秋人!!目が赤くなってツノが生えて肌も若干白くなって雰囲気もなんか大人っぽくなってるしよッ!!」

秋人「この姿が怖くないのか?」

良「全然怖くねーよ!何?秋人は俺たちにその姿を見せたらビビると思ったのか?ンなわけねーだろ笑。お前も心配性だなあ」

秋人「あ?」

良「ちよ:待ってって!冗談冗談!」

時音「良の言う通りだよ秋人!びっくりはしたけど全然怖くないよ。ボクからしたら『やっぱり!』って言う感じかな?だつて初めて会った時から何となくみんなと違う感じがて出たもん。ボクには分かるよ!ー!ー!ーそれにそっちの姿の方がボクは好きかな:~/」

秋人「時音:」

拓海「お前が身体能力おぼけな理由も、怒った時の異質なオーラもコレが原因ということが、今のでようやく繋がったわ。それにさ秋人、俺たちは1年ちよつとしかいなかったけど、その少ない時間の中でどれだけ一緒にいたと思ってるんだ?何かあったらいつも一緒にいただろ!お前が提督になってもメールグループは抜けなかったし、縁も切

らなかつた。それぐらい俺たちを信用してたんだろ？だから俺たち3人はお前が提督になろうとも、格好が変わろうとも性格が変わろうとも絶対にお前を、秋人を裏切らねーよ！」

拓海は微笑みながらそう言った。それと同時に時音と良も笑った。――何だよ……これだつたらずつと隠し続けていた俺が馬鹿みたいだ……。あれ――――目が熱い……？

良「うわあッ!?ちよつ……秋人何泣いてんだよッッ!？」

秋人「ツツ!？」

どうやら俺は無意識のうちに涙を流していたようだ。多分これは心が安心して勝手に出たんだと思う。

秋人「……泣いてない……気のせいだ」

時音「安心したんだね!これでようやく本当の友達だね秋人!」

秋人「――――ああ……そうだな……!」

「……………俺は初めてあつた日から今日まで、この仲間を信じられなくなった日は一度もなかった」

秋人「あとみんな……………」

「……………だから俺はみんなに伝える、今の姿じゃ言葉にするのは恥ずかしいけど」

秋人「俺はみんなに…出会えて、本当に良かった…:…!」

「……………大切な仲間だから。そして俺は笑顔で拓海達の肩を組みに行つた。それにつられて拓海達も一緒になって笑いあつた。」

秋人「ありがとな…:…!」

—————

赤城「秋人は本当にお友達を見つけましたね、頼長さん…♪」

頼長「己の絆の為に、無理でも俺と挑もうとしたやつだ。アイツらだったら本当の秋人を受け止められるのは当然だろう…」

赤城「ふふ、素直じゃないですね頼長さん。泣いているのがバレバレですよ♪」

頼長「泣いてない、目にゴミが入っただけだ…いい友達を持ったな…
秋人…」

—————

良「しやああああああ!!!早く戻って風呂はおろそおおお!!!」

拓海「良…お前風呂好きすぎだろ…」

秋人「ふ…良も変わらないな…」

時音「まあ良だからね〜」(?▽?)

時雨「…」

響「行こうか時雨」

時雨「うん…」良かったね、秋人…!」

47話 夏の夜のお風呂 With 時音

side 時雨

僕は響と一緒に秋人たちの話をこっそり見ていた。そして思ったのが拓海達は本当に良い人だった事と、少し申し訳ない事をしたという罪悪感だった。多分僕は拓海達に謝らなければいけない、友達だった秋人を勝手に提督にさせてしまったから。どんな形であれ僕達は秋人を間接的に奪ってしまった形になる。

時雨「なんだか複雑な気持ちだね……」

響「あれをみた後なんだ、そう思うのも仕方ないさ」

時雨「うん……とりあえず明日は拓海達に謝ろう。間接的だけど僕達も拓海達に申し訳ない事をしたから」

響「そうだね……時雨、いい時間だし入渠ドックに行こうか」

時雨「そうだね！」

さんに言ってこれとおんなじお風呂に変えてもらおうかな。———そんなどうでも良い事を思っていた時、いきなりそれは起こった。

ガラガラ———

時音「———ツツ!!」

突然お風呂のドアが開いた。って…なんでドアが…!?この時間は誰も入ってこないはずなのに!?!ボクは焦る。——— 一体誰が入ってくるの!!入ってきたのは

響「やっぱり時雨は改二になってから身体が(女性的に)成長したね」

時雨「恥ずかしいから、余計な事を言わないでくれるかい響:〃〃〃」

時雨と確か響だったかな? つじやなくて!なんで2人はこんなに時間に!?!もう艦娘さんは早めに入っていたはずなのに…もしかしてまだ入ってなかったの!?!…:…どうしよう…:…なんとしてでもバレないようにしなきゃ!

いるみたいだね……。まあ胸もないし、股部の部分だけタオルで隠していれば普通はそうそう女の子だなんてバレることはないよね。だけどボクは知っている、響だけはそんな小細工は通じないという事を……彼女だけは常に警戒しないといけないね……。少し演技でもしようかな。

時音「それより時間を改めなくて良いの？……／＼男のボクが入ってるのに……／＼」

響「大丈夫さ。たまに秋人一緒に入っていたし、なれてるよ」

時音「そ、そうなんだ……／＼」

時雨「うん。それに時音は見た目が少し女の子みたいだからまだ大丈夫だよ。——けど、秋人以外の男の人と入るのは初めてだね……／＼」

時音「じゃあボクはすぐに身体を洗って先に出るよ。気まづくさせるのも悪いし！」

そうしてボクは先にお湯から出て身体を洗いに行った。もちろんタオルで股部を隠した状態で、プラス響を警戒しつつ。はあ……気を張り続けるのもしんどいね……。

響「なら私も先に身体を洗おう」

ほら来たよ！これが響の怖いところーつだ、何を考えてるのかボクには読めない…。

響「隣失礼するよ」

時音「う、うん…。別にボクの隣じゃなくてもいいんじや…」

響「こういうのは隣に行くからいいのさ。それに時音に確かめたいことがあるし」

時音「確かめたい事…?」

何か嫌な予感がする……。

響「君、女の子だろう?」

時音「……………君のような勘のいいガキは嫌いだよ…」

いきなり直球ストレートの質問が来た。ボクは逆に冷静になる。

時音「……………いつから知ってたの…? / /」

響「君と初めて会った時からだよ。むしろなんでみんな気づかないのか知りたいぐら

いゃ」

もう最初から気づいてたみたいじゃないか!!! まさか響がここまで勘が鋭いとは……いや違うね、むしろ響だからこそだね……

時音 「やっぱり響には敵わないよ……」

響 「大丈夫さ、私が時音の秘密を知ったところで別に広めるつもりはないし、秋人に言うつもりもない。それに私は安心したよ」

時音 「どうして？」

響 「こんな女の子のような身体のラインで男だなんてそっちの方がおかしいからね。

『胸』はないけど」

時音 「ねえ響、それボクをからかっているの？それとも侮辱しているの？」

響 「……冗談だよ」

時雨 「2人ともさつきから何を話しているんだい？」

響 「時音の秘密の事さ」

時音 「響ツツ!?!」

やっぱりこの子は油断できない。これももうボク怒ってもいいかな？良いよね！

時雨「どう言うことだい響?」

時雨も気になってこつちに向かってくる。いや、来なくていいよ時雨ツ!!

響「それは時音が教えてくれるんだよ」

時音「言わないよ響ツ!」

響「それは困ったね……」

時雨「……?」

響「なら時雨、今から時音の身体に触れていったら秘密がわかるさ」

時雨「え……?」

時音「ツ!?!?!?!響、要らないことを言っちゃダメ:!!?!?!」

もう嫌だよこの人……誰か助けてえええ!!

時雨「いや、辞めておくよ響……時音も嫌がつてるみたいだし……」

時音「良かった……」

そして時雨は身体を洗いに移動していった。————これはもう響にお仕置きの必要みたいだね…。

響「それは残念だ」

時音「————ひくびくきい…？よくもボクの秘密を知ってるからって弄んでくれたね…？」

響「弄んではないさ、ただからかっただけなんだよ」

時音「一緒だよツ!!————君にはお仕置きの必要みたいだ…」

響「お仕置き？言っておくけど私にはある程度のお仕置きなんて慣れてるから効かないよ…」

時音「フッフッフ…それはどうかな!!」

ボクは身体を洗っている最中の響に、背中を指で当ててそのままぞるように動かした。

響「ツツツ!?…／／／／」

その瞬間響は、身体をビクッ!とさせて止まった。やっぱり響は背中が弱いのか…!
!これは面白くなってくるね!

時音「どうしたのさ響〜?急にビクッ!つてなつて〜?ボクはただ背中を触っただけだよ〜?」

ボクはそのまま背中を指でなぞっていくのを続ける。

響「べ、別に…////なんでもない…//////」

時音「もしかして響、背中弱い〜?」(?▽?)

響「よ…弱くなんか…//////」

時音「じゃあコレはどうかなあ〜」

今度は首を指でなぞった。

響「ん…//////や…やめ…//////」

首も弱いことが発覚！そのせいか響の身体はビクビクしている。可愛いね♪もつといじめちやおうか♪ボクは響の耳に息を吹きかける。

響「ふああ……／＼／＼／＼……あ……／＼／＼／＼」

時音「響の身体は敏感なんだね♪」

響「ツツツ……!!／＼／＼／＼」

響は理性を取り戻してボクから距離をとった。ボクの身体いじりから自力で!?すごいメンタルだね……!

時音「……なるほど、まさかボクの身体いじりから自力で抜け出せるなんて君が初めてだよ……」

響「はあ……はあ……／＼／＼／＼危ないところだった……／＼／＼不死鳥の名は伊達じゃない……／＼」

時音「すごいメンタルだね。今日のところはコレで終わりにするね。いい収穫もあったし！」

ボクは時雨にだけ、女の子を隠してる理由を話した。

時雨「————なるほど、時音の家庭も複雑なんだね……。分かった、時音の為に秋人達には黙っておくよ。それと、これからも時音を男の人として僕は頑張つて接するようにするから！」

時音「ありがとう時雨！やっぱり時雨は優しいね」

時雨「照れるじゃないか：／／————そろそろ上がるるか時音」

時音「そうだね！」

ボク達はお湯から上がつてお風呂から出た。

時雨「じゃあ僕はこのまま部屋で髪を乾かすら、先に失礼するよ」

時音「うん、ボクはここで髪を乾かすから、おやすみ時雨！」

時雨「うん、おやすみ時音！」

—————

それからボクは下着とノースリーブシャツの格好で髪を乾かしていた。服を着ない理由としては暑からである。いくら夜といつても、もう夏で且つお風呂上がりだからだ。多分みんなは下着の柄とか想像しているんだろうな……君達の変態だよ！お巡りさんに捕まったらいいんだ!!そんな誰に向かつていつてるのかわからない事を考えていると、第2の重大な事件が起きる。

良「忘れものゝがあります。ここ←にありますねえ！お、忘れものを発見！やりますねえ！いいよ来いよ俺のイヤホン」

脱衣所に良が入って来た。なんだ、誰かと思つたら良か、しかもどこかで聞いたことのあるような独り言を言つて。だけど、この時ボクは忘れていたのだ今の格好を—————

時音「あ、良どうしたの？」

良「お、時音か。いやあーねーイヤホンをここに忘れ—————」

逃げて来た。どうも皆さん良です！俺視点で話すのが初めてで実際すげーテンションが上がっています！ー！ー！ーじゃねえんだよツツツ！！俺は今絶対見ているいけない光景を目の当たりにしたんだ！！アレは絶対見間違いないじゃねえ……！！！！

良「時音が……女!?!」

あ……ありのまま今起こった事を話すぜ！「おれは忘れものをしたから脱衣所に行ったから、そこに髪を乾かしてる完全に女の子の服を着ていない時の、シャツと下着姿をした時音がいた」な……何を言っているのかわからねーと思うが おれも何が起きたのかわからなかった……頭がどうにかなりそうだった……催眠術だとか幻覚だとかそんなチャチなもんじゃあ断じてねえ……もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぜ……。

良「勘弁してくれよお……俺これから時音とどう接すりゃいいんだよ……」

確かに時音が女の子だったのは嬉しかった。いやその時点でおかしいんだけどよ!!でも今までずっと男だと思つて過ごして来たじゃん?だからこれから俺は時音が女の子という事実を知った上で付き合つていけないといけない……はつきり行つて無理

じゃね?だって俺男だと思って下ネタとか変態発言してたわけじゃん?絶対軽蔑して
るだろ!!!このキャラでやってきたから仕方ねえけど!!

良「ああ……胃が痛い……先が思いや割れるわあ……」

それにこれ多分家族がらみで秘密にしてたわけだろ?それを俺知っちゃった訳だし、
俺社会的に死んだな……。

良「おふくろ、親父……今までありがとう……楽しかったぜ」

俺は涙を垂らしながら、全てを覚悟して言った。だが——

時音「勝手に終わらさないでくれるかな、良……」

——誰かが俺の言葉に返答したのだ。それが誰なのか、声のする方へ振り向くと時
音だった。

良「ときー……ツツツ!!／／／／」

だが俺はアレをみた後だったせいで、まともに時音の顔を見れずに、顔をそらした。

時音「やつぱり分かったんだね……」

良「じゃあ……お前やつぱり女なのか……?／／／／」

俺は時音をそらしながら何とか口を開く。

時音「そうだよ……／／／ボクは本当は女の子なんだ……／／でもみんなを騙すつもりなんてなかったんだ!これには理由があるから……」

良「理由……?」

時音「うん。でもまだ言えないんだ……。でも、絶対にいつか秋人達には言うから……!!
それまで良にはまだ黙っててほしい!!お願いッ何でもするからツツ!!」

時音は必死に俺に頭を下げて訴えた。ん?今何でもするつて? (なんでもするとは言っていない) ……ってかここまで覚悟を持たれたら俺も裏切れねえよな……。

良「分かった。秋人達には黙ってるわ！あと、なんでもするってドユコト？」

時音「——それはほら……良が望むこと全てだよ……／＼／＼／＼え……えつちなこととか……／＼／＼大丈夫両親には絶対黙っておくから……／＼」

こ、この子いい子すぎなんちやいますツ！（唐突の関西弁）——てか馬鹿じゃね？いくら変態でも俺はそんな趣味ねーよ……。変態キャラだからこそ中身は紳士なんだ！！

良「馬鹿野郎……そんなすぐ自分の身体を犠牲にすんじゃないやねえ……もつと大切に使え！あと、俺はそんな秘密を盾に命令する趣味はねーし、そう言うのもする趣味はねえよ！あくまでそう言うキャラだからな！勘違いすんな！」

俺は時音にデコピンした。

時音「痛ツ……——初耳だよ、まさか良がそういうキャラを演じてるなんて……コレはボクも良の秘密を知ったかな？いい意味で！」

良「そうみたいだな……それに時音に手を出してもなんらかで絶対バレる……あの人の情報量半端無いから……」

時音「あ……確かに……」（…う？▽？）

良「……なんだか案外時音が女って分かってても普通にいけそうだわ！喋るといつも感じだし」

時音「確かにそうだね！じゃあ改めて、お互いの秘密を知っている同士、よろしくね！」

良「おお、こちらこそ！」

こうして俺と時音はお互いの寝る部屋へ向かった。ちなみに俺の寝る部屋は電ちゃんと雷ちゃんときゃんと銀髪がいる部屋だ！よおおおし！れでいちゃんを抱きしめながらねるぞおく♡ぐへへ♡♡

響「……何か汚らわしいオーラを感じたんだよ」

48話 いつもの騒がしい朝

6:00

携帯のアラーム音とともに俺は目を覚ます。目覚めはまあ良かった。

秋人「さ、今日も始めるか」

俺は恒例の日課をするために着替えて外へと向かった。外に出るといつものようにみんながいる。今日は吹雪、睦月、如月、金剛、比叡だけか…？

睦月「あ、秋人さんおはようございます！」

睦月は俺に気づいてこつちに来た。なんか妙にご機嫌な気がするのはいのせい？

秋人「おはよう睦月。今日はこんだけか？」

吹雪「多分もうそろそろくると思えますよ？」

良「なんで俺まで行くんだよ銀髪！俺は電ちゃん達とまだ寝たかったのに！」

響「煩いんだよ変態。黙って私の言うことを聞いていれば良いさ」

良「あつそ。てかなんで銀髪そんなに機嫌がいいんだ？」

響「……………何のことかわからないな」↑じつは凶星

吹雪が言い終わってすぐに響と良が来た。てか何で良!?響はわかるけど…しかも2人って仲悪かった?よな…どう言う経緯でこうなった?

秋人「おはよう良、響」

良「うおつ!!秋人ツ!?なんだよ銀髪そう言うことか…」

響「やつと分かったみたいだね」

秋人「てか良はどう言う経緯で響と来たんだよ…」

良「眺ちゃんと寝てたら無理矢理起こされて無理矢理連れてこられた」

秋人「その前に何で眺と寝てたか理由を聞こうか…」

良「ちよッ…:ちよつと待て!!これは誤解だッ!寝る場所探してたら電ちゃんから声をかけて来てくれてそれで一緒に寝たんだよッ!!マジで電ちゃん達にやらしい事なんて俺は一切してないからなッ!!!」

響「秋人、変態の言うことは本当だよ。昨日一日中警戒状態で変態を観察してたけど、一切曉達には手を出していなかった。一緒に寝た以外は」

秋人「マジか…」

響「ただ一つ一つの発言に対してはセクハラ級だけどね」

秋人「よし良、お前後で集合な」

これに関しては仕方ない。ちよつとばかり良には痛い目を見ないと反省しないからな。響も響で良の扱いをよく分かってんな…流石人間観察に特化した艦娘…。※ただし内の鎮守府の響に限る。

良「はあ!?!結局ですか秋人さんツ!!————銀髪、てめえは俺を怒らせた」

響「ざまあーだね」ピース

秋人「じゃあ早速行くぞ」

夕立「わあああ!!ちよつと待つつばい!!」

俺たちが日課を始めようとした時、夕立、時雨、時音が遅れてやってきた。あくやっばり時音も来るんだな。

時音「危なかつたね…」

時雨「全く…夕立がなかなか起きないから…」

夕立「もおお…それについてはずっと謝ってるっぼいいい…!」

遅刻の原因は夕立の寝坊にあるようだ。

時音「だからボクはそのまま起こさず行こうって言ったのに…」

時雨「その考えは確かにあったけど、僕は夕立と一緒にしたかったから」

夕立「っぼい!?!/ /」

時雨「だけど寝坊はいけないよ。だから罰として今日はハグ禁止だよ夕立」

夕立「ぼいッ!!?」

時音「あはは…」

時雨達は仲良く話していた。——あの3人も良いなく、なんかしつくりくる。多分時音が時雨ににてるからだな。今度こそ行くか——俺は集まったメンバーを連れて俺の日課を始めた。

side out 秋人

side 北上

どうもくやつと私の出番が来た北上だよ。もうすぐ待ったよ、私空気がやない？ つてぐらい影が消えてたし。まあそんな愚痴は置いといて、私はふと目が覚めたから、何もなしに廊下を歩いているよ。え？ 秋人つちの日課に行けば良かったって？ 起きた頃にはもういいなかつたんだよね。大井つちをむりに起こすわけにもいかな
いじゃん…？

北上「なんか面白いことないかな」

私がそう独り言を言った時、食堂で誰かが寝ているのを発見した。お、早速発見だね！ 誰が寝てるのかな？ 私は寝てる誰かを確認しに行った。——寝ていた人はまさかの秋人つちの友達だった。これは逆にびっくりだよ！ いやでもそもそもここで寝てる時点でおかしいよね。——それにしても顔は全く違うのに雰囲気はなぜ

か秋人つちに似てる。それに秋人つちとは違ったかつこよさもあるね。うん、提督はみんなこんな感じだったらわたし達艦娘は文句ないのに。それよりこの体勢で寝るのは身体に悪いから起こさないよ。

北上「おーい、起きろ」

拓海「……zzz」

北上「おろい、朝だよ」

拓海「ん……zzz」

なかなか起きないや……どうしようかなあ。思いつきり驚かしたら起きるかも。私は早速、単装砲だけを出して秋人の友達に向けて一言。

北上「ね、起きないと撃つよ？」

拓海「……ッ!？」

おお。起きた起きた！これは成功だね。

拓海「あの……こ……これはどういう状況つか……？俺なんかしました？めっちゃ怖いんですけど……」

秋人「うちの友達に身体を伏せたまま冷や汗をかきながら両手を上げていった。うん、ドツキリにしては良い反応だよ。あ、向こうは何も知らないまま銃口を近距離で向けられてるようなものだから普通はこういう反応が正しいか。」

北上「あゝごめんごめん！そんなところで寝てたからつい起こしちやったよお」

拓海「もつと別の起こし方とかあったでしょ!？」

北上「いや、私も君を2回ぐらい普通に起こしたよ、だけど君が起きないから脅かして起こそうと思ってね」

まあこれだけで起きたから全然良かったけど。もし起きなかつたら空撃してたところだし。

拓海「ああ……そうすか……」

北上「それより君の名前はえーつと……」

拓海「拓海です…」

ああ〜そうだ、拓海だ！改めて聞くと結構良い名前だよ〜拓海〜。本当に普通な感じのイケメンだし。はあ…世の中の男の子全員こんな感じだったら良いのにな〜。あ、さつきと似たようなことをつい…。

北上「そうそう拓海君だ〜！それはそうとなんで拓海君はそんなところで寝てたの？
明らかに姿勢に悪いけど〜」

拓海「ああ…それはですね…」

〜拓海説明中〜

拓海「………」

話を聞くと、どうやら拓海たちは赤城さんの部屋で寝ていたらしい。だけど急に赤城さんが抱きついてきたり、秋人のお父さんが入ってきたり、それを止めようと加賀さんが暴れたりして、部屋で気持ちよく眠れなかったため仕方なく一時的にここで寝る羽目に

なつたみたい。

北上「なるほど、拓海つちも災難だったね」

拓海「ほんと大変つすよ……危うく死を悟りかけましたから……って、拓海つち？」

北上「ああ、私なりのあだ名だよ。なんか呼びやすかったし。たくつちの方が良かった？」

拓海「それはマズイ」

北上「ええ。じゃあたつくー？」

拓海「さらにマズイわ!!!————普通に拓海つちで良いですよ……」

ええ……たつくー、たくつちの何がいけなかったんだろ？別に私は良いあだ名だと思うんだけど。

北上「しようがないな。あ、思ったんだけどさ、別に敬語で話さなくても良いよ。私堅苦しいの嫌だし」

拓海「北上さんが良いなら遠慮なく。————で、北上さんは何でここに？」

北上「あ、私はちよつと早く起きすぎてね。何もすることがなくて適当に通路を歩

いてたら拓海つちを見つけてね〜」

拓海「あーなるなる。ーーーんじやどうする？何もすることなかったら話相手になるけど」

北上「おお〜良いね〜！」

こうして私は拓海つちと話をしてみんなが起きるまでの時間を潰した。

side out 北上

side 加賀

初めまして加賀です。私は今変質者の後処理頼長さんを考えているところです。何故このようになったかと言うと、目を覚ますと頼長さんが赤城さんを連れ去ろうとしていたからです。その時の赤城さんの格好は下着姿でした。その状態で連れ去るもんですから私は早急に変質者を叩きのめしました。その結果、一緒に寝ていた拓海さんと赤城さんも起きてしまい事態はパニック状態となつて拓海さんはうるさいからねれないと言つて部屋から出て行つてしまいました。結局残つたのは、気絶した変質者と下着姿の赤城

さんと私です。ーとにかく私は怒ってます。

加賀「とりあえずこの変質者は一度轟沈するべきです……!」

赤城「ま、待って下さい!!それは流石にやりすぎですよ加賀さん!(汗)」

加賀「何故ですか?」

赤城さんとの大切な時間を邪魔された挙句、拓海さんも出て行ってしまった。これはもう私の手で楽にするしか方法はないのだけれど?

赤城「い、一応こんな人でも私の夫ですので……」

ブチッー

何故か赤城さんからのその一言で余計に頭にきました。ーこれは嫉妬じゃないわ。ええ…決して嫉妬じゃないわ。

加賀「そうですか。なら、なおさら引けません」

赤城「ダメですよッ!!」

加賀「いくら赤城さんでもここは譲れません。いくら夫でも私の前で赤城さんをこんな姿にしてただで済むとーーーー」

赤城「そ、それは誤解ですよ!!」

加賀「ーーーーえ？」

赤城「じ…実は…ーーーー」

く赤城説明中く

赤城「ーーーーそうことなんです…」

加賀「」

赤城さんの話を聞くと、赤城の下着姿は赤城さん自身がした事らしい。嘘…まさか赤城さん自らだつてなんて…。私が固まっていると赤城さんはさらなる追い討ちとなるものを私に告げる。

赤城「私は基本この格好で寝るんです。加賀さんが私の着替えを見てるときは寝着物を着ますが…それでも加賀さんが先に寝ている時は寝着物は着ません」

そんな馬鹿な……私が寝ている時だけ……。これはこれは駄目ね。

加賀「そう……私が先に寝ている時に赤城さんは……」

赤城「今まで黙っていてすいませー……」

赤城さんが何かを最後までいい終わり前に私は、ふと口が勝手に動いた。

加賀「何故私の前ではしないのですか？」

赤城「……へ？」

加賀「何故私の前ででも、その姿で寝ないのですかと言っているんです。私は別に赤城さんがよほどな姿にならないかぎり動じません」

赤城「加賀さー……」

加賀「だつてそうでしょう。私が先に寝ている時だけ本来の赤城さんのはずなのに、それを見ることができないのは同じ一航戦としておかしいです。それに私は赤城さんのその綺麗なボディ、スタイル、肌の色、e t c…をずっと見ていたいです」

いけない、つい赤城さんに対しての感情を———それでも私はやめませんが。

赤城「か、加賀さんッ!？」

加賀「私はどんな赤城さんも受け入れるつもりです。いや、もつと赤城さんの秘密を私に教えてください。ああ、赤城さんすごく綺麗です。流星に気分が高揚してききました」

赤城「加賀さんッ!?!落ち着いてくださいッ!?!怖いですッ!!目がすごく怖いですッ!?!」

加賀「別に何もかわらないのだけれど?———それより、もういいですか?」

赤城「な、何を……? / /」

加賀「この人の処理です。とりあえず縄で吊り下げるので手伝ってください」

赤城「あ……ああ……分かりました…… / /」

—————

今日も彼ら彼女らの朝は騒がしい。

49話 別れに伝える気持ち

拓海「じゃあ俺たちはもう行くから」

秋人「ああ」

騒がしかった朝の後、拓海達は艦娘のみんなと親睦を深めた。出撃訓練を見学したり、地上でのトレーニングと一緒にしたりとかなり仲良くなれたと思う。だが何故良は電や響のメンバーに好かれているのかが未だに分からない：良曰く「別になんもしねえよ。ただちよつと話を聴いただけ」と言つて真面目に答えてくれなかった。まあいいや。そして現在、俺は拓海達を見送っている。

良「じゃあな秋人！次会うときは夏休みだぜ!!」

時音「またね秋人！」

秋人「おう！またな良、時音！」

やっぱり時間が経つのが早く感じるな。もうちよつとだけ拓海達と一緒に居たかつ

た。だけど仕方ない、これは俺が選んだ道だから。そして俺が納得するまで絶対に提督を辞めたくない。

時雨 「またね時音」

秋人 「うおッ!? 時雨いつから!? ーーーってかみんなも!?!」

時雨だけじゃなく他の艦娘たちもが拓海達の見送りに来ていた。たった2日でここまで仲良くするとか…すげーな…流石俺の最高の友達だ!

暁 「見送りぐらい別にいいでしょ秋兄」

金剛 「そうですヨあつきー!」

電 「また来てください良さん!」

雷 「私達待つてるから!」

良 「おう! 今度来るときは違うゲームを持つてくるかな!」

響 「次来たらまた全力で縛り上げてあげるよ良」

良 「そんな時はお前の弱点の耳をいじってやるから覚悟しとけ銀髪」

相変わらず良と響は仲がいいのか悪いのか分からないな……。まあ仲がいいことを俺は願っておく。

加賀「拓海さん、また来るのを楽しみにしているわ」

拓海「はい、加賀さん。いろいろとお世話にました」

北上「拓海っち、次会ったらまたいろんな話をしよう。今度は大井っちも一緒にね」

拓海「ああ、その時は俺も楽しみにしとくから————そろそろ行くか」

時音「うん！」

良「だな！」

拓海「じゃあこれで……ちよ……ちよつと待つて……!!」————?」

拓海達が歩き出そうとした時、隣にいた時雨が拓海達を止めた。

拓海「どうした？」

時雨「えつと……どうしても謝りたいことがあるんだ……」

時音「謝りたいこと？」

時雨「うん……。形がどうあれ、僕達は拓海たちから秋人を奪った側なんだ……。だからこっちの勝手な都合だけで秋人を奪ってごめんさいッ!!……………本当は謝って済む問題じゃないのはわかつてる……。だけどー」

拓海「なんだ、そんな事か」

時雨「ー」

良「もう俺達は気にしてねーよ」

時雨「ー」

拓海「確かに、あの日急に秋人がいなくなつて提督をするって聞いた時は、ムカついたし、海軍本部に乗り込んで抗議しに行こうつて思った。今日だつて秋人を連れて帰ろうつて思つてた。だけど秋人の真剣な目を見て、俺は秋人を応援するつて決めた。それここには秋人が必要だつて事をこの二日間ではつきりわかつたし」

良「友達が決めた事を全力で応援して支えるのが本当の友達つてもんだろ？」

時音「だからボクたちも秋人が納得するまでずっと待つてる事にしたんだ!というところで時雨、これからも秋人をよろしくね!」

時雨「時音……………分かつた、僕にまかせて!」

秋人「じゃあなみんな!」

拓海「じゃあな!」

良「おう！」

時音「またね！」

そして拓海達は歩き出し、俺たちは限界まで門の前で見守り続けた。

時雨「……行っちゃったね」

秋人「…そうだな」

北上「なんだかこの2日間だけ凄く短く感じたね」

響「イレギュラーみたいな日だったからね、それに秋人の友達も個性的で面白かったし。特に良がね」

雷「そうね！」

電「なのです！」

金剛「またあの子達と会ってみたいデース」

加賀「大丈夫よ、きっと会えるわ。私はそう信じていますから」

暁「それより、早く戻りましょう。次の作戦についても考えないといけないし」

秋人「だな、みんな戻るぞ」

そして俺たちは鎮守府の中へと戻っていった。

side out 秋人

side 拓海

秋人達と別れて俺たち3人はまた長い一本道を歩いていった。

良『相変わらずなげえよな…(苦笑)』

拓海「仕方ない…」

時音「そうだね…」

やっぱり鎮守府に続くこの長い一本道はなれない…。普段長距離を走ってるけどこれはまた別の話だ。これはあれだ、多分気持ちの面でなれないんだと思う。——と俺がただ一本道について感想を考えている時、時音から「2人とも待って」と言ってる俺と良を止めた。

拓海「時音? どうした?」

時音「さつきからずっと見ているようだけど、まだボク達に用があるの？」

時音はいきなり誰もいない方向に向かって話しかけた。一体時音には何が見えているのか…。

良「ちよつ…おい時音誰に向かってー」

長門「よく私たちがいると分かったな」

良が最後まで言い終わる前に木の陰から長門さんと陸奥さんが出てきた。なんかこれ昨日のデジャヴみたいだな…。ーいや待て。そもそもなんで時音は長門さん達がいるって気づいたんだ？ 凄くね？

時音「まあね。ボクの両親の繋がりでサバイバルゲームをした事があるからね。それに細かい異変には気づくことができるんだ」

良・拓海「はあッ!？」

結論、やっぱり時音はチートだ。ほんともう何でもアリだな雨見財閥…。こんななん

でもアリ財閥だったら、秋人の提督の件も取り消しすること出来たんじゃね？と密かに俺は思う。

時音「それで何の用かな？」

長門「要件か、そうだなー……ツ……秋人の友達でいてくれてありがとう、そしてすまなかつた……！」

いきなり長門さんと陸奥さんが頭を下げて感謝と謝罪の両方をしてきた。これには流石の俺たちも思考がまあ停止するよね。

拓海「え……ちよつ……どういう事つすか……？」

陸奥「貴方達に秋人の本当の姿を見せたと秋人から聞いたわ。それでも貴方達は秋人の友達としていてくれた。だから感謝したかったの。秋人を提督を守る側として」

長門「そして出会ってすぐに秋人の友達である君たちに無礼な事を言った。本来なら謝罪だけでは済まされれない事だと十分わかっている。それでも私は君たちに謝罪したい。本当にすまない!!」

長門さんと陸奥さんは誠心誠意で謝った。それを見て俺はある事を思う。艦娘って結構純なんだなと。いやこんな雰囲気ぶち壊すような事をして悪いとは思ってる。けどさあまりにも純粹すぎるんだよ。だって普通の人間でもここまで自分のした事を真つ当に謝罪するのはいいないぞ…。なんか全ての人間が艦娘さんみたいな性格だと平和でいられるんだけどな…。まあ一人一人考え方や在り方も違うし、これが在るべき形でしかないから仕方ない。そんな事より、これ以上謝られても何だかんだ罪悪感でしかないからなんとかしないと。それに感謝するのは逆に俺たちの方だ……。――。

拓海「――もう俺たちはそんな事気にしてませんから顔を上げてください長門さん。いきなりアポも無しに来た自分達にも非があるのでむしろ謝らなきゃいけないのは自分達の方です…。」

陸奥「拓海君…。」

拓海「それにこここの鎮守府にも何かしら事情があるのも何となく解りましたから。だから秋人以外の普通の人間を警戒するのも別におかしい事じゃないですよ。むしろ感謝するのは自分達の方です、いつも海を守って頂きありがとうございます!!」

陸奥「長門「ツ!?!」」

良「あと、謝る立場なのはむしろこっちの方ですよ…。いつも守られてる側なのに、海

の事や艦娘に対してギャーギャー言ってますから…」

時音「それに艦娘さんたちを見下す人や怯える人だっています…だからこそボクたちは謝らなくちやいけけない…本当にすみませんでした!!」

俺と良は時音の謝罪に合わせて同時に頭を下げた。そしてしばらくの間沈黙が流れる。だがそれを破ったのは長門さんだった。

長門「……まさか君たちが逆に頭を下げてくるなんて思いもしなかった。全く…風の間人たちが君達のような人だったら苦労もしないのだがな…」

拓海「まあ自分勝手な人が多い世の中なんで仕方ないですよ…」

良「確かに…(笑)」

時音「うんうん」

長門「それもそうだな。……拓海よありがとう、また時間ができれば此処に来てくれ。今度はしっかりと歓迎する!」

陸奥「電話とかもしなくていいわ!遠陵せずに来てね、来てくれたらみんなも喜ぶと思うから♪」

陸奥さんと長門さんは笑顔でそう言った。そして手を差し伸べられ俺はその手を掴み握手を交わした。

拓海「分かりました、また絶対に来ます！」

良「また来るんで楽しみにしといて下さいよ〜！」

時音「色々とお世話になりました！」

長門「ああ。またいつかだ！」

陸奥「またね♪」

こうして俺たちは別れた。

50話 戻った日常（ほのぼの）

く大本営く

尾形「……………うーん…どうしたものかね…」

尾形はある事に頭を悩ませていた。

大和「どうしましたか元帥？かなりお悩みになっているようですが…」

尾形「いや…秋人の事だな…」

大和「秋人さんって、もしかして、あの時私が提督の知識を教えたあの青年ですか！
頑張っていますかね〜♪」

尾形「頑張っていると思うが…報告を聞くとまだ提督としての知識が足りてないんだ
…と言うか提督自身が戦場に出ると言う前代未聞なことをしておってな…」

そう、秋人の鎮守府の報告書によると、秋人はたまに艦娘と一緒に出撃しているよう
だった。

大和「…あ…そういえばそうでしたね……………」

尾形「まあそれが秋人らしいんだがな…全く誰に似ておるんだか」

大和「でももしこの事が別の鎮守府の提督にバレもでしたら…」

尾形「それに関しては儂の力でなんとかしてる…ただ秋人は無茶ばかりしおるせいであの子たちに負担をかけないか心配なんだ…もつと提督の在り方を知って欲しいの…提督の存在自体があの子たちの支えになっていることを…」

大和「なるほど……………あ！ならこう言うのはどうですか！」

何やら大和はいいアイデアを浮かんだらしく、それを尾形に話した————

side out??

side 秋人

拓海達が帰ってから、親父も「俺も茜を見て満足した」と言つて、家に帰って行つた。もちろん帰る前に母さんを思いつき抱きしめたのは言うまでもない、この妻コン髭親…おつとこれ以上言つと○されかねないから言うのをやめておく。————こう

してまた俺達にいつもと変わらない平凡な日々が戻ってきた。そして数日経ったある日の出来事。

今日も俺はいつもと変わらない鎮守府生活を送っていた。

秋人「睦月、如月、敵の後ろに回り込んで砲撃だ。金剛達は出来るだけ主力を優先的に狙うように攻撃な！」

そして今は絶賛出撃中である。俺は指示を出してみんなの援護をしている。

睦月・如月「分かりました！」

金剛「アツキー了解ネ！いきマス！Fire!!!」

榛名「はい、榛名は大丈夫です！」

比叡「比叡行かせていただきます！」

霧島「了解です。秋人さん！」

久しぶりの出撃のせいかみんなの気合いが凄かった。そしてみるみるうちに敵を轟沈させていった。いい調子だな！やっぱ艦娘はスゲーかつこいい。

秋人「みんな調子が良いな！」

大淀「そうですね。——しかし提督、いくらなんでも皆さんと一緒に出撃して指示を出さなくても良いのでは……」ジト

秋人「まあコレはなんつーか……実際に目で見て指示した方が良いじゃん？」

大淀「ダメです。大本営へ報告する私の身にもなつて下さい」

まあ即答。……別に良いじゃん俺強いんだから……ここで指示出したって！そう言ってる割には大淀も一緒について来てくるし。

秋人「大淀だつて俺と一緒に来てんじゃん、別に執務室で待つても良いのに」

大淀「そ、それは提督が何をしでかすか分からないので一緒に来ているんです！一応提督の補佐ですので！」

秋人「なるほど、つまり大淀は俺の事が心配でついて来ているんだな」ニヤニヤ

大淀「ば、馬鹿じゃないですかッ!?そんな訳ありませんッ……!／／／／」カァー

大淀は顔を赤くしながら大声で否定した。うん、凶星だ（笑）。ここまでの会話は全て

水上バイクの上で行なっている。大淀が運転し俺が後ろに乗っている状態。さらに付け加えるとするなら戦場で会話している。まあ危機感がなさすぎるよね。

秋人「隠さなくても良いのに……」ボソ

大淀「何か？」

秋人「いや別に」

金剛「アツキー！終わったヨ！」

気がつけば金剛率いる艦隊は敵の全艦を轟沈させて戻って来たようだ。案外早かったな。そして戻ってきた金剛達もそれほど負傷はしていなかった。

秋人「お疲れ！じゃあ鎮守府に戻るか」

こうして任務を成功させて俺たちは鎮守府に戻った。

—————

秋人「……で、なんでいんの？」

任務を終えて執務室に戻るとそこには何故か響、時雨、夕立、吹雪がくつろいでいた。いつもの固定メンバーである。

響「別に良いじゃないか、今日は私は休暇だったんだ。この休暇をどう過ごそうが私の自由だろう。ОТВЯЖИТЬСЯ

秋人「まあそうだけど…。あと最後の言葉、何言ってるか分かんなかったけど、俺に對して喧嘩を売ってることだけはわかった」

吹雪「響ちゃん…また秋人さんを…。……ごめんなさい秋人さん！私は新しくなった執務室が気になってつい…」

夕立「私と時雨ちゃんは遊びに来たっばい！」

時雨「ちよ…夕立!? 僕は…!」

4人は執務室に遊びに来たみたいだった。そんな気がしたけど…。

秋人「まあ遊びに来るのは自由だけどさー、来るなら俺がいる時にして来んない？」

別に何かやましいものを隠してる訳じゃないけど。変に何かあさられていたら俺も困るし、片付けるのがめんどくさい。

響「何故だい？ーももしかして隠しているモノを見つけられたくないからかい？大丈夫だ秋人、私は最初からそのつもりだから」

秋人「それだツ!!何も無い部屋を勝手にあさられて散らかされるから嫌なの!!別に探すなどとは言わないけど絶対散らかしたまま放置するだろ響!!」

響「バレたか…」

やっぱり俺の考えに狂いはなかった。響だけは絶対何かする…響は察しが良すぎるから。

秋人「でしようね!」

響「まあ既に部屋の中を探ったんだだけとね」

秋人「響お前執務室出入り禁止な」

響「ちよ…冗談さ…」

時雨「響…君はどれだけ秋人をからかうのさ…本当に嫌われても知らないよ…？」

響「大丈夫さ時雨。秋人は絶対私を嫌いにならないから」

秋人「まあそうだけど、もし本気で嫌いになったらどうすんの？」

響「その時は素直に受け入れるさ」

響は少し寂しそうにそう言った。

吹雪「……あ…！そ、それより秋人さん！私秋人さんにこの際なので改めて色々質問したいことがあるんです！大丈夫ですか？」

夕立「あ、それ私もしたいっほい！！」

秋人「別にいいぞこの際だしなんでも質問に答えるから」

響「ん？『なんでも』って……」

秋人「『なんでも』とは言っていない」

ここまでテンプレ。コレをいうまでがそもそもテンプレ。

吹雪「で…では早速…！秋人さんは…す、好きな人はいるんですか？／／」

秋人「ブツ!？」

吹雪何その直球火の玉ストレートな質問!？俺はつい驚きのあまりつい吹き出してしまった。

秋人「す、好き人かー今はいないなー」

時雨・響「ツ!？」

俺がそう吹雪に答えた時何故か急に響と時雨はガタツ!と机の音を鳴らせた。だがどう鳴らせたのかは分からない。誰かわかる人は説明よろしくお願いします。

吹雪「そうなんですネ……!」

夕立「じゃあ好きな女の子のタイプはー?」

秋人「うーん……優しい人……かな?」

時雨「なるほど秋人は……」

響「これは覚えておく必要があるね……」

今度は2人は小声でぶつぶつ言い出した。マジでどうしたんだ、2人とも……。――その後俺はみんなからの質問を答えていった。好きな歌や好きなご飯、最近の趣味など。最終的には「深海棲艦の姿になって!」と言われるハメに。ちゃんと深海棲艦の姿になったけど!そして結構目を輝かせながら見られました。さらに角も触られました、触れた感覚が伝わってくるのですごく変な感覚でした。ありがとうございます。

そして色々ことが過ぎて俺が現在執務室に1人でいる。何もすることがないからポオーツとしてるけど。その時――

♪

――俺の端末から通話の音楽が流れた。誰からなのかを確認すると尾形さんからだった。久しぶりに嫌な予感がある。※久しぶりに説明するが秋人のその予感はいくら当たります。それもかなりの確立で。

秋人「もしもし、秋人です。どうしたんですか尾形さん?」

尾形『おぉー秋人すまんあー急に電話して。少し秋人に頼みたいことがあってな』

秋人「頼みたいこと?」

尾形『そうだ――単刀直入に言う。秋人よ、お前に約1週間ほど研修として他の鎮

守府の見学、提督の補助を――」

秋人「お断りします」

俺は即答した。やっぱり俺の嫌な予感は正しかったのだ。嫌に決まってるでしょ！
なんで俺がわざわざ違う鎮守府に行つて研修をしないとイケないんだよ！めんどくさ
すぎるし間に合つてる。

尾形『お、おい：最後まで言う前に断るんじゃない！』

秋人「そりや断りますよ!?!なんで俺がわざわざ他の鎮守府に行つて研修を受けないと
イケないんですか!!それに俺は提督と同じやり方なんてしたくないです!」

俺はあの時、最終テストをする時に尾形さんにそう言った。何んで俺が暴行やわいせ
つ行為をしていた奴と同じ服や研修に行かなければいけないのか。ふざけんな！俺は
俺のやり方で提督をするつて決めたんだ！

秋人「それに俺は俺のやり方で提督をする！誰が何を言おうと!」

尾形『秋人の気持ちも分かる：だがそのまま秋人のやり方で活動し続けなければいずれ他

の過激な提督へと耳にいくだろう…：そうなれば秋人、いやこの鎮守府が潰されかねん…！そこまで来たたら儂の力でも止めることができん…：国家反逆罪にかけられる可能性のあるからな…」

秋人「……尾形さん…分かりました…ですが研修には行きませんか？みんなが心配なんでここに離れたく無いですし」

尾形『それについては大丈夫じゃ、秋人は当分席を外している間は代理として儂の秘書艦である大和がいくからの』

大和…：久しぶりだな…！確かいろんな事を教えてくれた先生だったはず、そして何よりすげー美人だった。それでも……

秋人「しかし……」

尾形『もし行つてくれるなら、お前の好きなバンドグループのライブチケットを報酬として送るよ』

秋人「じゃあ行きます」

即答した。そりやそうだろ!!ただでさえ倍率が高いバンドグループのチケットだよ

?それを報酬として貰えるんだから行くしかないじゃん!!

尾形『おぉー流石秋人!そう言ってくれと信じていたよ!!じゃあ出発は明後日だからくれぐれも忘れないようにな!鎮守府への往復費用は儂が払うから安心せい!』

秋人「それはありがたいっすね。分かりました、ではチケット絶対ですかね?嘘ついたときは…たとえ尾形さんでも分かれますよね?」

尾形『ああ、任せておけ、約束は絶対守る!それじゃあよろしくな、秋人!』

こうして俺と尾形さんの長い電話は終わった…。――明後日に研修か…めんどくさい…まあでもライブチケットくれるって言ってるし頑張るか!こうして俺は別の鎮守府への研修が決まった。――てかあれ?なんか忘れてるような…――

秋人「――そうだ…場所聞いてねえ…」

51話 前日

side 時雨

秋人「ー、ーという事で、明日から約1週間ほど尾形元帥に別の鎮守府へ研修に行つてこいつて言われたから行つてくる」

艦娘「ええー!？」

突然秋人は食堂でそう言いだした。本当になんでこんなにいきなり!?!それに言うのが遅すぎるよ!?!気持ちの整理の時間が全然ないじゃないか!!僕は秋人が言ったことになり動揺した。

天龍「なんだよそれ!いきなりすぎじゃねーか!」

秋人「仕方ねーだろ!俺も昨日急に電話で言われたんだから!もっと早く知ってたらもっと早く言ってるわ!」

あ、そうだったんだ。なら仕方ないね。でもどうしていきなり研修なんかには…。

大井「でもどうしていきなり研修なんか行く必要が…？」

秋人「なんか尾形元帥曰く『提督らしい事をしていないから別の鎮守府に行つて勉強してこい』つてさ」

艦娘「ああく…」

みんなが元帥さんの言ったことに共感した。確かに秋人は全く提督らしい事をしていない。むしろ本来提督がしないことまで軽々にする。例えば一緒に出撃とか提督の制服を着ないとか…あとは、運営の仕方とかね。

秋人「な、なんだよみんな揃いも揃つて『納得だわ』みたいな声出して！」

暁「だつて秋兄、いつも私たちと一緒に出撃して指示だしてるじゃない」

龍田「執務室で居てくれれば良いのにね」

雷「そうよお兄ちゃん！もつと私たちを頼つても良いのに！ね、電？♪」

電「なのです♪」

秋人「まあそうだけどさ…なんかほつとけないつて言うかなんて言うか…」

榛名「安心してください秋人さん！ 私たちはもうあの時のような私達ではないので！
榛名は大丈夫です！」

長門「しかし秋人、お前がこの鎮守府の席を外すのは良いが誰が代わりに運営をするんだ？」

あ、そうか。確かに秋人が別に鎮守府に行つちやうと提督が不在になるからね。長門さんか、大淀さんが代わりに運営するのかな？

秋人「それに関しては尾形元帥の秘書艦の大和さんが代理としてくるらしいから大丈夫だつて」

え、大和さんが!? それはそれでなんだか嬉しいね…！ 僕は大本営の大和さんが好きだ。理由はいつも僕たちの事を気にかけてくれたから。それに地獄だった頃、前任には分らないように援護してくれたりいつも助けてくれた。何故ばれなかつたのかは僕には分からないけど…。だつて普通出撃したら直ぐに分かるよ、大型戦艦だし…！ 一体大和さんはどんな事をしたんだろうね…！ あはは。

艦娘「ッ!？」

長門「何、元帥殿の大和がッ!？」

秋人「どうしたんだよみんなそんな反応して?」

瑞鶴「確かに…翔鶴姉知ってる?」

翔鶴「ごめんなさい瑞鶴、私にも分からないわ…」

陸奥「そういえば秋人さんと翔鶴、瑞鶴は知らなかったわね…元帥さんの大和さんは前鎮守府の艦娘が憧れるほどの強さと、人が良いのよ。確か数年前に発令された大規模作戦であの方一人の力で大きく戦局を変えたとか…そしてありえない事にたった一隻で複数の敵を殲滅したとか」

秋人「え…マジで…」

瑞鶴「す、凄い…」

北上「流星にその強さを生で見た時はびっくりしたよね」

吹雪「すぐくカッコ良かったです!私も大和みたいに強くなりたいって思いました!」

秋人「なるほど、戦艦だから最初から凄いつて思ってたけど、まさかそこまでの人だったなんてな!…あ、とりあえずその大和さんは明日来るからよろしくな!とりあえず今日はこれで終わりだから以上解散!」

こうして食堂での集会は終わった。明日か、楽しみだね！僕はふとそう思った。——さて、僕もまだ入渠していなかったしそろそろ入渠しに行こうかな。

夕立「あ、時雨ちゃん！」

僕が入渠ドックへ向かおうとした時、夕立が声をかけてきた。

時雨「どうしたの夕立？」

夕立「時雨ちゃんは入渠まだっぼい？」

時雨「うん、そうだよ。夕立もまだ入ってないのかい？」

夕立「うん！一緒に入りましょ、時雨ちゃん！」

時雨「そうだね、行こっか！」

こうして僕は夕立と一緒に入渠ドックへ向かった。そういえば夕立と一緒に入渠するのは久しぶりだね。夕立が怪我した時以来だったかな…？あの時の夕立はかなり無理していたし、僕が支えていなかったら多分危なかった状態だったからね…。本当にあ

の時は夕立が無事で良かったって思う。

夕立「あつたかいね時雨ちゃん！」

時雨「そうだね、夕立！——一緒に入渠するのは久しぶりだったね」

夕立「確かに！あの時は私がお腹に怪我を負った時だったっぼい？」

時雨「そうだね、あの時は本当に心配したんだから」

夕立「あはは……」

赤城「私もびっくりしましたよ夕立さん？」

夕立「もう分かったっ……！——ぼい？」

気がつけば赤城さんが夕立の隣で一緒に入渠していた。

赤城「隣失礼しますよ」ニコ

夕立「ほiiiiiiiiiiiッッッ

!!?!?!?!?

「(;(; ㇿ()()()()

夕立はびっくりしてそのままボンツ！とひっくり返った。——改二になってもそのオーバリアクシオンは変わってないんだね……。僕は夕立のそのオーバリアクシオンに苦笑いをした。

赤城「夕立さんっ!?!大丈夫ですか!?!」

夕立「プハツ……!だ、大丈夫っほい……」(――)；

時雨「こんばんは赤城さん。赤城さんも入渠がまだだったのかい?」

赤城「ええ♪食堂に集まる前に自習訓練をしていたので入るタイミングを失ってしまつて……」アハハ

なるほどそう言う事だったんだ。自習訓練か……赤城さんはすごいね!僕も赤城さんを見習わないと……!

赤城「———そういうえば、時雨さんは勿論夕立さんも改二になったんですね!あまりちゃんと見ることが出来ませんでした。改めて見るとすごく雰囲気が変わりましたね!」

夕立「そうなの!でも私が改二になる予告も無しに勝手にされたっほい……なんか目が

覚めて鏡を見たらこうなつてたの。強くなるのは嬉しいけど心の準備をさせて欲しかったつばい！寝ている間に改造は反則つばい！」

赤城「確かにそうですね。ですが、まさか明石さんが内緒で改造をするなんて…明石さんの行動が読めなくなりましたね…」苦笑い

時雨「でも寝ている間に改造はある意味すごいと思うよ？」

普通は寝てる間に大規模改造なんてしないし、それに大規模改造する時はある部屋に行かないと行けないし…明石さんは一体何をしたのだろう…？

夕立「確かに…」

時雨「まあ考えても仕方がないし、とりあえずは入渠で身体を休ませようか」

赤城「ですね♪」

夕立「うん！」

こうして僕たちは入渠ドックでしつかりと身体を休ませた。——あれ、普通に終わっちゃったね…。いや大体こういうほのぼのとした感じだったら『例のアレ』みたいなことが起きるはずなのに…？あ、そういえば入渠ドックも秋人が妖精さんに頼んで2

つに分けたんだったね。それなら起きないわけだ。——いや、普通は起きないよッ!!
起きる方がおかしいじゃないか!?僕は一体何を期待していたんだ…!!僕のバカアア…
!!
//
//
//

——時雨も少しドジな所は変わらない。

side out 時雨

side 秋人

秋人「えーと…一応念のために日本刀、水浮遊スーツとシューズ…あとは予備充、充電器とコード…」

俺は明日の鎮守府研修のための準備をしていた。だが俺はまだ行き先を聞いていなかった。まあ伝え忘れてるからまた電話は来るだろうけど…——そう思ってるのも束の間——

♪

——俺の端末に電話の通知が来た。相手は案の定尾形さんからだった。

秋人「もしもし秋人です」

尾形『おー秋人すまん！昨日秋人が行く鎮守府の場所を伝え忘れてしまったから急遽電話したんじや！』

秋人「でしようね！ーーそれで場所はどこですか？」

尾形『場所は呉鎮守府じや！』

呉鎮守府??聞いたことないんだけど…何処そこ…???

秋人「あの尾形何処ですかその鎮守府…」

尾形『いやだから呉鎮守府だよ』

秋人「いやだから何処だよ！何県にあるの!？」

尾形『ああくそういうことか。広島だよ』

秋人「ーーーは？」

広島?ちよつと待て…ここは関東で広島は…中国地方ーーークソ遠いやん!!!
 (関西弁) は!?!何!?!俺にそんな遠いところまで行かそうとしてるのあの人は!?!ーーー流

こうして俺と尾形さんとの長い（体感時間的に）通話は終わった。

秋人「マジでふざけんなよあの人…!!」

5 2話 当日

〔朝〕

俺はいつも早朝に起きていつものランニングいわゆる日課をするのだ。だが、今日の俺はまだ布団の中である。いわゆるサボりです、はい。というか流石に日課と言えど、毎日するわけではない。月2、3回はやらない日を設けている。ちよつとした体のメンテナンスと睡眠時間の確保だ。え？これじゃ日課じゃないって？いやいや、ほぼ毎日なんだから日課で大丈夫でしょ！……ってことで今日、俺は日課をやらなくて二度寝かましまーっす。睦月たちには申し訳ないな。まあ俺いなくてもちやんとやってくれるから大丈夫でしょ。

？「……っち」

「……ん？誰かの声がする……？まあ気にせず寝る、おやすみ。

？「……きとっち……」

「……さつきから誰の声が聞こえるんだ？ いや、無視だ無視！俺は寝るからね！！
？」「……秋人っち……！」

「……俺を起こしてんのかよ！！悪いけど俺はぜつてえー起きねーからな！！こんな感じの起こされ方は何度かあった。今回こそは勝つーじゃあおやすみ……zzz……。」

？「……ねえ秋人っち、起きないと撃つよ？」

秋人「おう上等だよってやるよ」

無理でした。宣戦布告されたので起きました。ありがとうございます。てか誰だよいきなり撃つとか言った奴は……こっちは気持ちよく寝てんの……。俺はその宣戦布告した犯人を確かめた……」

北上「あ、起きた起きた」

「――犯人は北上だった。」

秋人「なんの用だよ北上……せっかく気持ちよく寝てたつてのに……」

北上「あ、そうだったね。みんなが外で秋人が全然来ない……って言うて慌ててたから私が代わりにお越しに来たのさ」

「こいつマジかよ……それだけの為に着したのか……響ぐらいのクレイジーな奴じゃねーか!!え、北上つてこんな子だっけ……?」

北上「あ、今『こいつマジかよ……』って顔したね?」

秋人「いや普通は思うだろ……起きなかつたら諦めるよ……」

北上「だってみんなが待つてるみたいだし……それに朝になったら日課するつていうお決まりじゃなかつたの?」

秋人「今日やしねーの!人間誰しも休憩は必要なの!」

北上「いや艦娘と人間のハーフで且つ深海棲艦の力を持つてる時点で人間じゃないよね」

秋人「おい北上……唐突なマジレスやめろ……」

え…ちよつと待つて…北上さん今凄いこと言つてるよ!?大丈夫か!?

北上「別に良いじゃない。へることないんだし、それにこれ読んでる人はもう既に思つてることだから大丈夫大丈夫」

秋人「ちよつと待つて…!それ言つちやいけないやつだから…!!」

とんでもないタイミングでメタ発言が北上の口から飛んできたんだけど…!?つか、北上だけ見てる世界が違くない・?…本当に大丈夫か!?

北上「まあまあ!そんな小さいことは気にしない。さ、起きたことだし早く準備だよ秋人つち」

秋人「はあ…仕方ねえなあ…分かったよ、そのかわり北上も強制参加な」

北上「良いよ、私も参加してみたかったし」

そして俺は仕方なく準備をして時雨たちがいるところに向かった。現在6時40分ぐらい。当然、俺を待つてた時雨たちにおこられました。ありがとうございます。

ど日課が終わった後にみんなに1日だけ休みを入れると伝えました。よし、これで起こされずに済む！やったぜ！この後、俺は食堂に行つて朝食をとつた。

秋人「あゝ…平和な朝だゝ…！朝ごはん美味すぎる！」

俺は変わらない朝に少し感動していた。だつて前任のやつの件や拓海たちの件で空気がピリピリしてたから、こんな余裕を持つて食べれなかつたし。加賀さんと親父の騒動もあつたし。もうホントヤバイよヤバイよ！、（？、？、？、；）ノ

天龍「朝からうるせーな秋人！ご飯ぐらい黙つて食べるよ…全く…」

ーと1人で心の中で騒いでいたら天龍からため息混じりで注意された。そういや天龍はすげー提督否定派だったのに、まさか天龍の方から話しかけてくれるなんて…ほんと頑張つたわ。

秋人「いやゝ…ホント俺頑張つたわー…」

天龍「何言つてんだお前…ちよつとキモいぞ…」

「……って言ったそばから、普通に引かれたんだけど。まあこれは明らかに俺が悪いんだけど…。」

秋人「だって一番提督嫌ってた天龍が、声かけて来たからさー」

天龍「ん？……ああーそういうことか。確かにあの時は死ぬほど提督という存在が嫌いだったからな。まあ今でも提督は苦手意識はあるが。でも秋人や元帥は全然大丈夫だ」

秋人「そっか！」

俺は天龍の言葉に対して笑顔でそう言った。だって少しは俺を信用してくれるようになったから。

天龍「そういえば秋人、お前はいつ研修に行くんだ？」

秋人「確か今日の夜に出発だったはず。その前にある程度準備しないと」

天龍「そうか。秋人も大変だな」

秋人「まあな、いろいろ事件が重なりすぎてるし。いつとくけど俺まだ17歳で元高

「在校生だぞ？そう見えないのは重々承知だけど」

「そう、今までの言動行動的に結構大人な感じを見せてるけど俺は17歳で元高校生なのだ。それだけはわかってほしい。そして、流石に俺でも付いていけない事ぐらいは山ほどある。大規模作戦の話とか戦術や策略の話とか。ほんとど素人だから。」

天龍「あ、そういうえばそうだったな：悪い忘れてた」

秋人「いや全然良いけどさー。ーーーとりあえず俺は準備してくるから。ごちそうさま！」

天龍「お、おう」

俺は食器等を戻し棚に置いて食堂を後にした。あ、勿論間宮さんに「ごちそうさま」を伝えて。さて：準備をする前にどうしよっかな。ーーそういうえば今日に大和さんがくるって言ってたけどいつ来るんだろ？来る前にある程度仕事の事とかの引き継ぎの確認をしておかないと。

金剛「heyアツキー！」

「……とまああれこれ考えていると後ろから俺を呼ぶ声が聞こえた。まあこの言
い方と声で誰が言ったから分かつてるけど。」

秋人「何、金剛?」

金剛「アツキー、今時間空いてますカツ!」

まさかの金剛直々のお誘い! いやめちやくちや嬉しいけど俺やることがあるしな
……。。

秋人「あーごめん金剛! 俺これから大和さんへの仕事とかの引き継ぎとかしなく
ちやいけないからパスで!」

金剛「oh: そうデスク! : 妹達とのTea timeのお誘いをしようと思つたん
デスクド、無理なら仕方ないデスクネー。また時間がある時にしましょうアツキー!!! Se
e you ♪」ノシ

秋人「おう! その時は楽しみにしとくから!」ノシ

「……つてと、まあ……そろそろ引き継ぎや出発の準備をしないと。正直まったりしてられないのが現状。大和さんが来る前にある程度整理しておかないと大和さんに申し訳なくなる。」

秋人「とりあえず大和さんが鎮守府に来る時間を15時目どで作業するか」

？「……その必要はありませんよ秋人さん」

秋人「は？……」

執務室に戻ろうとしたら、後ろから何処かで聞いたことのある声が聞こえて俺は思わず振り返った。するとそこには何故か大和さんがいた。

大和「お久しぶりぶりです秋人さん！この大和、推して参りました！」

秋人「うわああツツ……や……大和さんツツツ?!?!?」(;(; ㇿ。((()))

いつ来たッ!?てか鎮守府から大和さんが来たっていう報告もなかったし……!!昼過ぎには来るって言ってたけど、まだがつつり昼前なんだけど!!

大和「はい！大和です！」

秋人「いつ来たんだよツツツ!?てかどっから入って来たツツツ!」

大和「勿論正門から入って来ましたよ？一応声をかけようとしたんですけど、誰もいなくて、つい入ってしまいました！」テヘツ

秋人「マジか…」

まさか誰もいなかっただなんて…ここ意外とセキュリティゲーガバガバなんじゃないのか??あとで大淀に確認してみよう。

大和「はい！というところで秋人さん！今仕事はどれぐらいありますか？」

秋人「早過ぎない!?何もかも!」

大和「いえ、これが普通だと思いますけど？あ、秋人さんこれいかがですか！大和特製ラムネです！」

え…これが普通なの…?というか大和さんそれどっから出してきた!?美味しそうだけど?!いきなり何処から出して来たのか分らない、大和特製ラムネと書かれた瓶のラムネを差し出して来た。俺は断るのも申し訳ないので、そのラムネを受け取った。あとで

冷やして飲もう。

秋人「ありがと！冷やしてあとで飲むな〜！とりあえず執務室はこっちだから〜」

俺は自分の部屋という名の執務室に案内した。だって完全に一人暮らし用の部屋だもん。勉強机にテーブルに、ベット、テレビ。過ごしやすい一人用の部屋だね！

大和「わあ…凄いわりましたね…執務室というか完全に一人暮らししているお部屋になつてますよ…」アハハ

秋人「あんな堅苦しい感じの部屋で作業なんかやりたくねーよ。逆に落ち着かないって！俺まだ17歳だし」

大和「気持ちわかりますけど…まあ良いです…！それで、残っている書類は……これですね！」

そうやって大和さんは、置いている書類の整理に取り掛かった。うそっ!?!早っ!?!大和さんは驚くほどのスピードで書類を片付けていった。流石は尾形さんの秘書艦の大和さん、動きがもう職人のソレだ。そして大和さんは10分も掛からない時間で書類を片

付けた。俺でも1日分の書類の整理に20〜30分は掛かるのに。末恐ろしいぜ大和さん……。

秋人「すげーな大和さん：俺でも20〜30分は掛かるのに」

大和「ふふ、慣れていきますから！大本営の書類の数と比べると大した数じゃないですし！」

秋人「マジか」

大和「マジです！」

そうして、この後俺は大和さんにここの活動状況や、運営の流れを伝えた。

大和「なるほど、良い感じですね秋人さん！分かりました、では私も変わらずに秋人さんの運営の流れでやっていきますね！ですがみんなへの指示が若干変わりそうですが大丈夫ですか？」

秋人「あーそれは大丈夫。むしろ艦娘である大和さんのほうが戦い方とか分かっているからそっちの方が上手くいくかもな」

寧ろそうしてくれた方が俺もありがたい。マジでみんなには近距離戦に戦い方とか教えていなかっただし。

大和「そうですか、分かりました！」

こうして俺は大和さんへの仕事の引き継ぎが終わった。————それから夕方食堂でみんなを集めて大和さんを紹介した。まあみんな分かってるけど。紹介し終えるとみんなは一気に大和さんの所へと群がっていった。握手を求める娘もいればサインを求める娘、抱きしめる娘、押める娘までいろんな娘がいた。いや、個性豊かすぎない!?ちなみに俺は周りの娘達に潰されて辛かったです…身動きが一切取れませんでした。おい、その君!羨ましいとか思うなよ?体験したらわかる、これはマジで地獄だから!!ホント苦しいから!!————そうして俺はみんなに押しつぶされて疲れ切った状態で、研修先鎮守府に向かうのであった。辛い……。

秋人「じゃあ…行ってくるな…」

時雨「き…気をつけてね秋人…」

夕立「しつかりバスの中で休んでね…?」

何故か見送りが時雨と夕立だけなのがふに落ちないけどー。。

4章 鎮守府生活編 2 〵完〵